

塩川砂井戸遺跡

塩川砂井戸遺跡

(都)3.3.2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金
(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(都)3.3.2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金
(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一五

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2015

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



塩川砂井戸遺跡

(都)3.3.2 吉井北通り線社会資本整備総合交付金
(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

群馬県高崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、群馬県高崎市吉井町に所在し、都市計画道路「吉井北通り線」の建設工事に伴い発掘調査された塩川砂井戸遺跡の調査報告書です。本遺跡の発掘調査は、群馬県高崎土木事務所の委託を受けて、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成25年8月から平成26年1月にかけて実施したものです。

塩川砂井戸遺跡は、縄文時代後期の柄鏡形住居と弧状に繋がる列石、および古代の集落や中世の溝・井戸などが調査されました。

縄文時代の列石は、溝状に掘り下げた窪みの中に石を積み上げる珍しいもので、出土する縄文時代後期の土器も県内では代表的な例と言える良好な資料です。古代の集落は、本遺跡の東側約2 kmにある国の特別史跡多胡碑が建立された8世紀初頭にも営まれたもので、古代多胡郡の様子を探る新たな資料を追加するものです。中世のこの地には『塩川の砦』が築かれたと考えられており、本遺跡で確認された溝が、中世の方形区画施設として、その関連性が注目されます。このように、縄文時代から中世に至るまでの貴重な埋蔵文化財が明らかにされたことで、本報告書が、地域研究の歴史資料や地域史を学ぶ教材として役立てて頂けるものと確信いたしております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県高崎土木事務所および群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、ならびに地元関係者の皆様からは多くのご指導・ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これら関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成27年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 吉野 勉

例 言

- 1 本書は、平成24年度(都)3.3.2吉井北通り線社会資本整備総合交付金(防災・安全/活力基盤)事業に伴い発掘調査された、塩川砂井戸遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 所在地 群馬県高崎市吉井町塩川69-1、73-1、75-2、76、77-1・2・3・4、78-1・2・3・4・5・6、79-2・3・4、80-6・7、81-2、193-1・2、82-1・2、83、84-1・2、85-1・2、86-4・5、87-1、127-4・5・6、152-2、153-1・4・5、154-1・2・3・6、155-1・2・3・4・5・6・7、156-1・6・7、159-1・2、160-1・2・3・4・5、162-1・2・4・5、163、165-2、166-1・2、167、168-1・2・3・4・5・6、169、170-1・2・4、171-1、173-1・3・4
- 3 事業主体 群馬県高崎土木事務所
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 履行期間 平成25年7月1日～平成26年3月31日
調査期間 平成25年8月1日～平成26年1月31日
- 6 調査面積 8368㎡
- 7 発掘調査体制は次の通りである。
発掘担当者 調査統括 関根慎二 上席専門員 麻生敏隆
遺跡掘削請負工事 有限会社毛野考古学研究所
地上測量：空中写真撮影 株式会社シン技術コンサル
- 8 整理事業の期間と体制は次の通りである。
整理期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日
(履行期間も同じ)
整理担当 専門調査役 飯田陽一 上席専門員 大西雅広
遺物写真撮影 飯田陽一(土師器・須恵器) 専門調査役 石坂 茂(縄文土器・弥生土器)
調査研究員 石田典子(石器・石製品)
遺物保存処理 補佐(総括) 関 邦一
- 9 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 飯田陽一
デジタル編集 主任調査研究員 齊田智彦
執筆 上席専門員 徳江秀夫(遺物観察表：土師器・須恵器) 石坂 茂(遺物観察表：縄文土器)
石田典子(遺物観察表：石器・石製品) 大西雅広(遺物観察表：陶磁器・中世土器類)
関根慎二(第IV章) 麻生敏隆(第VI章-1) 前記以外 飯田陽一
- 10 調査現場での敷石住居・列石石材および整理作業時の出土石製品の石材鑑定については、飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 11 遺物の分析・鑑定委託については、第V章に記した。
- 12 発掘調査諸資料および出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 13 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の方々・機関にご協力・ご指導いただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不動)
群馬県高崎土木事務所、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、高崎市吉井郷土資料館、下仁田自然学校、鈴木徳雄

凡 例

- 1 本文中に使用した座標・方位はすべて国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」を使用している。また座標北と真北との偏差は調査区中央付近の $X=46,590$ 、 $Y=-76,655$ で東偏 $0^{\circ} 30' 26'' 88$ である。遺構挿図中に+と数値を併せて座標値を表した。数値は国家座標値 $X \cdot Y$ 値の下3桁を用いて表記している。
- 2 遺構の種別および遺構番号は、混乱を避けるため調査時の番号を踏襲することを原則とした。
- 3 遺構断面図に記した数値は、標高(単位:m)を表した。
- 4 遺構・遺物の縮率は原則として以下の通りとし、各挿図にスケールを添えた。同一の遺物挿図内に異なる縮率の図が加わる場合は遺物番号の次に縮率を分数で記した。

遺構 縄文時代遺構 列石概念図 1 : 200 住居 1 : 60 列石詳細図 1 : 50 炉・立石詳細図 1 : 30
古墳時代以降の遺構 南東隅窪地平面図 1 : 100 同断面図 1 : 50 ピット・溝断面図 1 : 20 その他 1 : 40

遺物 土器類 大型縄文土器 1 : 4 土師器・須恵器・小型縄文土器 1 : 3 土偶・匙型土製品 1 : 2
金属製品 1 : 2

石器 石皿・大型凹石・大型砥石・多孔石・石棒 1 : 4

砥石・打製石斧・大型スクレーパー・大型石核・凹石・磨石・敲石 1 : 3

小型砥石・スクレーパー・石核・石錘 1 : 2 石鏃・石錐・楔形石器・垂飾 1 : 1

大型土器を除き、遺物写真は遺物図とおおよそ同縮率となるようにしたが、撮影方向は異なるものがある。

- 5 遺構図内で使用したトーンおよびドットは次のことを示している。



● 土器 ▲ 石器 ■ 金属製品

その他、個別図面で使用したトーン・記号については各挿図内に凡例を加えた。

遺物で使用したトーンは次のことを示している。



- 6 遺構の主軸方向・走向を示すため、座標北を基準として東に傾いた場合は $N - \circ^{\circ} E$ 、西に傾いた場合は $N - \circ^{\circ} W$ というように表記した。
- 7 住居等の面積は、デジタルプランメーターにより1/30縮小打ち出し図上で3回計測し、その平均値を記した。
- 8 遺物観察表の凡例については観察表冒頭の133頁に記した。
- 9 本書で掲載した地図は以下の通りである。
国土地理院地形図 1 : 25,000 「下室田」(平成14年5月1日発行)、「伊香保」(平成14年9月1日発行)
国土地理院地形図 1 : 50,000 「榛名山」(平成10年3月1日発行)、「前橋」(平成10年3月1日発行)

目 次

序		第IV章 調査の内容(縄文時代)	
例言		1 調査の概要	88
凡例		2 22号住居	89
目次		3 1号列石	94
第I章 調査に至る経緯と経過		4 6号住居	119
1 調査に至る経緯	1	5 遺構外の遺物	121
2 発掘調査の方法		第V章 分析	
(1)調査区とグリッドの設定	2	1 分析の目的	122
(2)基本土層	3	2 塩川砂井戸遺跡馬骨と焼骨	122
(3)調査と記録の方法	3	3 塩川砂井戸遺跡1号列石出土黒曜石資料の 産地分析	124
3 発掘調査の経過	3	第VI章 総括	
4 整理業務の経過	5	1 塩川砂井戸遺跡の石材について	129
第II章 発掘調査と遺跡の概要		2 中世塩川砂井戸遺跡の遺構について	132
1 遺跡の位置と地形	6	遺物観察表	133
2 周辺の遺跡	7	引用・参考文献	151
第III章 調査の内容(古墳時代以降)		写真図版	
1 調査の概要	12	抄録	
2 竪穴住居	13	付図1. 塩川砂井戸遺跡1面全体図	
3 掘立柱建物	44	付図2. 塩川砂井戸遺跡2面詳細図	
4 ピット	51		
5 土坑	62		
6 溝	69		
7 井戸	84		
8 遺物集中地点	86		
9 遺構外の遺物	87		

挿図目次

第1図	塩川砂井戸遺跡と周辺の地勢	1	第57図	土坑出土遺物	67
第2図	塩川砂井戸遺跡調査区位置図	2	第58図	溝配置図	69
第3図	調査区の呼称と基本土層計測地点	3	第59図	1 A・B・C号溝	70
第4図	基本土層柱状図	4	第60図	2号溝と出土遺物	71
第5図	遺跡周辺の地形	6	第61図	4号溝と出土遺物	72
第6図	周辺遺跡の分布	8	第62図	4 A号溝と出土遺物	73
第7図	主な遺構配置図	12	第63図	5・6・7 A・B号溝	74
第8図	住居配置図	13	第64図	8号溝	75
第9図	1号住居	14	第65図	9号溝と出土遺物	76
第10図	1号住居カマドと出土遺物	15	第66図	10 A・B号溝	77
第11図	2号住居	16	第67図	11号溝	78
第12図	3号住居	17	第68図	12 C号溝	79
第13図	3号住居出土遺物(1)	18	第69図	12 A・B号溝と13号溝	80
第14図	3号住居出土遺物(2)	19	第70図	14 A号溝・15号溝	82
第15図	3号住居出土遺物(3)	20	第71図	14 B号溝と出土遺物	83
第16図	4号住居	21	第72図	1・2号井戸	84
第17図	5号住居	22	第73図	3・4号井戸と3号井戸出土遺物	85
第18図	7号住居と出土遺物	23	第74図	遺物集中地点と出土遺物	86
第19図	8号住居	24	第75図	遺構外の遺物(古墳時代以降)	87
第20図	8号住居カマドと出土遺物(1)	25	第76図	縄文時代遺構配置図	88
第21図	8号住居出土遺物(2)	26	第77図	22号住居(1)	89
第22図	9号住居と出土遺物	27	第78図	22号住居(2)	90
第23図	10号住居と出土遺物	28	第79図	22号住居炬(上)と住居列石(下)	91
第24図	11号住居と出土遺物	29	第80図	22号住居出土遺物(1)	92
第25図	12号住居と出土遺物(1)	30	第81図	22号住居出土遺物(2)	93
第26図	12号住居出土遺物(2)	31	第82図	1号列石西側(1)	94
第27図	14号住居と出土遺物	32	第83図	1号列石西側(2)	95
第28図	15号住居	33	第84図	1号列石西側(3)	96
第29図	16号住居(1)	34	第85図	1号列石西側(4)	97
第30図	16号住居(2)	35	第86図	1号列石東側(1)	98
第31図	16号住居出土遺物(1)	36	第87図	1号列石東側(2)	99
第32図	16号住居出土遺物(2)	37	第88図	1号列石立石(上)と遺物出土状態(下)	100
第33図	17号住居(1)	38	第89図	1号列石出土遺物(1)	101
第34図	17号住居(2)と出土遺物	39	第90図	1号列石出土遺物(2)	102
第35図	18号住居	40	第91図	1号列石出土遺物(3)	103
第36図	18号住居出土遺物	41	第92図	1号列石出土遺物(4)	104
第37図	19号住居と出土遺物	42	第93図	1号列石出土遺物(5)	105
第38図	20号住居	43	第94図	1号列石出土遺物(6)	106
第39図	21号住居	43	第95図	1号列石出土遺物(7)	107
第40図	1号掘立柱建物	44	第96図	1号列石出土遺物(8)	108
第41図	2号掘立柱建物	45	第97図	1号列石出土遺物(9)	109
第42図	3号掘立柱建物(1)	47-48(折込)	第98図	1号列石出土遺物(10)	110
第43図	3号掘立柱建物(2)	49	第99図	1号列石出土遺物(11)	111
第44図	ピット配置図(1)	51	第100図	1号列石出土遺物(12)	112
第45図	ピット配置図(2)	52	第101図	1号列石出土遺物(13)	113
第46図	ピット(1)	53	第102図	1号列石出土遺物(14)	114
第47図	ピット(2)	54	第103図	1号列石出土遺物(15)	115
第48図	ピット(3)	55	第104図	1号列石出土遺物(16)	116
第49図	ピット(4)と出土遺物	56	第105図	1号列石出土遺物(17)	117
第50図	ピット(5)	57	第106図	1号列石出土遺物(18)	118
第51図	ピット(6)	58	第107図	6号住居と出土遺物	119
第52図	ピット配置図(3)	58	第108図	遺構外の遺物(縄文時代)	121
第53図	土坑(1)	63	第109図	塩川砂井戸遺跡分析資料(1)	127
第54図	土坑(2)	64	第110図	塩川砂井戸遺跡分析資料(2)	128
第55図	土坑(3)	65	第111図	石材比率グラフ	131
第56図	土坑(4)	66	第112図	中世の溝と周辺の地形	132

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧	10	表8 上顎臼歯列長	123
表2 周辺の古墳群とその他遺跡一覧	11	表9 下顎臼歯列長	123
表3 調査区別 主な遺構数一覧	12	表10 切歯計測値	123
表4 ビット一覧	59	表11 塩川砂井戸遺跡1号配石遺構出土黒曜石の 産地分析結果	125
表5 土坑一覧	67	表12 東日本の主な黒曜石の6元素組成	126
表6 上顎臼歯計測値	123		
表7 下顎臼歯計測値	123		

写真図版目次

PL. 1 遺跡全景	④ 10号住居掘り方(南より)
① 塩川砂井戸遺跡1・2区全景(東より)	⑤ 11号住居全景(北西より)
② 塩川砂井戸遺跡1・2区全景(南より)	⑥ 11号住居掘り方(北西より)
PL. 2 調査区遠景	⑦ 12号住居全景(西より)
① 塩川砂井戸遺跡西側遠景(南西より：手前が大沢川)	⑧ 12号住居断面(南より)
② 調査前の2・3区遠景(東より)	PL. 8 14号住居
③ 1・2区1面遠景(東より)	① 14号住居全景(西より)
④ 1・2区2面遠景(東より)	② 14号住居遺物出土状態(西より)
⑤ 3区遠景(東より)	③ 14号住居カマド(西より)
⑥ 5区遠景(南より)	④ 14号住居カマド断面(南より)
⑦ 2区西側調査風景(東より)	⑤ 14号住居カマド周辺掘り方(西より)
⑧ 現地説明会と2区遠景(南西より)	⑥ 14号住居貯蔵穴(西より)
PL. 3 1・2号住居	⑦ 14号住居断面(南より)
① 1号住居全景(西より)	⑧ 14号住居貯蔵穴遺物出土状態(北より)
② 1号住居床上礫確認状態(西より)	PL. 9 15・16号住居
③ 1号住居断面(南より)	① 15号住居全景(西より)
④ 1号住居貯蔵穴(西より)	② 15号住居カマド断面(西より)
⑤ 1号住居カマド(西より)	③ 16号住居全景(西より)
⑥ 1号住居カマド掘り方(南西より)	④ 16号住居北西隅遺物出土状態(北より)
⑦ 2号住居全景(南より)	⑤ 16号住居断面(東より)
⑧ 2号住居断面(南より)	⑥ 16号住居貯蔵穴(北より)
PL. 4 3号住居	⑦ 16号住居カマド(西より)
① 3号住居全景(西より)	⑧ 16号住居カマド掘り方(西より)
② 3号住居床上礫確認状態(西より)	PL.10 16～18号住居
③ 3号住居北西隅付近遺物出土状態(南東より)	① 16号住居床下土坑断面(南より)
④ 3号住居南壁下遺物出土状態(南より)	② 16号住居貯蔵穴断面(南より)
⑤ 3号住居断面(西より)	③ 17号住居全景(南西より)
⑥ 3号住居カマド(南西より)	④ 17号住居断面(南西より)
⑦ 3号住居カマド断面(西より)	⑤ 18号住居全景(西より)
⑧ 3号住居貯蔵穴断面(西より)	⑥ 18号住居遺物出土状態(西より)
PL. 5 4・5・7号住居	⑦ 18号住居貯蔵穴断面(西より)
① 4号住居全景(南西より)	⑧ 18号住居カマド(西より)
② 4号住居断面(南東より)	PL.11 19～21号住居
③ 4号住居カマド(南東より)	① 19号住居全景(南より)
④ 4号住居カマド(南西より)	② 19号住居遺物出土状態(南より)
⑤ 5号住居全景(東より)	③ 19号住居カマド前遺物出土状態(西より)
⑥ 5号住居断面(東より)	④ 19号住居カマド断面(南東より)
⑦ 7号住居全景(西より)	⑤ 19号住居掘り方(南より)
⑧ 7号住居カマド(西より)	⑥ 19号住居貯蔵穴と遺物出土状態(南西より)
PL. 6 7・8号住居	⑦ 20号住居全景(南より)
① 7号住居カマド内出土遺物(西より)	⑧ 21号住居全景(北より)
② 7号住居カマド断面(南より)	PL.12 1号掘立柱建物
③ 2区北西隅の住居群(南より)	① 1号掘立柱建物全景(南より)
④ 8号住居全景(西より)	② 1号掘立柱建物P1断面(南より)
⑤ 8号住居断面(南より)	③ 1号掘立柱建物P2断面(南より)
⑥ 8号住居掘り方(西より)	④ 1号掘立柱建物P3断面(南より)
⑦ 8号住居貯蔵穴(西より)	⑤ 1号掘立柱建物P4断面(南より)
PL. 7 9～12号住居	⑥ 1号掘立柱建物P5断面(南より)
① 9号住居全景(南より)	⑦ 1号掘立柱建物P6断面(南より)
② 9号住居遺物出土状態(北より)	⑧ 1号掘立柱建物P7断面(南より)
③ 10号住居全景(南より)	⑨ 1号掘立柱建物P8断面(南より)

⑩ 1号掘立柱建物P9断面(南より)

PL.13 2・3号掘立柱建物

① 2・3号掘立柱建物全景(南より)

② 2号掘立柱建物P1(南より)

③ 2号掘立柱建物P4(南より)

④ 2号掘立柱建物P5(南より)

⑤ 2号掘立柱建物P8(南より)

⑥ 3号掘立柱建物P1(南より)

⑦ 3号掘立柱建物P3(南より)

⑧ 3号掘立柱建物P7(南より)

⑨ 3号掘立柱建物P10(南より)

⑩ 3号掘立柱建物P11(南より)

PL.14 3号掘立柱建物柱穴

① 3号掘立柱建物P16断面(南より)

② 3号掘立柱建物P16(南より)

③ 3号掘立柱建物P23(南より)

④ 3号掘立柱建物P24(南より)

⑤ 3号掘立柱建物P25(南より)

⑥ 3号掘立柱建物P27(南より)

⑦ 3号掘立柱建物P29(南より)

⑧ 3号掘立柱建物P32(南より)

⑨ 3号掘立柱建物P34(南より)

⑩ 3号掘立柱建物P35(南より)

⑪ 3号掘立柱建物P37(南より)

⑫ 3号掘立柱建物P46(南より)

⑬ 3号掘立柱建物P51(南より)

⑭ 3号掘立柱建物P54(南より)

⑮ 3号掘立柱建物P55(南より)

PL.15 ビット(1)

② 1号ビット(南より)

② 2号ビット(東より)

③ 13号ビット(南より)

④ 17号ビット(南より)

⑤ 18号ビット(南より)

⑥ 20号ビット(南より)

⑦ 26号ビット(南より)

⑧ 28号ビット(南より)

⑨ 40号ビット(南より)

⑩ 46号ビット(南より)

⑪ 52号ビット(南より)

⑫ 66号ビット(南より)

⑬ 76号ビット(南より)

⑭ 79号ビット(南より)

⑮ 81号ビット(南より)

PL.16 ビット(2)

① 89号ビット(東より)

② 90号ビット(東より)

③ 93号ビット(東より)

④ 94号ビット(東より)

⑤ 101号ビット断面(南より)

⑥ 106号ビット(南より)

⑦ 117号ビット(南より)

⑧ 140号ビット(南より)

⑨ 148号ビット(南より)

⑩ 162号ビット(南より)

⑪ 167号ビット(南より)

⑫ 173号ビット(南より)

⑬ 178号ビット(南より)

⑭ 181号ビット断面(南より)

⑮ 184号ビット(南より)

PL.17 土坑(1)

① 1号土坑(南東より)

② 2号土坑(南より)

③ 3号土坑(東より)

④ 3号土坑馬歯出土状態(北より)

⑤ 4号土坑(南東より)

⑥ 5号土坑(南より)

⑦ 6号土坑断面(南より)

⑧ 6号土坑(南より)

⑨ 7号土坑(南より)

⑩ 8号土坑断面(南より)

⑪ 9号土坑(東より)

⑫ 10号土坑(東より)

⑬ 11号土坑(東より)

⑭ 12号土坑断面(南より)

⑮ 12号土坑(南より)

PL.18 土坑(2)

① 13号土坑断面(南西より)

② 14号土坑(南西より)

③ 15号土坑(南西より)

④ 16号土坑(南より)

⑤ 17号土坑断面(北より)

⑥ 18号土坑(南より)

⑦ 19号土坑(西より)

⑧ 20号土坑(北より)

⑨ 21号土坑(東より)

⑩ 23号土坑(西より)

⑪ 24号土坑(北より)

⑫ 25号土坑断面(南より)

⑬ 25・26号土坑(南より)

⑭ 25・26号土坑(東より)

⑮ 27号土坑断面(南より)

PL.19 土坑(3)

① 27号土坑(南より)

② 28号土坑(東より)

③ 29号土坑(南より)

④ 30号土坑(南より)

⑤ 31号土坑断面(南より)

⑥ 31号土坑(南より)

⑦ 32号土坑断面(西より)

⑧ 33号土坑断面(南より)

⑨ 34号土坑(南より)

⑩ 35号土坑(西より)

⑪ 36号土坑(東より)

⑫ 37号土坑、185・186ビット(南より)

⑬ 39号土坑断面(南より)

⑭ 39号土坑(南より)

⑮ 40号土坑断面(北より)

PL.20 溝(1)

① 1号溝断面(南より)

② 2号溝(南東より)

③ 4・4A号溝(西より)

④ 4・4A号溝(西より)

⑤ 4・4A号溝(西より)

⑥ 4・4A号溝B断面(西より)

PL.21 溝(2)

① 5～7A・B号溝(西より)

② 8号溝(北西より)

③ 9号溝(東より)

④ 9号溝(西より)

⑤ 9号溝断面(東より)

⑥ 10B号溝(北より)

⑦ 10A号溝断面(北より)

PL.22 溝(3)

① 11号溝(北より)

② 11号溝礫出土状態(東より)

③ 11号溝礫出土状態(東より)

④ 11号溝(南より)

⑤ 11号溝断面(北より)

⑥ 12B・13号溝(西より)

⑦ 12C号溝断面(東より)

PL.23 溝(4)

- ① 14A号溝(西より)
- ② 14A号溝(南西より)
- ③ 14A号溝(東より)
- ④ 14A号溝(西より)
- ⑤ 14号溝B断面(西より)
- ⑥ 15号溝(北より)
- ⑦ 15号溝E断面(北より)

PL.24 井戸、遺物集中地点

- ① 1号井戸(西より)
- ② 1号井戸断面(西より)
- ③ 2号井戸、14B号溝(北東より)
- ④ 3号井戸(北より)
- ⑤ 3号井戸断面(南より)
- ⑥ 4号井戸断面(南より)
- ⑦ 遺物集中地点(南西より)
- ⑧ 遺物集中地点(南より)

PL.25 22号住居(1)

- ① 22号住居(北より)
- ② 2区第2面と22号住居(東より)
- ③ 22号住居北側(北東より)
- ④ 22号住居南側(北西より)
- ⑤ 22号住居列石(東より)
- ⑥ 22号住居列石(南西より)
- ⑦ 22号住居列石(北西より)

PL.26 22号住居(2)

- ① 22号住居中央付近(東より)
- ② 22号住居上面炉(北東より)
- ③ 22号住居下面炉と出土遺物1(上方が東)
- ④ 22号住居下面炉(東より)
- ⑤ 22号住居下面炉断面と出土遺物2(東より)
- ⑥ 22号住居追加調査部分(東より)
- ⑦ 22号住居追加調査部分(南より)

PL.27 1号列石(1)

- ① 上空から眺めた1号列石(上方が北)
- ② 1号列石確認状況(西より)
- ③ 1号列石北側上面(東より)
- ④ 1号列石北側(西より)
- ⑤ 1号列石北側(北より)

PL.28 1号列石(2)

- ① 1号列石北側下面(東より)
- ② 1号列石北西側下面(北東より)
- ③ 1号列石断面(西より)
- ④ 1号列石内側列北側(南東より)
- ⑤ 1号列石北東側と22号住居列石(東より)
- ⑥ 復元した1号列石内立石(南西より)
- ⑦ 1号列石内立石周辺(北より)

PL.29 1号列石(3)、6号住居

- ① 1号列石西側下面(東より)
- ② 1号列石出土遺物(南東より)
- ③ 1号列石出土遺物56(南東より)
- ④ 1号列石下の基盤層(南西より)
- ⑤ 2区1号列石周辺(北東より)
- ⑥ 6号住居(東より)
- ⑦ 6号住居(南より)

PL.30 1・3号住居出土遺物

PL.31 3号住居出土遺物

PL.32 7～12号住居出土遺物

PL.33 14・16～18号住居出土遺物

PL.34 18・19号住居・ビット・土坑・井戸・溝出土遺物

PL.35 遺物集中地点、遺構外(古墳時代以降)、22号住居出土遺物

PL.36 1号列石出土遺物(1)

PL.37 1号列石出土遺物(2)

PL.38 1号列石出土遺物(3)

PL.39 1号列石出土遺物(4)

PL.40 1号列石出土遺物(5)

PL.41 1号列石出土遺物(6)

PL.42 1号列石出土遺物(7)

PL.43 1号列石出土遺物(8)

PL.44 1号列石出土遺物(9)

PL.45 1号列石出土遺物(10)、6号住居出土遺物

PL.46 遺構外の遺物(縄文時代)、分析骨歯類

第 I 章 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

国道254号は東京都文京区を基点として埼玉県・群馬県を通過し長野県松本市へ至る一般国道である。

群馬県内では藤岡市・高崎市・甘楽郡甘楽町・富岡市・甘楽郡下仁田町の県西部地域を東西に横切っている。この路線のうち、群馬県内の広範な部分が江戸時代に中仙道の脇往還として使われた旧街道を踏襲している。かつて宿場町であった市街地とその周辺では幅員が狭いうえに交通量が多く、特に大型車の通行が目立つ、渋滞と安全対策が課題の道路であった。市街地北側に国道254号バイパスを作る工事は1976年より事業化され、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ではこれまでに工事に伴う遺跡の発掘調査を行ってきた。

西側から東方へ向かって富岡市田島から甘楽町福島まで全長8.27kmの「富岡バイパス」が2000年に開通した。1994年度から1995年度に田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・

福島鹿島下遺跡などの埋蔵文化財発掘調査を実施した。

その東に繋がる「甘楽吉井バイパス」は甘楽町福島から高崎市吉井町本郷を結ぶ全長3.2kmの路線で、高崎市吉井町片山までが2011年に開通している。1998年度に甘楽条里遺跡(大山前地区)、2006年度に甘楽条里遺跡(庭屋深町地区・造石大町地区)・塚田遺跡などの埋蔵文化財発掘調査を実施した。

都市計画道路「吉井北通り線」は、「甘楽吉井バイパス」の東側へ繋がる高崎市吉井町本郷と高崎市吉井町池を結ぶ全長1.5kmの道路で、2002年度より建設事業が開始されている。

この路線上の大沢川以西では平成24年度に包蔵地(高崎市遺跡番号02746)内の本郷畑内遺跡の調査を実施し、弥生時代後期から平安時代にかけての集落等を確認している。大沢川以东には包蔵地(高崎市遺跡番号02747)がかかり、北側の鍋川沿いには北原古墳群が広がっている。また、付近は中世城館跡である塩川の砦の比定地となっ



第1図 塩川砂井戸遺跡と周辺の地勢

第1章 調査に至る経緯と経過

ている。群馬県教育委員会文化財保護課は群馬県高崎土木事務所の紹介を受け、用地確保が終了したこの区間について、平成24年12月と平成25年1月に事業対象地において、重機を用いたトレンチ試掘調査を実施した。その結果、大沢川から東側250mの範囲に竪穴住居や土坑・溝および土師器・須恵器包含層の存在を確認し、試掘対象地内の8368㎡について埋蔵文化財調査が必要と判断された。

平成25年6月27日、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で発掘調査委託契約がかわされ、同年8月より翌26年1月までの期間で発掘調査が実施されることとなった。

遺跡の名称は、当初『本郷塩川遺跡』であった。これは周辺の二つの大字を重ねたもので、本遺跡は本郷に該当していない。現地の実態的な大字と小字を組み合わせた遺跡名が妥当との判断から、群馬県教育委員会・高崎市教育委員会との協議により『塩川砂井戸遺跡』に改名する

こととした。砂井戸の小字名は本遺跡の南側に広がり、本遺跡周辺は飛び地にあたる。

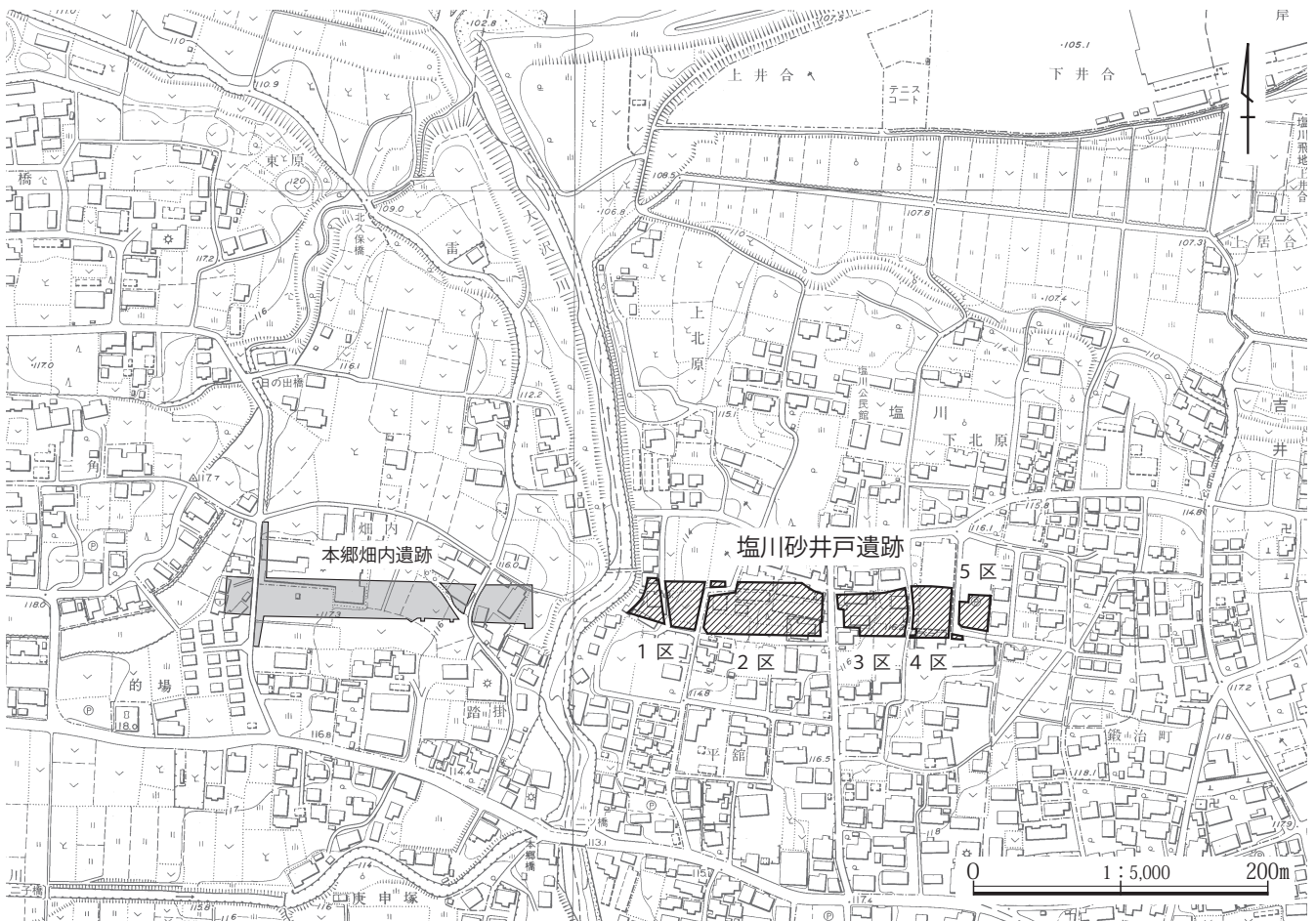
2 発掘調査の方法

(1)調査区とグリッドの設定(第3図)

塩川砂井戸遺跡の調査にあたっては、調査対象地を分断する生活道路を境に、西側より1区から5区までの調査区を設定した。このうち1区は、さらに東西2地点に分かれている。

調査区名称は調査工程管理や表採・包含層内遺物取上げ等のために用いたが、遺構番号はこれにかかわらず通し番号としたので、個別遺構の名称に反映するものではない。区を跨ぐ遺構には縄文時代の1号列石および時期不明の10・12号溝がある。

調査段階では調査区内に方眼杭を設定することはなかったが、遺構に伴わない遺物取上げのためグリッド呼称を使用した部分がある。これは平面直角座標系(新座標IX系)を用いた座標値の下3桁を呼称したもので、



第2図 塩川砂井戸遺跡調査区位置図

本報告書挿図で例示すれば、座標 $X=29,070$ と $Y=-76,650$ の交点を+記号と共に(070、-650)と略して記し、この地点を南東隅とする1m四方の範囲を070-650グリッドと呼称した。

(2)基本土層

本遺跡の基本土層は、主に河川の氾濫の影響により地点ごとに差異が見られる。ここでは第3図の試掘トレンチの調査地点で計測した、A～Hの8地点のデータを元に、第4図に柱状図を示した。

1区西はA・Bの2地点、1区東でCの1地点で記録化した。周辺は大沢川に近い西側へ低い傾斜地部分で、1区西には古代の遺構調査面にあたるIV層やその上部にあたるIII層が見られない。礫の混入が全体に多く、B地点では基盤層の砂礫層まで達している。C地点以東でIII層・IV層土が確認できる。

2区はD～Fの3地点を記録化した。D・E地点はC地点と大きな差異は見られない。2区東隅は強い傾斜部分で比高差約1mの段差を生じているが、ここにあるF地点はI～III層土が見られず、旧地形ではさらに大きな段差があった可能性がある。またE地点以西には見られなかったローム層に近いIVa層が確認できる。

3区ではG、5区ではHのそれぞれ1地点を記録化した。全体に砂礫の混入が少ない。F地点のIVa層に対応すると思われるVa層がある。

いずれの地点からも、鍵層となるテフラ層は確認できなかった。また、鎭川の氾濫層土を基盤としているようで、地山内の礫の中には長さ30cm以上の円礫が少量含ま

れていた。

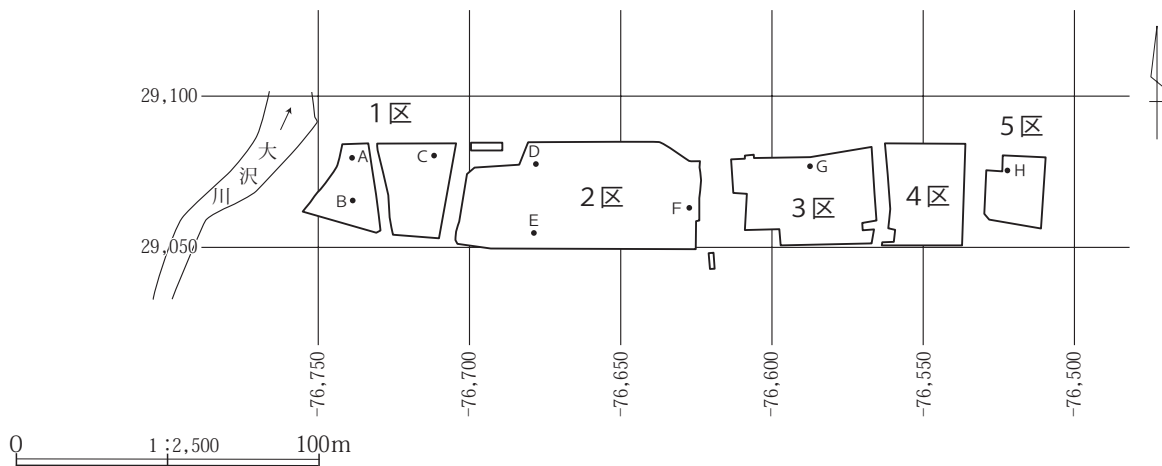
(3)調査と記録の方法

調査では、試掘トレンチデータを元に遺物包含層・遺構確認面などを把握したうえで、遺物包含層の上まで重機による土砂除去を行った。その後をジョレンを用いて人力で遺構確認を行った。把握できた遺構は、埋没土断面観察のため、小規模な遺構は半截、大型遺構は十字に土層観察ベルトを残して掘り下げを行った。ただし、ピットに関しては土層確認を行えなかった遺構がある。

記録図化はトータルステーションによる平面測量を地上測量委託して行った。アナログの断面測量は発掘作業員と調査担当者で行った。断面測量の図根点は平面測量図に加え、断面図はデジタルトレースを行って後日のデジタル版下作成に備えた。遺構写真はデジタルカメラによる撮影と、ブローニー版モノクロネガフィルム撮影を併用して調査担当者が行った。また1区の古代住居群撮影には高所作業車を用い、1・2区の縄文時代遺構面の全景撮影は、ラジコンヘリによる空中写真撮影を委託した。

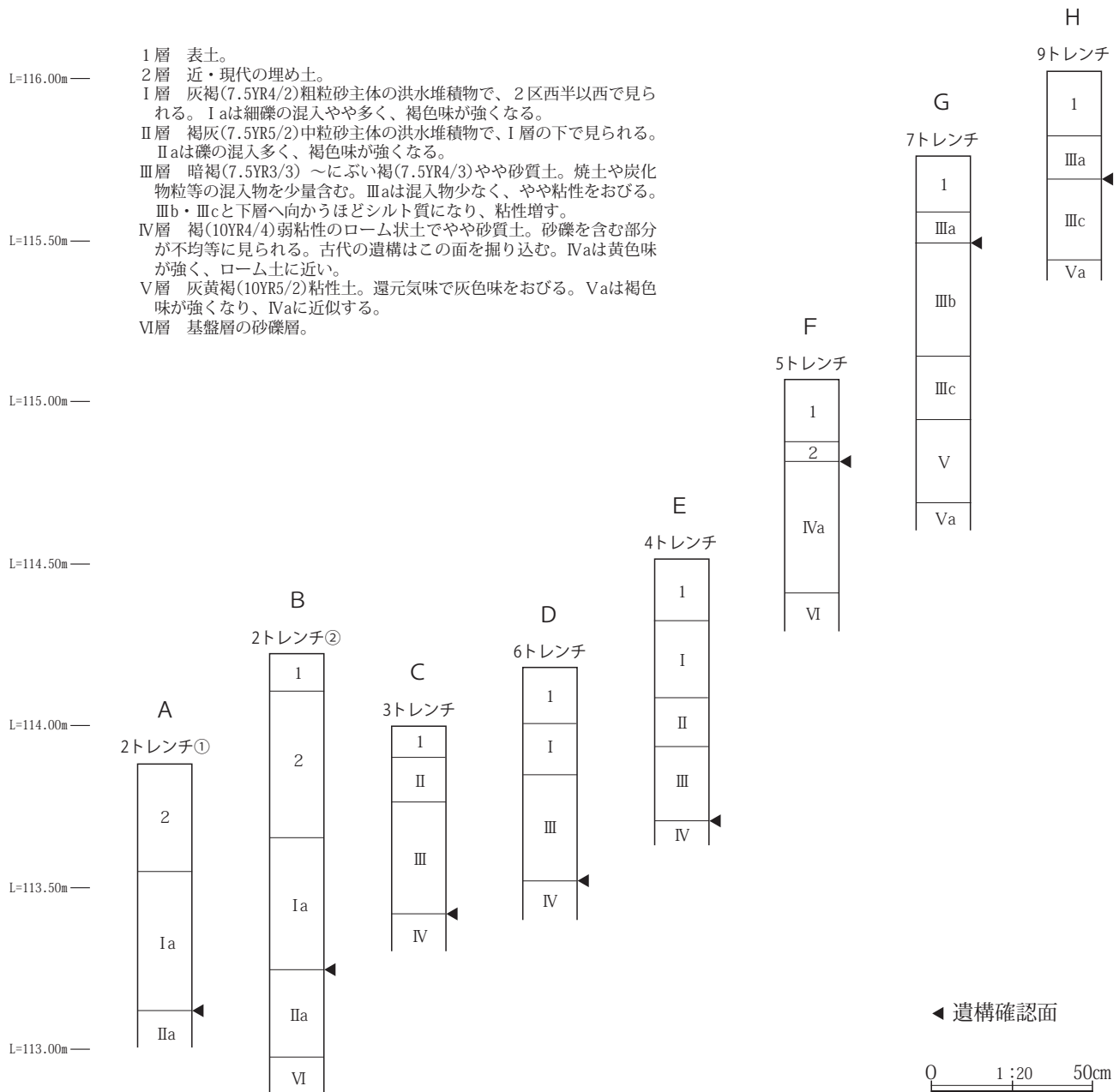
3 発掘調査の経過

発掘調査は平成25年8月より開始した。調査範囲が住宅地内にある調査のため、排土を調査区域外へ搬出することができず、調査区内に排土を仮置きしながらの用地内での打って返しの調査となった。また、地元の生活道路や水道管が調査区内に残り、一部調査できなかった部分がある。



第3図 調査区の呼称と基本土層計測地点

第 I 章 調査に至る経緯と経過



第 4 図 基本土層柱状図

バイパス建設工事の工程に合わせ、調査は 1 区より着手した。これは大沢川の護岸・橋梁工事および工事用道路の確保を行うため、1 区西側および 2 区東側北半の調査を先行させた。

遺構が密集して確認された 1・2 区は 3・4 区へ排土を置いて調査面を広げた。その後、1・2 区の北半部調査終了地点に 3 区以東の排土を置き、残り部分の調査面を広げた。このため遺跡全体を網羅する写真は撮影できず、古代の集落や縄文時代の住居・列石など部分的な調査面の撮影となった。

調査が進行する中で、11月16日(土)には地元住民向け

の現地説明会を実施した。

列石・住居上など縄文時代の埋没土は篩いにかけて、微細な遺物の検出に努めた。

調査は予定通り 2 月に現場作業を終了し、遺物洗浄と注記作業を外委託した。また、調査期間中に手実測で図化した遺構断面記録のデジタル化等、引き続き 3 月まで事後作業を行っている。

また 1 区・2 区境の現道下の一部では、道路撤去工事時の平成 26 年 5 月 15 日に立ち会い調査を行い、22 号住居の敷石部分を確認した。

具体的な調査経過は以下(調査日誌抄)に記す。

(調査日誌抄)

平成25年

- 8/2 1区より作業員・重機による掘削開始。1区西側、1・2号溝より掘り下げ開始。
 - 8/19 1区東側、3号溝掘削開始。後に縄文時代配石遺構に伴う窪みと判明。
 - 8/21 1号住居掘削開始。
 - 8/22 2～4号住居、1～4号土坑掘削開始。
 - 8/26 2区遺構確認作業開始。
 - 9/2 8号住居他2区の住居調査開始。
 - 9/10 ラジコンヘリによる1区住居群の撮影。
 - 9/24 1区溝状の窪みが縄文時代配石と判明。
 - 10/8 古代の竪穴住居調査終了。
 - 10/10 4区重機による掘削開始。
 - 10/18 1区東側調査終了し引き渡し。
 - 10/22 3区重機による掘削開始。
 - 10/28 配石周辺の土篩い開始。
 - 11/6 4区調査終了。排土置き場に。5区表土掘削開始。
 - 11/12 5区で多数のピット群より掘立柱建物確認。
 - 11/16 地元向け現地説明会開催。131名見学。
 - 11/26 5区調査終了。埋戻し。
 - 11/28 3区調査終了。埋戻し。
 - 12/10 2区周辺の道路脇部分トレンチ調査。
 - 12/11 配石現道隣接部分、調査区を広げて掘削開始。
 - 12/13 22号住居石囲い炉確認。
 - 12/17 ラジコンヘリによる配石部分写真撮影。
 - 12/18 配石石材鑑定。
- 平成26年
- 1/9 配石石材取り外し開始。
 - 1/21 22号住居下面炉・住居内土坑確認。
 - 1/24 現場作業終了。
 - 1/27 埋戻し・整地作業開始。
 - 1/30 高崎土木事務所へ全調査地点の引き渡し。

4 整理業務の経過

整理事業の実施にあたっては、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で、平成26年4月1日整理事業の委託契約がかわされ、平成26年7月1日より同事業団本部にて整理作業を開始した。

土器・石器類は洗浄注記を発掘調査時に済ませ、事業団に収納してあった。これを遺構とその周辺遺物ごとに接合し、図化個体を選定後、復元から写真撮影・実測・採拓・観察表作成作業を行った。遺物実測は長焦点実測用写真撮影や三次元計測機を併用しながら等倍のアナログ図を作成した。トレー스는掲載サイズの2倍に調整して図作成後、スキャニングによりデジタルデータ化した。遺物写真は当事業団写真室でデジタルカメラを用いて撮影し、画像修正を行って印刷原稿データ化した。併行して非掲載土器の分類・カウント作業を実施している。金属製品も当事業団で修復・保存処理作業を行い、写真撮影・実測・観察作業を行った。錆の影響で本来の形状が不明瞭なものはX線写真により旧状を復元した。保存処理後の作業の流れは土器と同様である。

石器の石材同定は、群馬県地質研究会の飯島静男氏に依頼した。

遺構図は調査段階でデジタルデータ化しており、これらを一歩修正しながらアドビ社インデザインで組版し、印刷原稿として編集した。

編集作業後は、出土遺物・図面・写真類の収納作業を終了させた。平成27年3月に発掘調査報告書「塩川砂井戸遺跡」を刊行した。

なお、調査時に付けた遺構名称は原則的に踏襲した。掘立柱建物の柱穴にはピットの通し番号が付されたものが多く、それらを掘立柱建物ごとの通し番号としたため多数の欠番を生じている。その他にピット類は番号未命名のものが大半だったため、整理段階で欠番を埋めずに新規に番号付けを行った。

第Ⅱ章 発掘調査と遺跡の概要

1 遺跡の位置と地形

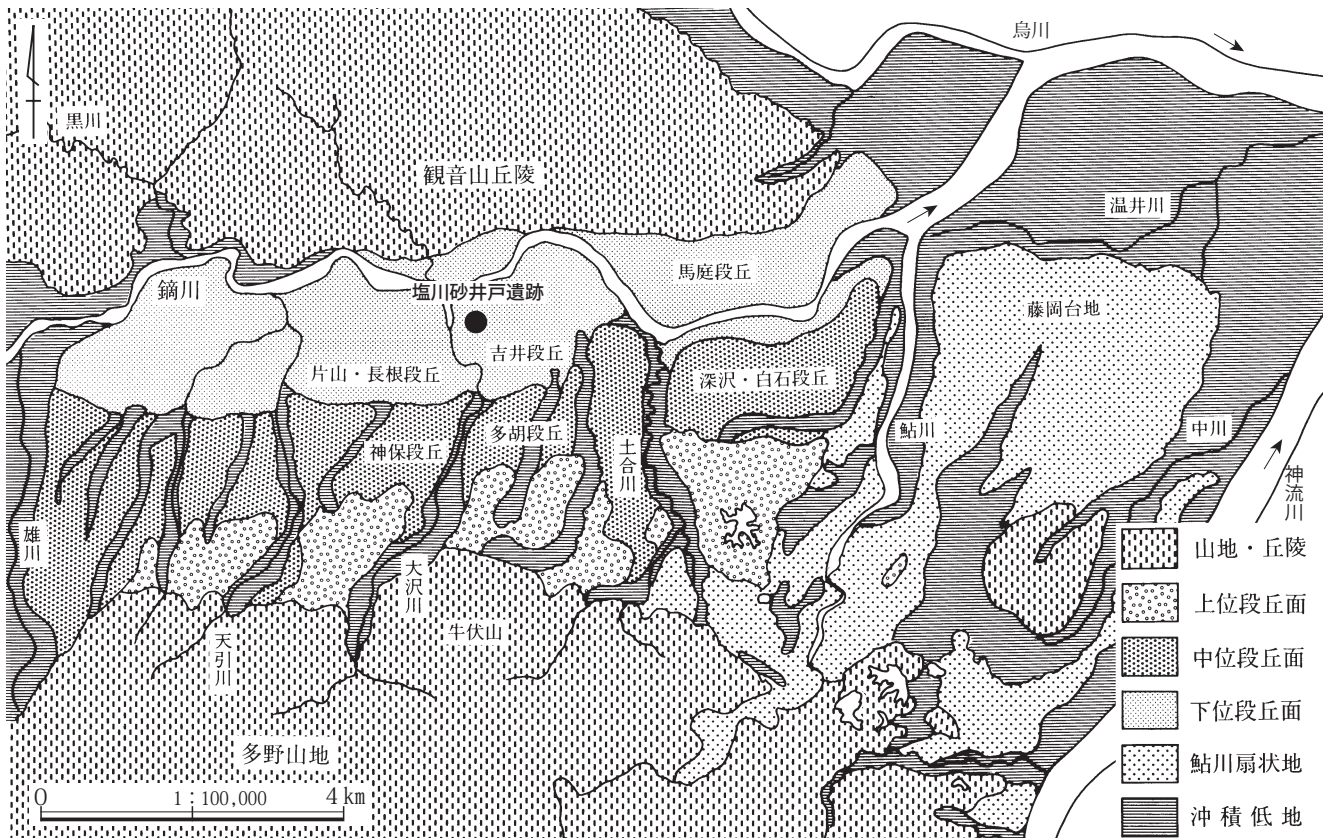
鑄川砂井戸遺跡のある群馬県高崎市吉井町(明治22年吉井町・矢田村・本郷村・塩川村など多胡郡内9町村の合併により生まれ、平成21年高崎市と合併により現在の地名となる。本文中では旧吉井町と呼称)は、関東平野の北西隅・群馬県南西部に位置している。北側・東側は高崎市が広がり、南側を藤岡市、西側を甘楽郡甘楽町・富岡市と接している。町のほぼ中央部に下仁田町と長野県佐久市の境界付近にある物見山(標高1375m)を源とする延長58.8km、流域面積632km²の利根川水系一級河川の鑄川が西から東へ流れ、高崎市阿久津町付近で利根川一次支流の烏川に合流している。

鑄川流域は古くから「甘楽の谷」「鑄の谷」と称されてきた地域である。この流域は、西側に進めば内山峠を経て長野県佐久市に至る、中部地方と関東地方を結ぶ重要

な交通路であった。現在の交通路もこの流域に沿っており、高崎-下仁田間を結ぶ上信電鉄や、東京都文京区と長野県松本市を結ぶ国道254号も鑄川の兩岸を行き交うようにして東西を繋いでいる。関越自動車道から藤岡市で分岐し、新潟県上越市で北陸自動車道へ繋がる上信越自動車道は、主に鑄川南の丘陵北隅を走向している。

鑄川流域は西側に位置する富岡市街から甘楽郡甘楽町、本遺跡のある旧吉井町にかけて、広く富岡層群と呼ばれる第三紀中新世の海成層を基盤としている。旧吉井町市街地と周辺は南側にある丘陵地から続く富岡層群中の吉井層と呼ばれる泥岩・砂岩層を主体とする面にある。

鑄川が作る段丘は左右非対称で、旧吉井町周辺の左岸北側では下位段丘が崖線を隔て丘陵地形に接している。東西に繋がる平坦なこの丘陵地・富岡丘陵は、碓氷川と鑄川の間が発達した東西約16kmにおよぶ丘陵である。標高200~300mにあってなだらかな丘頂部をもち、裾部は



第5図 遺跡周辺の地形

特に南側で樹枝状の開析谷が発達している。丘陵東隅にあたる高崎市街地に面した周辺は観音山丘陵と呼ばれ、周辺住民から親しまれている。付近ではこの名で呼称されることが一般的である。

旧吉井町から西側に隣接する甘楽町にかけての鑄川右岸では二段の河岸段丘が広がり、さらに南側は関東山地の北隅、多野山地へ繋がっている。右岸の河岸段丘は南側から鑄川へ流れ込む雄川・天引川・大沢川・土合川等多数の小河川による浸食をうけ、細かく分断されている。このうち大沢川(全長約6km)は東谷川・八束川・折茂川・長根川などの小河川を集めた旧吉井町域で流域面積、長さ、水量等、最大規模の河川である。

塩川砂井戸遺跡のある旧吉井町市街地北側は吉井段丘と呼ばれる下位段丘上にあり、西側を流れる大沢川を挟んで片山・長根段丘と接している。南側の上位段丘は多胡段丘と呼ばれ、さらに丘陵地を隔て周辺のランドマークである牛伏山(標高490m)へ至っている。

塩川砂井戸遺跡は下位段丘(吉井段丘)の北西隅、鑄川河床から比高6m前後の段丘崖より南側40m前後に位置している。付近の標高は調査区西側で114m前後、調査区東側で116m前後を測る。北側の鑄川よりも西側の大沢川へ向かって緩やかに傾斜している比較的平坦な地形である。周辺は高崎市・藤岡市のベッドタウン化し、調査前は住宅地を中心として一部に畑地が入り込む土地利用であったが、明治18年の迅速測図では、南側に点在する塩川村の集落の北方にあたり、畑地が全面に広がっていた。

2 周辺の遺跡

ここでは塩川砂井戸遺跡で主な調査対象となった縄文時代および古墳時代から中世にかけての歴史的景観を理解するために、これらの時代を中心とした周辺の歴史環境について概略を記す。

個別の遺跡については第6図に、調査報告書が刊行された遺跡を中心にドットと算用数字で示し、表1にその内容を記した。矢田遺跡など周辺で数次におよぶ広範な調査を実施した遺跡については、代表的な地点のみの掲載となっている。また長根遺跡群として11次にわたって報告された多数の遺跡はドットを示しきれず、代表的な遺跡のみの図示となった。古墳群の範囲やその他の面的

な遺跡はアルファベットで示し、表2にその内容を記した。本文中では初出の遺跡にのみ番号・アルファベットを付した。引用・参考文献は151頁に一括して記した。

【旧石器時代】この時代の遺跡は上信越自動車道の発掘調査で、多胡蛇黒い席(44)・多比良追部野遺跡(49)などが確認された。いずれも鑄川右岸上位段丘面において、約2.5万年前のA T(始良・丹沢)火山灰層下から確認されるものである。また、羽田倉Ⅱ遺跡(36)でも多数の石器出土が報告されている。

【縄文時代】縄文時代草創期・早期の遺跡はほとんど調査されていないが、本郷畑内遺跡(2)の石鏃など、点在するように出土例がある。集落が確認されるのは前期からで、鑄川右岸上位段丘上の椿谷戸遺跡(21)・神保富士塚遺跡(41)などの調査例がある。中期に入ると遺跡の範囲はやや広がり、鑄川右岸上位段丘の神保植松遺跡(42)など大規模な土坑群等の確認がある他、左岸でも東吹上遺跡(9)に土器群が見られる。本遺跡には中期後半から後期前半にかけての遺物が見られる。後期後半以降は再び遺跡が少なくなる。

【弥生時代】弥生前期から中期も遺跡は少ないが、神保富士塚遺跡では弥生中期の土坑群が調査され注目されている。弥生時代後期になると上位段丘上で集落が増加し、馬場遺跡(24)のように一旦途切れる集落もあるが、多比良追部野遺跡など古墳時代前期まで継続する大集落が多い。これらは古墳時代後期以降の集落占地と共通することを特徴としている。本郷畑内遺跡では下位段丘上の弥生時代後期住居が1棟だけだが調査され、この地区では数少ない調査例となっている。小規模ながら古墳時代前期まで集落が繋がる点は、鑄川右岸上位段丘上の主な集落と共通している。

【古墳時代】旧吉井町域は方形周溝墓の調査例が少なく、前期・中期の大型古墳の見られない地域である。古式の古墳調査例には片山古墳群(A)内で粘土槨の小円墳例がある。後期の古墳群は鑄川沿いと、上位段丘上の小河川沿いに見られる。鑄川沿いでは特に下位段丘の広がる右岸側に密集している。自然堤防状の微高地が主な占地となっているようで、片山古墳群の他に本郷古墳群(B)・下池古墳群(D)などがある。小河川沿いでは北側から流下して本遺跡北側で鑄川に合流する大沢川両側の中位段丘部に、神保古墳群(H)や多胡古墳群(I)などこの地域



第6図 周辺遺跡の分布

最大の古墳群が展開している。

集落は古墳時代前期まで上位段丘上を中心に見られるが、後期になって急激に増大し、入野遺跡(23)・長根羽田倉遺跡(37)など枚挙にいとまがない。旧吉井町南側に隣接する藤岡市や西側に隣接する甘楽町で滑石を産出することから滑石製品を製作する工房が古くから注目され、昭和37年群馬大学によって調査された入野遺跡はその嚆矢となった。下位段丘での古墳時代後期集落は、鑄川左岸の川福遺跡(6)、右岸中位段丘直下の吉井川下宿遺跡(20)などわずかに見られ、鑄川右岸縁で片山遺跡群などにやまとまった例がある。町域の広い範囲に古墳群が展開しており、それを支える集落の存在は不可欠であるが、下位段丘での集落数は十分でない。該当地が現在の市街地と重複するため、調査例が少ないものと思われる。本遺跡および本郷畑内遺跡の調査は、片山遺跡群に続く鑄川右岸自然堤防状微高地の集落展開を示す好例となった。

【奈良・平安時代】律令期の町域は倭名類聚抄記載の多胡郡にあたる地域である。本遺跡のある旧吉井町の西側に隣接する甘楽町は「から」を語源とする半島からの帰化人の多い地域と古くから推測されている。和同四年(711)、周辺の三郡から300戸を割譲し多胡郡を建郡したことが刻まれた日本三古碑の一つ国史跡多胡碑(3)は、本遺跡東側1.8kmの鑄川右岸で本遺跡と同じ下位段丘面にある。江戸時代から盛んに論考されたこの碑については、明治以降にも黒板勝美、高橋健自、柴田常恵、喜田貞吉、原田淑人、尾崎喜佐雄、坂本太郎など論考に加わった研究者の顔ぶれは特筆されるものである。続日本紀には甘楽郡の織茂(おりも)・韓級(からしな)・矢田(やた)・大家(おおやけ)の4郷、緑野郡の武美(むみ)1郷・片岡郡の山等(やまな)1郷を併せた6郷名が記され、倭名類聚抄には俘囚郷を加えた7郷が記されている。本遺跡周辺にはこれら郷名の名残が今も数多く見られる。折茂(おりも)の地名が南側1.1km周辺に、辛科(からしな)神社が南西側2.3kmに、矢田の地名が南東側2km周辺に、山名(やまな)の地名が東側5.5km周辺にあるなどきわめて密集した状態であり、多胡碑周辺の御門(みかど)の地名をもって郡衙推定地とする検討も古くから行われている。雑木味遺跡(5)は瓦出土地として古くから知られ、2013年度より行われている多胡碑周辺遺跡(4)の調査で正倉と推

定される礎石建物が確認され、炭化米が出土している。また、矢田遺跡(47)は多数の出土文字資料から矢田郷内の中核的な集落と比定されている。

本遺跡周辺は現代の地名より通常織茂郷と大家郷に比定される地域の中間点付近にあたる。調査成果からは郷に関する新たな知見は得られなかったが、多胡郡建郡の時期には確実に存在していた集落である。

古墳時代後期に見られた大規模な集落は、この時期にさらに拡大し広範囲にわたって確認される。上位段丘(多胡段丘)上の入野遺跡・矢田遺跡、および長根遺跡群として報告された神保段丘上の北高原遺跡(30)・神保境遺跡(31)などの諸遺跡は、ともに住居総数が数百棟規模の大集落である。他にも神保富士塚遺跡・長根羽田倉遺跡など周辺でも集落の調査が続き、群馬県内でも有数の集落が調査された地域である。下位段丘面では鑄川右岸縁は自然堤防状の微高地で古墳時代後期に続き集落がみられ、本遺跡や本郷畑内遺跡西側に隣接する道六神遺跡(11)の他、上河原遺跡(16)・御門遺跡(17)などの集落の広がり確認されている。しかし、古墳時代後期同様中位段丘上の集落にくらべ著しく小規模で、現市街地と重複して古代の集落が存在するものと推定する。

生産遺跡では鑄川左岸でヌカリA沢窯址(18)など平安時代初頭を中心とする時期の須恵器窯跡が調査されている。また、本遺跡南西側一帯の下位段丘面は長根条里(M)と呼ばれる条里区画地と推定されているが、明治39年からの耕地整備事業によって条里地割は姿を消し、現在の地形からその痕跡は窺えない。道六神遺跡では条里地割を留めるとされる溝が調査されている。

【中世の城館】戦国時代の西上州は後北条氏・上杉氏・武田氏の勢力が拮抗する地であった。甘楽の谷は長く小幡氏の支配下にあり、後北条氏・武田氏・織田氏などの侵攻による戦乱があった。山城・城柵の多い地域であり、下条遺跡(25)で城跡が調査されている。下位段丘には本遺跡南側に隣接する可能性のある塩川の砦(13)・大沢川を隔てて本遺跡西側の本郷の砦(12)など戦国期の城柵群が推測されているが、実体は明らかではない。

【江戸時代】信州との国境へ向かう中仙道は群馬県西部では碓氷川に沿った安中市周辺を横断しているが、鑄川沿いには中仙道脇往還である下仁田街道(N)が通っていた。信州街道・富岡街道などの呼称の他、比較的起伏が

表2 周辺の古墳群とその他遺跡一覧

No.	古墳群・遺跡名	備 考	参考文献
A	片山古墳群	鑄川右岸。粘土槨を有す中期古墳を調査し、小型仿製内行花文鏡・鉄剣・鉄斧・石製模造品等豊富な遺物出土。他に後期横穴式石室の円墳調査。	10・45
B	本郷古墳群	鑄川右岸で本遺跡西側に隣接する本郷畑内遺跡の北側。21基の後期古墳群。	4
C	北原古墳群	本遺跡北側の大沢川右岸で、鑄川に合流する地点付近の4基が確認されている小規模な古墳群。前方後円墳を含む可能性があるが不明瞭。塩川古墳群とも呼ばれる。	4
D	下池古墳群	鑄川右岸、多胡碑上流側に隣接。	4
E	高木古墳群	鑄川右岸、多胡碑下流側に隣接。6基現存。	4
F	塚原古墳群	矢田川右岸で付近には少ない前方後円墳を含む後期古墳群。蛇田古墳の調査。	4・13
G	石神古墳群	土合川左岸の小規模な後期古墳群。	4
H	神保古墳群	大沢川左岸で対岸の多胡古墳群に次ぐ63基の後期古墳群。	4
I	多胡古墳群	大沢川右岸のこの地域最大規模の91基以上の後期古墳群。	4
J	塩Ⅱ古墳群	12基の後期古墳群。	4
K	塩Ⅰ古墳群	10基の後期古墳群。塩Ⅱ古墳群と共に塩古墳群と呼ばれる。	4
L	山ノ神古墳群	7基の後期古墳群。	4
M	長根条里	片山・長根段丘上に広がる条里跡で道六神遺跡で一部を調査。明治期の区画整備事業のため範囲など明確ではなく、古地図などから存在が推定されている。	11
N	下仁田街道	中仙道の脇往還。旧吉井町域では国道254号線とほぼ重複する。	5

少なく参勤交代に用いられなかったことから庶民に用いられることが多く、姫街道とも呼ばれた。吉井町は藤岡宿と富岡宿の間にある宿場町であった。

天明三年(1783)の浅間山噴火の際の降下軽石を集めて埋めた痕跡が吉井川下宿遺跡の井戸で見られるが、畑の一面に軽石を寄せた「灰掻き山」と呼ばれる復旧痕が甘楽町の天引向原遺跡で調査されている。

火打金は江戸時代吉井宿の名産品であったが、吉井川下宿遺跡で工房と推定される一部が調査され、東シメ木遺跡(27)や多胡蛇黒遺跡に出土例がある。

平成26年6月、富岡製糸場が世界文化遺産に登録された。製糸場は本遺跡の西側約8kmの鑄川および鑄川支流の高田川に囲まれた通称富岡盆地にある。明治5年の製糸場開業には交通の便、豊富な水や木材、煉瓦や瓦造りの粘土と窯業技術、施設建設のための平坦地の存在などが求められた。これらの要件を満たし、養蚕地帯であった信濃・上野・武蔵を結ぶ要所としてこの地域が選ばれるに至った、歴史的な裏付けが看取できる。

第Ⅲ章 調査の内容 (古墳時代以降)

1 調査の概要

塩川砂井戸遺跡の古代以降の遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、ピット、土坑、井戸、溝、遺物集中地点がある。全体図(付図1)の他に、竪穴住居(第8図)およびピット集中地点の配置図(第44・45・52図)、溝は位置図(第58図)を記した。また、表3には該期の遺構数に縄文時代の遺構数を加え、調査区ごとに集約した。

1区西側は大沢川に面した傾斜面、1区東側は傾斜変換点から平坦面にあたる。主な遺構は1区東側以東で確認されている。1区東側には古代の住居6棟が比較的密集して確認される。

2区は最も広い調査区で大半が比較的平坦な部分にあたるが、東隅は東へ向かって高くなる傾斜面となっている。この傾斜面より上側からは古代の遺構は確認できない。傾斜面直下にあたる2区北東隅に古代の住居8棟が密集している。これとは別に5棟の竪穴住居が広範に散在している。竪穴住居密集部分に掘立柱建物が1棟重複しているが、時期不明の施設である。方形の区画を画すと思われる4号溝が傾斜面を貫いている。中世以降の施設と想定するが、時期を確認できない。

3区は全体に平坦なうえ2区に次ぐ広さがある。平坦面で、中世方形館の内部となる可能性があるが、遺構は少ない。

4区は攪乱の影響が顕著で、全容を把握できていない。

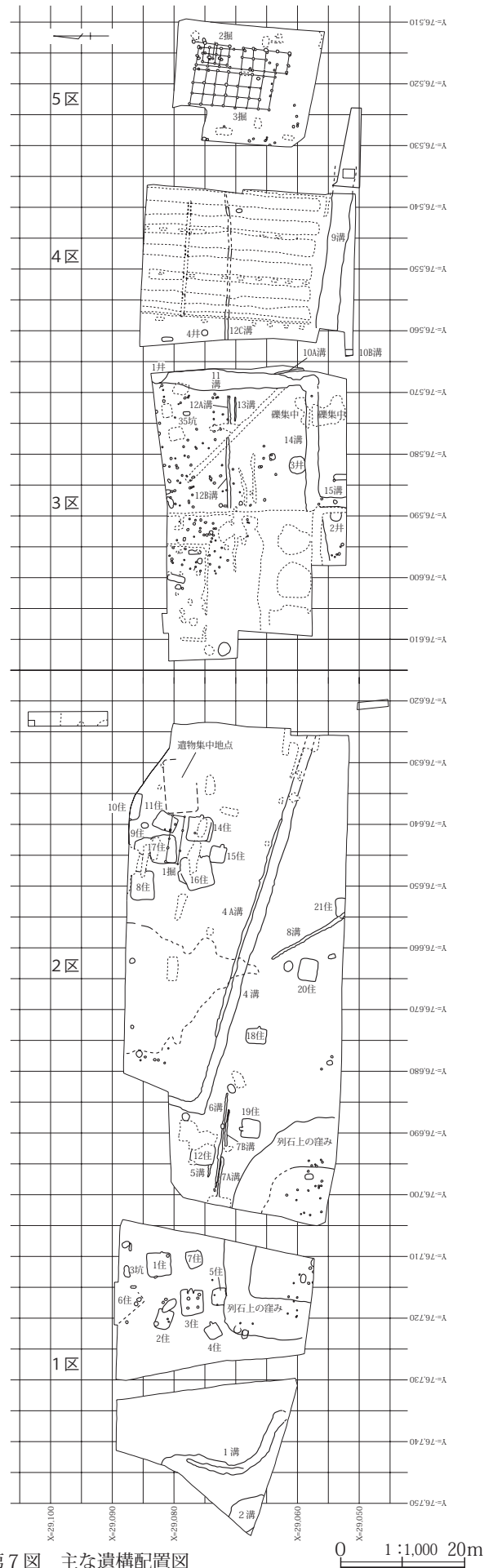
5区も遺構は少ないが、大型掘立柱建物の3号住居が孤立するようにして確認できた。

表3 調査区別 主な遺構数一覧

調査区	縄文住居			中世溝	古代以降時期不明					他
	古後期	奈・平	不明		掘立柱建物	土坑	井戸	溝	ピット	
1区	2	1	3			10		2	22	
2区		11	2	1	1	9		5	30	* 1
3区				2		14	3	4	141	
4区				1		2	1	(2)		* 2
5区					2				33	
合計	2	12	5	3	3	35	4	11	226	

* 1 遺物集中地点(奈良・平安時代)

* 2 溝2条は3区溝から繋がる



第7図 主な遺構配置図

2 竪穴住居

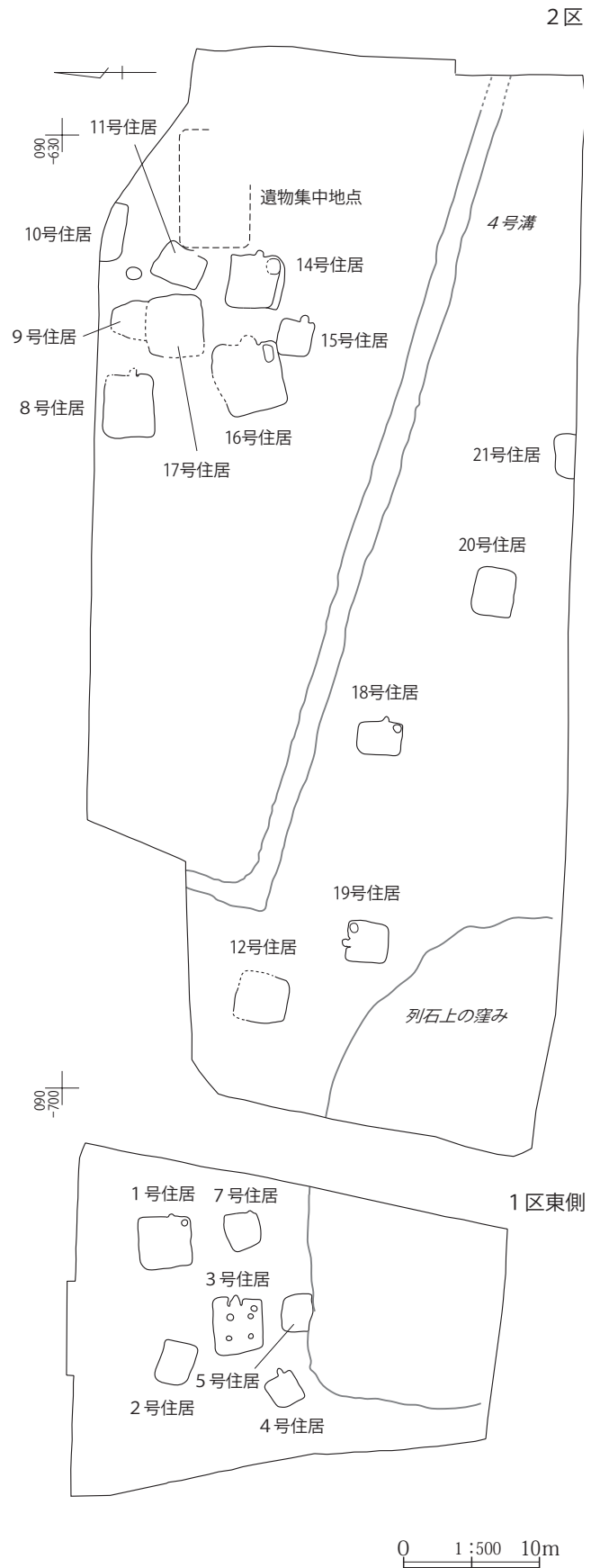
発掘調査により、縄文時代と古墳時代以降の22棟に竪穴住居番号を付けた。このうち6・22号住居は縄文時代の住居で、13号住居は整理段階で遺構ではないと判断した。これにより、古墳時代以降の竪穴住居は19棟となった。これらにはカマドの設置のない“竪穴状遺構”と称される施設に近い遺構や、範囲が明瞭でない遺構も含まれている。

時期が特定できた遺構により、古墳時代後期から平安時代までの集落であることが分かる。調査範囲には明らかな奈良時代の住居が見られず、遺構外にも奈良時代遺物の出土は少なく、永続して営まれた集落であるか判断できなかった。

古墳時代以降の集落は1区東側から2区にかけて、限られた範囲に分布し、3区以東では全く確認されていない。3・4区には広い攪乱があるが、古代の遺物の出土はほとんどなく、集落のない一画と想定できる。

竪穴住居は特に1区北東寄り付近に6棟、2区北東寄り付近に8棟が集中している。2区北東隅には古代の遺物集中地点が集落に隣接して確認されているが、竪穴住居があった可能性もある。住居間の重複は1区にはなく、2区北東寄り付近の8棟の住居に9・17号住居、15・16号住居間の2例が見られる。残り5棟の住居が2区南側にまばらに広がり、隣接する住居とは10m近く離れている例が多い。また、古墳時代住居2棟が1区にあるのに対し、平安時代の住居12棟中、11棟が2区に偏在している。集落占地の移動が確認できる。

カマドを持つ竪穴住居の形状の特徴として、南辺が北辺よりやや短くなる逆台形状に歪む傾向が看取できる。1区1・3・7号住居、2区11・16号住居に共通して確認できた。



第8図 住居配置図

1号住居

(第9・10図 PL.3-①~⑥、30 遺物観察表134頁)

1区北東寄りの住居群内にあり、南側2mに7号住居、南東側3mに3号住居が隣接している。

位置 080~084、-709~713グリッドにある。

規模形状 南辺は3.3m、他辺は3.6m前後で逆台形状にやや歪む方形を呈している。

埋没土・壁 壁際でいわゆる三角堆積が見られるが、住居中央部分では水平堆積に近い状態である。投げ込まれたような礫が多く、人為的な埋戻しがあったと思われるが明瞭ではない。壁は40cm前後の深度があった。

方位 N-2° W(長軸) N-84° E(カマド)

面積 11.95㎡

床面 緩やかな凹凸があり、全体では東側へ低く傾斜して西壁際と5cm前後の比高差を生じている。床面下のほぼ全域に深さ5cm前後の掘り方があるが、掘り方の浅い一部で地山の小礫が床面に露出している。床面の踏み固めは弱く、貼床は認められない。

壁溝 カマド周辺と南東隅周辺および各辺の中央付近で途切れる不規則な壁溝が見られる。規模は幅9~22cm、深さ6~10cmを測り、不規則な壁溝としては明瞭な施設

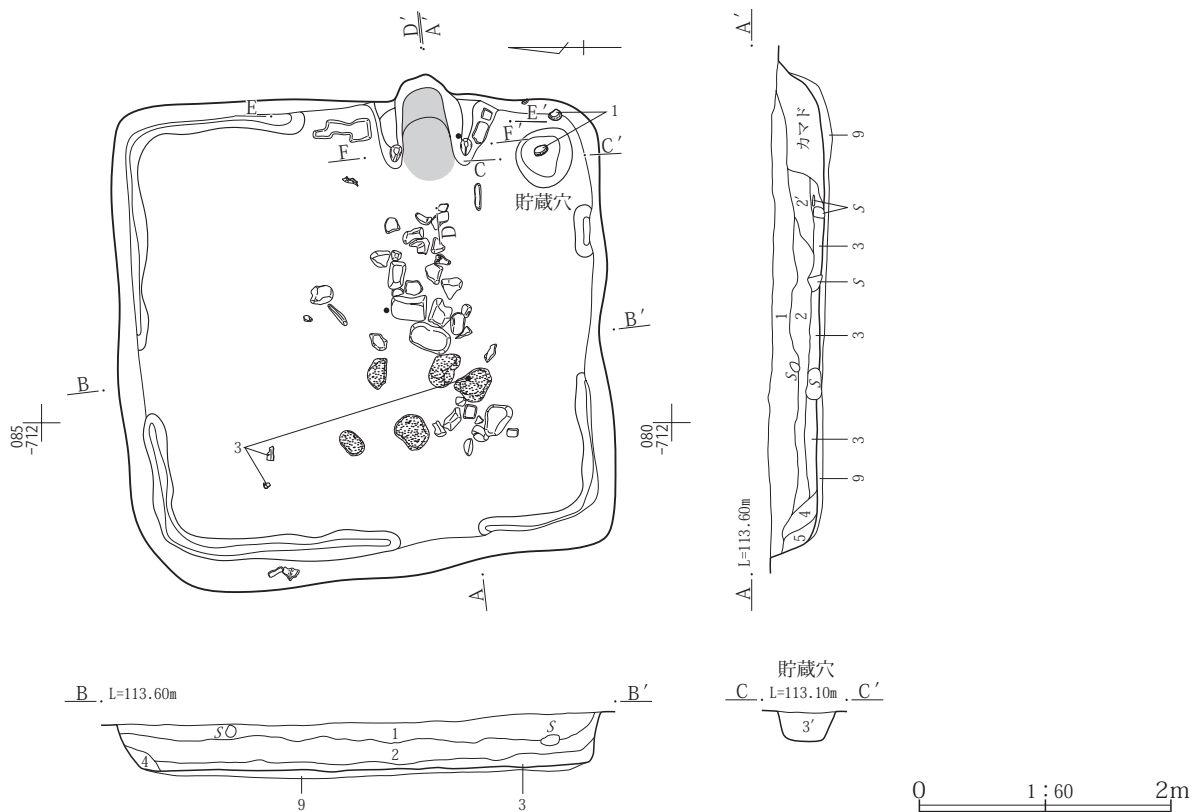
である。

貯蔵穴 南東隅にある。径49×44cm、床面からの深さ25cmで底面が平坦な施設である。上面に踏み固めはなく、貯蔵穴内出土遺物が周辺床面出土遺物と接合する例があり、住居廃絶時に開口していたことが分かる。

カマド 東壁南寄りにある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面とほぼ同じ高さにある。両袖先端に細長い礫が据えられていて、石組みの焚口部であった可能性があるが、焚口天井材に使用したと思われる礫は見られない。南袖外側には裾付近に平坦な川原石や割り石状の礫が貼り付けるようにして置かれていた。また北袖外側には住居壁直下に割り石状の礫が住居床直上に据えられていた。煙道は確認できない。

その他 柱穴は確認できない。住居中央に多量の礫が見られる。一部床直上の礫があり、図のトーンで示したものは礎盤石状の平坦な川原石であった。他のほとんどの礫は床面より少し浮いた状態にあり、住居埋没過程で投げ込まれたものと思われる。

遺物 出土遺物はきわめて少なかったが、土師器3点を図示した。杯1は南東隅および貯蔵穴内、壺3は住居中央から西寄りにかけての床直上出土破片を含むもので、



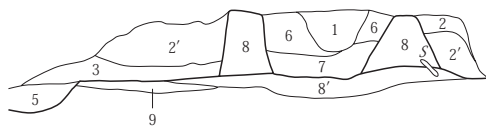
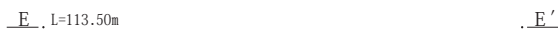
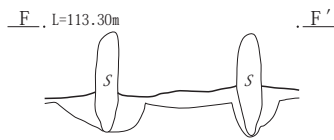
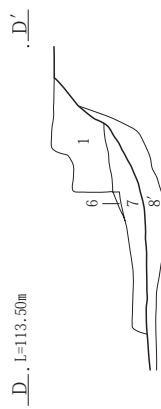
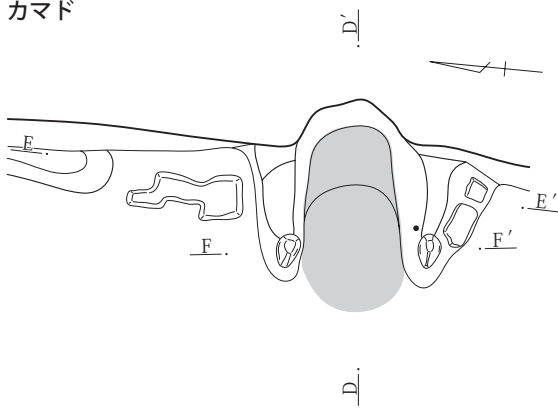
第9図 1号住居

これらは本住居に確実に伴う遺物である。2は埋没土内の遺物だが、丸胴気味の大型甕で本住居遺物と考えると齟齬はない。図示した以外には土師器壺・甕類の破片を3

点出土したのみであった。

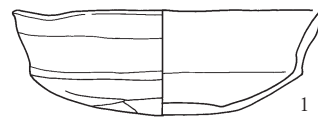
所見 出土遺物は少なく不明瞭だが、土師器模倣杯のある6世紀後半の住居と考えられる。

カマド

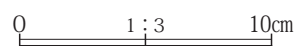
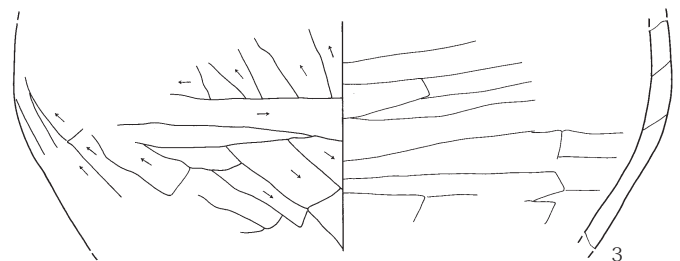
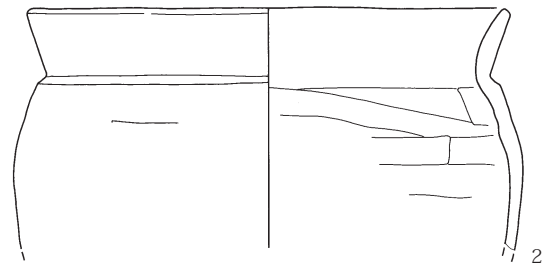
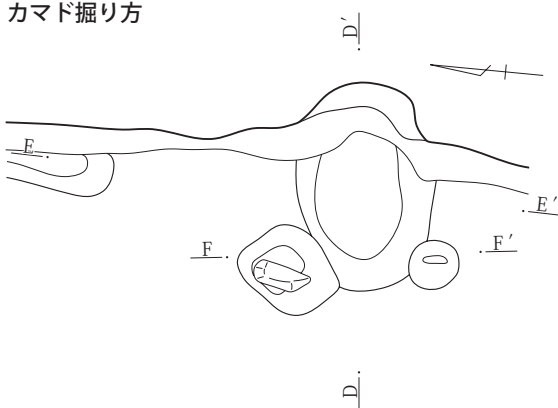


1号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/3)小礫・炭化物粒を含み、焼土粒を散見する。
- 2 褐(7.5YR4/3)小礫を含む。炭化物粒・焼土粒が1層より多い。
- 2' はカマド崩落土主体で焼土はブロック状に混入。
- 3 褐(7.5YR4/4)炭化物粒・焼土粒・褐色土ブロックを含。3'は貯蔵穴埋没土でやや黒色味強く、小礫混じり、焼土粒は少ない。
- 4 灰褐(7.5YR4/2)褐色土粒含む。やや砂質。
- 5 黒褐(10YR3/2)褐色土ブロックを含む。
- 6 赤褐(5YR4/6)カマド上側の構築材で焼土粒多い。
- 7 明赤褐(5YR5/6)カマド燃焼部埋没土で焼土主体。
- 8 暗褐(7.5YR3/4)褐色土粒・小礫をわずかに含む袖構築材。
- 9 暗褐(7.5YR3/3)炭化物を少量含む掘り方埋戻し土。8'は袖下層および火床下の埋戻し土で黄色味が強い。



カマド掘り方



第10図 1号住居カマドと出土遺物

2号住居

(第11図 PL. 3-⑦・⑧)

1区北東寄りの住居群内にある。

位置 080~083、-718~721グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.15m、南北軸長2.50mの東西に長い長方形を呈している。各辺は直線的だが西側の両隅の丸みが強く、歪んだ形状になっている。

埋没土・壁 炭化物粒の混じる単層土で埋没過程は明らかにできない。壁は浅く、7cm前後であった。

方位 N-72° W(長軸)

面積 復元[6.97] m²

ピット 南壁寄りに規模の近似した2基の小ピットを確認し、P1・P2とした。埋没土の記録を欠き、住居廃

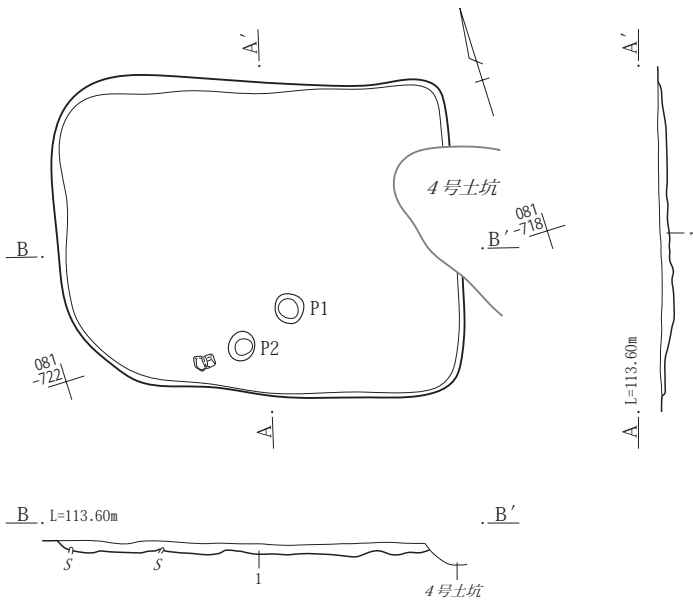
絶時に開口していたか確認できない。深度にやや乏しく、配置からも柱穴的ではない。

床面 踏み固めのない不明瞭な床面であった。床全面に凹凸が多く、5cm前後の比高差が見られた。一部でやや大きな地山の礫が露出し、焼土や炭化物粒等による汚れも見られず、住居床らしさに欠けていた。

その他 4号土坑に前出している。カマド・炉等の施設を欠いている。

遺物 図示できる遺物の出土はなかった。埋没土内から形状の不明な土師器の小片が2点出土し、他に近世磁器小片1点があった。

所見 炭化物粒の混じる埋没土で竪穴住居的ではあるが、規模が小さいうえにカマド等の施設がなく、“竪穴状遺構”あるいは“小竪穴遺構”等と呼称される遺構となる可能性もある。遺物から時期を想定することもできなかった。



2号住居土層説明
1 暗褐色(7.5YR3/3)少量の炭化物粒を含む。

第11図 2号住居

3号住居

(第12~15図 PL. 4、30・31 遺物観察表134・135頁)

1区北東寄りの住居群内のほぼ中央にある。北東側約3mの1号住居とカマド軸を揃えるようにして並んでいる。

位置 075~078、-715~719グリッドにある。

規模形状 南辺が北辺より60cm短い逆台形を呈している。各隅の丸みは少なく、比較的整った形状である。

埋没土・壁 断面の観察では壁際からの自然堆積に見えるが、多量の礫が投げ込まれており、人為的な埋戻し部分を含んでいる。壁は比較的深度があり、全域で壁高30

cm以上を測った。

方位 N-88° W(長軸) N-92° E(カマド)

面積 11.37m²

床面 細かな凹凸があり住居中央や貯蔵穴周辺でやや低くなる傾向もあるが、ほぼ水平な床面である。しかし、やや大きな地山礫が露出する部分があり、平坦な床面とはなっていない。住居粗掘り時の窪みを埋め戻す程度のわずかな掘り方が、ほぼ全面に見られた。

貯蔵穴 南東隅付近に径47×41cm、床面からの深さ25cm、底面が平坦な窪みがあり貯蔵穴とした。遺物の出土がなく、住居廃絶時に開口していなかった可能性がある。

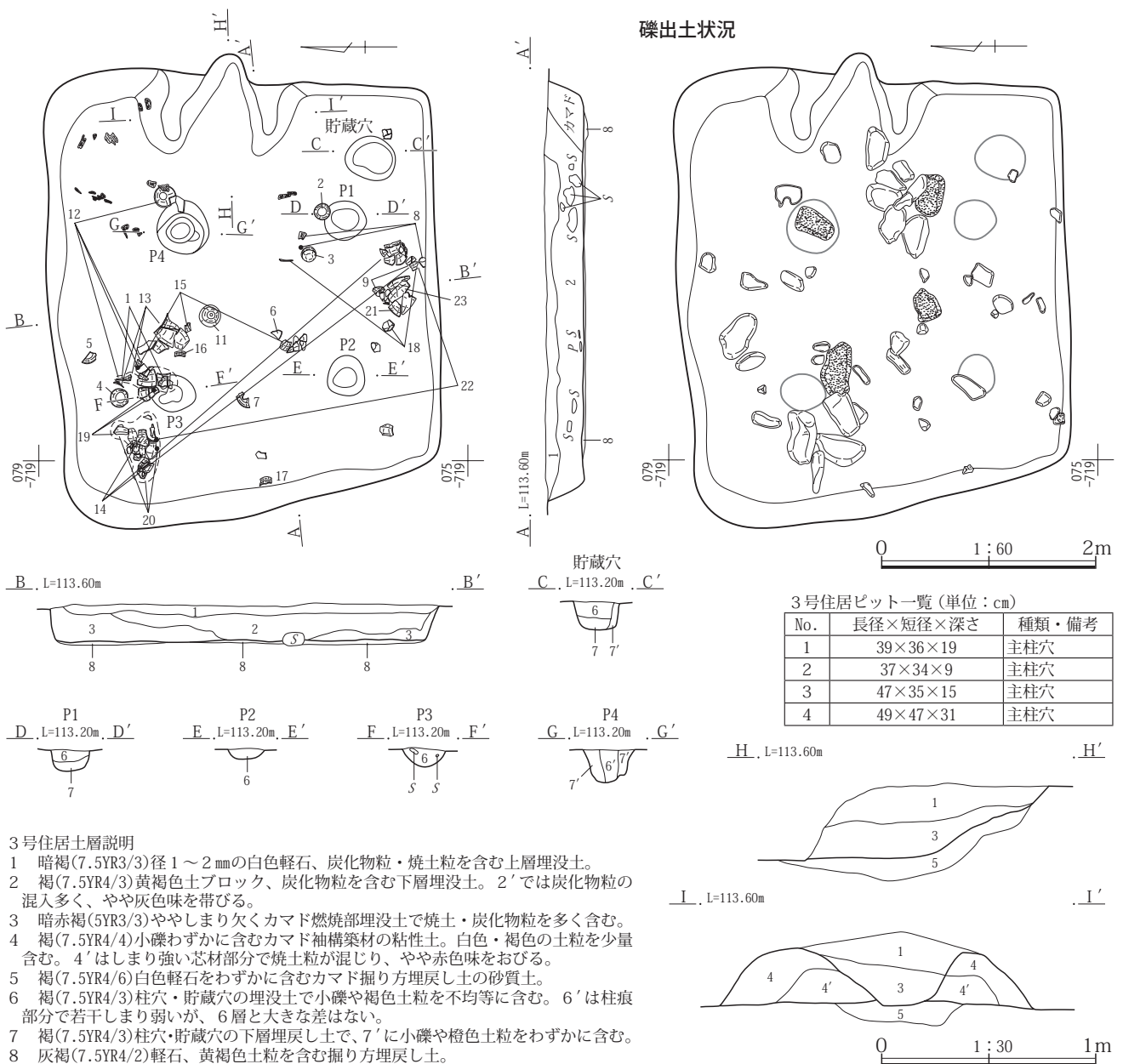
ピット 本遺跡で唯一四支柱穴を確認したが、P 4 以外深度に乏しい。住居四隅からの対角線上穿たれていて、やや平行四辺形気味に歪んだ配置にある。

カマド 東辺の中央やや北寄りにある。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床と同じ高さにある。煙道は短く、壁外への張出しは25cmである。両袖は比較的良好に残存している。袖構築材中に焼土の混入が見られ、造り直された可能性がある。

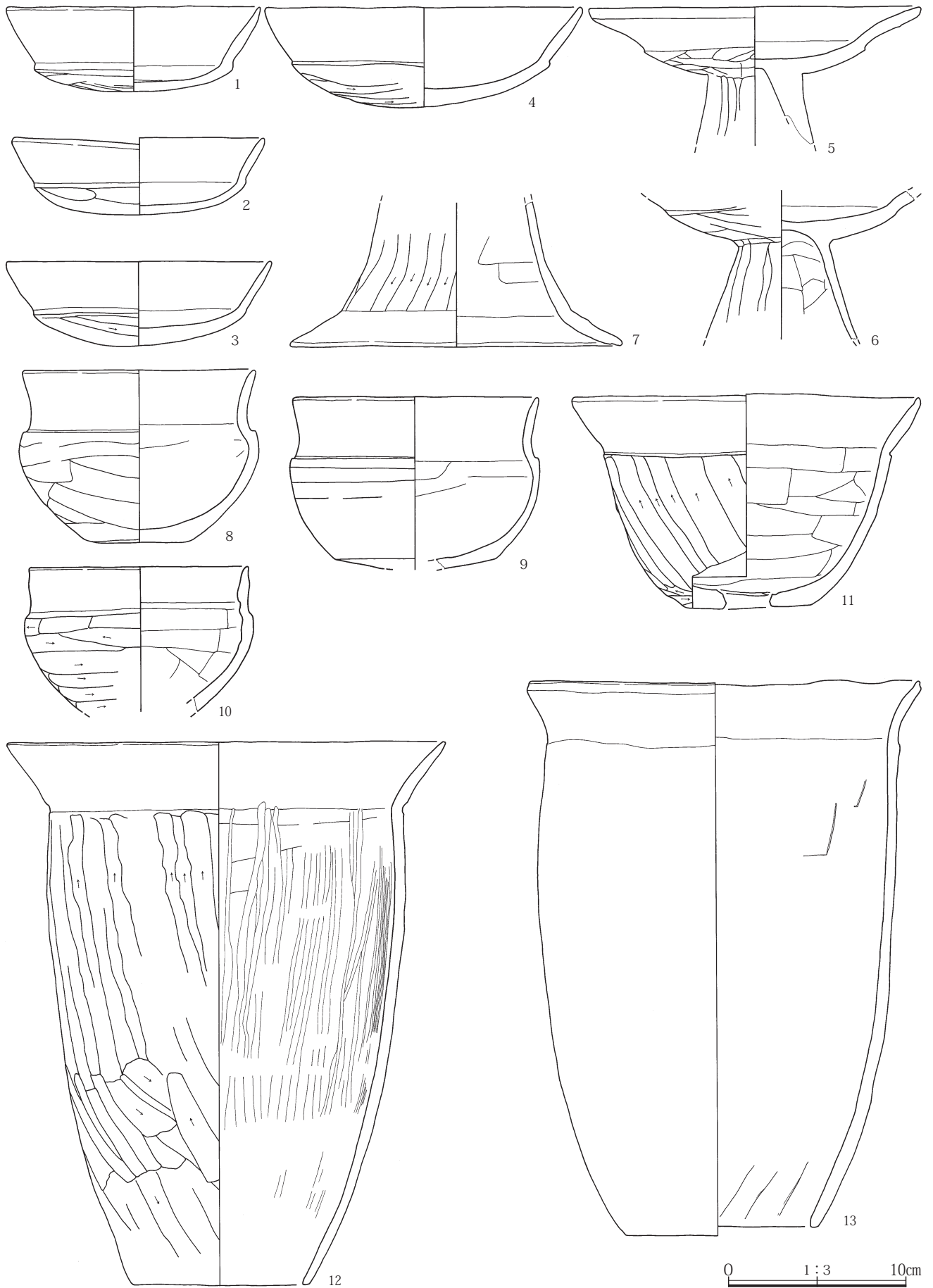
その他 壁溝は確認できない。最大で長さ50cm以上の礫が床面よりやや浮いた状態で多量に確認された。柱穴上に位置するものもあり、住居廃絶後に投げ込まれたものである。1号住居同様に床直上に据えられたような礎盤

石状の平坦な川原石もあり、図中にトーンで示した。長さ50cm近い規模の近似した礫が多数見られ、石組みの構造物が付近に存在して可能性もある。

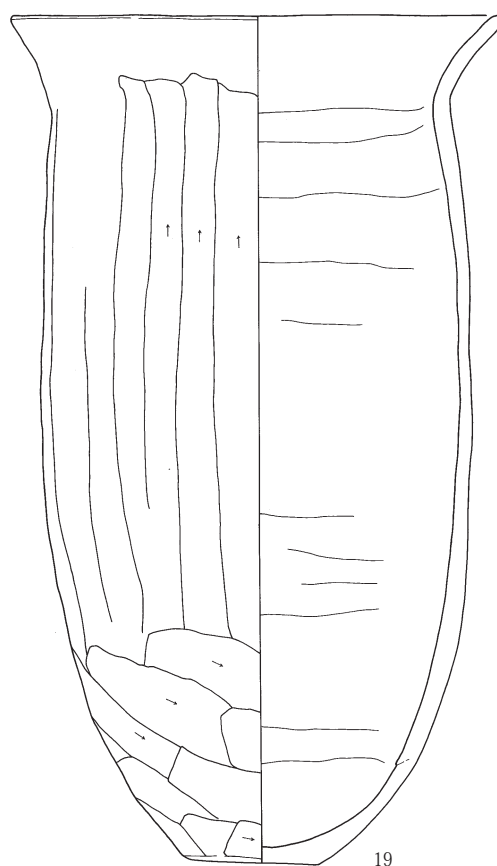
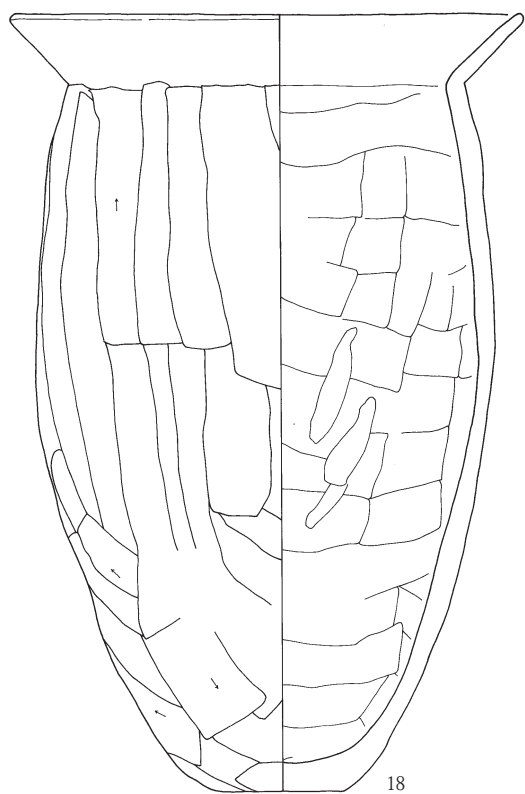
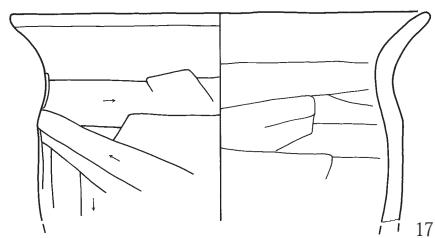
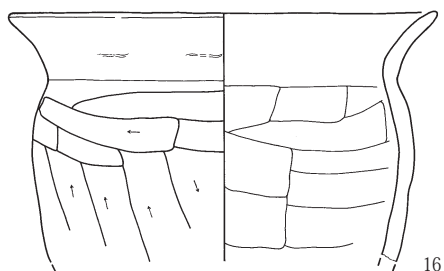
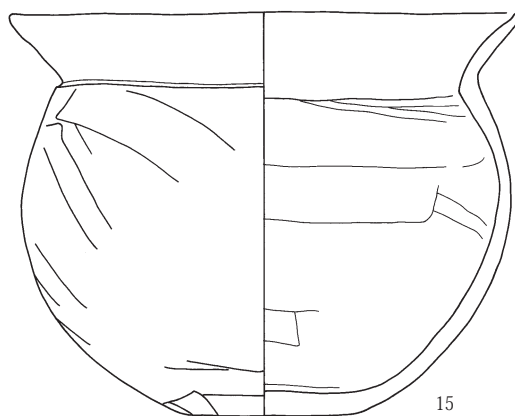
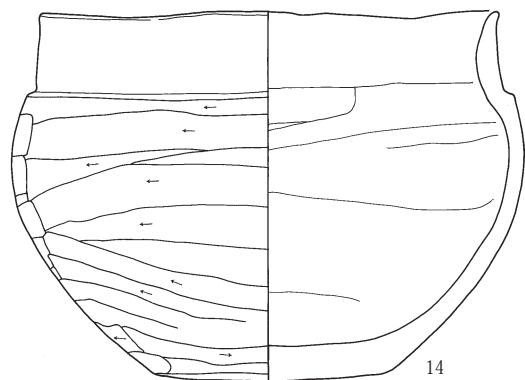
遺物 出土遺物はきわめて多く良好な資料を得て、土師器23点を図示した。遺物は住居内に広く散乱するようにして出土し、北西隅付近と南壁下で特に多く見られた。北西隅付近では杯1・4、高杯5、小型甕16、甕19・20が出土した。杯1は床直上、甕19・20もほぼ床直上の出土で、他は床面より5cm前後高い位置の出土である。南壁下では鉢9、甕21・23が床直上から出土している。2点の甕類はいずれもカマド内出土破片と接合した点の特筆される。他に西壁直下の小型甕17、中央付近の杯2・



第12図 3号住居

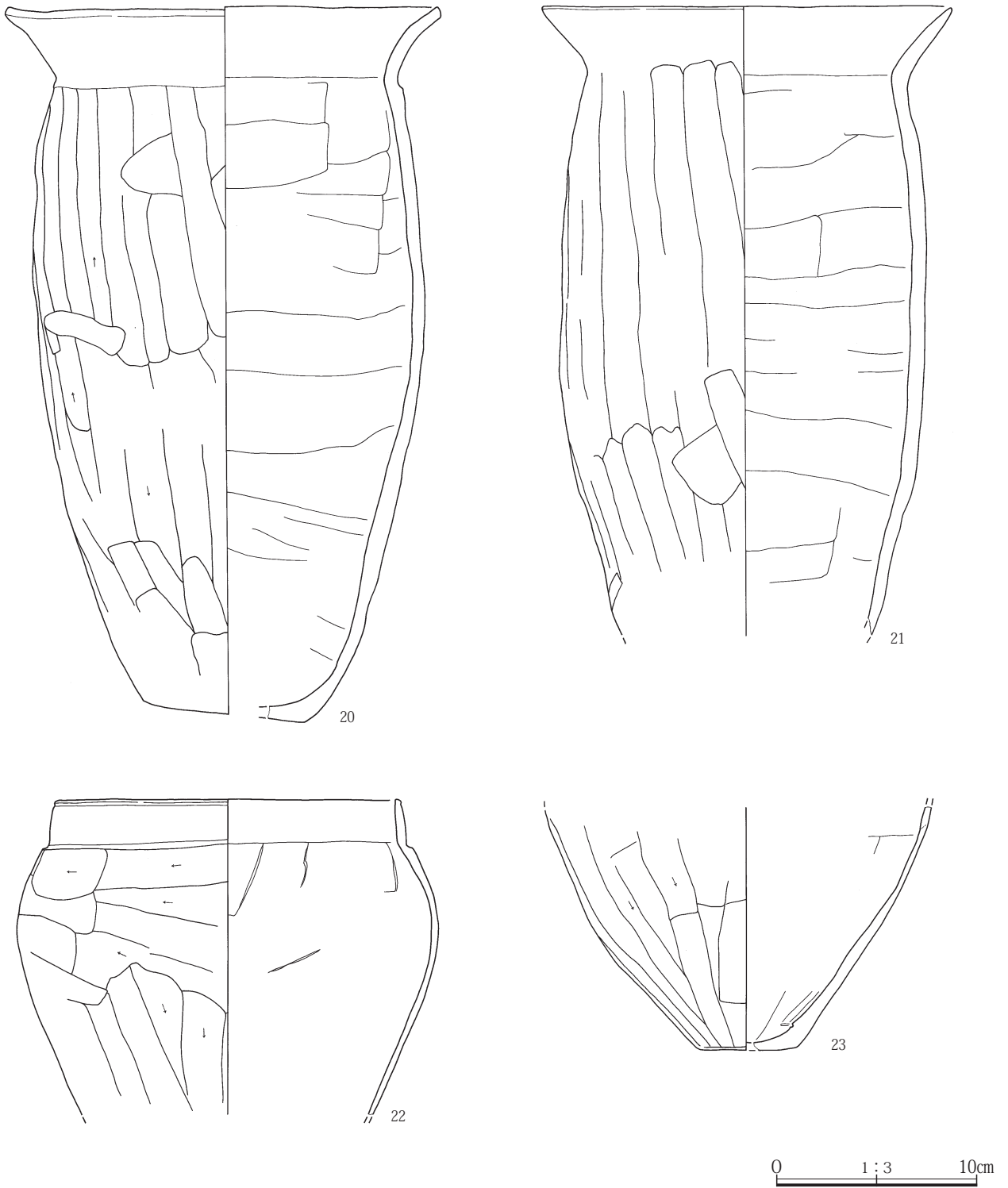


第13図 3号住居出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第14图 3号住居出土遺物(2)



第15図 3号住居出土遺物(3)

3、有孔鉢11等が床直上出土遺物である。甑12、小型甕14・15、甕22など杯類以外では離れた位置に散乱した遺物が目立った。

図示した以外の土器はほとんどが土師器壺・甕類で202点を数え、他は土師器杯・鉢類が17点、不明が5点で、須恵器は壺類の4点のみであった。なお、上層には平安

時代遺物(第75図4～6羽釜)の混入も見られた。

所見 甕類の長胴化が顕著な7世紀代の住居である。床直上出土の豊富な遺物があるが、多量の甕・甑類がカマドから離れて出土しており、旧生活面をそのまま留めた状況ではないようだ。

4号住居

(第16図 PL. 5-①~④)

調査された住居中最も西側にある住居で、3号住居の約2m南西側にある。付近は集落の最西部にあたり、地山が西側へ緩やかに低くなる傾斜変換点付近に位置している。

位置 072~075、-720~723グリッドにある。

規模形状 一辺2.3m前後の正方形に近いプランを呈しているが、西隅の丸みが強く、歪んだ形状となっている。

埋没土・壁 南西側から偏って埋没しており、自然堆積の状況ではない。西側には埋没土を掘り直したような痕跡があり、土坑状の重複遺構があった可能性がある。

方位 N-59° E(長軸) N-63° E(カマド)

面積 4.50㎡

床面 緩やかな凹凸があり、住居中央から南隅にかけて低くなる弱い傾斜があり、他辺の壁際より4cm前後深く

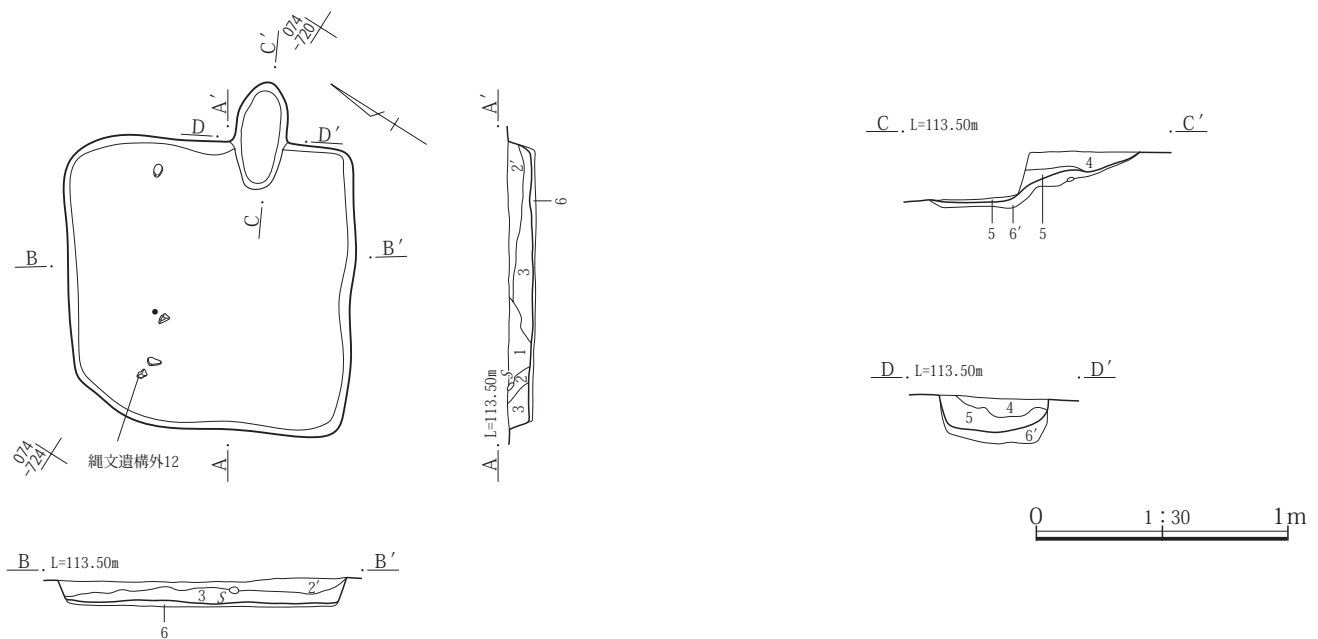
なっていた。住居粗掘り時の窪みを掘削残土で埋め戻す程度の不明瞭な掘り方がほぼ全面に見られるが、地山の小礫が一部で露出していた。

カマド 北東辺南寄りにカマドの痕跡と思われる施設が見られる。燃烧部は壁際から壁外にかけての位置にあったと思われ、埋没土内に崩落天井部と思われる焼土が見られるが、明瞭な火床は残存していない。袖の痕跡も見られない不明瞭な施設である。

その他 柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

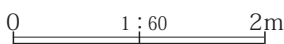
遺物 土師器片が17点出土したのみで、図示に耐える遺物はなかった。縄文時代遺物の混入があり、遺構外の遺物2・12として第108図に示した。

所見 時期を推定する根拠を持たない。縄文時代の列石上の窪みに沿うように、本住居のみカマドの軸方向が北東側を向いている。またカマドのある住居としては、本遺跡で最も小型の住居となる。



4号住居土層説明

- 1 黒褐(7.5YR3/2)褐色土粒を少量含む層で、土坑状の別遺構埋没土の可能性。
- 2 暗褐(7.5YR3/3)褐色土がブロック状に入る1層の影響を受けた層。2'では径2~3mm礫を含むやや砂質土層。
- 3 褐(7.5YR4/4)下層埋没土で炭化物粒を少量含む。
- 4 黒褐(7.5YR3/1)炭化物粒を少量含むカマド上層埋没土。
- 5 褐(7.5YR4/4)焼土ブロック・炭化物粒を含む崩落天井部および燃烧部埋没土。
- 6 灰褐(7.5YR4/2)軽石、黄褐色土粒を含む掘り方埋戻し土。6'はカマド掘り方埋戻し土で住居掘り方より黒色味が強いが、焼土・炭化物粒等の混入は少ない。



第16図 4号住居

5号住居

(第17図 PL. 5-⑤・⑥)

1区の住居群中最も南側にあり、南隅は縄文時代の1号列石上にある窪みに接している。

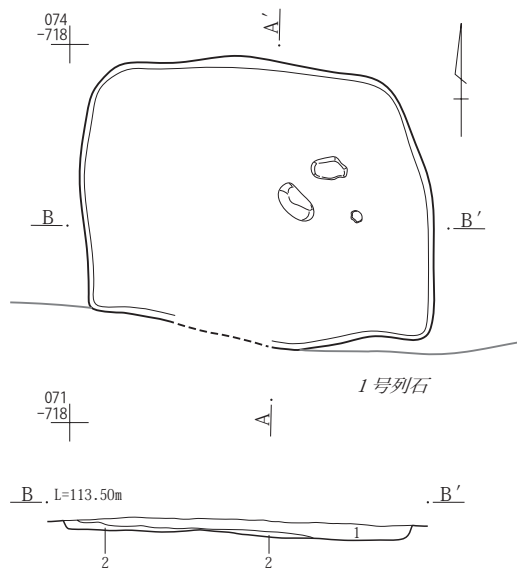
位置 071~073、-715~717グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.8m、南北軸長2.3mの長方形を呈している。東辺の北半が住居内側に屈曲し、南辺も蛇行気味で歪んだ形状となっている。

埋没土・壁 壁際からの自然堆積が観察できる。埋没土に焼土や炭化物粒などの混入がなく、住居的ではない。

方位 N-85° W(長軸)

面積 復元[5.24] m²



第17図 5号住居

床面 踏み固めのほとんどない不明瞭な床であった。凹凸も多く10cm前後の比高差を生じているが、地山礫の少ない一面にあるため、本遺跡の住居内では整った床面となっている。掘り方は認められない。

その他 縄文時代の列石上に廻る窪みの縁辺部に築かれている。カマドや炉および柱穴などの施設は確認できない。住居中央付近の床直上にやや大きな礫が2点確認されているが、本住居に伴うか、廃絶直後に投げ込まれたものか、判断できなかった。

遺物 土師器片が5点出土したのみで、図示に耐える遺物はなかった。

所見 竪穴状遺構と分類される施設に近い遺構である。時期を推定する根拠を持たない。

5号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/3)小礫を含む上層埋没土。
- 2 褐(7.5YR4/4)下層埋没土でやや砂質土。

7号住居

(第18図 PL. 5-⑦~6-②、32 遺物観察表135頁)

1号住居の南側約2mにあり、同住居と並んで1区最東部に位置している。

位置 075~078、-709~712グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.7m、南北軸長2.6mの小型住居で、南辺が北辺より80cmほど短い逆台形状の歪みが顕著なうえ、各辺の丸みが強い不整な形状を呈している。

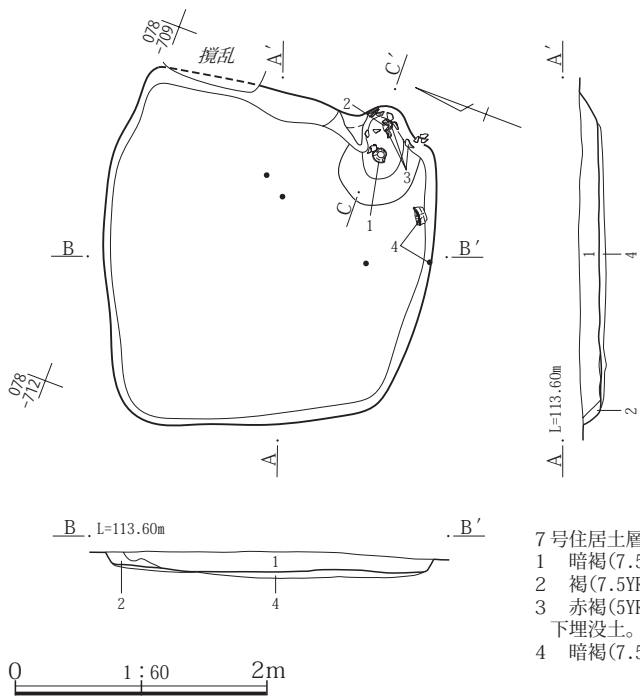
埋没土・壁 西壁・北壁側から急な埋没の形跡が認められる。自然堆積的ではない。

方位 N-74° E(長軸) N-85° E(カマド)

面積 5.40m²

床面 緩やかな凹凸のある床で、全体では南側へ低く傾斜していて北壁下と5cm前後の比高差を生じている。住居粗掘り時の窪みを埋め戻すような不明瞭な掘り方があるが、地山礫の露出する部分が見られた。

カマド 東辺南隅にある。燃焼部は壁際にあり、火床は住居床より2cmほど低くなっていた。火床下には層厚7cmの焼土や灰の層があり、前出して使われた火床がこの下にあると思われる。火床中央付近に後出火床の支脚に用いたと思われる礫が見られた。北袖基部がわずかに残存している。南袖基部に角柱状の礫があるが袖石とするには短く、北袖裾付近の礫は平板な形状で袖石には不向きな礫である。煙道は確認できない。



その他 壁溝・柱穴等の施設は確認できない。

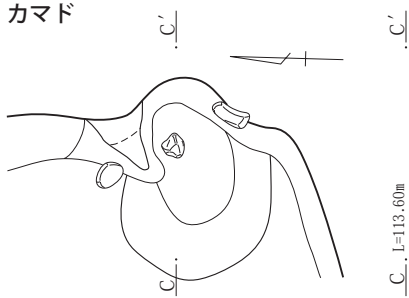
遺物 須恵器碗3点、羽釜1点を図示した。碗類はいずれもカマド内の出土で、羽釜7は床より5cmの高さだが壁に密着するような状態の出土で、いずれも本住居に確実に伴う遺物である。図示した以外の土器は少なく、土師器は甕類を中心に52点、須恵器は5点のみであった。

所見 碗類は還元焰焼成が不十分だが口縁の外反がわずかに残り、羽釜は平坦な口縁部を呈している。9世紀末から10世紀初頭にかけての住居と想定できる。

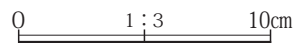
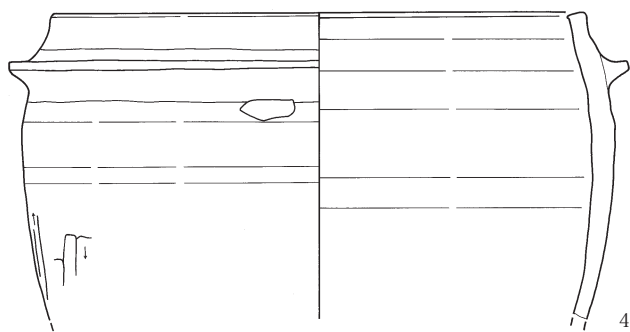
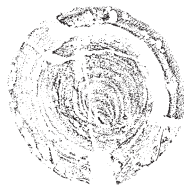
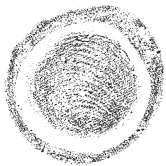
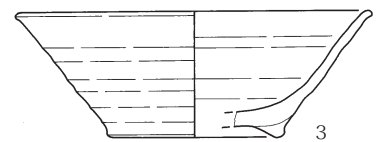
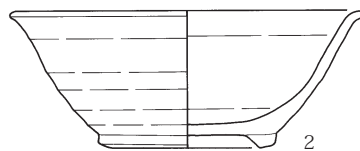
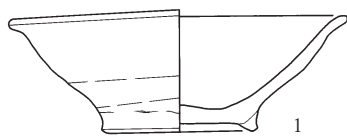
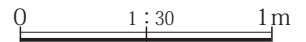
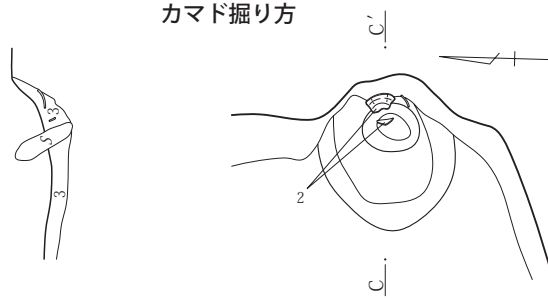
7号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/4)礫・橙色土粒・白色軽石をわずかに含む住居内の大半を覆う埋没土。
- 2 褐(7.5YR4/6)橙色土を少量含み、礫を散見する壁際埋没土。
- 3 赤褐(5YR4/6)焼土細粒、黄橙色ブロック土を少量含み、褐色土粒を散見するカマド火床下埋没土。炭化物粒や灰の混入があり掘り方埋戻し土ではないと思われる。
- 4 暗褐(7.5YR3/3)褐色土粒をわずかに含む掘り方埋戻し土。

カマド



カマド掘り方



第18図 7号住居と出土遺物

8号住居

(第19～21図 PL. 6 - ④～⑦、32 遺物観察表135・136頁)

2区北東隅周辺は竪穴住居が最も密集していた一画で、おおよそ20m四方の範囲に8～11・14～17号住居の8棟が集中していた。本住居この集中部分の北西隅にある。カマドや北東隅等を攪乱で壊されている。

位置 083～087、-647～652グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.6m、南北軸長3.7mの長方形を呈している。各隅は丸みが強いが、各辺が直線的で比較的整美な形状である。

埋没土・壁 壁際からの堆積の後、中層以上ではほぼ水平堆積となっており、自然堆積に近い状況が想起される。壁高は25cm前後を測る。

方位 N-89° E(長軸)

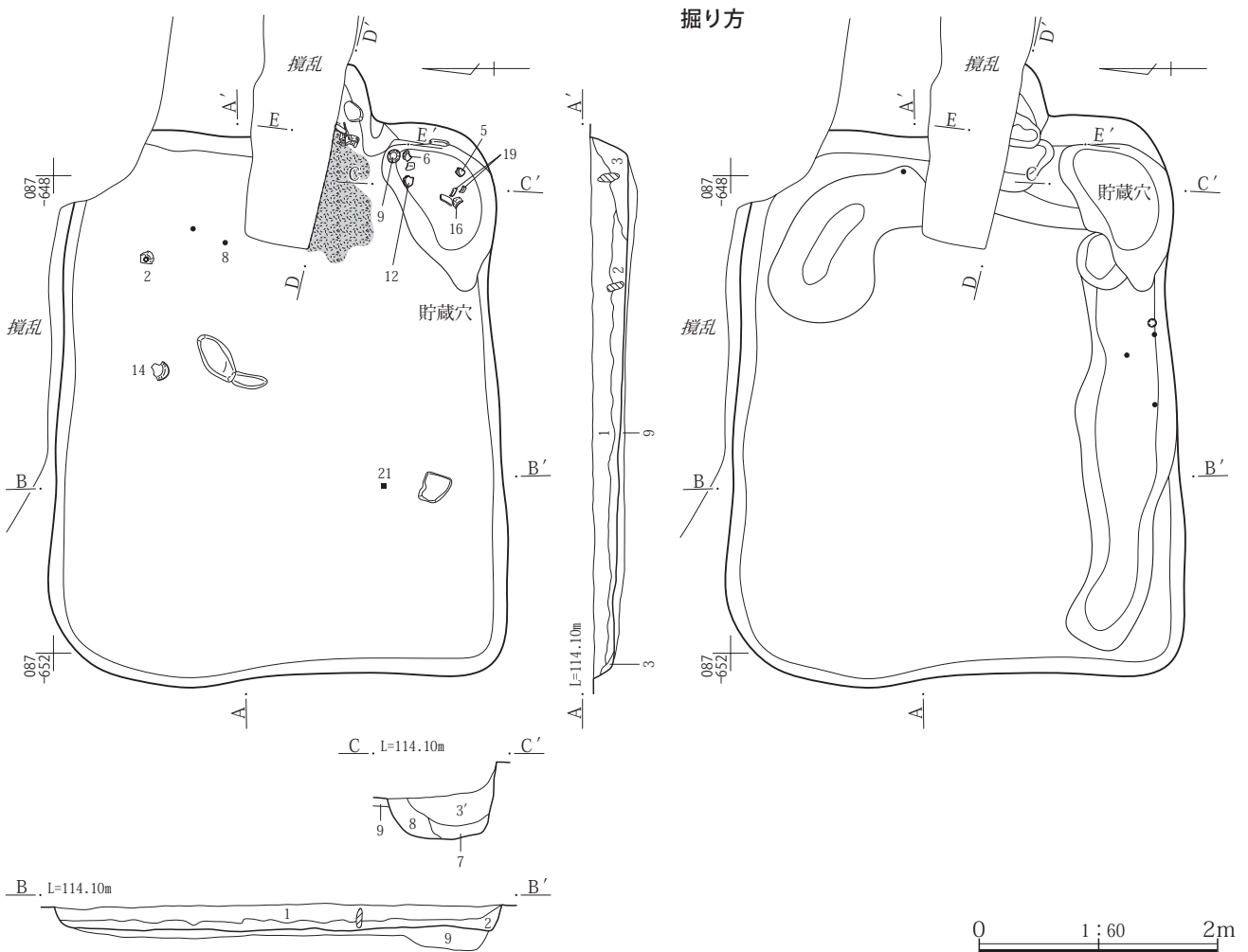
面積 復元[14.87] m²

床面 緩やかな凹凸のある床面で東側へ低く傾斜し、西

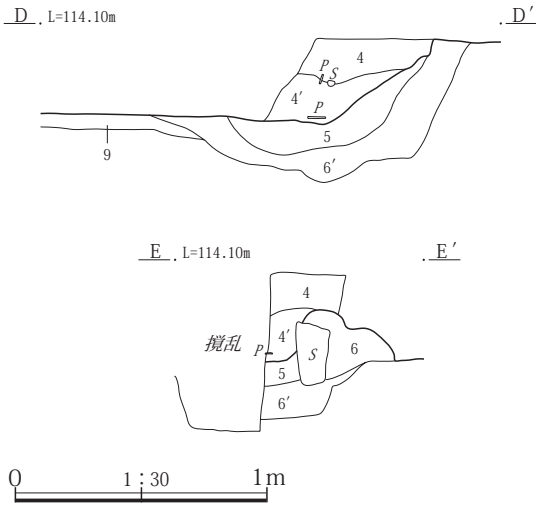
壁下と10cm前後の比高差がある。ほぼ全域に住居粗掘り時の窪みを埋め戻すような掘り方があるが、西寄りなど掘り方の浅い部分では地山礫が露出する部分があった。南・東壁下には幅50～80cmのやや深い溝状の掘り込みが見られた。

貯蔵穴 南東隅直下に住居床面からの深さ35cmの窪みがあり、貯蔵穴とした。平面が三角形を呈しているが、底面は平坦で遺物の出土も多く、貯蔵穴として齟齬はないと思われる。貯蔵穴内の遺物が住居床面遺物と接合する例があり、住居廃絶時に貯蔵穴が開いていたことが分かる。

カマド 東辺南寄りにあり、住居中央に向かって広範囲に炭化物粒や焼土が見られる。北半部分を攪乱で壊され残存状態は悪い。壁際に袖石が据えられており、燃燒部は壁外にあると思われる。火床は住居床面と同じ高さにある。火床下には深い掘り方があるが、埋戻し土に焼土・灰等の混入は少なく、火床面の造り直しの痕跡は認めら

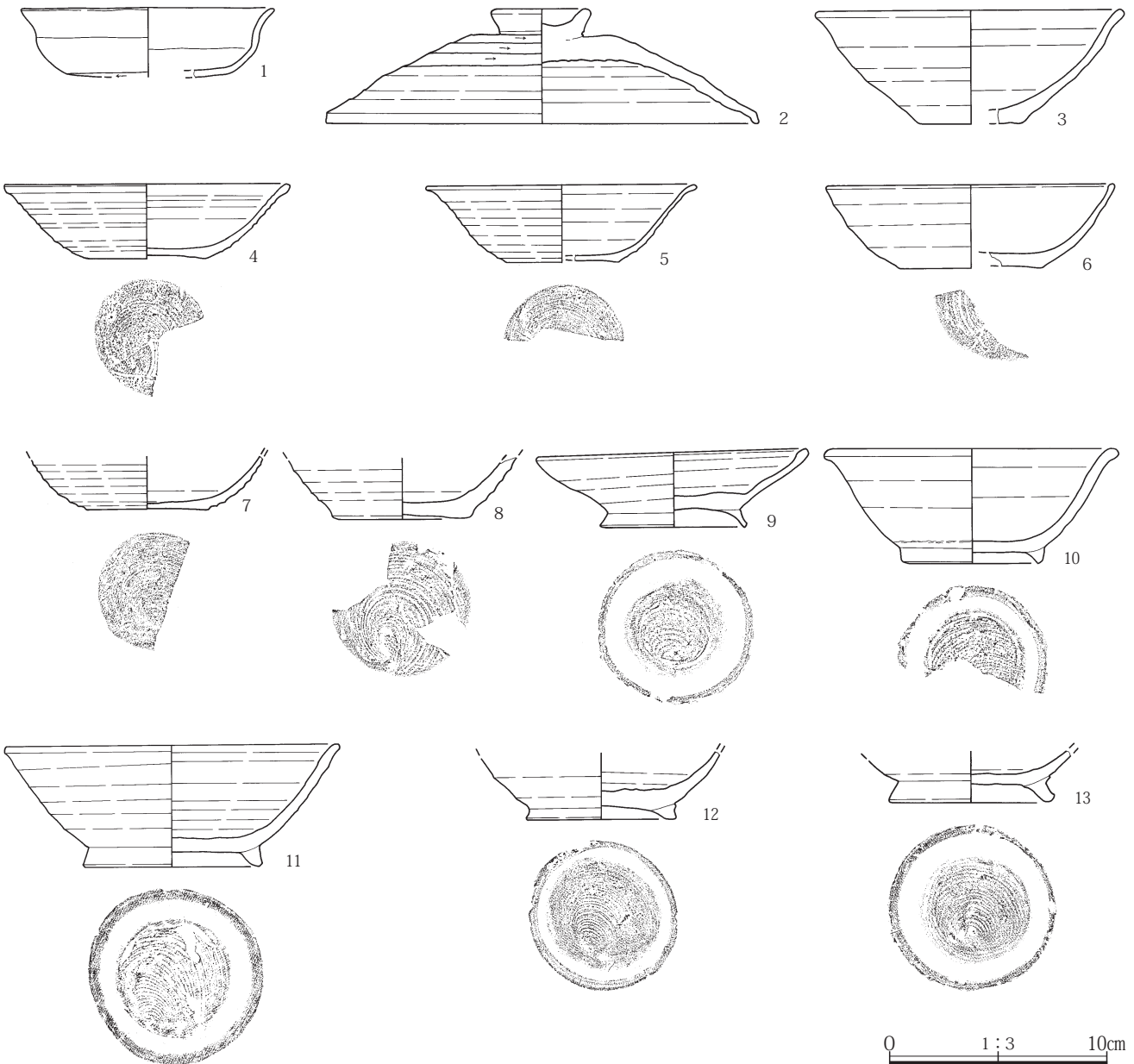


第19図 8号住居

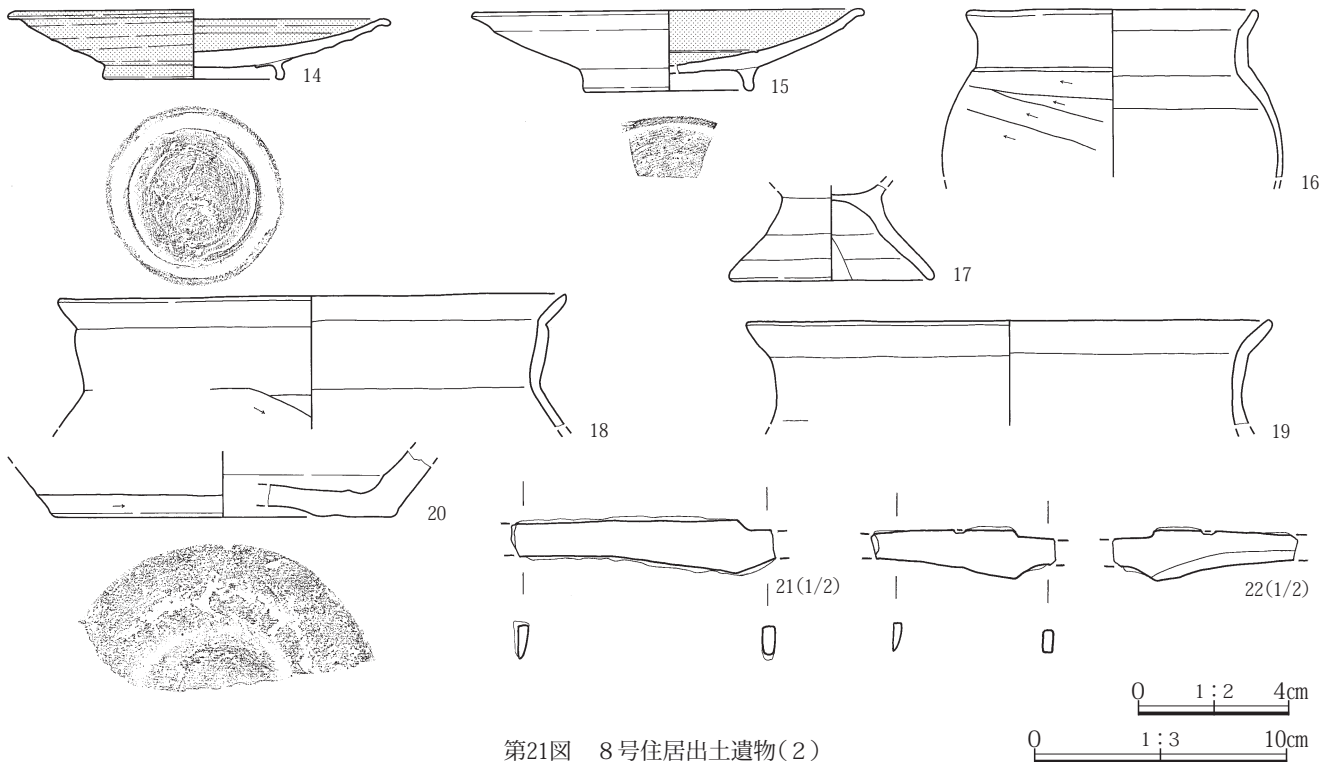


8号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/3)褐色土粒を少量含み、炭化物粒・焼土粒・小礫を散見する上層埋没土。
- 2 褐(7.5YR4/4)褐色土粒を少量含み、焼土粒・黄褐色土粒を散見する下層埋没土。
- 3 暗赤褐(5YR3/6)焼土粒を少量含むカマド周辺壁際埋没土。3'は貯蔵穴上層に見られ、炭化物粒以外の混入物は少ない。
- 4 暗赤褐(5YR3/2)炭化物粒・焼土粒・褐色土粒を散見するカマド上層埋没土。4'は焼土の混入が増えガサガサする燃焼部埋没土。
- 5 赤褐(5YR4/6)焼土粒・炭化物粒はわずかだが、上面に火床のような硬化面のあるカマド掘り方上層埋戻し土。
- 6 にぶい褐(7.5YR6/3)黄褐色土粒を多く含む袖構築材。6'は掘り方下層埋戻し土で袖と近似し、炭化物粒を含む層。
- 7 暗褐(7.5YR3/3)炭化物粒・黄褐色土粒を散見する貯蔵穴埋没土。
- 8 にぶい黄橙(10YR6/3)炭化物粒散見。ローム状土の混入多く7層に比べ黄色味が強い。
- 9 灰褐(7.5YR4/2)軽石・黄褐色土粒を含む掘り方埋戻し土。



第20図 8号住居カマドと出土遺物(1)



第21図 8号住居出土遺物(2)

れない。

その他 掘り方調査時に貯蔵穴脇でピット状の窪みを確認した。床面からの深さは20cmで配置から柱穴の可能性もあるが明瞭ではない。壁溝は認められない。

遺物 貯蔵穴から多数の遺物を出土し、住居内に散乱するようにして出土した土器と併せ、杯類を中心に土器20点と鉄器2点を図示した。貯蔵穴からは杯類の出土が多く、4～9・12の7点の須恵器の他、灰釉陶器皿15や土師器甕類の16・19がある。このうち杯8は住居東寄り床直上出土片が貯蔵穴内の小破片と接合した。須恵器蓋2と灰釉陶器皿14は北寄りの床直上出土で、貯蔵穴内出土の10点を含め本住居に確実に伴う土器である。鉄器は刀子2点が出土した。どちらも両端を欠く研ぎ減りしたもので、本遺跡での出土はこの2点のみである。21は南寄り床直上、22は埋没土内の出土であった。図示した以外にも土器片の出土は多く、土師器は杯類29点、壺・甕類665点、須恵器は杯類188点、壺類6点を出土し、総量は16号住居に次ぐ多さであった。

所見 須恵器杯類の椀・皿への分化が始まるが無台の杯類の形状も残し、羽釜類が出現する以前の9世紀中頃から後半にかけての時期と想定できる。灰釉陶器の年代とも矛盾しない。

9号住居

(第22図 PL. 7-①・②、32 遺物観察表136頁)

2区北東隅住居群内にあり、8号住居の2m東側に位置している。広範囲に攪乱の影響を受け、全体の形状を把握できない。

位置 083～086、-642～645グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.7m、南北軸長2.9m以上の南北に長い長方形となるが、東西両辺が途中で内側へ屈曲し北辺は著しく狭まる不整な形状である。

埋没土・壁 焼土・炭化物粒等の混入のない埋没土で、住居埋没土的ではない。水平に近い堆積で人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。

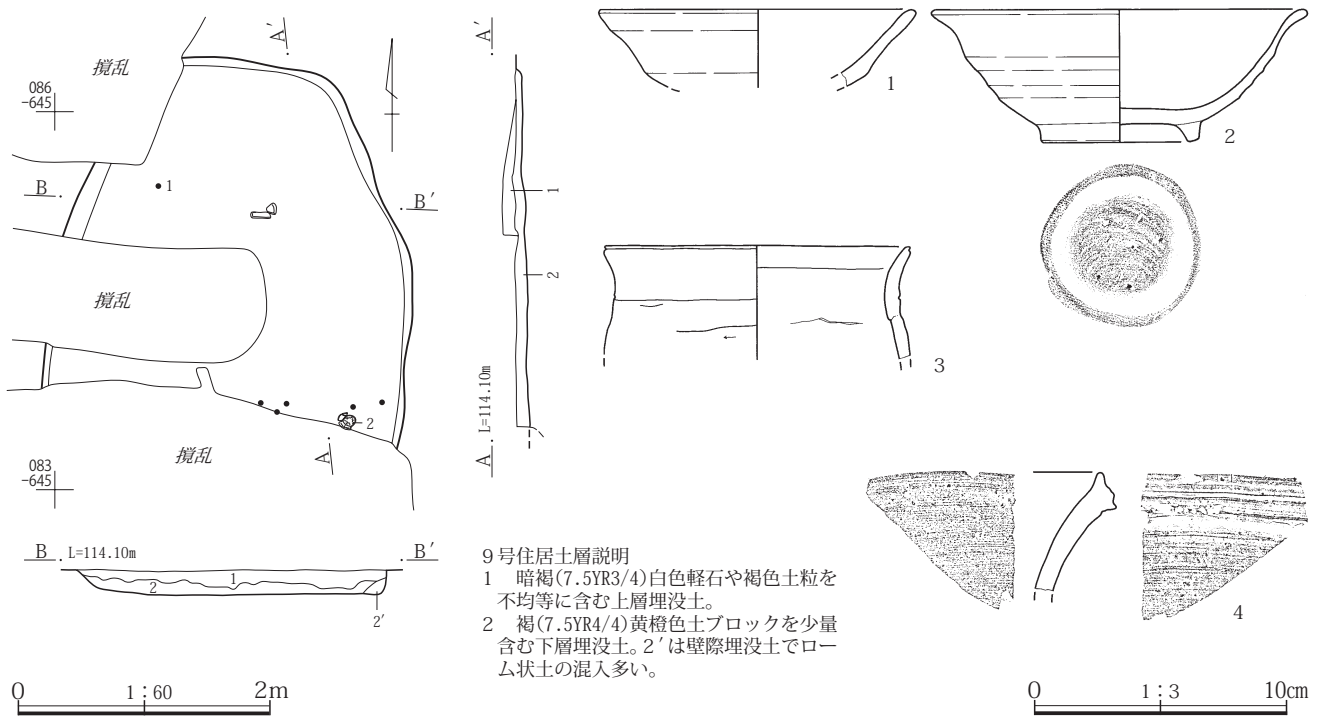
方位 N-4° E(長軸)

面積 残存(5.98) m²

床面 礫の少ない地山に築かれているが、凹凸の多い不整な床面である。全体は南側へ低く傾斜していて北壁直下と8cmの比高差を生じている。掘り方は認められない。

その他 17号住居に後出している。カマド・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物は少なく土器4点を図示した。椀2は南隅の床面にもぐり込むようにして出土した土器で、前出の17号住居に伴う可能性がある。杯1は床上8cmの高さ、他の2点も埋没土内の出土遺物で確実に本住居に伴うと



第22図 9号住居と出土遺物

認められる遺物はない。図示した以外には、土師器は杯類4点、壺・甕類34点、須恵器杯類12点、壺類3点、灰釉陶器碗皿類2点を出土している。

所見 時期を確定する資料に欠くが、前出する17号住居が9世紀後半の住居と推定されている。9世紀後半以降の時期が想定されるのだが、出土遺物は17号住居との時期と大きく差がないように見える。ほとんどが同住居からの流れ込みの可能性もある。

10号住居

(第23図 PL. 7-③・④、32 遺物観察表136頁)

2区北東隅住居群内の北東隅にあり、北側は調査区境にかかり全容を把握できていない。また住居外南東側には地山のシミのような部分があって、周辺を過掘削したため東側の壁は上半を失った部分がある。シミ状の部分は、わずかだが遺物の出土もあり、当初13号住居と名付け遺構として扱ったが、検討の結果遺構ではないと判断し、13号住居は欠番となっている。

位置 085~087、-635~639グリッドにある。

規模形状 唯一残存する南辺は長さ3.9mを測り、南北軸長は1.6m分が確認できる。南西辺は鈍角に開いており、逆台形状に歪む形状が想定される。

埋没土・壁 水平に近い堆積で、人為的な埋戻しの痕跡

は確認できない。壁高は残存状態の良い西壁でも15cm前後である。

方位 N-76° W(東西軸)

面積 残存(5.79) m²

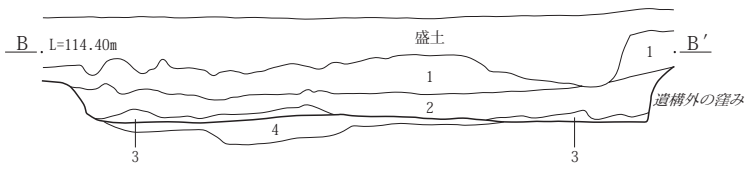
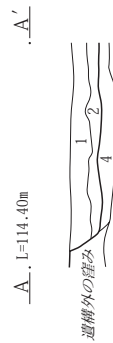
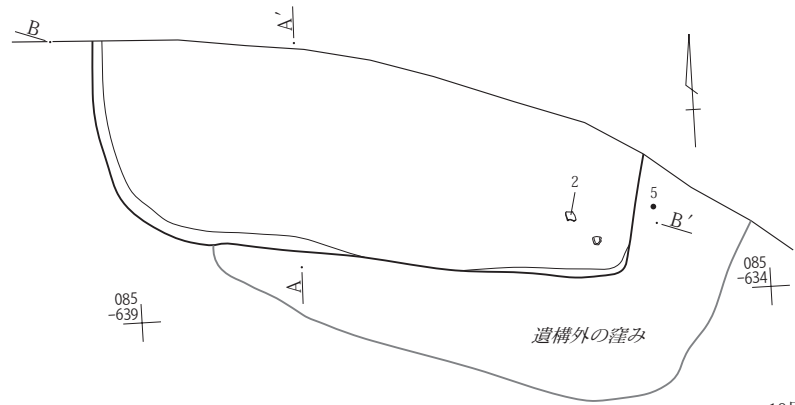
床面 凹凸が多い床面で5cm前後の比高差を生じているが、全体ではほぼ水平である。住居掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度の弱い掘り方が見られる。

その他 12号ピットに後出している。カマド・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 当初別遺構遺物と考えた住居外遺物1点を含む杯類5点と甕1点を図示した。碗2は南東側の床面上20cmの高さでの出土で、他の遺物も埋没土内の出土である。確実に本住居に伴うと確認できる土器はなかった。なお碗5は本住居壁外の出土で2とほぼ同じ高さの出土である。図示した以外にも遺物の出土は多く、土器には土師器杯類22点、壺・甕類367点、須恵器杯類68点、壺・甕類17点、器種不明の灰釉陶器小片2点がある。また、遺構外からも27点の土師器・須恵器がある。

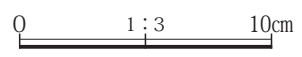
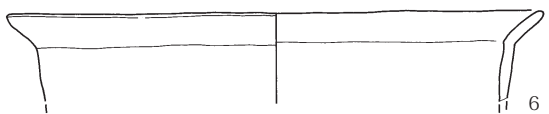
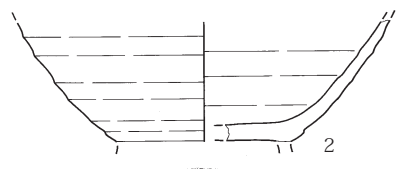
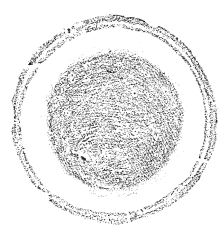
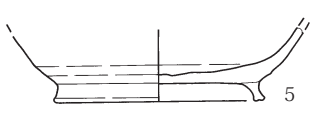
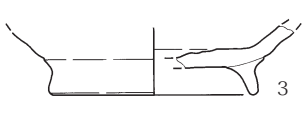
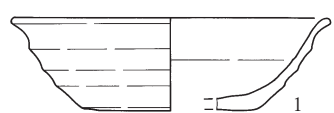
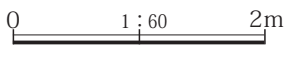
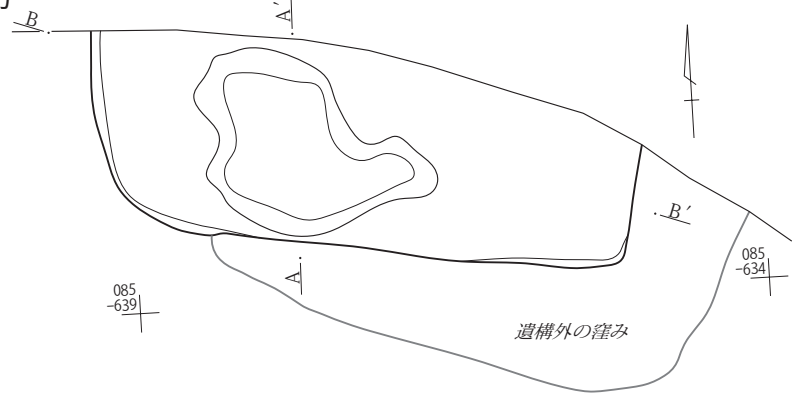
所見 確実に本住居に伴う土器を伴わない。口径が底径の1/2に満たない杯や、高台がやや高め碗など9世紀から10世紀初頭までの遺物が混在している。平安時代以外の出土土器は見られず、9世紀末前後の住居と想定する。

第三章 調査の内容(古墳時代以降)



- 10号住居土層説明
- 1 黒褐(7.5YR3/2)上層埋没土。白色軽石・黄橙色土粒を少量含む。小礫・焼土粒を散見する。
 - 2 暗褐(7.5YR3/3)下層埋没土。黄橙色土ブロックを少量含む。白色軽石・褐色土粒・小礫を散見する。
 - 3 褐(7.5YR4/3)床直上に部分的に見られるブロック状のローム状土主体の層。小礫を少量含む。
 - 4 黄橙(7.5YR8/8)ローム状土主体に、暗褐色土を不均等に含む掘り方埋戻し土。

掘り方



第23図 10号住居と出土遺物

11号住居

(第24図 PL. 7-⑤・⑥、32 遺物観察表136・137頁)

2区北東隅住居群内の東隅にあり、西側に隣接する17号住居との間隔は最短で35cmの距離まで近接している。

位置 079~083、-637~641グリッドにある。

規模形状 南北軸長3.5m、東西軸長2.7mの長方形で、南辺が北辺より50cm短い逆台形を呈している。

埋没土・壁 下層土は床直上でブロック状に堆積していて、人為的な埋戻しがあったと思われる。

方位 N-26° E(長軸)

面積 8.25㎡

床面 細かな凹凸があり、住居中央や北西壁下でやや窪む傾向があるが、全体ではほぼ水平な床面である。掘り方は認められない。

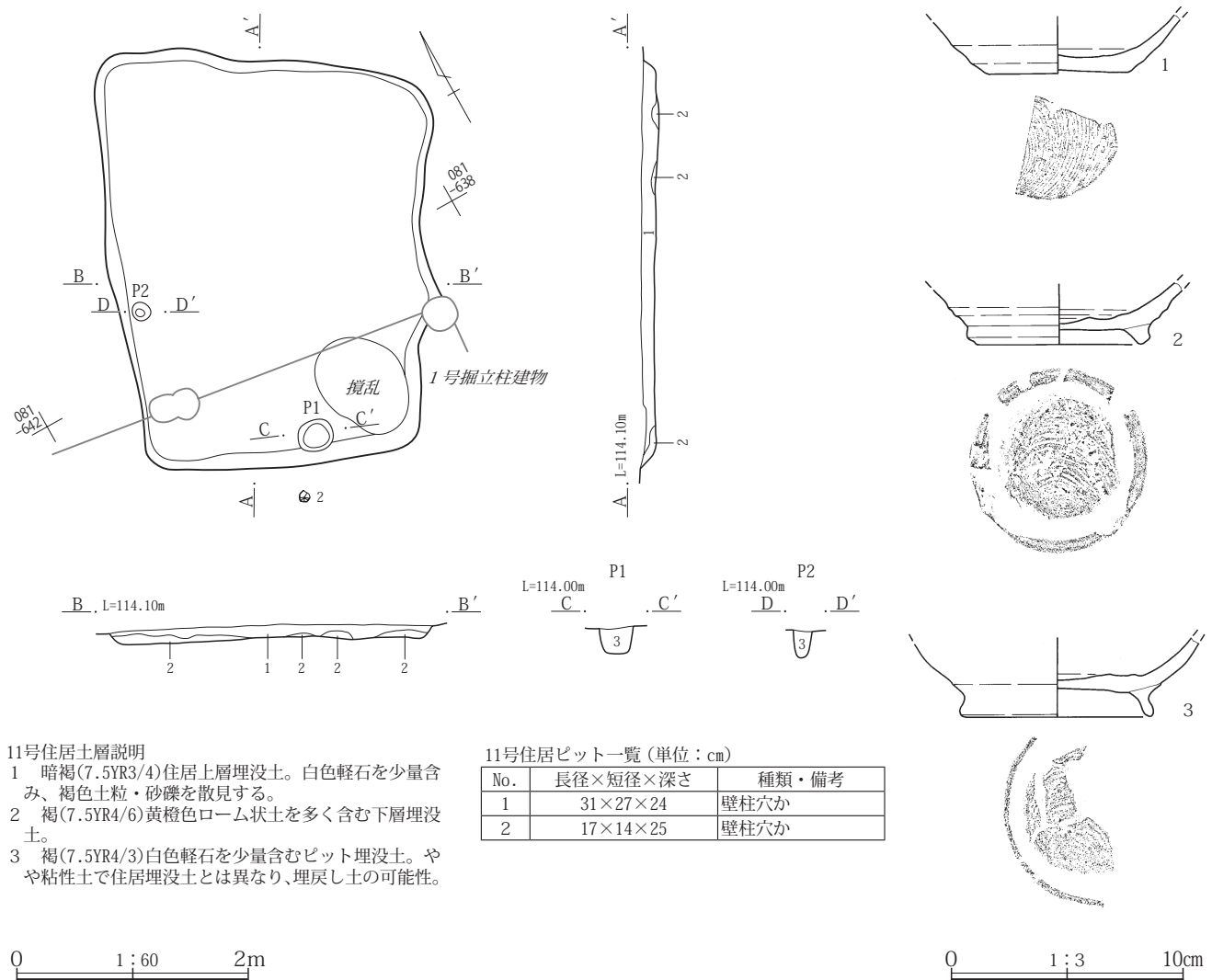
ピット 南東・南西の各壁直下壁際に1基ずつピットを

確認した。両者が対になるものではないが、近似した埋戻し土が観察され、壁柱穴の可能性のある施設である。

その他 1号掘立柱建物と重複している。カマド・炉等の施設は認められない。北東辺中央付近が若干外側へ張出しているが、カマドを想定できるような痕跡は全く認められない。

遺物 須恵器杯類3点を図示した。椀2は南壁外の遺物である。他の2点も埋没土内の破片で、本住居に確実に伴う遺物はない。図示した以外の土器もやや少なく、土師器壺・甕類31点、須恵器杯類12点、壺・甕類1点がある。土師器杯類の出土はなかった。

所見 時期を確定する資料に欠くが、9世紀後半から10世紀にかけての遺物と思われる。竪穴住居であれば東辺にカマドを有す時期であり、竪穴状遺構と分類される遺構の可能性はある。



第24図 11号住居と出土遺物

12号住居

(第25・26図 PL. 7-⑦・⑧、32 遺物観察表137頁)

2区東側の、他の住居から離れた位置にある。東側に広く攪乱を受け、全容を把握できていない。

位置 073~077、-691~695グリッドにある。

規模形状 東辺が攪乱を受け明瞭でないが、南寄りでの東西軸長3.3m、南北軸長3.9mの長方形を呈している。南辺が短い逆台形を呈す可能性がある。

埋没土・壁 住居中央付近に下層土の高まりが見られ、人為的な埋戻しが想定される。

方位 N-12° E(長軸)

面積 9.87㎡

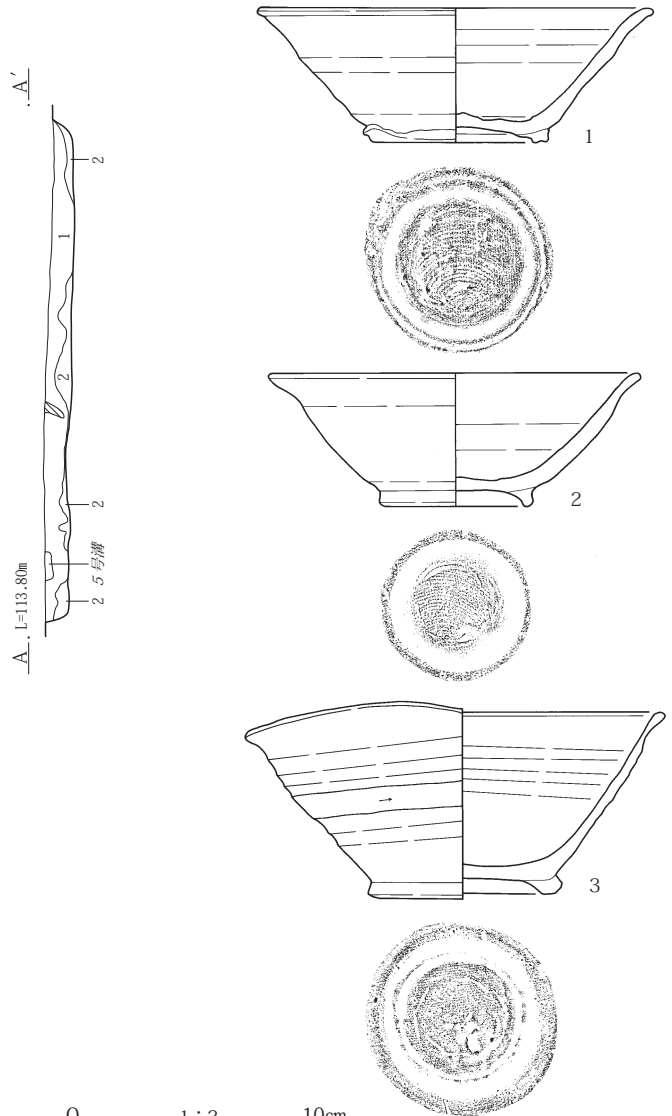
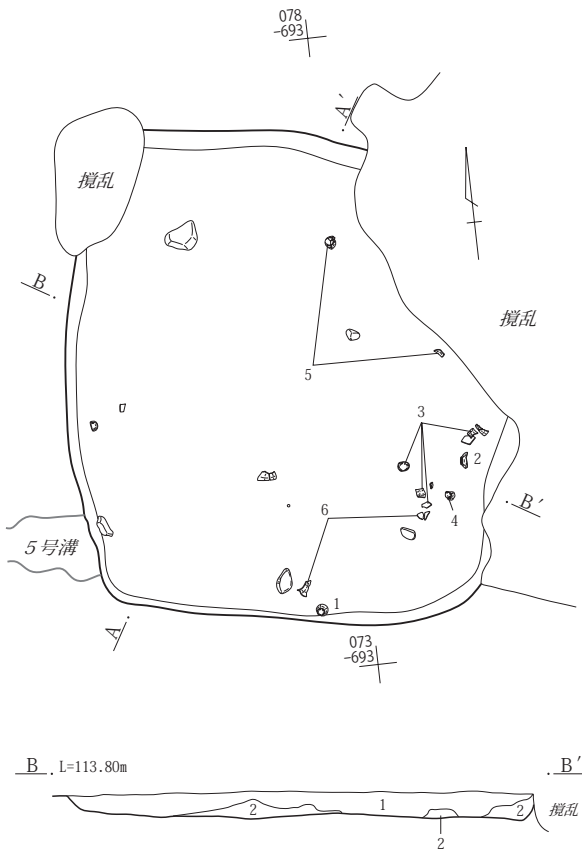
床面 地山礫の少ない面に築かれた床面である。緩やかな凹凸があり、全体では東側へ低く傾斜して西壁際と8

cm前後の比高差がある。掘り方は認められない。

その他 5号溝に前出している。カマド・炉等の施設は認められない。東辺中央付近が若干外側へ張出している。攪乱の影響を受け不明瞭な部分だが、カマドの想定される位置である。袖部・焼土等の痕跡は見られないが、付近に遺物の出土が多く、若干窪んでいてカマドの存在が想定される地点である。

遺物 須恵器碗5点、羽釜2点を図示した。南壁際の碗1、東壁寄りの碗2・4、南東隅付近に散乱する羽釜6が床直上で出土した本住居に確実に伴う遺物である。図示した以外の土器は杯類に偏り、土師器杯類25点、須恵器杯類11点、壺・甕類8点がある。

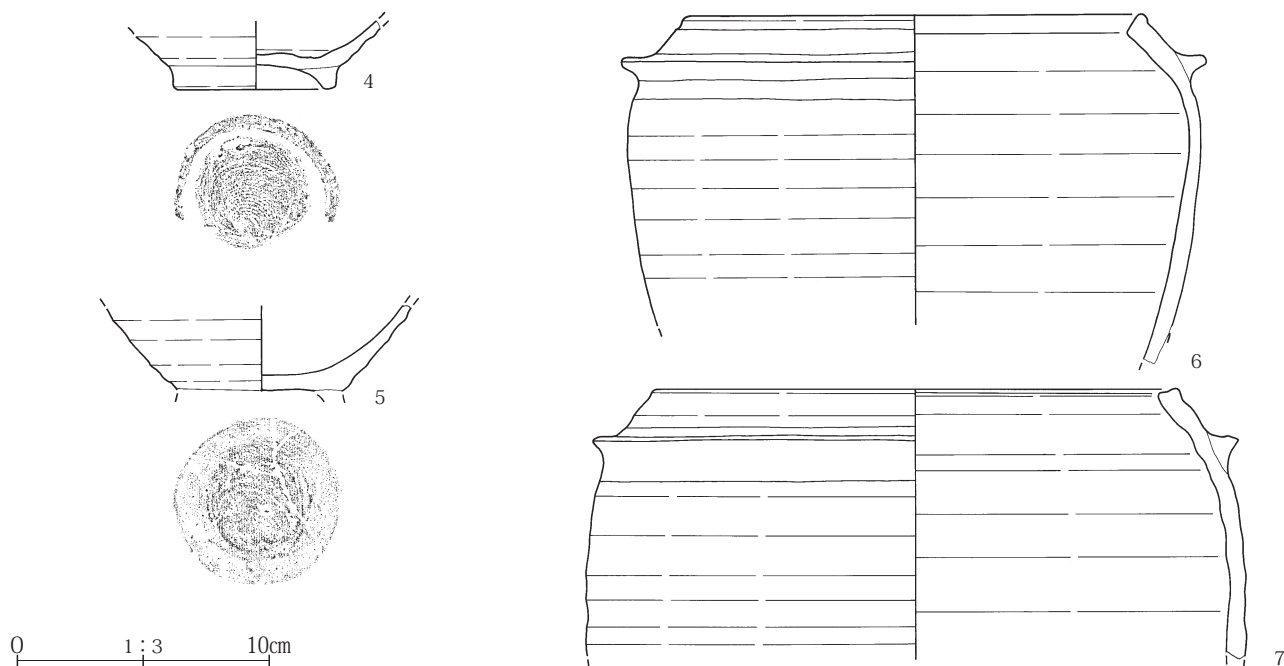
所見 碗は深い器形だが口縁の外反が残り、羽釜の作りも丁寧で、10世紀前半の所産と考えられる。



12号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/3)砂礫混じりの上層埋没土。白色軽石を少量含む。
- 2 褐(7.5YR4/4)不均等に堆積する下層埋没土。砂粒を少量含む

第25図 12号住居と出土遺物(1)



第26図 12号住居出土遺物(2)

14号住居

(第27図 PL. 8、33 遺物観察表137頁)

2区北東隅住居群内の南東隅にある。南側が階段状に2段になっている。土層観察を欠き、同時存在か新旧の壁面になるのか確認できない。遺物が内側の壁際に集中して出土しており、時間差のある壁と想定し、内側壁の住居を14号A住居(以下A住居と略す)、外側壁の住居を14号B住居(以下B住居と略す)呼称した。

位置 073~078、-638~642グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.8m、南北軸長A住居3.6m・B住居4.0mの方形を呈している。

埋没土・壁 東西両壁下にいわゆる三角堆積が見られ、自然堆積と考えられる。

方位 N-4° E(南北軸) N-102° E(カマド)

面積 13.99㎡ (B住居)

床面 A住居には不規則な凹凸があり8cm前後の比高差を生じているが、全体ではほぼ水平な床面である。B住居はA住居床面より7~11cm高い位置にある。中央付近がやや窪む傾向があり、壁際と5cm前後の比高差があった。A住居には東西2カ所の土坑状に窪む掘り方があった。床面からの深さは西側の窪みは20cm、東側の窪みは12cmを測る。南・西両壁中央直下にはそれぞれピットを確認した。配置より入口ピットとなる可能性がありP1・P2とした。埋没土の記録を欠いている。B住居に掘り

方は確認できない。

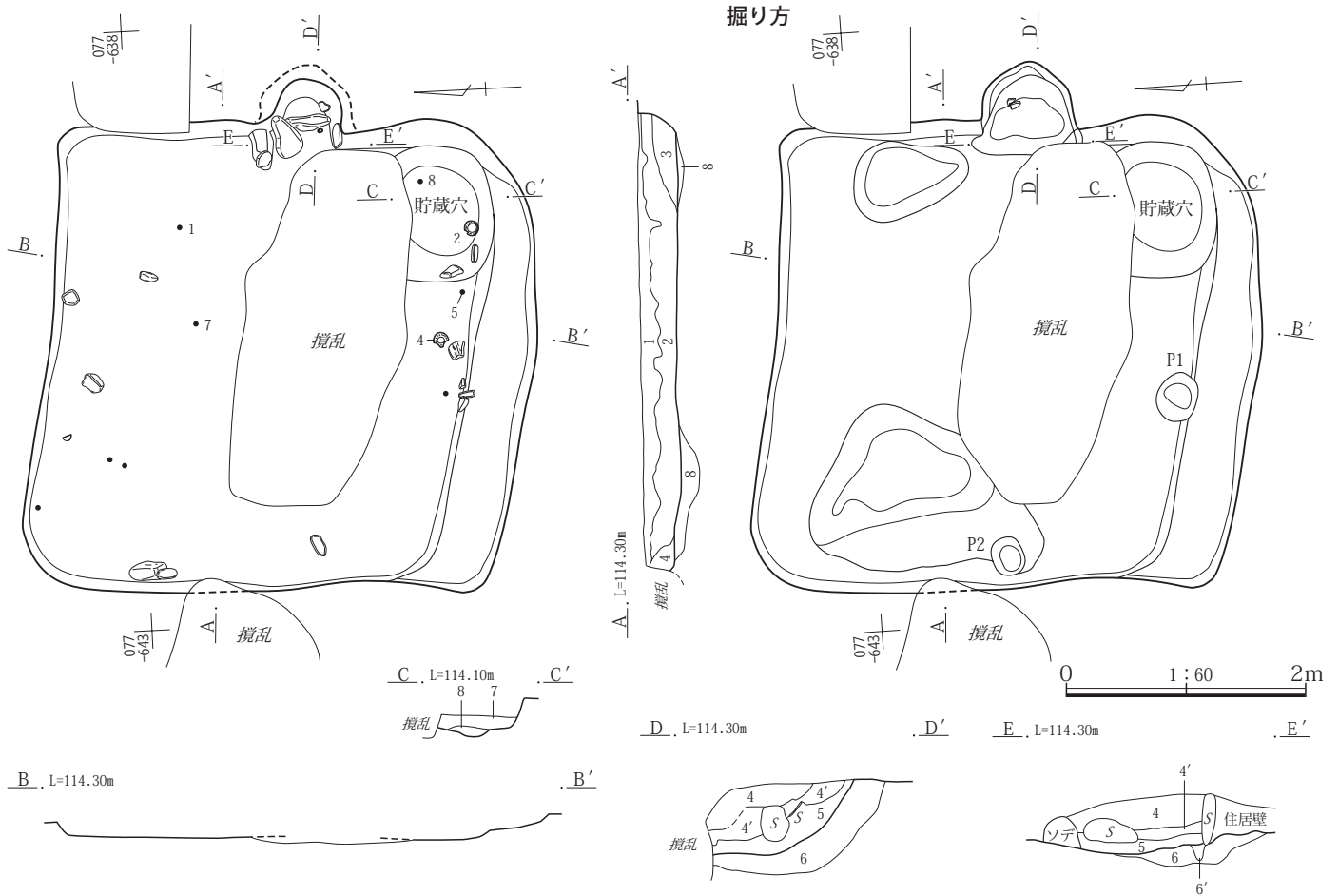
貯蔵穴 南東隅に東西径115cm、床面からの深さ18cmの窪みがあり、埋没土に焼土を含むことや配置、出土遺物のあることにより貯蔵穴とした。ただし貯蔵穴としては乏しい深度に対し開口部が広すぎ、掘り方であった可能性がある。

カマド 東辺中央にある。壁際に袖石が据えられ、焚口天井を築いたと思われる礫が燃烧部側に残存している袖は北袖基部付近が残存している。火床は住居床と同じ高さであり、煙道は確認できない。

その他 壁溝・支柱穴等の施設は確認できない。

遺物 須恵器杯6点、灰釉陶器壺1点、土師器甕2点を図示した。杯2、甕8が貯蔵穴内で出土した。杯4・5は床面より5cm前後の高さの出土だが壁際の出土で、これらが本住居に確実に伴う遺物である。杯1は床面より7cm高い位置出土の遺物で他の土器より古い混入品であり、B住居の年代を示唆する可能性のある土器である。カマド内出土の出土遺物はごく少なく、図示できるものはなかった。図示した以外の土器も多く、土師器杯類19点、壺・甕類456点、須恵器杯類113点、壺・甕類13点、灰釉陶器碗皿類・瓶類各1点がある。

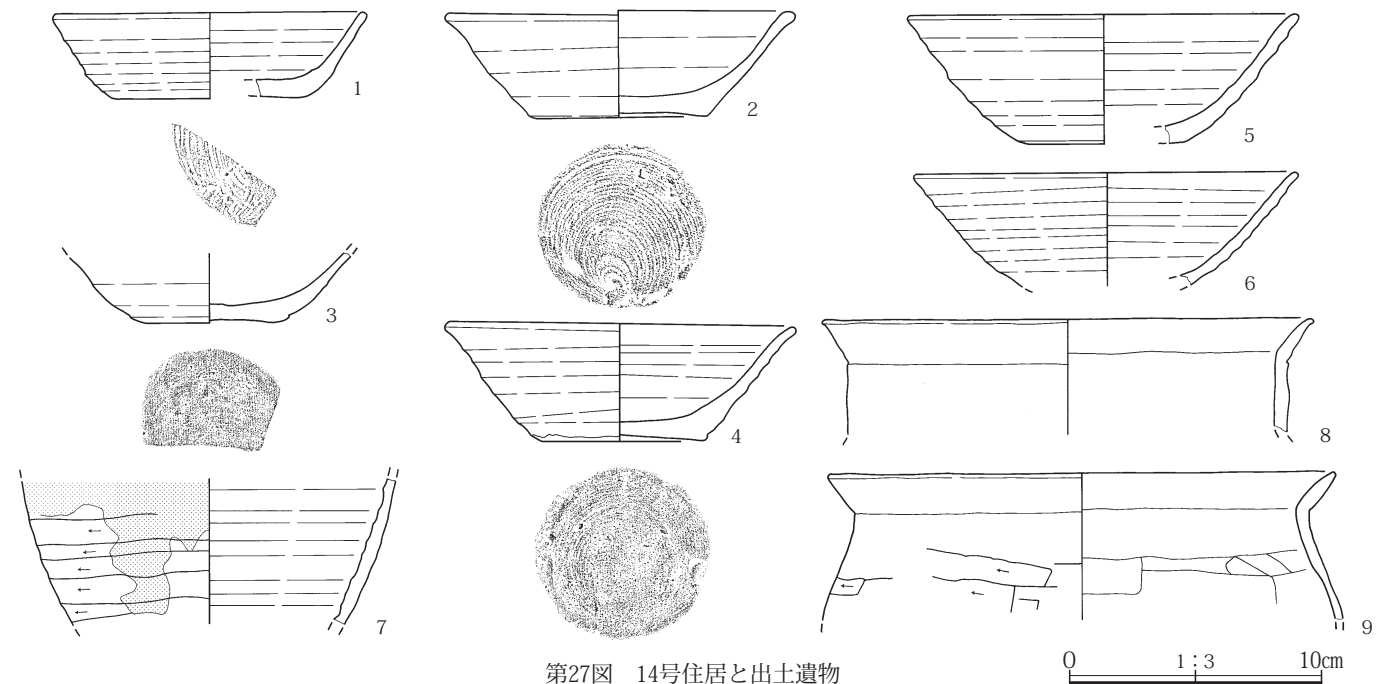
所見 杯は口縁の外反があり、土師器甕はコの字状口縁で羽釜類を伴っていない。9世紀後半の住居と想定できる。杯1は底径の広い8世紀代の土器である。



14号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/4)細礫を少量含む表層土。
- 2 褐(7.5YR4/6)焼土粒を少量含み、細礫・炭化物粒等を散見する下層埋没土。
- 3 褐(7.5YR4/4)細礫・焼土粒極・炭化物粒・黄橙色土粒等雑多な混入物を含む壁際埋没土。
- 4 赤褐(5YR4/8)カマド天井部に相当する被熱した粘質土層。細礫・白色軽石を少量含み、炭化物粒を散見する。4'は崩落天井とカマド埋没土の混土層。炭化物粒・焼土粒を少量含み、細礫・白色軽石を散見する。

- 5 暗赤褐(5YR3/4)カマド壁や天井部の崩落土層で径2~3mm大の焼土ブロックや炭化物粒の多い、ややしまり欠く層。
- 6 暗褐(7.5YR3/3)カマド埋戻し土。小礫含む。炭化物等の混入は少ない。6'はしまり欠く。
- 7 暗褐(7.5YR3/3)焼土粒・炭化物粒を少量含み、礫を散見する貯蔵穴埋没土。
- 8 褐(7.5YR4/3)黄橙色土粒少量含む掘り方埋戻し土。貯蔵穴底面付近にも見られ、ここでは焼土粒を散見する。



第27図 14号住居と出土遺物

15号住居

(第28図 PL. 9-①・②)

2区北東隅住居群内の南隅にある。

位置 071~074、-643~646グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.6m、南北軸長2.5mの方形を呈し、南辺が北辺より30cm短く逆台形状に歪んでいる。

埋没土・壁 下層土が波状に堆積していて人為的な埋戻しの可能性がある。

方位 N-78° W(長軸) N-100° E(カマド)

面積 5.80㎡

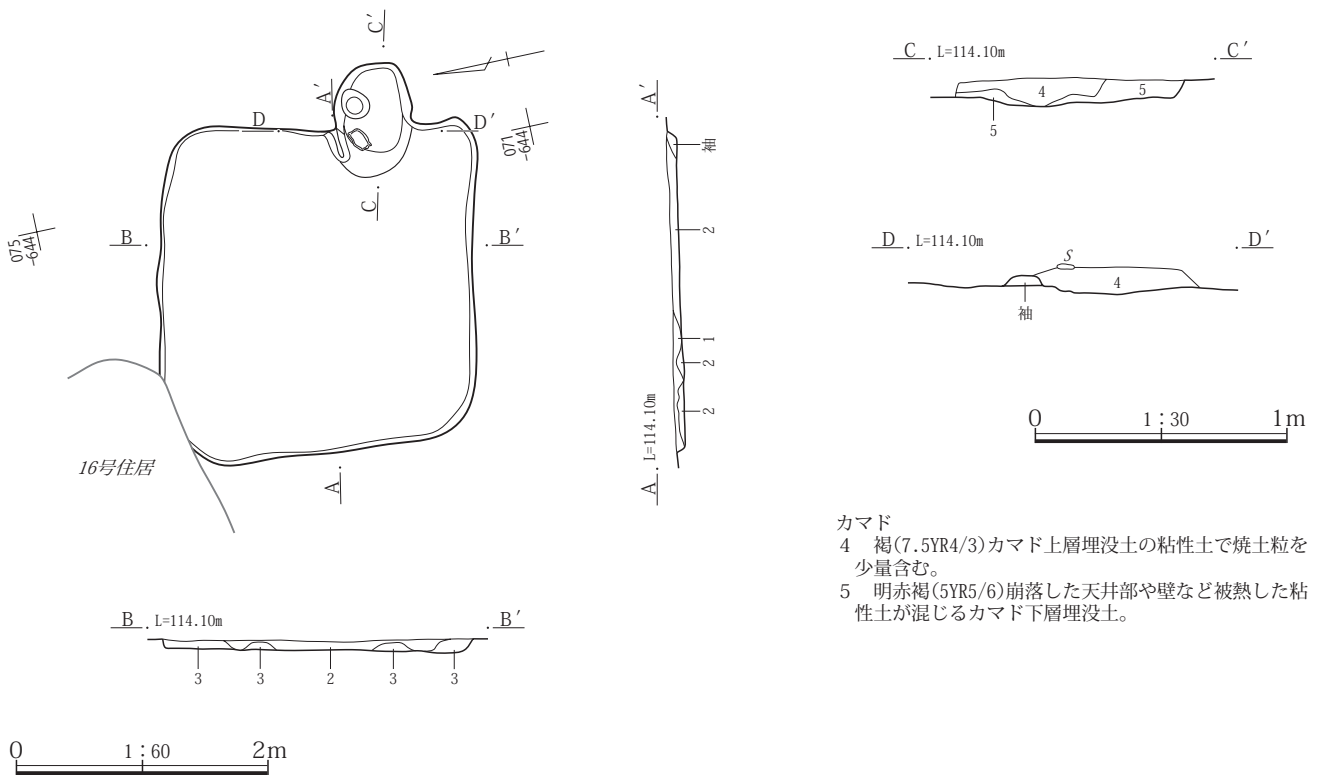
床面 西側へ低く傾斜していて、東壁際と10cmの比高差を生じている。地山礫の見られない、比較的平坦な床面となっている。掘り方は確認できない。

カマド 東辺南寄りにある。燃烧部は壁際から壁外にかけての位置にあり、火床は住居床よりわずかに窪んだ高さにあり、被熱による弱い硬化が見られる。火床上に平板な礫が見られるが、カマドに伴う施設が確認できない。北袖基部付近が残存している。煙道は確認できない。

その他 16号住居に前出していると思われるが、重複部分の観察を欠いている。柱穴・壁溝等の施設はない。

遺物 遺物の出土は土器小破片を含め1点もなかった。

所見 時期推定のための資料を欠いているが、後出すると思われる16号住居が9世紀後半の所産であり、本住居が東カマドの小型住居であることから、9世紀前半を中心とする時期の住居と想定する。カマドのある住居としては、4号住居に次いで小型の住居となる。



カマド
 4 褐(7.5YR4/3)カマド上層埋没土の粘性土で焼土粒を少量含む。
 5 明赤褐(5YR5/6)崩落した天井部や壁など被熱した粘性土が混じるカマド下層埋没土。

15号住居土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/4)白色粒わずかに含む。
- 2 橙(7.5YR6/6)黄橙色土少量含む。
- 3 黒褐(7.5YR3/2)細礫わずかに含む。

第28図 15号住居

16号住居

(第29～32図 PL. 9-③～10-②、33 遺物観察表137～139頁)

2区北東隅住居群内の南西隅にある。カマド北側と東辺周辺を攪乱に、北辺を16号土坑に壊され残存状態はあまり良くない。

位置 073～079、-644～650グリッドにある。

規模形状 東西軸長は南側で4.8m・北側で5.5m、南北軸長は東寄りの最長部分で5.0mを測る。西辺が東辺より、南辺が北辺よりそれぞれ短く台形状に歪むうえ、北辺が大きく湾曲し不整な形状である。

埋没土・壁 壁際から自然埋没したようで、中央付近にはレンズ状の堆積部分も見られる。炭化物の混入が多く、火災住居の可能性はある。壁高は40cm前後を測り、本遺跡では最も深い住居である。

方位 N-76° E(東西軸)

面積 復元[21.17] m²

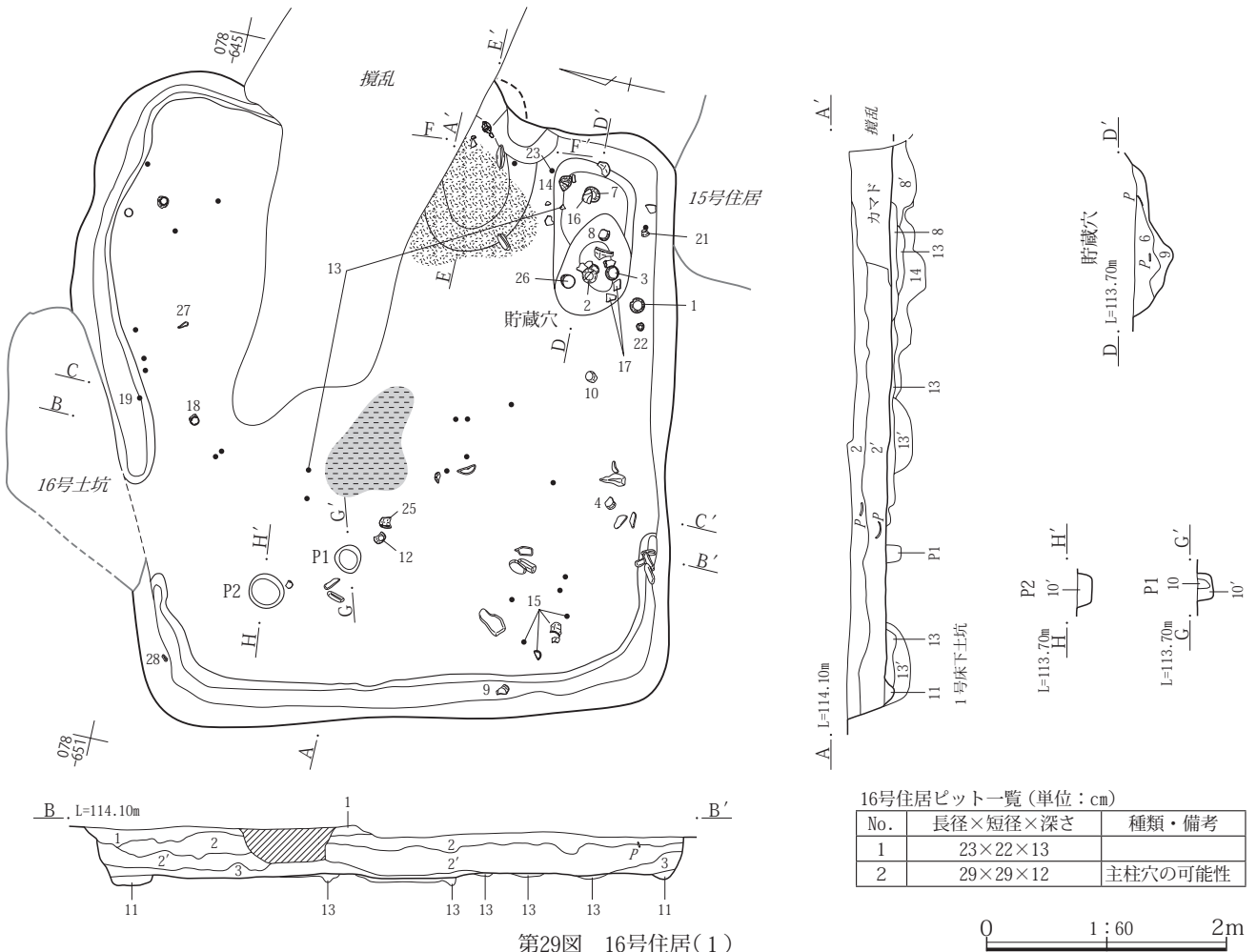
床面 ほぼ水平な床面だが、東壁際のみ3cm前後高く

なっていた。地山礫の床面の露出はごく少ない平滑な床面であった。住居中心付近に焼土等が散っていた。住居東側を中心に掘り方が見られた。また土坑状の窪み部分も多く、このうち床面からの深さが15cm以上で底面が平坦な3箇所を床下土坑とした。床面からの深さは1号が16cm、2号が19cm、3号が30cmを測る。

貯蔵穴 南東隅に東西径128cm、南北径68cmの細長い窪みを確認し貯蔵穴とした。東側の底面の平坦な部分と西側の深い部分の二段底状になっていて、床面からの深さはそれぞれ12cm・29cmを測る。

壁溝 住居の西寄りと北東隅周辺に壁溝が見られた。溝幅10cmを超える部分が大半で、床面からの深さも5cmを超える部分が多い明瞭な施設だった。

カマド 東辺南寄りにある。北側や煙道部分を攪乱で壊され全容を把握できていない。燃烧部は壁際から住居内に欠けての位置にあり、火床は住居床面より5cm窪んでいる。灰や炭化物粒がカマド前の床面に広がっている。南袖基部が残存し、先端に袖石が据えられていた。火床



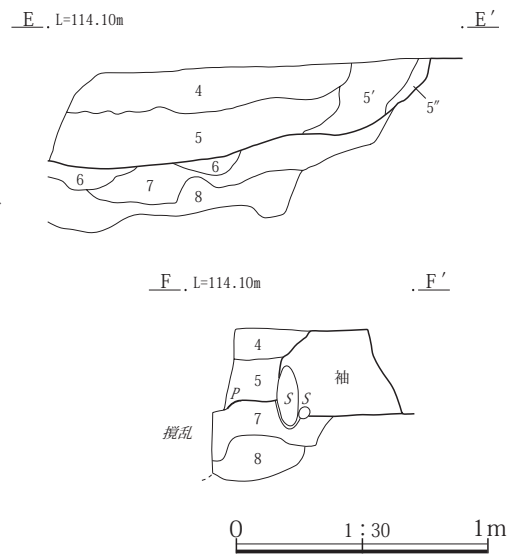
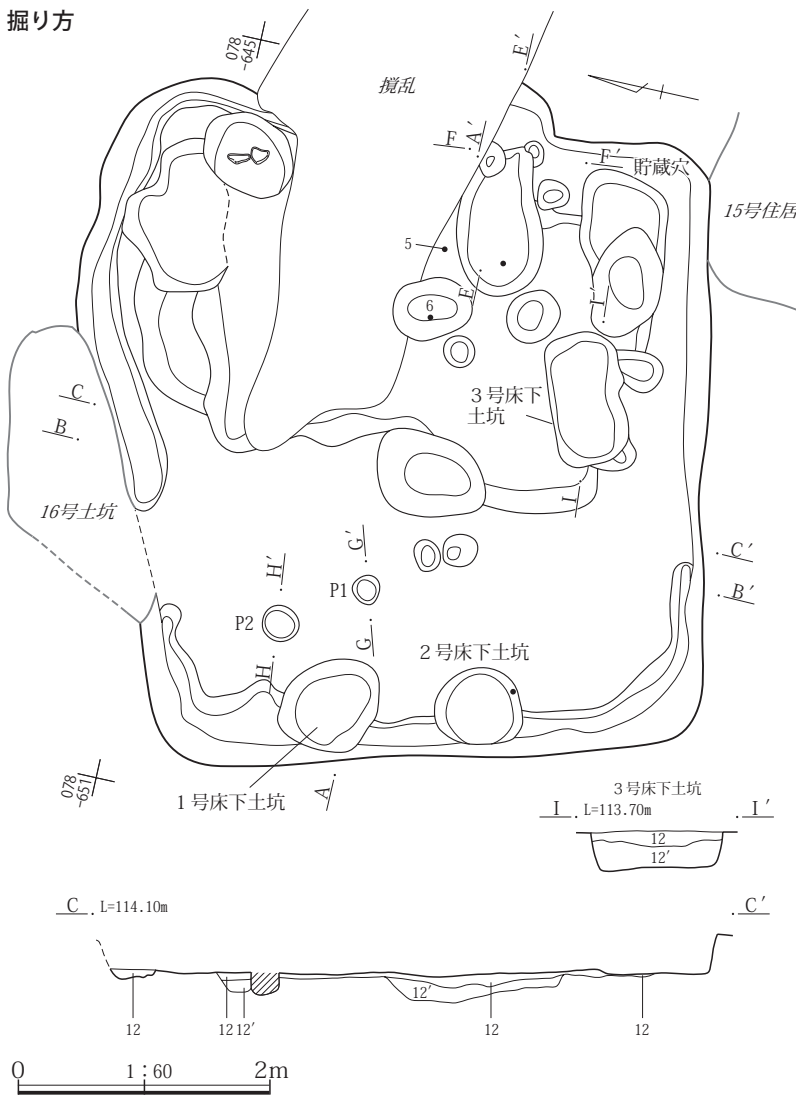
下に小さな窪みが確認され、支脚が据えられていた可能性はあるが明瞭でない。

その他 15号住居に後出すると思われる。16号土坑に前出している。掘り方調査でピット状の窪みを確認しているが、主柱穴配置上のピットは含まれていない。

遺物 きわめて多量の遺物を出土し、杯類を中心に土器26点、鉄器2点を図示した。貯蔵穴内から土師器杯2・3、須恵器杯類8・13・14・16・17がまとまって出土した。床面から少し高い位置であるが、南壁際の土師器杯1・台付甕21・22や、西壁際の須恵器杯9、北壁際の灰釉陶

器椀19、貯蔵穴脇の土師器甕23の壁際から出土した土器などを加えた土器が本住居に確実に伴う土器である。杯10・12は床ほぼ直上の高さの遺物だが、住居中央付近の出土である。その他の土器も住居床面より5cm以上高い位置からの出土が多かった。カマド内の出土遺物は乏しかった。また金属製品では鉸具28が北西隅壁に密着するようにして出土した。27は2点の鉄器が錆着したもので、住居中央付近だが床ほぼ直上の出土である。端部が薄く平坦で、鉄鏃の可能性はあるが不明瞭である。図示した以外の土器数もきわめて多く、土師器1299点、須恵

掘り方



16号住居土層説明

- 1 にぶい褐(7.5YR5/3)白色軽石、砂粒・白色軽石を含む表層土。
- 2 褐(7.5YR4/3)褐色土粒・炭化物粒を含む下層埋没土。2'は大粒の炭化物粒の混入多い。
- 3 褐(7.5YR4/6)壁崩落土と思われる褐色粘性土ブロックの混入多い最下層埋没土。
- 4 明赤褐(5YR5/6)カマド天井部に相当する被熱した粘性土で礫・白色軽石を少量含む。

- 5 にぶい赤褐(5YR4/3)崩落した天井部とカマド埋没土の混土で、礫わずかに含む。礫・炭化物・黄褐色土粒等を含む。5'は煙道側からの混入土で炭化物粒の混入やや多く、5''は被熱壁が緩んだ部分。
- 6 暗赤褐(5YR3/3)焼土粒・炭化物粒を多量に含む火床直下に点在する層で、貯蔵穴上層にも見られる。
- 7 赤褐(2.5YR4/6)焼土粒を多量に含み、炭化物粒・黄褐色土粒を少量含むカマド掘り方上層埋戻し土。
- 8 明赤褐(5YR5/6)やや砂質なカマド掘り方下層埋戻し土で、黄褐色土粒少量含むが焼土粒の混入少ない。
- 9 赤褐(5YR4/6)炭化物粒・焼土粒を少量含む貯蔵穴下層埋没土。
- 10 黄橙(7.5YR7/8)P1の柱痕に相当する部分にあたるがローム状土主体の粘性土で柱痕的ではない。10'はピット埋没土で10層より黒色味強い粘性土。
- 11 灰褐(7.5YR4/2)壁溝埋没土で掘り方埋戻し土(13層)に近似するが、ややしまり欠く。
- 12 赤褐(5YR4/6)3号床下土坑埋戻し土でカマド灰掻き土を多量に含むと思われる、灰・焼土粒僅等を含む。12'には黄褐色土粒等が混入し、しまり・黒色味が強くなる。
- 13 にぶい黄橙(10YR6/4)掘り方埋戻し土で固く踏み固められている。黄褐色土粒の混入多い。13'にはブロック状の黄褐色土を含む。
- 14 灰黄褐(10YR4/2)住居粗掘り時の残土を踏み固めたような粘性土。炭化物粒の混入がやや多い。

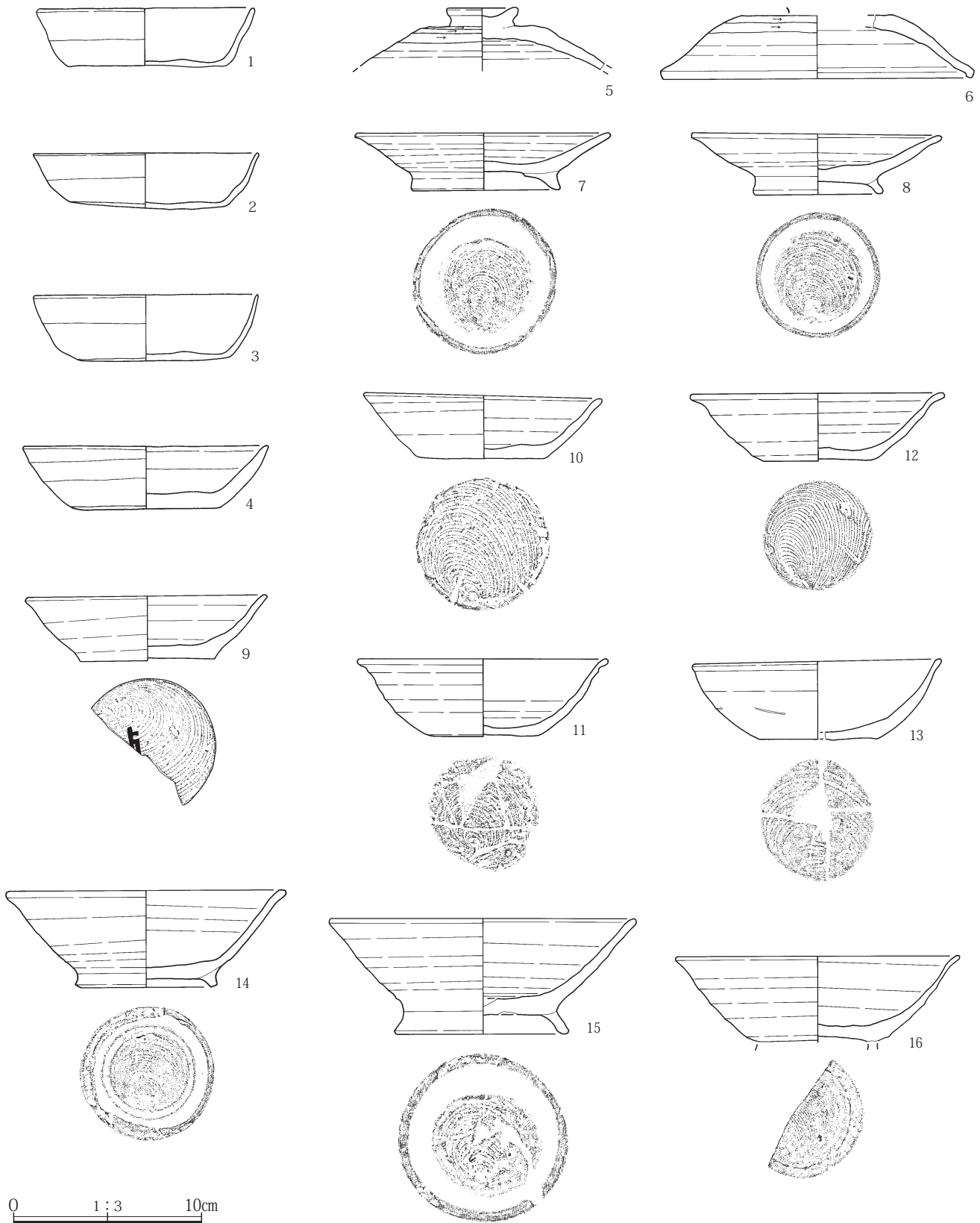
第30図 16号住居(2)

第三章 調査の内容(古墳時代以降)

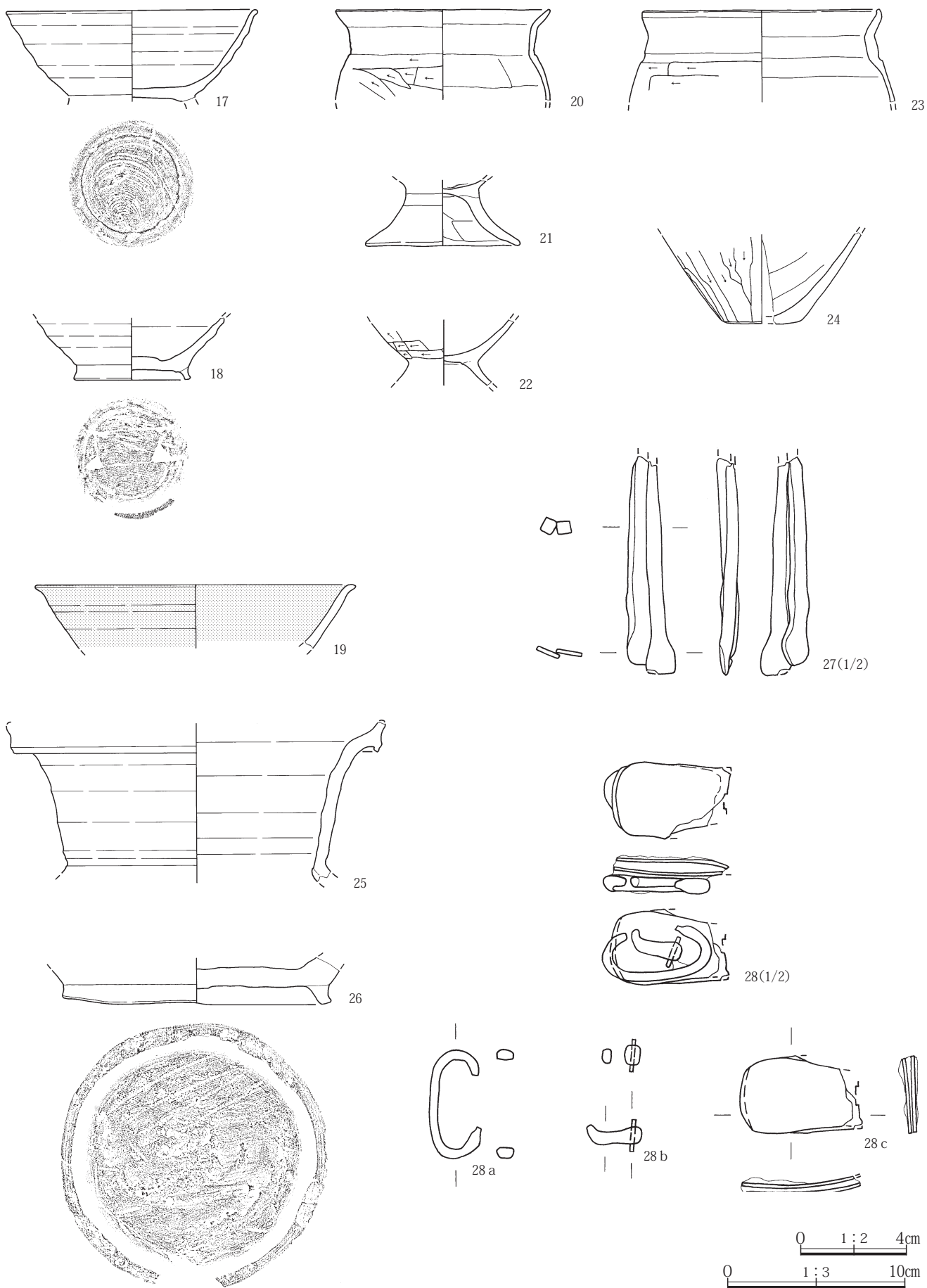
器520点、灰釉陶器4点を出土している。合計1823点は、本遺跡全体の古代非実測土器片数5602点の32.5%にあたる。特に須恵器杯類490点は遺跡全体の非実測須恵器杯

類1278点の38.3%を占めている。

所見 須恵器杯類が椀・皿に分化した、9世紀中頃から後半にかけての住居と思われる。



第31図 16号住居出土遺物(1)



第32图 16号住居出土遺物(2)

17号住居

(第33～34図 PL.10-③・④、33 遺物観察表139頁)

2区北東隅住居群の中央にある。北側に後出する9号住居との重複や攪乱の影響を受けるが、おおよその規模は復元できる。

位置 079～083、-641～647グリッドにある。

規模形状 東西軸長4.6m、推定南北軸長4.2mの方形で、北辺が南辺より30cm短く、台形状にやや歪んでいる。

埋没土・壁 本遺跡の中では炭化物粒・焼土等の混入の多い埋没土である。下層埋没土層厚が様でなく、人為的埋戻しの可能性がある。

方位 N-88° E(長軸)

面積 復元[17.41] m²

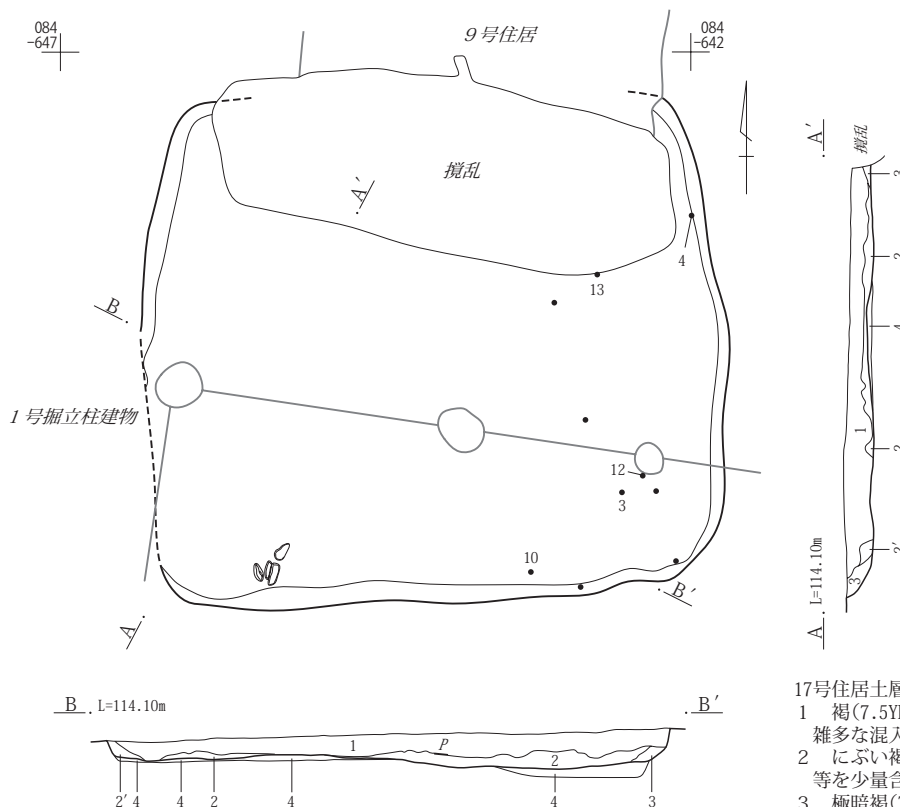
床面 西側へ低く傾斜していて東壁下と7cmの比高差を生じている。地山礫の少ない一面にあり、床面に露出する礫は少ない。南東と北西の両隅付近が深くなる掘り方がある。また一部でピット状になる窪みも見られたが、

床面からの深さはいずれ10cm前後で深度に乏しく、柱穴として扱わなかった。

その他 9号住居・1号掘立柱建物に前出している。カマドや炉などの施設を伴わず、竪穴住居的ではない。竪穴状土坑よりは規模が大きく、類例のない遺構である。

遺物 遺物は比較的豊富で土器13点を図示した。南東隅付近の須恵器椀3・甑12と東壁際の須恵器椀4が床面直上出土の本住居に確実に伴う土器である。また須恵器椀5・土師器甕10・須恵器壺13の掘り方内出土土器もやや多い。図示した以外の土器には土師器杯類16点、壺・甕類285点、須恵器杯類122点、壺・甕類21点、灰釉陶器椀皿類1点がある。

所見 杯類の口縁端部は外反が顕著だが、コの字状口縁の土師器甕類も残存し、9世紀後半の住居と推測できる。椀形鍛冶滓の出土があるが、炉跡や台石等、鍛冶遺構と推定するための他の資料をもたない。



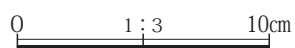
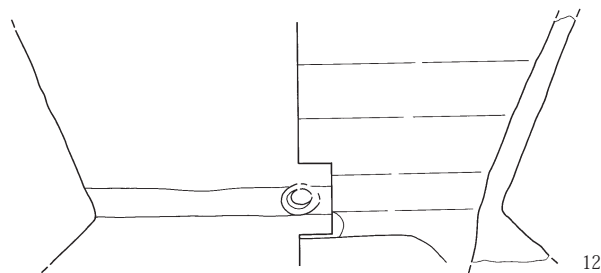
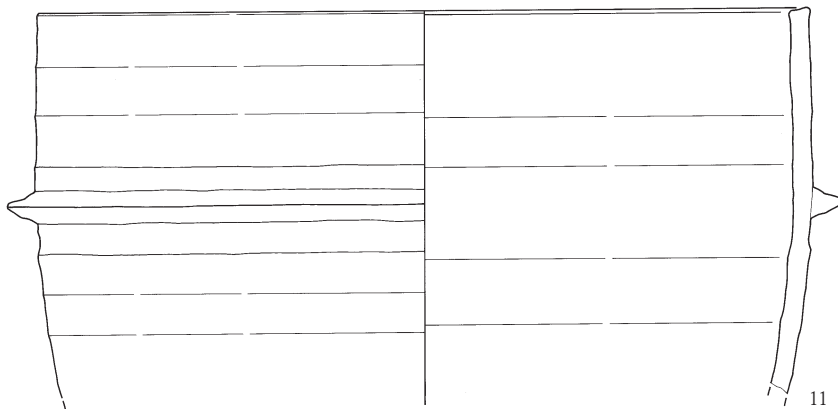
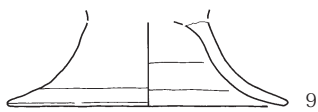
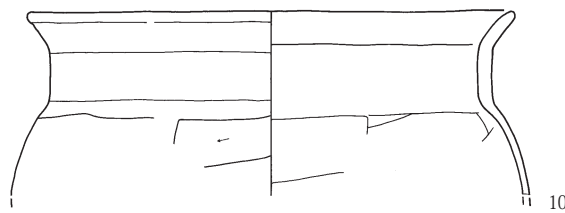
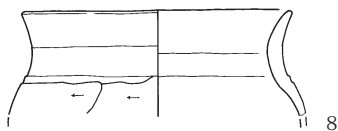
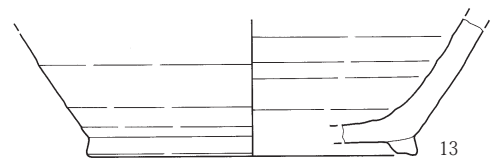
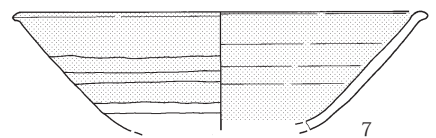
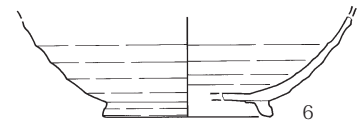
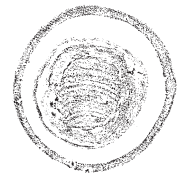
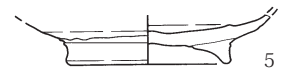
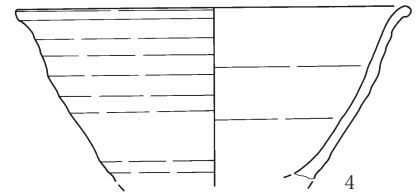
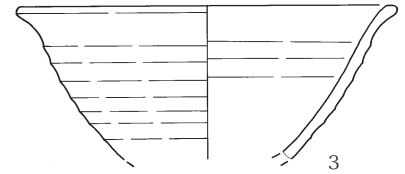
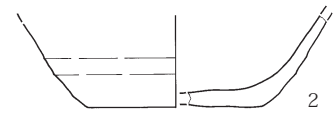
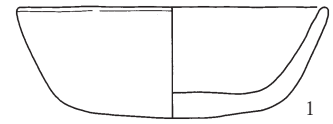
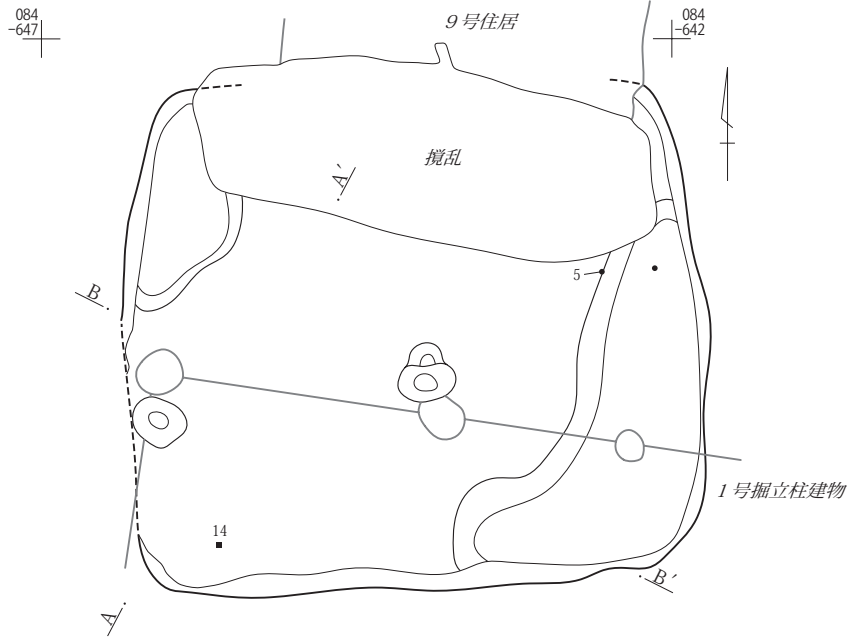
17号住居土層説明

- 1 褐(7.5YR4/3)黄橙色土粒・細礫・炭化物粒・焼土粒等の雑多な混入物を少量含む上層埋没土。
- 2 にぶい褐(7.5YR5/4)下層埋没土の弱粘性土で黄橙色土粒等を少量含む。2'ではやや黒色味をおびる。
- 3 極暗褐(7.5YR2/3)部分的に壁際に見られる埋没土で、炭化物、焼土粒等を少量含む。
- 4 暗褐(7.5YR3/4)掘り方埋戻し土。地山中の黄橙色土ブロック・砂礫等を少量含む。

0 1:60 2m

第33図 17号住居(1)

掘り方



第34図 17号住居(2)と出土遺物

18号住居

(第35・36図 PL.10-⑤~⑧、33・34 遺物観察表139頁)

2区中央付近にある。西側の19号住居からは12m、東側の20号住居からは10m離れた位置で、1棟だけ孤立したような占地にある。

位置 064~068、-672~675グリッドにある。

規模形状 東西軸長2.45m、南北軸長3.3mの長方形を呈している。東辺が外側へ膨らむように湾曲するが、比較的整美な形状である

埋没土・壁 焼土粒等の混じる住居的な埋没土であるが、三角堆積と呼ばれる壁際からの埋没が見られず、自然堆積的ではない。

方位 N-4° E(長軸) N-99° E(カマド)

面積 6.95㎡

床面 細かい凹凸が多い不整な床だが、全体ではほぼ水平である。地山礫がカマド周辺で露出している部分があ

る。掘り方は認められない。

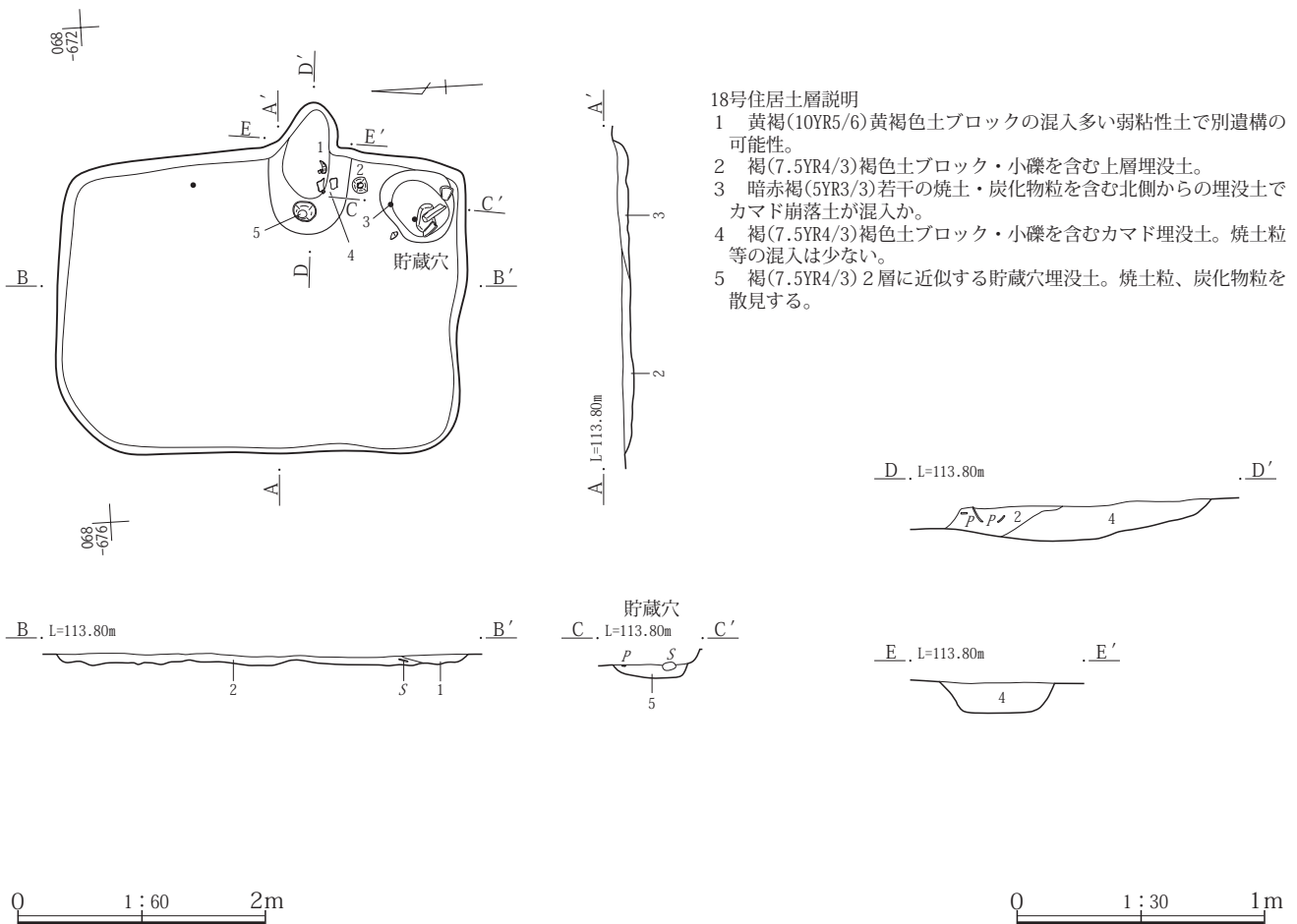
貯蔵穴 南東隅に開口部径63×57cm、床面からの深さ10cmの窪みを貯蔵穴とした。深度に乏しいが底面は平坦である。貯蔵穴埋没過程で混入した礫が見られる。

カマド 東辺南寄りにある。燃烧部は壁際にあり、火床は住居床より5cm低い。袖や煙道部分は確認できない。

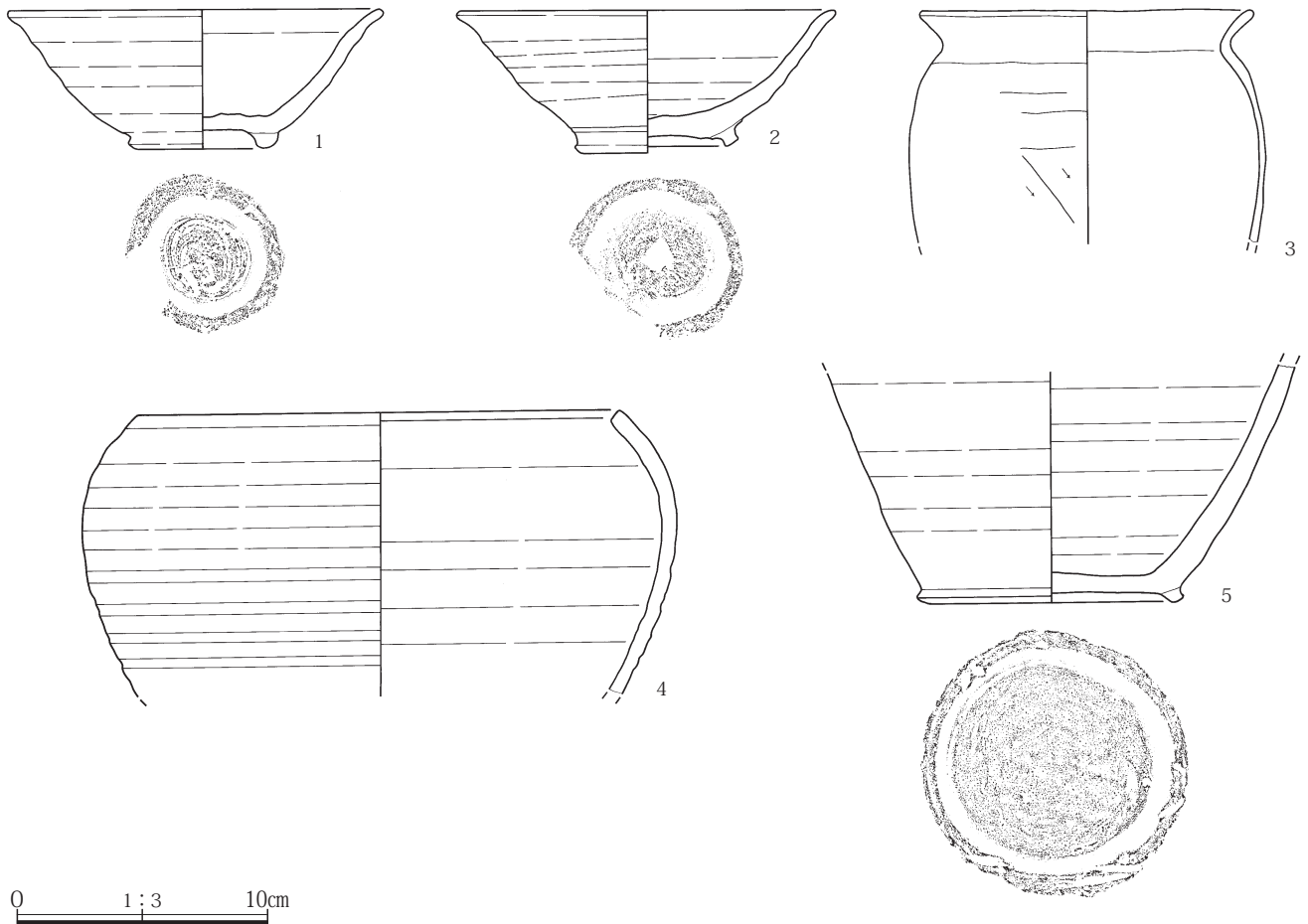
その他 柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 出土遺物は少ないが土器5点を図示した。カマド内からは須恵器椀1、鉢4、壺5の煮沸土器以外がまとまって出土した。須恵器椀2はカマド脇の床直上出土で、これらが本住居に確実に伴う土器である。図示した以外の土器はきわめて少なく、土師器壺・甕類9点、須恵器壺・甕類1点のみで、杯類の出土はなかった。

所見 須恵器椀は口縁が外反し、底径が口径の半分以下の10世紀前半の遺物と考えられる。



第35図 18号住居



第36図 18号住居出土遺物

19号住居

(第37図 PL.11-①~⑥、34 遺物観察表140頁)

2区西寄りにある。北西側の12号住居から約5mに位置する、本遺跡唯一の北カマドの住居である。

位置 066~069、-687~690グリッドにある。

規模形状 東西軸3.1m、南北軸3.0mを測る。東壁は崩れて広がったようで当初は正方形に近い形状であったと想定される。

埋没土・壁 礫が下層から中層まで広い範囲に散乱していて、人為的に投げ込まれた可能性がある。

方位 N-7° E(南北軸・カマド)

面積 7.12㎡

床面 緩やかに不規則に波打つような凹凸のある床面で、貯蔵穴周辺が低く、西壁下と10cmの比高差を生じている。南西隅付近で地山礫の露出が顕著だった。南壁寄りを除いて掘り方があり、土坑状・ピット状に窪む部分もあった。

貯蔵穴 北東隅に開口部径69×58cm、床面からの深さ27

cmの貯蔵穴がある。二段底状で底面の狭い施設で、断面から掘り直しの可能性が看取される。貯蔵穴内と住居下面では埋没土が異なり、住居廃絶時には埋没していたと思われる。

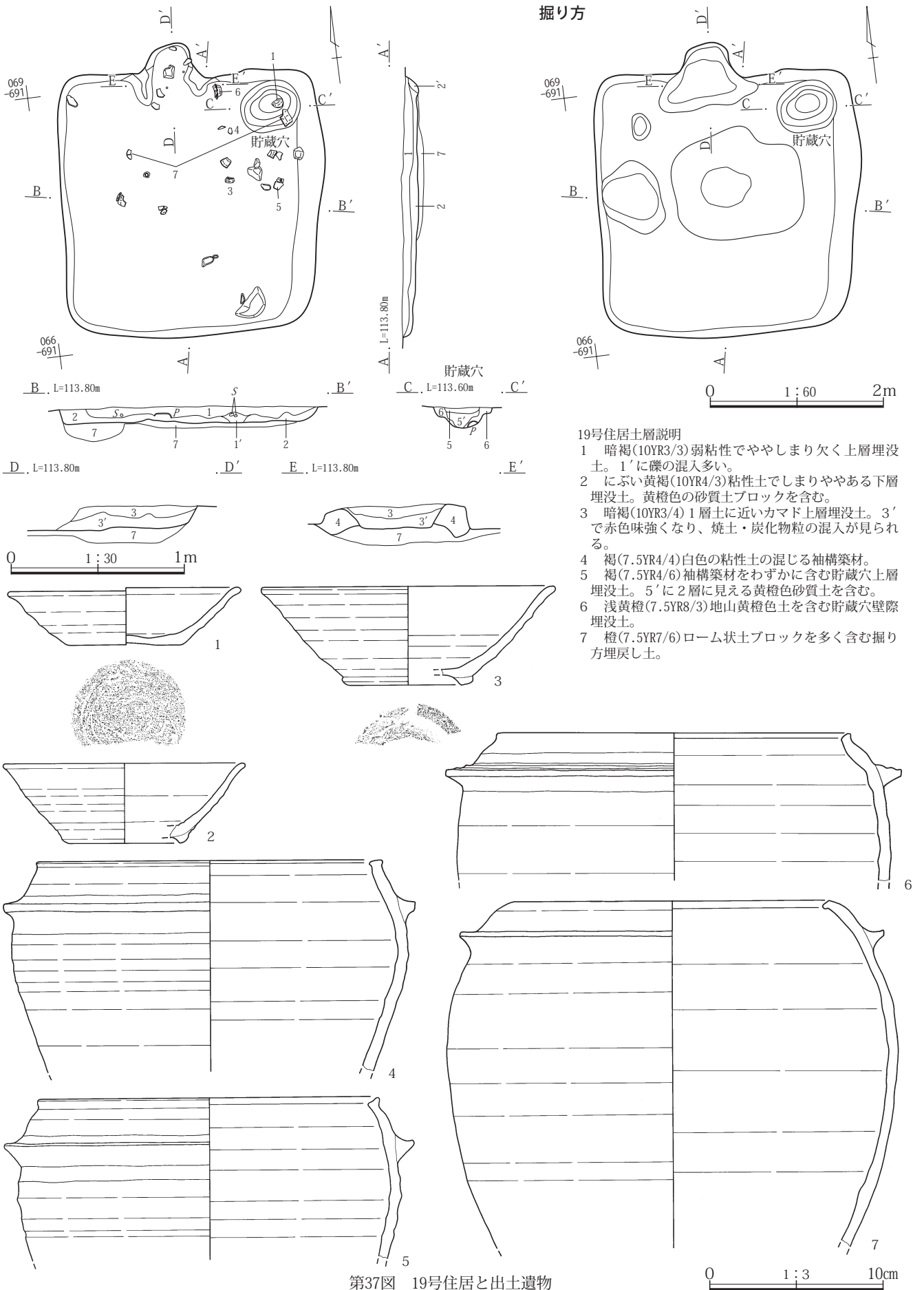
カマド 北辺中央やや西寄りにあり東西両袖が残存している。燃焼部は壁際であり、火床は住居床と同じ高さにある。火床中央付近の礫は火床より高い位置にあり、支脚として使用されたものではない。

その他 柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 須恵器7点を図示した。カマド脇の羽釜6・貯蔵穴上の羽釜7が床直上出土の本住居に確実に伴う遺物である。貯蔵穴内の杯1は器高に乏しい無台の土器で、他の碗より古式の様相が見られる。図示した以外の土器は少なく、土師器壺・甕類6点、須恵器杯類13点、壺・甕類16点がある。

所見 碗口縁は外反し、煮沸具はすべて羽釜となっている10世紀前半の住居である。該期の住居で北カマドを持つ希少な例である。

第三章 調査の内容(古墳時代以降)



20号住居

(第38図 PL.11-⑦)

2区中央にあり、西側の18号住居からは12m、南東側の21号住居からは8m離れた位置にある。

位置 056~059、-661~665グリッドにある。

規模形状 東西軸3.55m、南北軸3.0mの長方形を呈している。

埋没土・壁 埋没土は単層で埋没過程は明確にできない。残存壁高も4cm前後で不明瞭であった。

方位 N-82° W(東西軸)

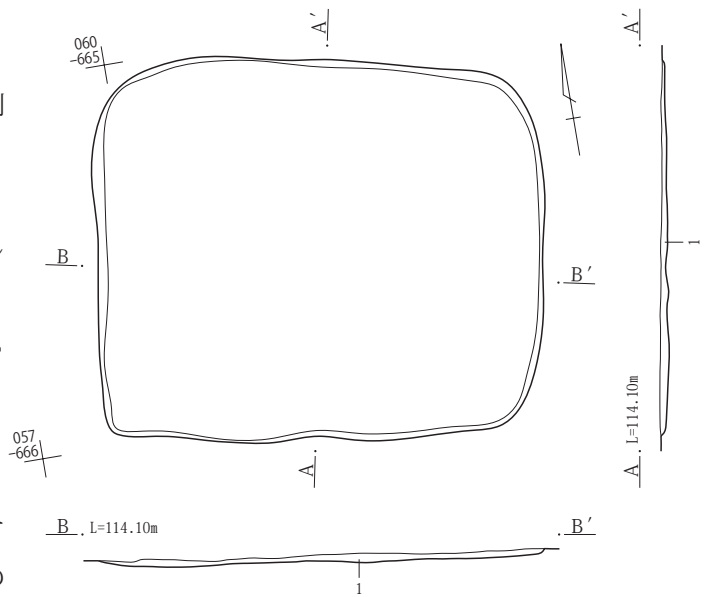
面積 9.58㎡

床面 細かな凹凸があり、全体では西側へ低く傾斜していて東壁下と8cm前後の比高差を生じている。地山礫の露出のない平坦な床面である。掘り方は確認できない。

その他 カマドや炉・柱穴等の施設は確認できない。

遺物 土器類の出土は小破片を含め1点もなかった。

所見 時期を推定する資料を持たない。住居通有の施設がなく、竪穴状遺構と区分される遺構に近い。



20号住居

1 褐(7.5YR4/3)径2~3mm台の細礫や地山黄褐色土粒を含む弱粘性土層。

0 1:60 2m

第38図 20号住居

21号住居

(第39図 PL.11-⑧)

2区南隅にあり、南側は調査区境にかかるうえ西側を8号溝に壊され全容を把握できていない。

位置 052・053、-651~655グリッドにある。

規模形状 東西軸長3.3m、残存する南北軸長1.6mを測る。残存する各隅は丸みが強く、20号住居と近似した形状になりそうである。

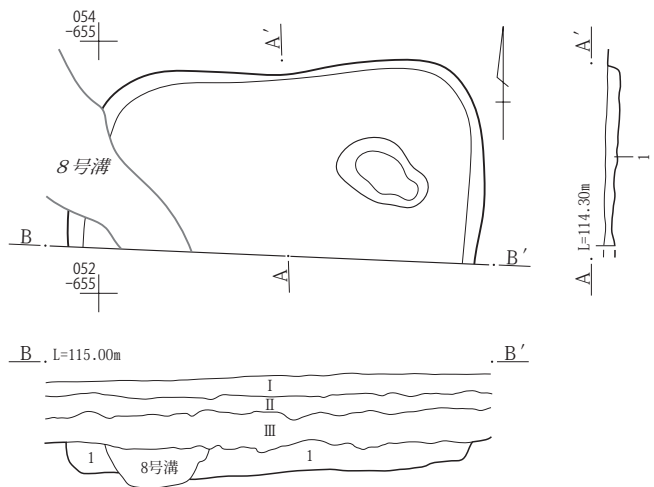
埋没土・壁 埋没土は単層で埋没過程は明確にできない。表土層からの断面でも20cm前後の壁高が確認されるのみで、深度に乏しい遺構である。

方位 N-87° W(東西軸)

面積 残存(4.05)㎡

床面 不規則な凹凸があり、全体では西側へ低く傾斜していて東壁下と10cmの比高差を生じている。地山礫の露出がなく、平坦な床面である。明瞭な掘り方は確認できなかった。

その他 8号溝に前出している。北東寄りに窪みがある。配置は住居主柱穴として齟齬はないが、プランが不明瞭なうえ床面からの深さ8cmで深度に欠き、掘り方と区別できなかった。カマド等の施設は確認できない。



21号住居

1 暗褐(7.5YR3/4)黄橙色土ブロック少量含む弱粘性土。

0 1:60 2m

第39図 21号住居

遺物 土器類の出土は小破片を含め1点もなかった。

所見 時期を推定する資料を持たない。住居通有の施設がなく、竪穴状遺構と区分される遺構に近い。

3 掘立柱建物

本遺跡では掘立柱建物3棟を確認した。遺構の分布は2区に1棟のみ離れた位置にあり、4区に大型建物1棟を含めた2棟が重複して確認されている。この他3区にはピット群が見られ(第44・45図)、一部柱穴列状に繋がる部分もあったが、建物を復元することはできなかった。

各掘立柱建物ごとに柱穴番号をP1から順にP2・P3…と記し、建物として復元できなかった個別のピット(177ピットのように記した)と区別した。

1号掘立柱建物(第40図 PL.12-①~⑩)

概要 2区北東側の竪穴住居が密集して確認できる地点にある。ピットの少ない一画で明瞭に復元できた遺構である。

位置 089・090、-955~959グリッド

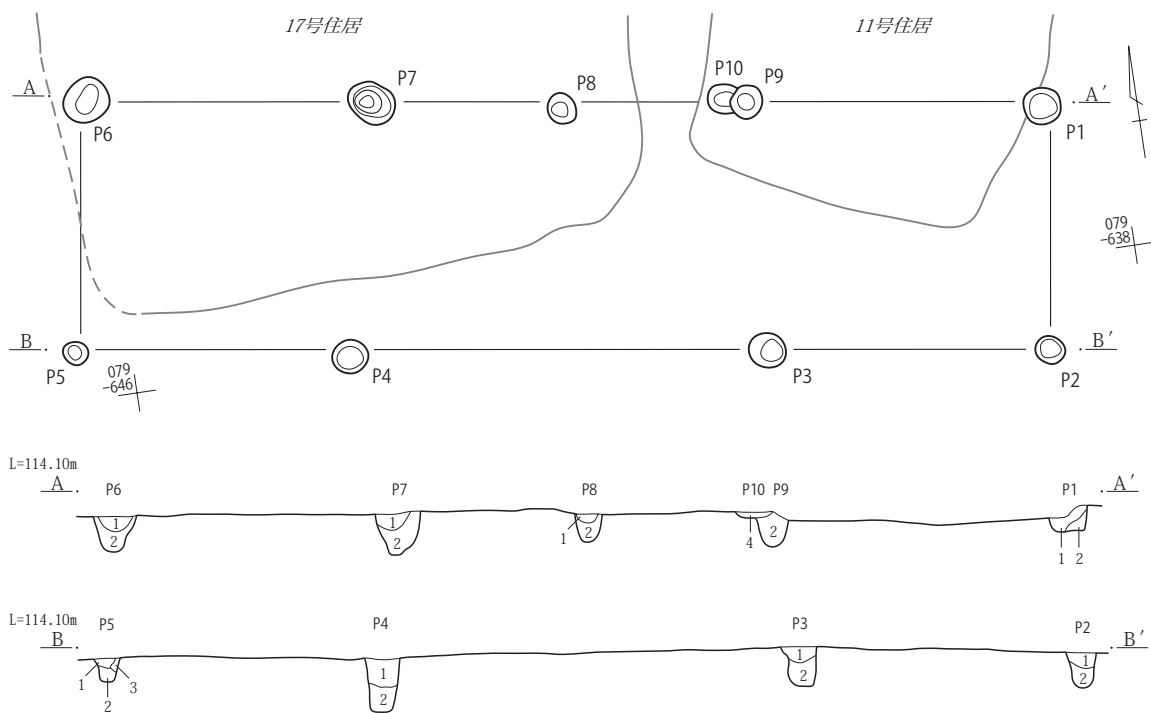
規模形状 芯々距離で桁行7.70m、梁間1.95mを測り、著しく東西方向に細長い。1間×4間(南側桁方向では3間)の変則的な遺構である。

軸方向 N-7°E(梁方向)

柱穴 いずれの柱穴とも明瞭な柱痕は確認できない。径・深度にやや乏しい。特に深度に乏しいP10はP9に後出する別遺構の可能性がある。

その他 P9が11号住居に後出することが観察できる。17号住居にも後出すると思われる。

所見 4号溝が造る方形区画内の遺構であるが、溝と本建物の軸方向が異なり、区画に伴う施設か分からない。10・14・15号住居など平安期の竪穴住居に軸方向が近似しているが、変則的な建物で中世以降の施設と考える。



1号掘立柱建物

ピット計測 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	29	29	20	11号住居と重複
2	24	21	30	
3	30	26	31	
4	28	26	43	
5	21	18	19	
6	37	33	29	17号住居と重複
7	40	30	34・29	二段底状・17号住居と重複
8	25	22	33	17号住居と重複
9	27	25	28	P10に前出 11号住居と重複
10	31	23	6	P9・11号住居に後出

ピット間距離計測 (cm)

ピット間	距離
1-2	195
2-3	220
3-4	332
4-5	214
5-6	196
6-7	228
7-8	153
8-9	146
9-1	240

1号掘立柱建物土層説明

- 1 褐(7.5YR4/4)褐色土をブロック状に含むややしまり強い層。
- 2 暗褐(7.5YR3/3)しまりある粘性土。
- 3 黄褐(10YR5/6)根固め部分にあたるブロック状の粘性土。
- 4 灰褐色土(7.5YR4/2)白色軽石粒をやや多く含むやや砂質土。

0 1:60 2m

第40図 1号掘立柱建物

2号掘立柱建物(第41図 PL.13-①~⑤)

概要 5区大型建物である3号掘立柱建物の北東隅に重複している。

位置 070~077、-512~517グリッド

規模形状 南北方向に長い建物で、桁を南北、梁を東西に置くと桁行4.20m、梁間3.05mで2間×2間の総柱建物となる。

軸方向 N-6° E(長軸方向)

柱穴 底面中央付近に柱痕状窪みのある二段底状の柱穴が多く、P1~3・5・6・10の6基がこれにあたる。ただしP1・3など窪みの底径が10cmに満たず、柱材を想定するには小さ過ぎるものもある。各柱穴とも開口部径は40cm前後で比較的揃っているが、深さには差が大き

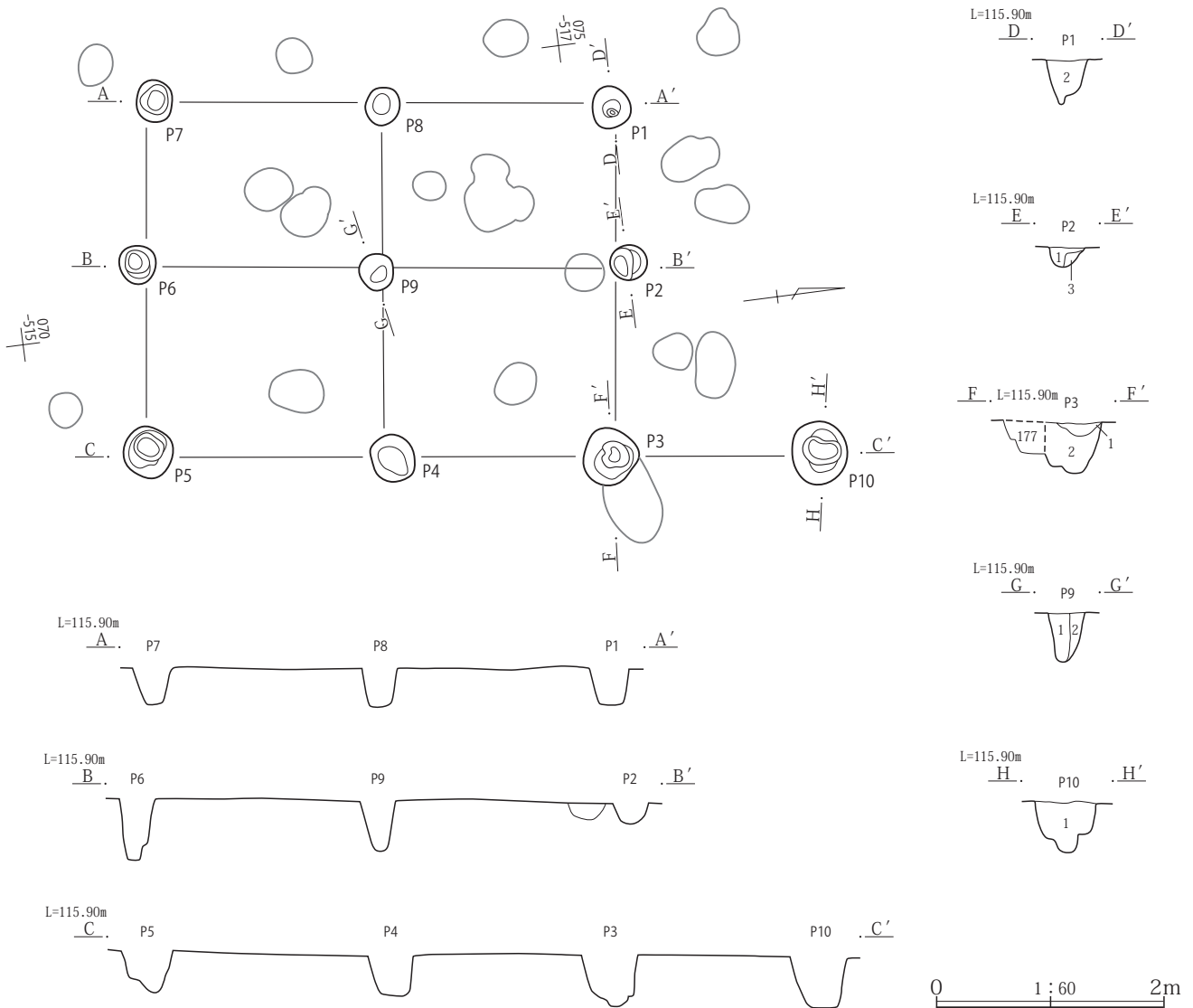
い。最も浅いP2と、最も深いP6が柱筋の外側にやや逸れるように穿たれている。最も規模の大きいP10は東側柱筋の北側に並ぶ柱穴であるが、本建物に伴うものか明確ではない。

その他 重複する3号建物と近似した軸方向にあるが、柱穴間の重複が全くない。

所見 3号建物との新旧関係は不明だが、近接した時期の建替えがあったと想定できる。周辺に古代の遺構はなく、遺物の散布も見られないことから中世以降の施設と推定する。

2号掘立柱建物土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/4)しまりあるやや砂質土。軽石・炭化物粒・黄褐色土粒等雑多な混入物を少量含む。
- 2 褐(7.5YR4/3)軽石・黄褐色土粒を散見するしまりあるやや粘性土。2'では粘性・しまりともやや弱い。
- 3 黄褐(10YR5/6)根固め部分にあたるブロック状の粘性土。



第41図 2号掘立柱建物

2号掘立柱建物

ピット計測 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	36	33	29・31	二段底状
2	33	32	17・14	二段底状
3	49	43	45・40	177ピットと重複
4	43	37	36	
5	47	43	36・16	二段底状
6	34	33	53・42	二段底状
7	38	31	31	
8	34	30	35	
9	33	28	45	
10	60	48	44・34	二段底状

ピット間距離計測 (cm)

ピット間	距離
1-2	134
2-3	167
3-4	202
4-5	219
5-6	166
6-7	143
7-8	206
8-1	205
2-9	208
8-9	144
3-10	178

3号掘立柱建物(第42・43図 PL.13-⑥~14-⑮)

概要 5区にある58本の柱穴からなる特殊な大型建物である。調査段階では東西の柱筋に沿って4棟の建物を想定していたが、南北の柱筋が全体に揃っていることから整理段階で1棟の建物に修正した。

建物の説明にあたり、各柱筋には49頁の柱穴列呼称一覧に記した。

位置 061~077、-543~524グリッド

規模形状 南北軸長A列12.9m、G列14.9m、東西軸長N列9.25mのきわめて大型の建物である。建物内部は以下に区画できる。まずD列とE列に挟まれた、幅約0.75mの廊下のような南北に細長い区画を挟んで、西側と東側に大別できる。

西側区画は1列から8列の間が1.8~1.9mのほぼ等間隔に並び、軸の方向も揃っている。しかし1列にはB列上に並ぶ柱穴がなく、1列と2列の間は底のような別区画であった可能性がある。A列~C列の間も1.75m前後の等間隔だが、C・D列間は北側で2.2m・南側で2.0mの間隔がある。

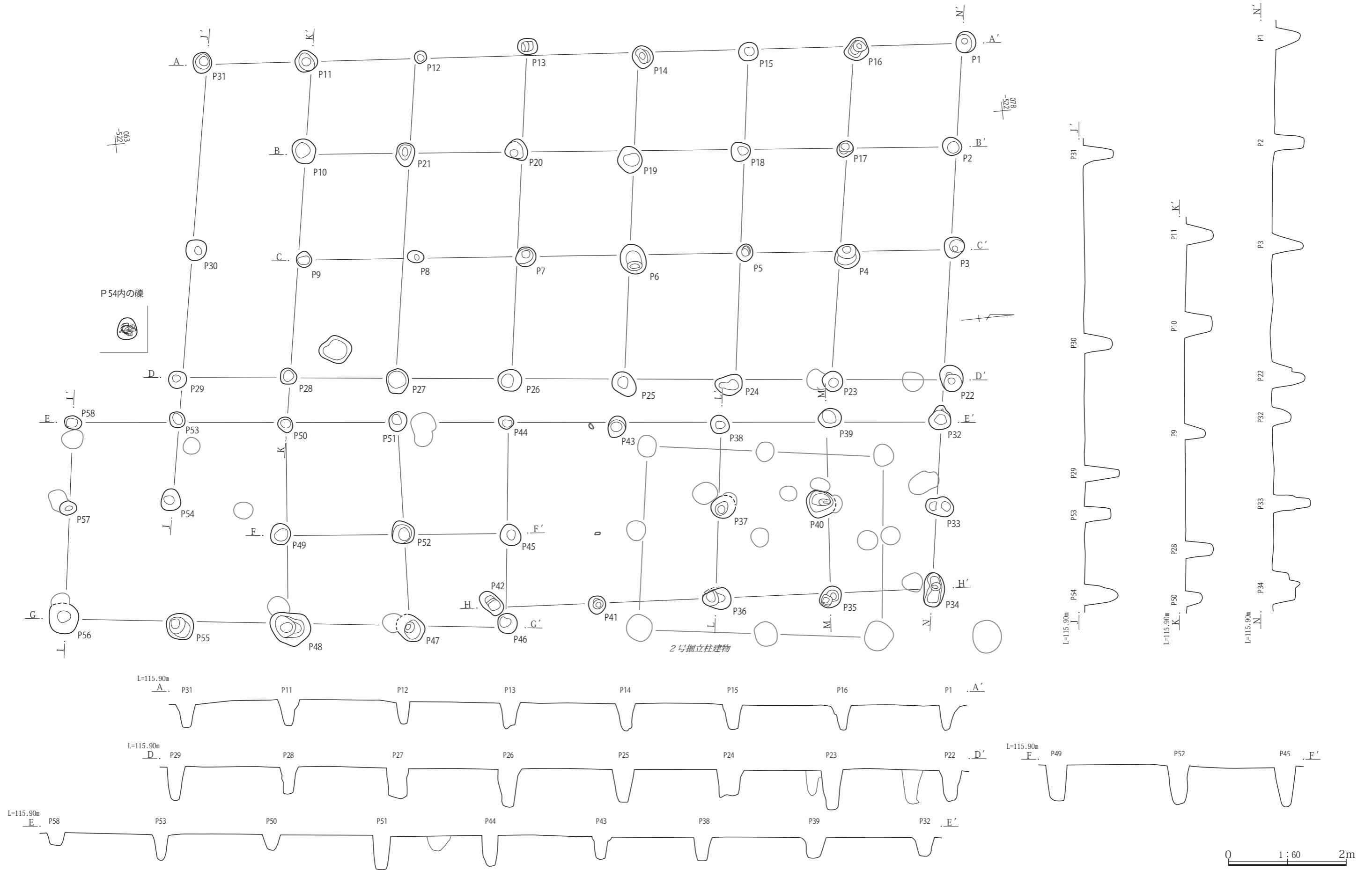
東側区画は東隅のG列とH列の軸方向が大きく異なり、12列を挟んで南北に二分できる。北側は13列と15列の間の2間×2間の総柱状区画と、12列・13列間の2間×2間の側柱状区画に分けられる。南側もP54の性格が不明瞭だが北側同様に総柱状区画と側柱状区画に分かれるようだ。

軸方向 N-4° E(A列) N-8° E(G列)
 N-4° E(H列) N-79° W(1列)
 N-80° W(8列) N-80° E(9列)
 N-84° W(10列) N-87° E(11列)
 N-82° E(13列)

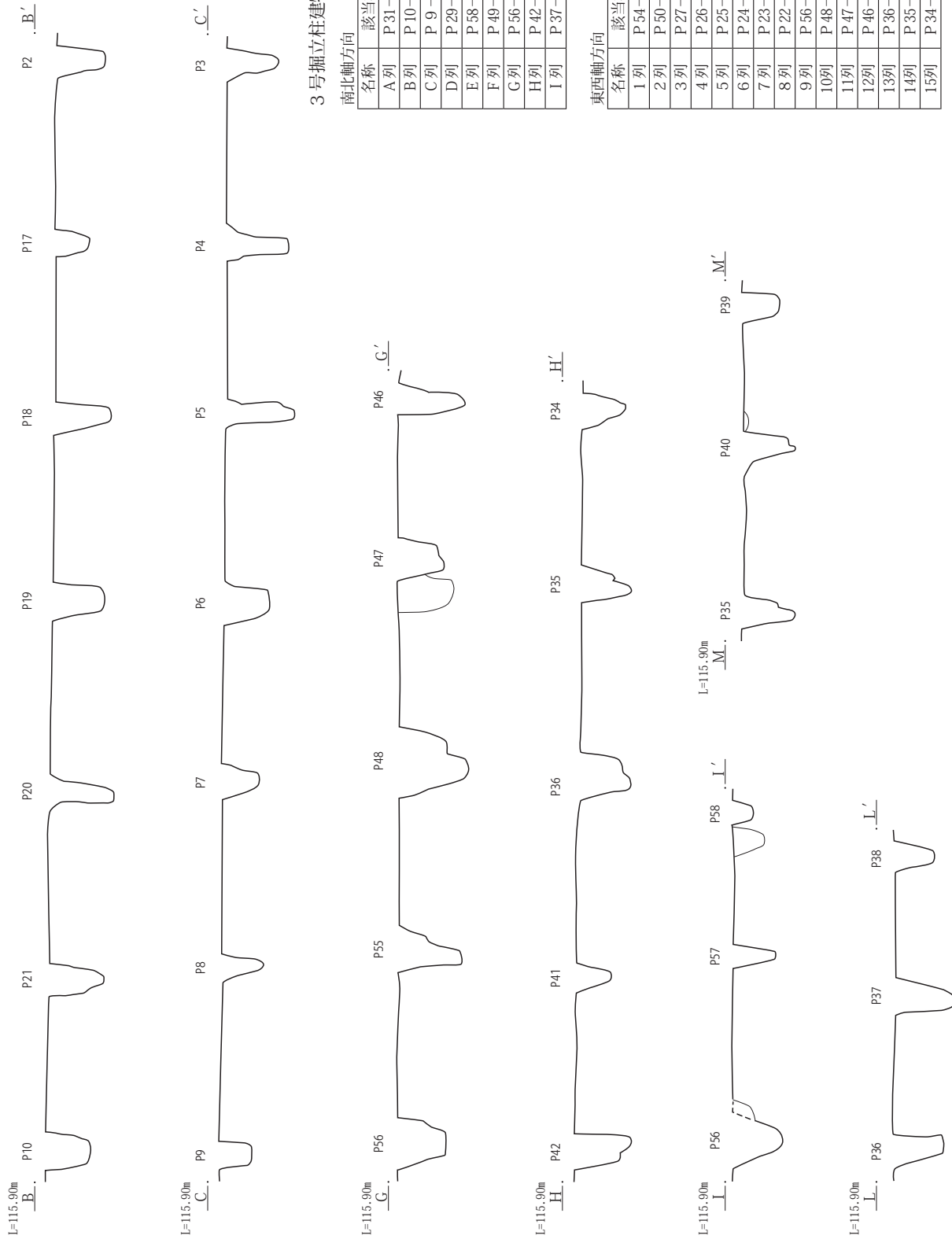
柱穴 本建物は、深度に富む規模の近似した柱穴で構成されている。柱穴は径35cm前後の円形プランを基本とし、楕円形を呈したり径が大きくなると、複数柱穴の重複と思われる場合が多い。埋没土の記録のある柱穴は一部だが、断面に柱痕の確認できるものはなかった。埋没土は、やや砂質の暗褐色土：Aと、やや粘性のある褐色土：Bが主な層であった。P2・3・7・14・57は上層A・下層Bの二層に分かれ、P16・40はAの単層、P11・33・35はBの単層であった。P27はA土主体だが、表層付近にブロック状の黄色土が敷かれるように確認されている。

その他 北東側で2号掘立柱建物と重複している。その他に17基のピットが東側に集中していて、P40・47・48・56・57などがピットと重複している。西側では2基のピットがD列上に見られるのみである。

所見 東西軸と南北軸が直交していない。特に西側では乖離が大きく、大屋根の建物構造としては不安である。建物を拡張したもので、分棟型建物のような形状を想定すべきと考えられる。最も規則的な配置にあるのが南東側の建物で、これを北側にやや歪んだ状態で拡張し、この拡張部分に沿って西側に大規模な拡張を行ったのが最終的な3号掘立柱建物の姿と想定する。時期を推定する根拠を持たないが、形状から中世末以後の建物と想定する。



第42図 3号掘立柱建物(1)



3号掘立柱建物柱穴列呼称一覧

南北軸方向

名称	該当柱穴	備考
A列	P31-P1	A-A'断面に同じ
B列	P10-P2	B-B'断面に同じ
C列	P9-P3	C-C'断面に同じ
D列	P29-P22	D-D'断面に同じ
E列	P58-P32	E-E'断面に同じ
F列	P49-P45	F-F'断面に同じ
G列	P56-P46	G-G'断面に同じ
H列	P42-P34	H-H'断面に同じ
I列	P37-P33	

東西軸方向

名称	該当柱穴	備考
1列	P54-P37	J-J'断面に同じ
2列	P50-P11	K-K'断面に同じ
3列	P27-P12	
4列	P26-P13	
5列	P25-P14	
6列	P24-P15	
7列	P23-P16	
8列	P22-P1	
9列	P56-P58	I-I'断面に同じ
10列	P48-P50	
11列	P47-P51	
12列	P46-P44	
13列	P36-P38	L-L'断面に同じ
14列	P35-P39	M-M'断面に同じ
15列	P34-P1	N-N'断面に同じ



第43図 3号掘立柱建物(2)

第Ⅲ章 調査の内容(古墳時代以降)

3号掘立柱建物

ピット計測 (cm)

番号	長軸	短軸	深さ	備考
1	47	43	43	
2	33	30	51	
3	37	33	53	
4	43	40	60・17	二段底状
5	29	26	69・55	
6	52	42	50・45	二段底状
7	35	32	39	
8	28	20	42	
9	27	26	34	
10	43	40	45	
11	38	35	45	
12	22	20	39	
13	33	27	45・38	二段底状・柱筋から西側へ逸れる
14	38	34	51・45	二段底状
15	33	30	42	
16	41	34	41・36	二段底状
17	30	24	33・18	二段底状
18	34	32	57	
19	46	41	54	
20	38	33	64	
21	40	30	55	
22	45	37	55・33	二段底状
23	34	34	68	117ピットと重複
24	46	33	43	
25	45	35	57	
26	40	35	65	
27	42	37	52	
28	29	28	47	
29	30	29	60	

番号	長軸	短軸	深さ	備考
30	37	35	49	
31	36	32	50	
32	42	35	31・13	二段底状
33	48	30	63・35	二段底状・重複ピットの可能性
34	57	35	43・27	二段底状
35	40	33	52・36	二段底状
36	48	36	51・44	二段底状
37	48	37	60・54	131ピットに移す
38	33	30	40	
39	39	34	34	
40	47	43	52・45	二段底状・113・189ピットと重複
41	31	29	35・29	二段底状
42	46	28	58・47	二段底状
43	38	29	38	
44	26	22	53	
45	38	34	67	
46	34	32	68	
47	55	41	46	149ピットと重複
48	70	52	72・49	二段底状・164ピットと重複
49	35	33	60	
50	27	24	27	
51	33	30	57	
52	38	36	66	
53	29	27	43	
54	36	33	56	礫の混入多い
55	49	43	67・30	二段底状
56	51	50	49	
57	28	22	44	197ピットと重複
58	30	22	22	173ピットに移す

ピット間距離計測 (cm)

ピット間	距離
1-2	180
2-3	172
3-4	186
4-5	174
5-6	193
6-7	185
7-8	186
8-9	192
9-10	185
10-11	153
11-12	195
12-13	182
13-14	200
14-15	184
15-16	188
16-1	180
3-22	225
9-28	198
9-30	183
11-31	176
22-23	201
23-24	180
24-25	181
25-26	197

ピット間	距離
26-27	188
27-28	184
28-29	192
29-30	220
30-31	322
22-32	71
29-53	69
32-33	148
33-34	140
34-35	188
35-36	197
36-37	150
37-38	145
38-39	186
39-32	189
36-41	190
38-43	180
41-42	178
43-44	186
44-45	192
45-46	148
46-47	192
47-48	180
48-49	158

ピット間	距離
49-50	190
50-51	190
51-44	188
51-52	196
48-55	192
55-56	189
56-57	186
57-58	147
58-33	180
29-53	77

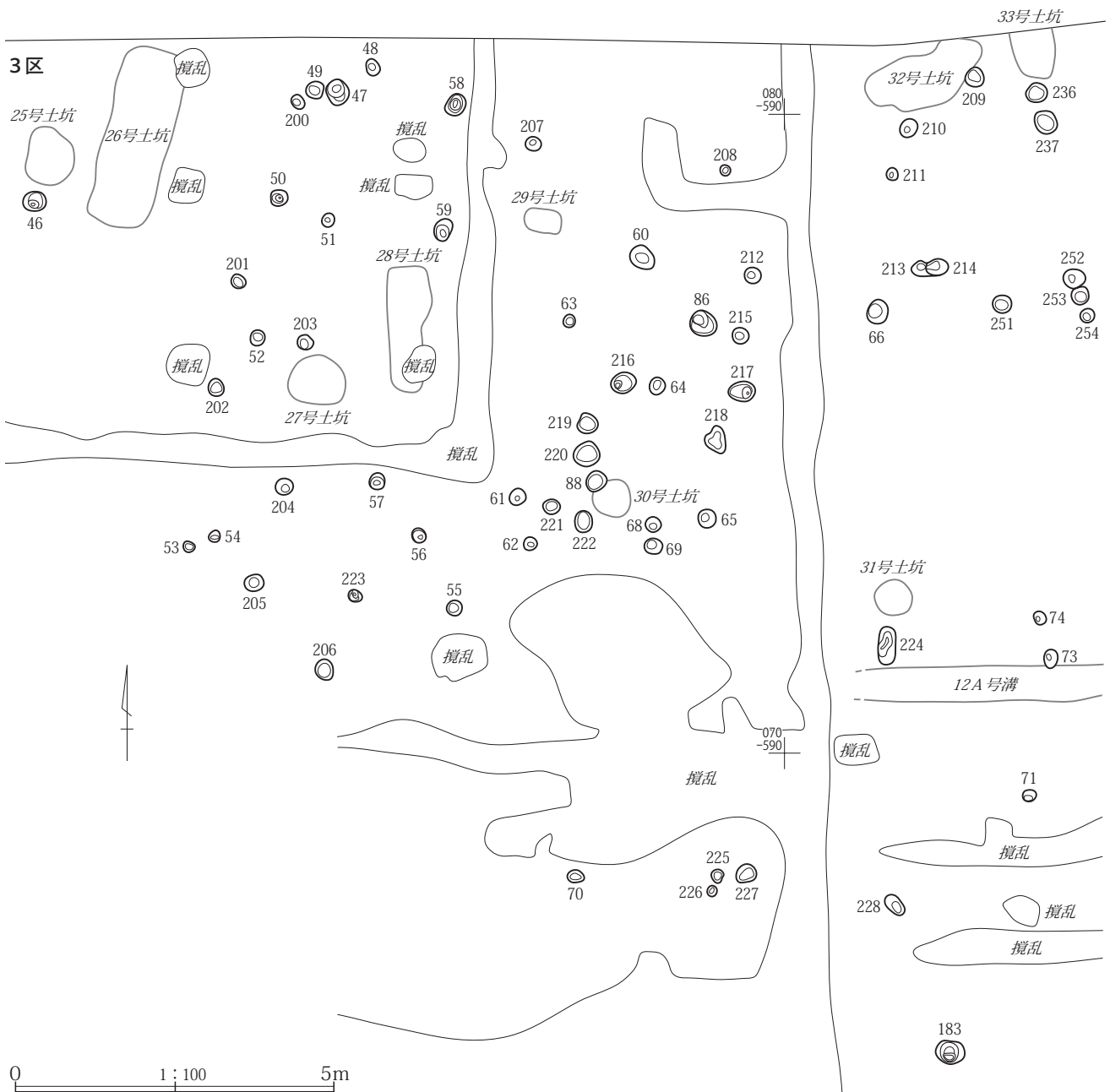
4 ピット

(第44～52図 PL.15・16、34 遺物観察表140頁)

小型円形の柱穴状の窪みのうち、掘立柱建物として把握できなかったものをピットとして扱った。本遺跡では226基が該当する。ピット番号は通し番号で付けられていたが、5区の2棟の掘立柱建物を構成する68基の柱穴にもピット番号が点けられており、これらを建物ごとの番号に付け直したため、多数の欠番を生じている。調査段階で付けられたピット番号は195までで、これらには写真や断面図等の記録が加えられていた。断面図はす

べて記載したが、写真は代表的なピットのみ記載となった。それ以外のは平面図のみ記録されたもので、整理段階で番号を付け、一部に測量記録から断面図を起こして記載した。

遺物を伴うピットが少なく、唯一図示できたものが86号ピット出土の不明石製品である。硯の可能性のある中世以降の遺物と考えられる。他のピットは時期を決定する資料を持たない。縄文時代の弧状列石内側にあたる1区南東隅、2区南西隅のピット群の埋没土は、列石内に見られる縄文時代のものとは明らかに異なることが観察されている。また、古代の遺構の多い1区北西隅や2区



第44図 ピット配置図(1)

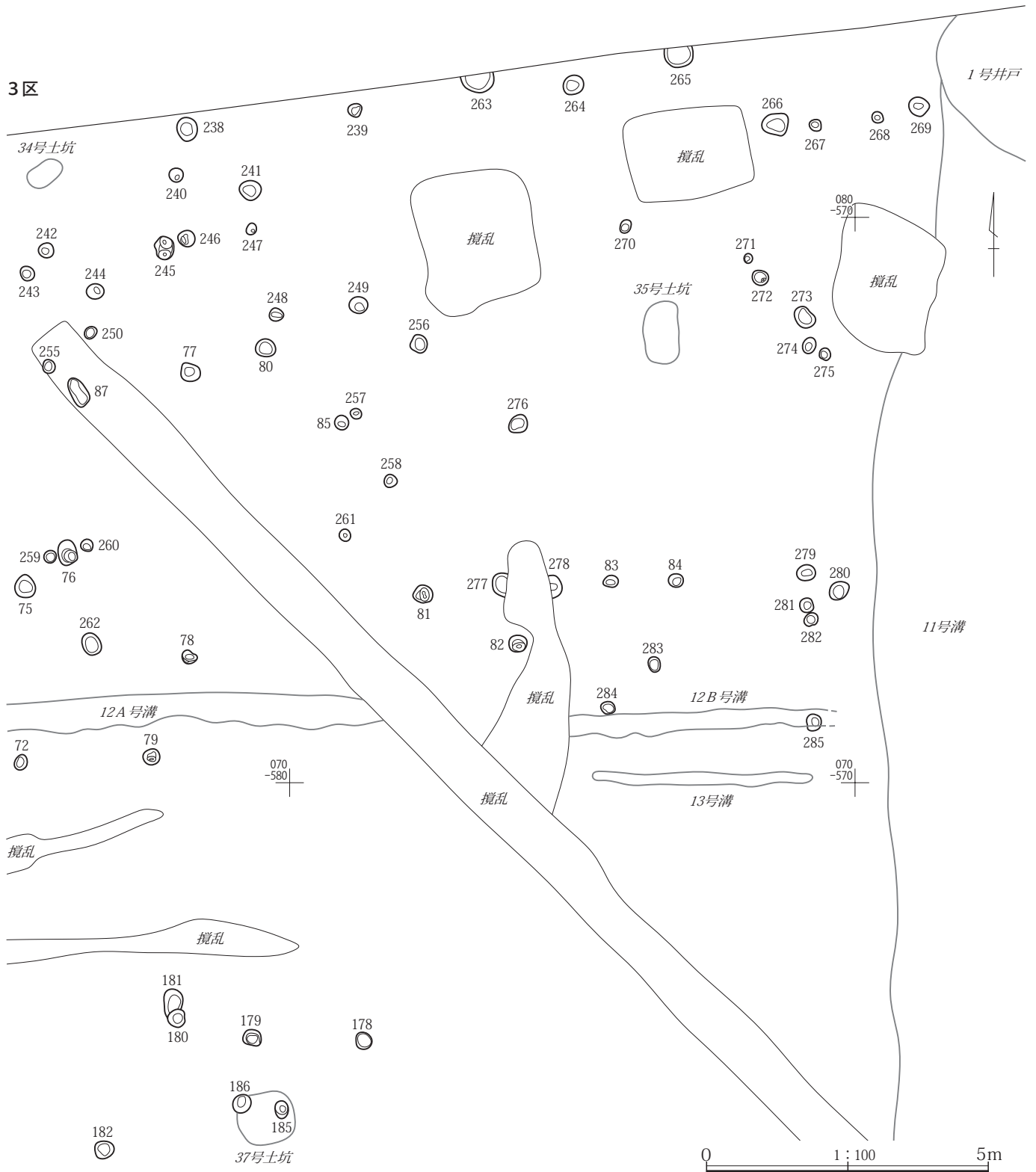
第三章 調査の内容(古墳時代以降)

にはピットの分布は少なく、大半のピットは中世以降の所産と推定される。

ピットが最も集中して分布しているのは3区北半で、全体の53%にあたる120基が11・14号溝が作る区画内にある。この部分のピットの配置を第44・45図に示した。

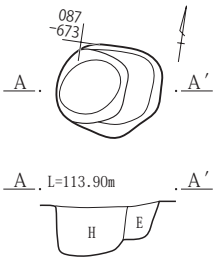
第44図の56・62・69号ピットのように約1.8m間隔に東西一列に並ぶピットなどがあり、建物や柱穴列があった可能性があるが、明確にできなかった。

5区にもピットは多いが大半は掘立柱建物柱穴として捉えられている。建物の中にあるピットの配置を第52図

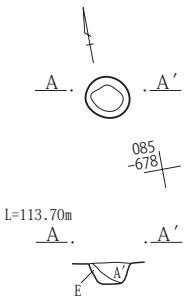


第45図 ピット配置図(2)

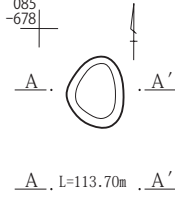
1号ピット



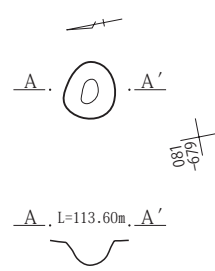
6号ピット



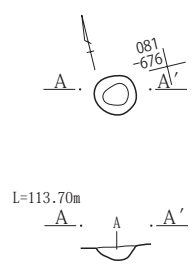
7号ピット



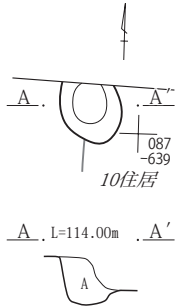
10号ピット



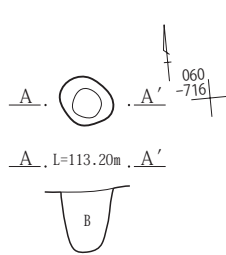
11号ピット



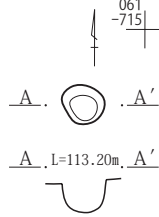
12号ピット



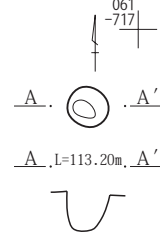
13号ピット



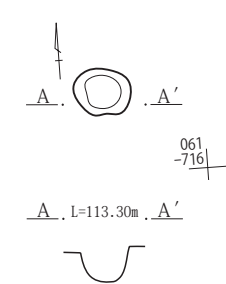
17号ピット



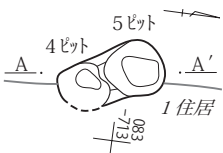
18号ピット



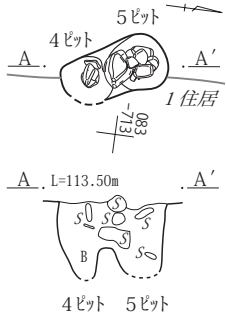
19号ピット



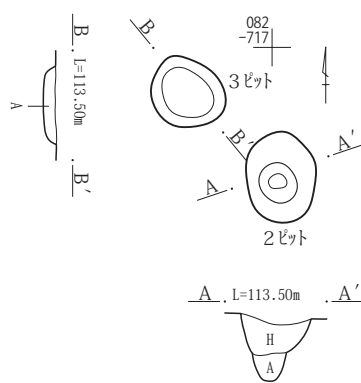
4・5号ピット



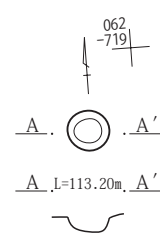
礫出土状態



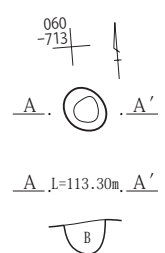
2・3号ピット



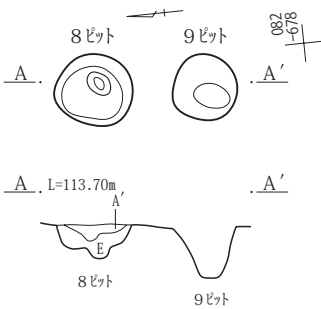
20号ピット



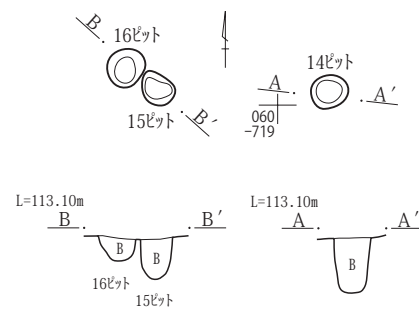
21号ピット



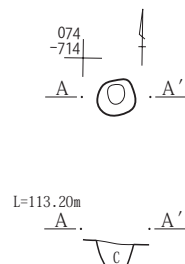
8・9号ピット



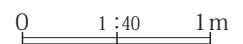
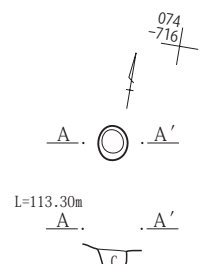
14~16号ピット



22号ピット

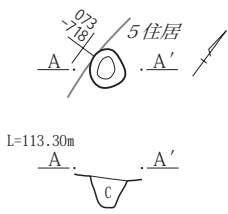


23号ピット

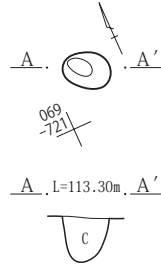


第46図 ピット(1)

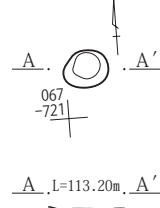
24号ピット



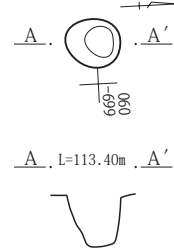
25号ピット



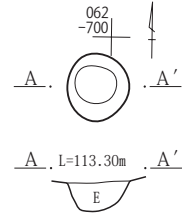
26号ピット



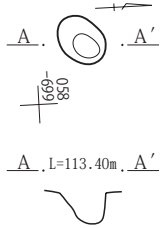
30号ピット



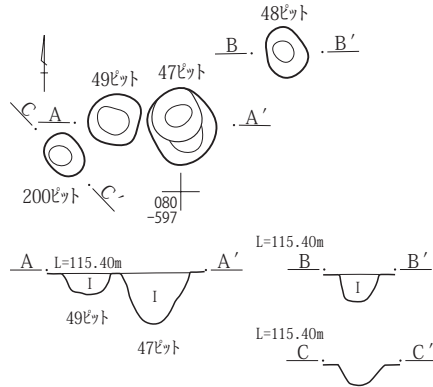
33号ピット



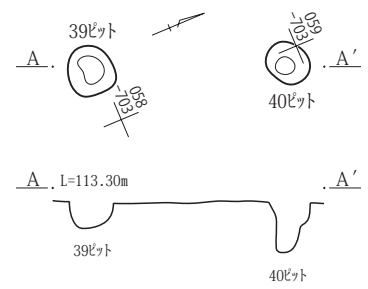
37号ピット



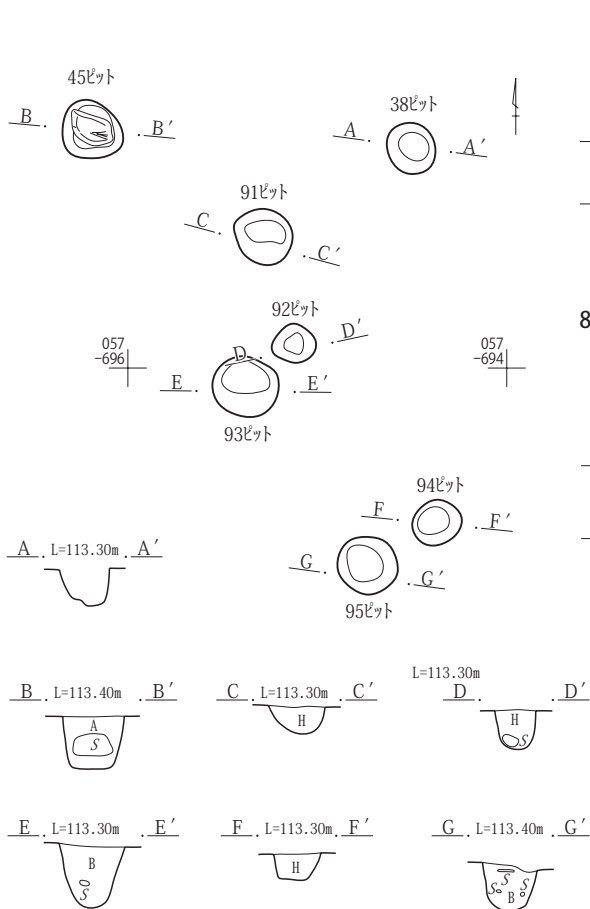
47~49・200号ピット



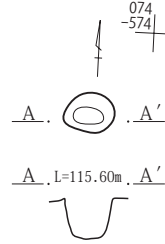
39・40号ピット



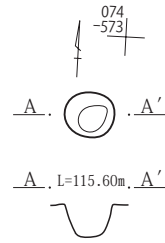
38・45・91~95号ピット



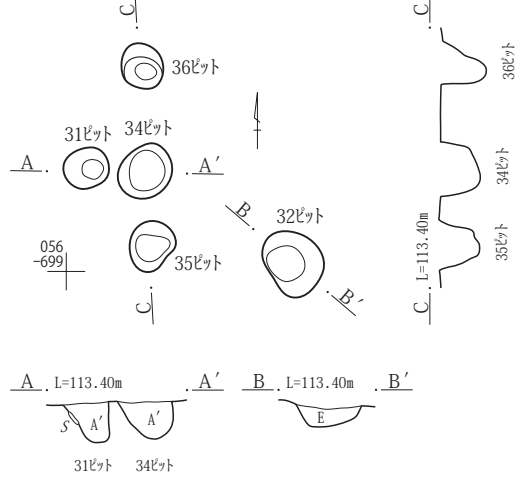
83号ピット



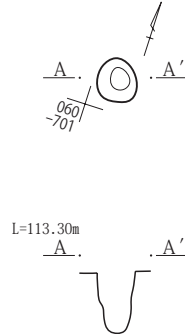
84号ピット



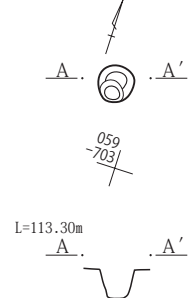
31・32・34~36号ピット



42号ピット

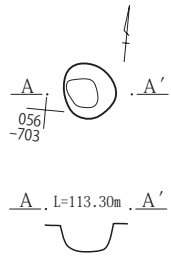


41号ピット

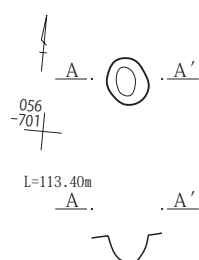


第47図 ピット(2)

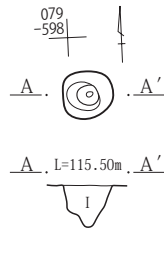
43号ピット



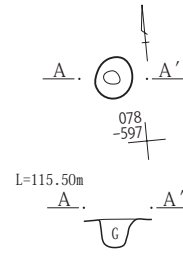
44号ピット



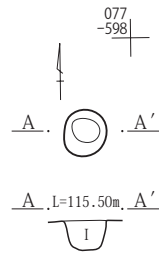
50号ピット



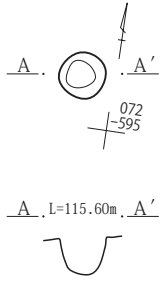
51号ピット



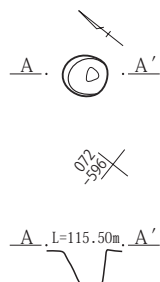
52号ピット



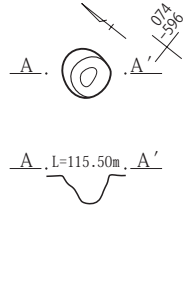
55号ピット



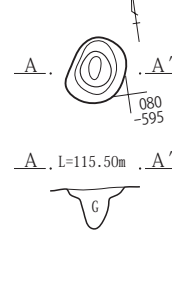
56号ピット



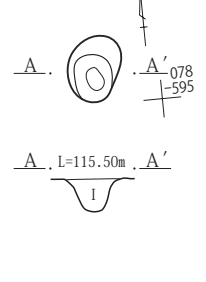
57号ピット



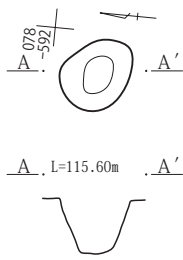
58号ピット



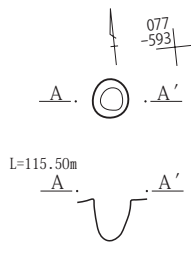
59号ピット



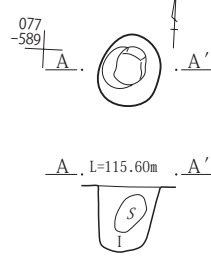
60号ピット



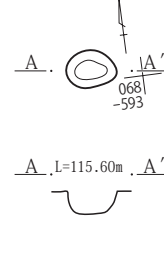
63号ピット



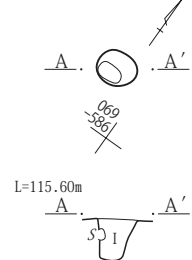
66号ピット



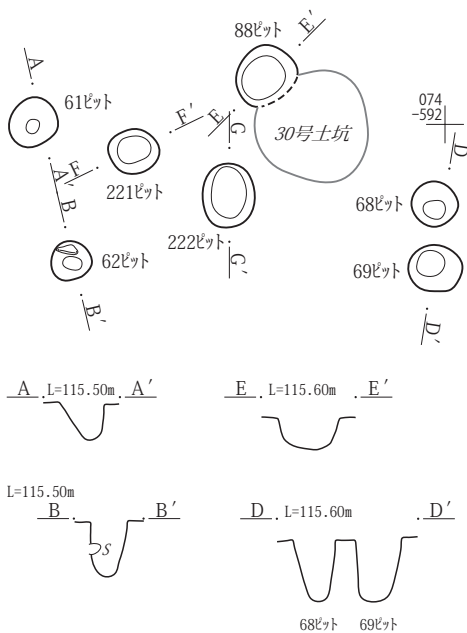
70号ピット



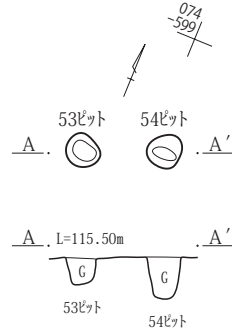
71号ピット



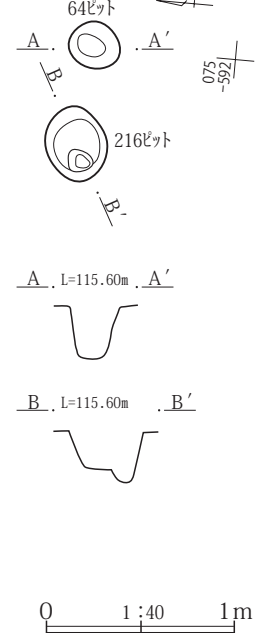
61・62・65・65・69・88・221・222号ピット



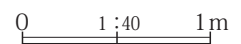
53・54号ピット



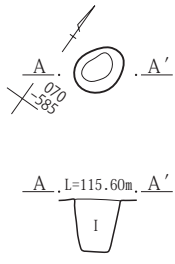
64・216号ピット



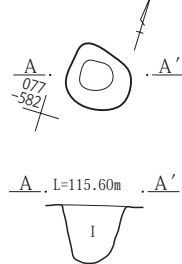
第48図 ピット(3)



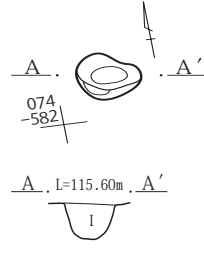
72号ピット



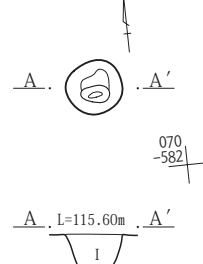
77号ピット



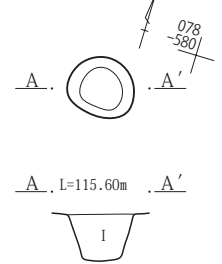
78号ピット



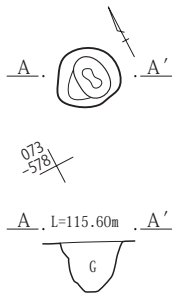
79号ピット



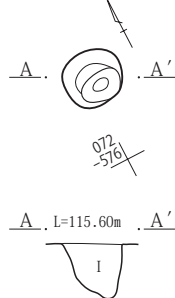
80号ピット



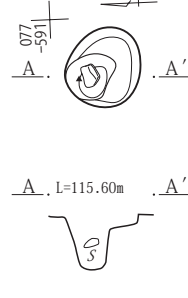
81号ピット



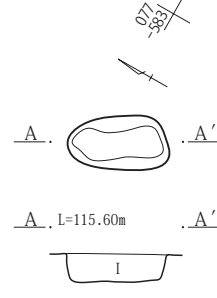
82号ピット



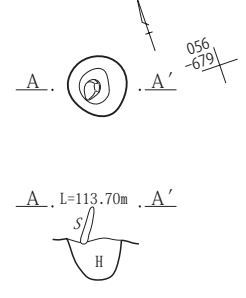
86号ピット



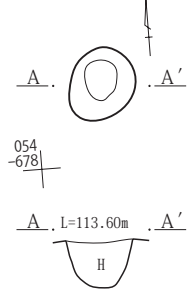
87号ピット



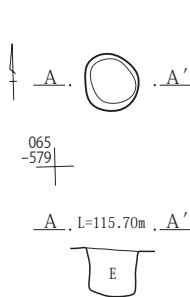
89号ピット



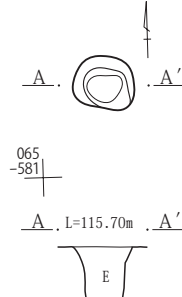
90号ピット



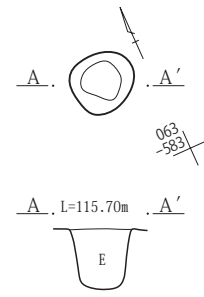
178号ピット



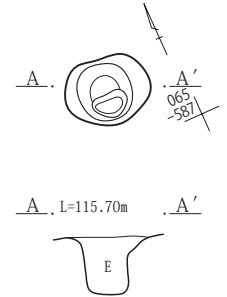
179号ピット



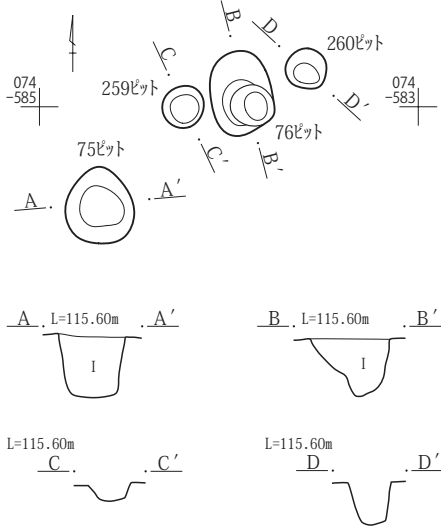
182号ピット



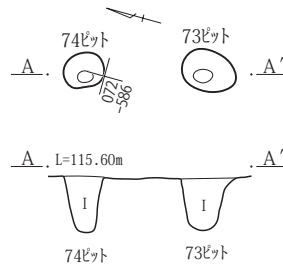
183号ピット



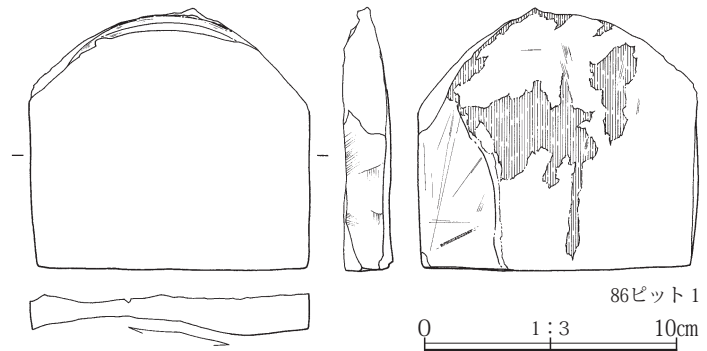
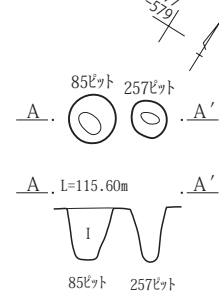
75・76・259・260号ピット



73・74号ピット

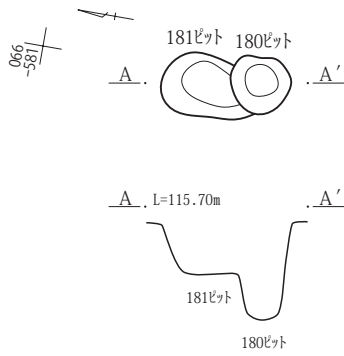


85・257号ピット

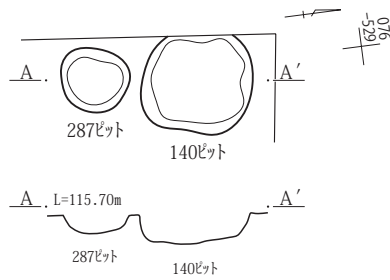


第49図 ピット(4)と出土遺物

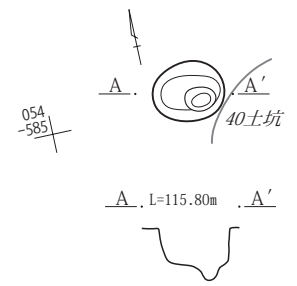
180・181号ピット



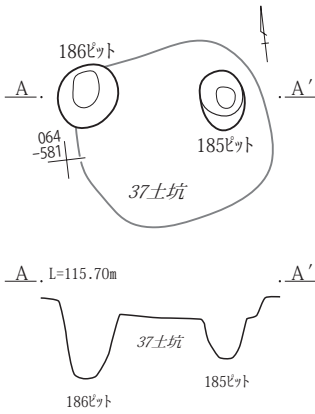
140・287号ピット



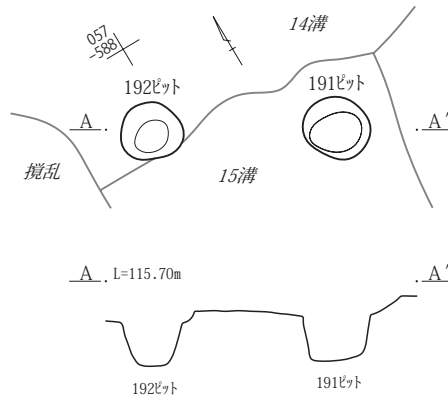
184号ピット



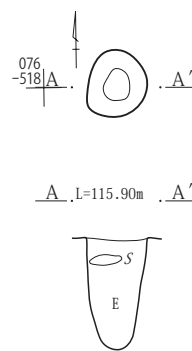
185・186号ピット



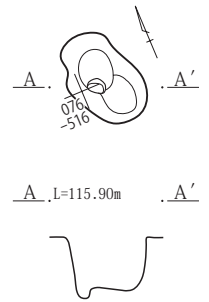
191・192号ピット



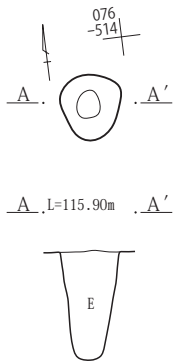
101号ピット



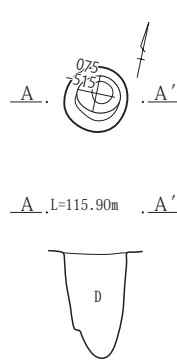
103号ピット



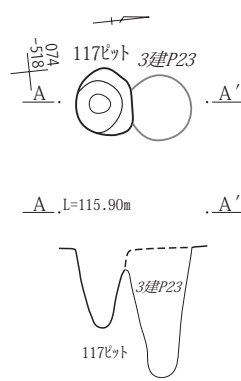
106号ピット



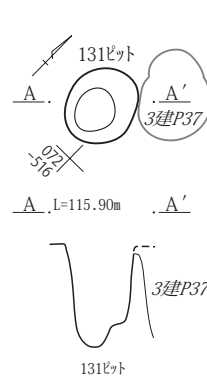
111号ピット



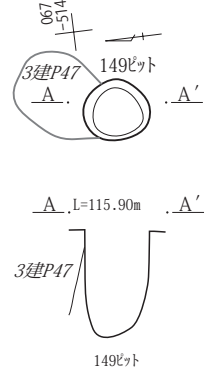
117号ピット



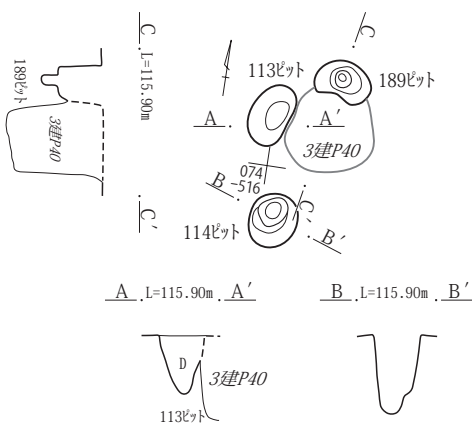
131号ピット



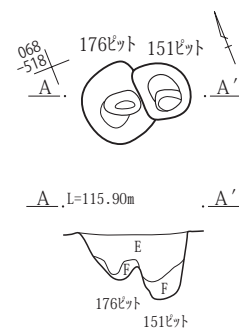
149号ピット



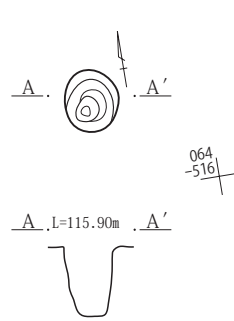
113・114・189号ピット



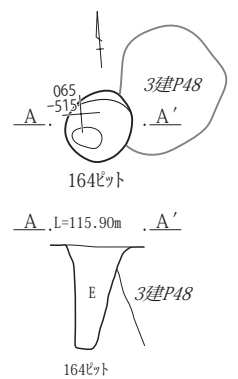
151・176号ピット



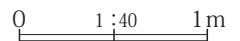
162号ピット



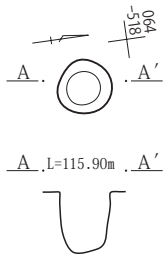
164号ピット



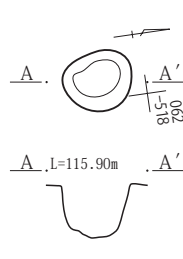
第50図 ピット(5)



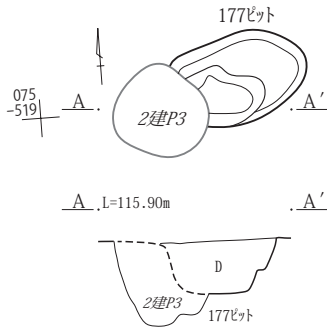
167号ピット



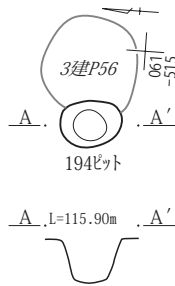
173号ピット



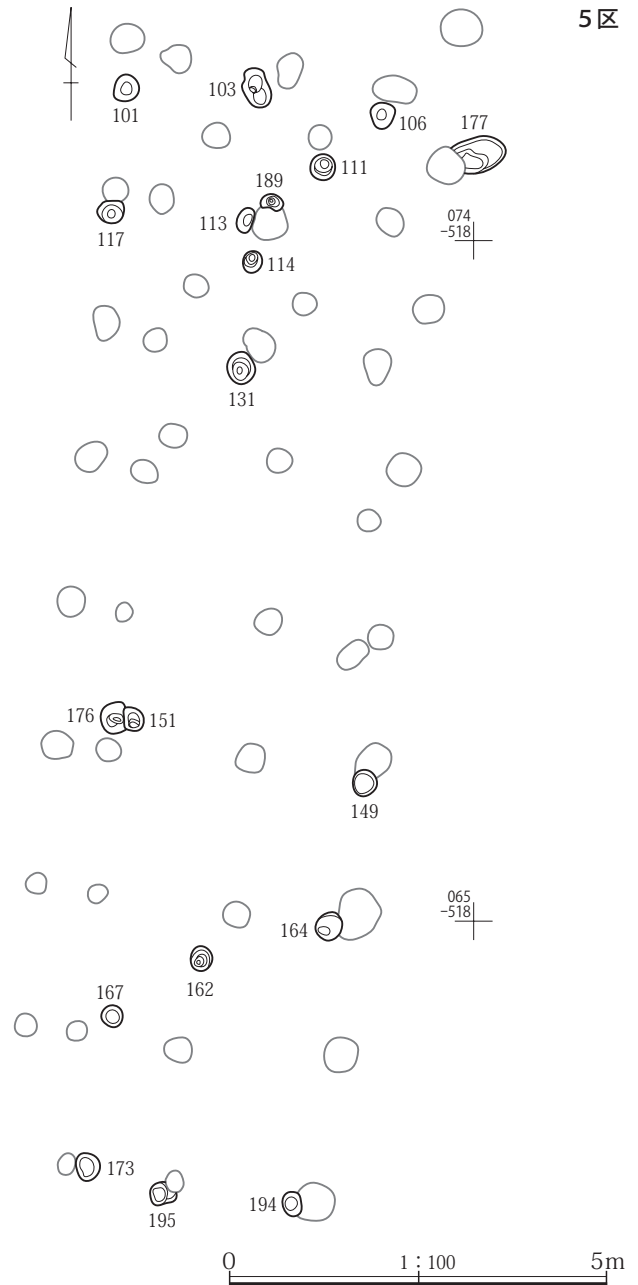
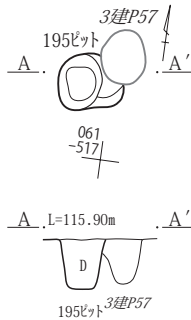
177号ピット



194号ピット



195号ピット



0 1:40 1m

0 1:100 5m

第51図 ピット(6)

第52図 ピット配置図(3)

に示した。

埋没土には共通するものが多く、以下のようなアルファベット共通土層記号を用いた。それ以外の土層には算用数字の番号を用い、ピットごとに説明を加えた。

- A 暗褐(7.5YR3/3)非粘性土層。不揃いの黄橙色土をブロック状に少量含む。A' では混入物が細かい。
- B 暗褐(7.5YR3/3)弱粘性土層。径3mm前後の細礫や黄褐色土粒をやや多く含む。
- C 黒褐(7.5YR3/2)粒子の細かな層で、径5mm前後の褐色粘性土小ブロックを不均等に含む。
- D 暗褐(7.5YR3/4)A層に近いやや砂質土層。白色軽石

粒・炭化物粒・黄橙色土粒を散見する。

- E 褐(7.5YR4/3)わずかに粘性をおびる層。白色軽石粒・黄橙色土粒を散見する。E' はやや粘性が強くなる。
- F 明褐(7.5YR4/4)土質はE層に近い。黄橙色土をブロック状に少量含む。
- G 暗赤褐(5YR3/3)斑鉄が見られる弱粘性土層洪水堆積土。黄橙色土をブロック状に少量含む。
- H 黒褐(7.5YR3/2)ややしまり弱い弱粘性土層。
- I 暗褐(7.5YR3/4)土質はG層に近い。雑多な混入物含み、As-Aの可能性のあるパミスが混じる。

表4 ピット一覧

No.	挿図	写真	位置	形状	長軸×短軸×深さ(cm)	備考(掘立柱建物は建物と略す)
1	46	15①	086・087、-672	円形・方形	58×52×28・19	重複する2基のピット。西側が新しい。
2	46	15②	081、-716・717	楕円形	48×37×39	
3	46		081、-717	楕円形	41×36×10	2号ピットの北西側20cmに隣接。
4	46		082・083、-713	楕円形	(48)×27×42	1号住居・5号ピットと重複。礫の混入多い。
5	46		082・083、-713	楕円形	32×30×38	1号住居・4号ピットと重複。礫の混入多い。
6	46		085、-678	円形	24×22×10	
7	46		083、-677	不整楕円形	37×30×9	
8	46		082・083、-677・678	円形	42×40×19・13	東寄りに柱痕状の細い窪み。
9	46		082、-678	円形	36×35×32	85号ピットに近接。郷ピットの南側20cmに隣接。
10	46		081、-678	円形	30×27×14	
11	46		080・081、-676	円形	23×21×7	
12	46		086・087、-639	楕円形	(42)×31×25	10号住居と重複。北側は調査区外。
13	46	15③	059・060、-716	円形	30×25×34	
14	46		059・060、-718	円形	20×18×29	3号溝と重複。
15	46		060、-719	不整楕円形	20×16×21	3号溝と重複。16号ピット東側に接する。
16	46		060、-719	円形	22×19×14	3号溝と重複。15号ピット西側に接する。
17	46	15④	060、-714	円形	23×21×17	
18	46	15⑤	060、-717	円形	22×20×21	3号溝と重複。
19	46		061、-716	不整円形	31×25×18	
20	46	15⑦	061、-719	円形	23×22×8	3号溝と重複。
21	46		059、-712・713	楕円形	25×20×18	
22	46		073、-713	円形	22×20×17	
23	46		073、-716	円形	18×16×13	5号住居と重複。
24	47		072・073、-717	円形	21×19×17	5号住居と重複。
25	47		069、-720	楕円形	26×19×24	3号溝と重複。
26	47		067、-720・721	円形	24×21×17	3号溝と重複。
30	47		059・060、-699	円形	29×26×29	
31	47		056、-698・699	円形	24×21×22	
32	47		055・056、-697	楕円形	36×29×13	
33	47		061、-699・700	円形	36×33×16	
34	47		056、-698	円形	31×27×20	31号ピットの西側5cmに近接。
35	47		055・056、-698	不整円形	27×24×22	34号ピットの南側10cmに隣接。
36	47		056・057、-698	楕円形	26×22×24	34号ピットの北側30cmに隣接。北側に抜柱痕か。
37	47		058、-699	楕円形	29×21×16	
38	47		058、-694	円形	29×25×20	3号溝と重複。
39	47		057・058、-703	円形	27×27×14	
40	47	15⑨	058・059、-702・703	楕円形	24×21×27	
41	47		059、-703	円形	21×19×20・15	南隅に柱痕状の窪み。
42	47		060、-699	円形	24×21×33	
43	48		055・056、-702	円形	29×27×15	
44	48		056、-700	楕円形	26×21×15	
45	47		058、-696	円形	33×30×28	中層に礎盤石状の平坦な礫。
46	44	15⑩	078、-601	楕円形	36×30×21・16	南隅に柱痕状の窪み。
47	44・47		080、-596・597	楕円形	40×34×27・16	2基のピット重複の可能性。
48	44・47		080、-596	楕円形	27×21×14	
49	44・47		080、-597	円形	29×28×12	47号ピットの西側3cmに近接。
50	44・48		078、-597・598	円形	28×26×22・16	中央に柱痕状の窪み。
51	44・48		078、-597	円形	22×19×15	
52	44・48	15⑪	076、-598	円形	26×22×17	
53	44・48		073、-599	円形	18×17×14	
54	44・48		073、-598・599	円形	19×17×22	53号ピットの東側25cmに隣接。
55	44・48		072、-595	円形	25×24×20	
56	44・48		073、-595	円形	24×22×23	
57	44・48		074、-596	円形	27×24×15	北西壁に弱い稜。
58	44・48		079・080、-594・595	楕円形	36×28×21・7	
59	44・48		078、-595	楕円形	36×27×17	北壁は開き気味に開口し、2基のピット重複の可能性。
60	44・48		077、-592	楕円形	43×33×29	
61	44・48		073・074、-594	円形	27×26×21	
62	44・48		073、-593・594	円形	22×21×30	地山礫が覗く。
63	44・48		076、-593	円形	21×19×22	
64	44・48		075、-591・592	円形	28×25×27	
65	44・48		073、-591	円形	29×28×29	
66	44・48	15⑫	076・077、-588	楕円形	38×32×35	中層に大形礫あり。
68	44・48		073、-591・592	円形	25×24×33	
69	44・48		073、-591・592	楕円形	29×25×35	68号ピット南側7cmに近接。
70	44・48		067・068、-593	楕円形	27×21×12	
71	44・48		069、-586	楕円形	22×18×22	

第Ⅲ章 調査の内容(古墳時代以降)

No.	挿図	写真	位置	形状	長軸×短軸×深さ(cm)	備考(掘立柱建物は建物と略す)
72	45・49		070、-584	楕円形	28×22×28	
73	44・49		071、-585	楕円形	29×22×28	12号溝と重複。
74	44・49		072、-585・586	円形	22×18×30	73号ピット北側40cmに隣接。底面細く杭打設痕状。
75	45・49		073、-584	不整円形	41×37×34	
76	45・49	15⑬	073・074、-583・584	楕円形	42×33×32・21	259号ピットに近接・南隅に柱痕状の窪み。
77	45・49		077、-581	不整円形	38×34×31	
78	45・49		072、-581	不整円形	26×25×19・10	南西側に抜柱痕か。
79	45・49	15⑭	070、-582	円形	30×29×25・19	南隅に柱痕状の窪み。
80	45・49		077、-580	楕円形	37×32×25	
81	45・49	15⑮	073、-577	楕円形	36×32×27	南西側に抜柱痕か。
82	45・49		072、-575・576	円形	33×32×32・21	南隅に柱痕状の窪み。
83	45・47		073、-574	楕円形	28×22×21	
84	45・47		073、-573	円形	27×25×17	
85	45・49		076、-578・579	円形	26×25×27	257号ピットに近接。
86	44・49		076、-591	楕円形	44×38×31・9	2基のピット重複の可能性。中層に礎盤石状の礫あり。
87	45・48		076・077、-583	楕円形	52×29×15	攪乱の中にあり。底面平坦で土坑状。
88	44・48		074、-592・593	円形	33×30×16	30号土坑と重複。
89	49	16①	055・056、-679	円形	33×31×21	上層に平坦な礫。
90	49	16②	054、-677	楕円形	40×34×25	南西側に抜柱痕か。
91	47		057、-695	楕円形	32×28×16	3号溝と重複。
92	47		057、-695	円形	24×21×22	3号溝と重複。底面直上に円礫。
93	47	16③	056・0578、-695	円形	35×31×35	3号溝と重複。92号ピット南西側6cmに近接。
94	47	16④	056、-694	楕円形	27×23×15	
95	47		055・056、-694	円形	32×31×25	小礫の混入やや多い。94号ピット南西側15cmに隣接。
101	50・52	16⑤	075・076、-517	円形	37×33×59	3号建物区画内
103	50・52		075・076、-515・516	楕円形	54×34×28	3号建物区画内でP33に近接。2基のピット重複の可能性。
106	50・52	16⑥	075、-514	不整円形	35×33×57	3号建物区画内でP34に近接。
111	50・52		074・075、-514・515	円形	35×33×56	2号建物P2に近接。2・3号建物区画内。
113	50・52		074、-515・516	円形か	34×20×40	3号建物P40と重複。2・3号建物区画内。
114	50・52		073、-515・516	円形	29×26×41・30	2・3号建物区画内。二段底状。
117	50・52	16⑦	074、-517	楕円形か	(40)×34×42	3号建物区画内でP23と重複。
131	50・52		072、-515・516	楕円形	43×37×54・41	2・3号建物区画内でP47と重複。二段底状。
140	50	16⑧	074・075、-528・529	隅丸方形	63×58×16	西隅は調査区域外。底面広く土坑状。
148	50・52	16⑨	066・067、-514	円形	35×33×57	3号建物区画内でP47と重複。
151	50・52		067、-517	不整楕円形	34×28×35	176号ピットと重複。3号建物区画内。
162	50・52	16⑩	064、-516	円形	33×29×47	底面わずかに段底状。3号建物区画内。
164	50・52		064・065、-514・515	円形	39×33×56	3号建物P48に後出か。底面が南西方向にやや傾いて穿たれる。
167	51・52	16⑪	063、-517	円形	30×29×33	
173	51・52	16⑫	061、-517・518	不整円形	37×34×27	
176	50・52		067、-517	不整楕円形	43×42×21	151号ピットと重複。3号掘立柱建物区画
177	51・52		074・075、-512・513	楕円形	75×49×30	2号建物P3と重複。底面平坦で土坑状。
178	45・49	16⑬	065、-578	円形	32×30×26	
179	45・49		065、-580	円形	33×29×32	断面漏斗状に上面が開く。
180	45・50		065、-581・582	円形	33×31×51	181号ピットと重複。
181	45・49	16⑭	065・066、-581・582	楕円形	(51)×34×27	180号ピットと重複。
182	45・49		063、-583	円形	34×31×32	
183	44・49		065、-587	楕円形	46×37×41・31	南隅に柱痕状の窪み。
184	50	16⑮	053・054、-584	楕円形	38×32×28・18	東隅に柱痕状の窪み。40号土坑と接する。
185	45・50		064、-580	楕円形	32×23×21	37号土坑と重複。
186	45・50		064、-580・581	円形	34×32×42	37号土坑と重複。
189	50・52		074、-515	不整楕円形	31×(25)×33	3号建物P40と重複。
191	50・70		055・056、-587	円形	36×32×25	15号溝と重複。
192	50・70		056、-587・588	円形	33×32×30	14・15号溝と重複。
194	51・52		061、-515	楕円形	32×25×23	3号建物P56と重複。
195	51・52		061、-517	楕円形	37×31×28・9	2基のピットの重複か。3号建物P57に後出か。
196			057、-714	円形か	29×(16)×22	南側は調査区外。
197			057、-712	円形か	35×(21)×22	南側は調査区外。
200	44・47		080、-597	楕円形	24×19×10	
201	44		077、-598	円形	24×21×12	
202	44		075、-598・599	円形	28×25×16	
203	44		076、-597	円形	25×23×12	
204	44		074、-597	円形	28×26×20	
205	44		072、-598	楕円形	30×26×24	
206	44		071、-597	楕円形	33×29×13	
207	44		079、-593・594	円形	25×22×9	
208	44		079、-590・591	円形	18×16×7	小ピットで杭打設痕の可能性。
209	44		080、-586・587	円形	31×30×12	32号土坑と重複。
210	44		079、-587・588	楕円形	31×26×21	
211	44		078・079、-588	円形	20×18×11	底面細く杭打設痕状。

No.	挿図	写真	位置	形状	長軸×短軸×深さ(cm)	備考 (掘立柱建物は建物と略す)
212	44		077、-590	円形	26×25×9	
213	44		077、-587・588	楕円形	[44]×25×25	214号ピットと重複。
214	44		077、-587	楕円形	35×26×21	213号ピットと重複。
215	44		076、-590	円形	27×26×7	215号ピット東側25cmに隣接。
216	48		075、-592	楕円形	40×33×27・20	64号ピット西側20cmに隣接。南隅に柱痕状の窪み。
217	44		075、-590	楕円形	43×32×27	東側に柱痕状の窪み。
218	44		074・075、-590・591	不整楕円形	41×33×11	
219	44		075、-592・593	円形	33×32×7	
220	44		074、-592・593	不整楕円形	42×37×8	88号ピット北側10cm、219号ピット南側20cmに隣接。
221	44・48		073、-593	円形	28×24×12	61号ピットに近接。
222	44・48		073、-593	楕円形	34×28×14	30号土坑南西側10cmに隣接。
223	44		072、-596	円形	22×19×26	
224	44		071、-588	長円形	59×27×28	
225	44		067・068、-590・591	円形	22×20×8	226号ピットに近接。
226	44		067、-591	円形	17×16×10	225号ピットに近接。
227	44		067・068、-590	不整楕円形	33×29×12	
228	44		067、-588	楕円形	38×23×10	
229			054、-596	円形	23×20×9	
230			053・054、-596	円形	22×20×15	
231			053、-596	楕円形	28×23×10	232号ピットに近接。
232			053、-595・596	楕円形	45×36×6	231号ピットに近接。
233			052・053、-594・595	円形	24×22×10	
234			052、-594	円形	46×44×8	
235	70		053・054、-587・588	不整楕円形	64×55×16	15号溝と重複。
236	44		080、-585・586	円形	33×30×9	
237	44		079・080、-585・586	楕円形	39×35×8	
238	45		081、-581	円形	42×36×14	
239	45		081・082、-578	円形	25×24×18	
240	45		080、-581・582	円形	25×25×18	底面細く杭打設痕状。
241	45		080、-580	円形	38×35×9	
242	45		079、-584	円形	28×27×21	
243	45		078・079、-584	円形	28×25×17	
244	45		078、-583	円形	32×28×30	
245	45		079、-582	楕円形	42×35×21	2基のピットの重複か。246号ピットに近接。
246	45		079、-581	円形	31×28×19	石器あり。245号ピットに近接。
247	45		079、-580	楕円形	21×17×20	底面細く杭打設痕状。
248	45		078、-580	円形	25×24×12	
249	45		078、-578	円形	33×30×28	
250	45		077・078、-583	楕円形	25×20×12	
251	44		076・077、-586	円形	30×29×18	
252	44		077、-585	楕円形	35×31×18	253号ピット北側に接する。
253	44		077、-585	円形	30×28×21	252号ピットと接する。254号ピットに近接。
254	44		076、-585	円形	24×22×9	253号ピットに近接。
255	45		077、-584	円形	25×22×17	攪乱下で確認。
256	45		077、-577	円形	33×31×15	
257	45・49		076、-578	円形	21×19×29	85号ピット北東側8cmに近接。
258	45		075、-578	円形	24×23×17	
259	45・49		073・074、-584	円形	23×22×11	76号ピット西側3cmに近接。
260	45		074、-583	円形	23×22×23	76号ピット東側8cmに近接。
261	45		074、-578・579	円形	22×20×19	
262	45		072、-583	楕円形	40×32×7	
263	45		082、-576	円形か	58×(33)×17	北側は調査区外。
264	45		082、-574・575	円形	38×35×14	
265	45		082・083、-572・573	円形か	51×(36)×8	北側は調査区外。
266	45		081、-571	不整楕円形	46×40×17	
267	45		081、-570	円形	23×21×10	
268	45		081、-569	円形	21×19×8	
269	45		081・082、-568・569	円形	34×33×12	
270	45		079、-573・574	楕円形	24×19×15	
271	45		079、-571	円形	17×16×14	
272	45		078・079、-571	不整楕円形	30×27×19	南東隅に柱痕状の窪み。
273	45		078、-570・571	不整楕円形	42×30×14	
274	45		077、-570	楕円形	29×23×16	275号ピットに近接。
275	45		077、-570	円形	22×21×16	274号ピットに近接。
276	45		076、-575・576	不整円形	37×31×31	
277	45		073、-576	楕円形か	41×(26)×27	東側は攪乱により不明。
278	45		073、-575	円形か	39×(20)×19	西側は攪乱により不明。
279	45		073、-570・571	楕円形	33×29×20	
280	45		073、-570	楕円形	38×30×31	

第三章 調査の内容(古墳時代以降)

No.	挿図	写真	位置	形状	長軸×短軸×深さ(cm)	備考 (掘立柱建物は建物と略す)
281	45		072、-570	円形	26×24×8	282号ピットに近接。
282	45		072、-570	円形	26×23×26	281号ピットに近接。
283	45		071・072、-573	楕円形	27×21×15	
284	45		071、-574	楕円形	27×22×13	12号溝北側に近接。
285	45		070・071、-570	楕円形	30×26×17	12号溝と重複。
286	70		057、-570	円形	27×24×18	14号溝底面中央に穿たれる。
287	50		074、-528・529	円形	36×35×10	140号ピット南側5cmに近接。
288			071・072、-526・527	楕円形	31×26×7	
289			067、-529	不整楕円形	44×35×20	
290			066・067、-528・529	不整楕円形	33×27×10	3号建物K列の西側延長上約5mに位置。
291			065、-529	不整円形	32×31×13	292号ピット北西側に近接。
292			064・065、-528・529	円形	24×21×7	291号ピットに近接。
293			064・065、-528	円形	22×20×11	
294			064、-529・530	円形か	40×(26)×7	西側は調査区外。
295			063、-529	不整円形	31×27×11	
296			060、-526・527	隅丸方形	44×35×9	
297			059・060、-526・527	円形	30×29×11	298号ピット西側に近接。
298			059・060、-526	円形	32×31×12	297号ピットに近接。
299			059・060、-525	隅丸方形	32×31×6	
300			060、-525	隅丸方形	32×30×10	
301			058、-714	隅丸方形	42×37×27	

5 土坑

本遺跡では40基の土坑を調査した。調査段階では43まで番号を付けたが、このうち3基を整理段階で井戸とし、欠番は埋めなかった。土坑の分布は1区西側と5区の調査範囲両隅を除く部分に広く散在している。これらを第53～56図に示し、出土遺物を一括して第57図に示した。また、個別の内容を表5に示した。

特筆される土坑には3号土坑と35号土坑がある。3号土坑は馬頭骨を出土するものであるが、規模から手足を縛らないと体全体を埋葬するのは難しい大きさである。35号土坑は焼土・炭化物粒を埋没土とする土坑で、人骨と思われる焼骨片が出土している。火葬遺構と思われるが、送風口などの施設は確認できない。いずれも中世の施設と思われるが、時期を決定する資料に欠く。

そのほか39号土坑は上面の規模・形態が井戸と近似するものだが、深度には乏しかった。4号土坑は陥穴と思われる施設で、時期不明の関製品以外、遺物を伴わない。まとまった遺物を出土するのは18号土坑のみで、縄文時代の列石内側の住居の確認できない一画で、平安時代の羽釜・鉄器を伴っている。

埋没土の表記には、以下のような土坑独自の共通記号を付した。それ以外の土層については個別土層断面図下に記した。

(土色・土質による基本分類)

- A：にぶい褐7.5YR5/3周辺土色の粘性土
 - B：褐7.5YR4/3周辺土色の粘性土
 - C：灰褐7.5YR4/2周辺土色の弱粘性土
 - D：暗褐7.5YR3/4周辺土色の弱粘性土
 - E：黒褐7.5YR2/2周辺土色の非粘性土
 - F：にぶい黄褐10YR5/4周辺土色の粘性土
- 砂質土の場合、記号に'を加えた。

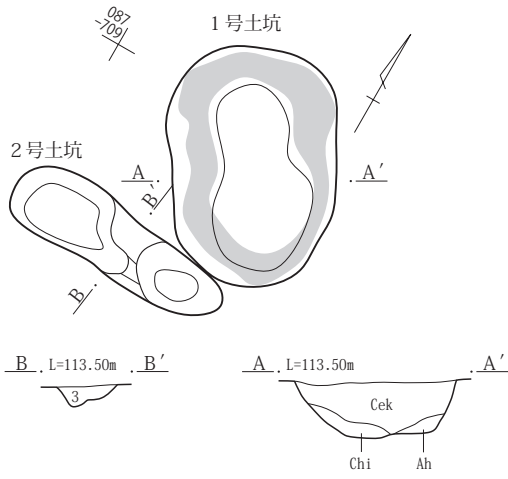
(しまりなど付帯項目)

- 1：しまり強い層
 - 2：しまりやや強い層
 - 3：しまりやや弱い層
 - 4：ブロック状・粒状の混合土層
- (少量混入物の追加記載)

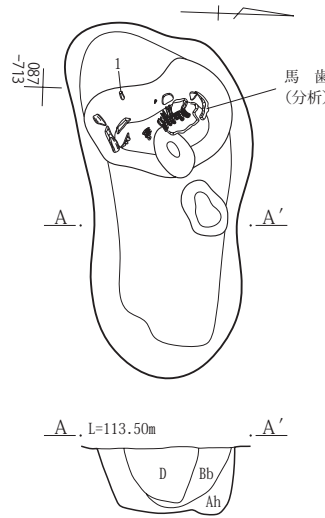
- a：白色・淡黄色の給源不明軽石
- b：黄橙色土ブロック
- c：黄橙色土粒
- d：褐色粘性土ブロック
- e：砂粒
- f：細礫(径3mm大)
- g：小礫(径10mm大)
- h：焼土粒
- i：炭化物粒

各アルファベットに対し、混入物が多量の場合はアンダーバー、微量の場合は'を付けた。

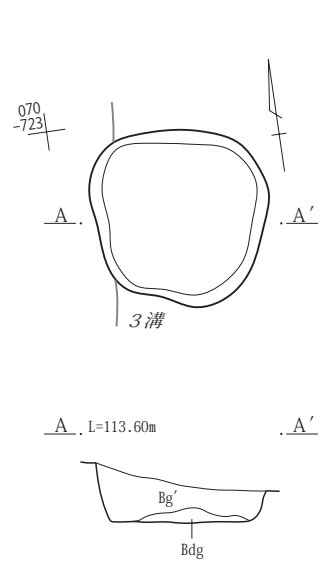
1·2号土坑



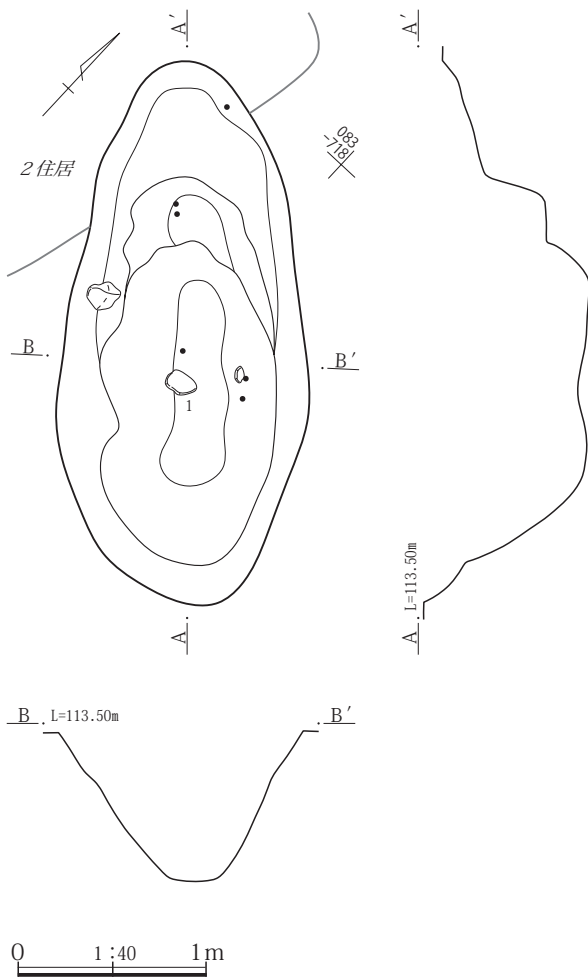
3号土坑



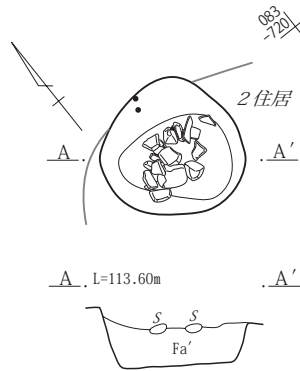
5号土坑



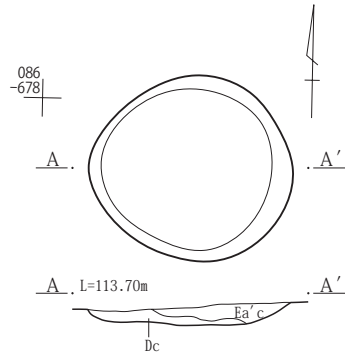
4号土坑



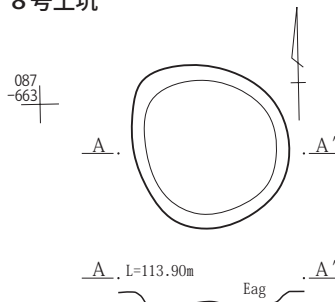
6号土坑



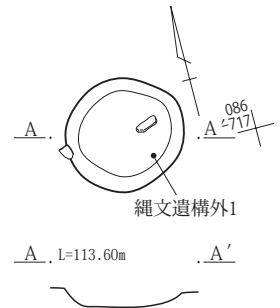
7号土坑



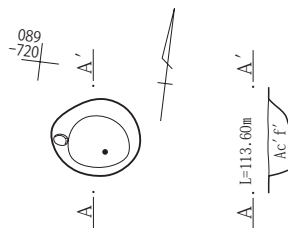
8号土坑



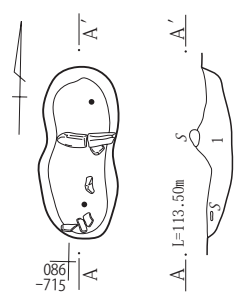
11号土坑



9号土坑

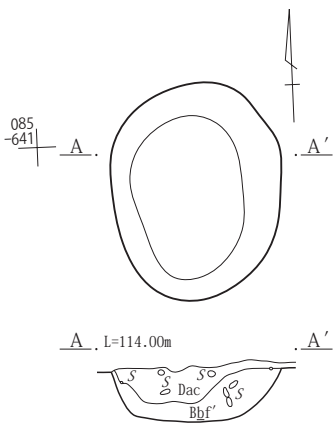


10号土坑

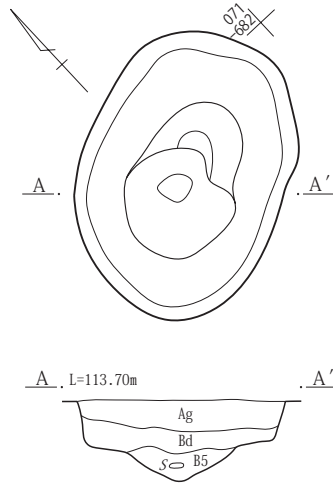


第53图 土坑(1)

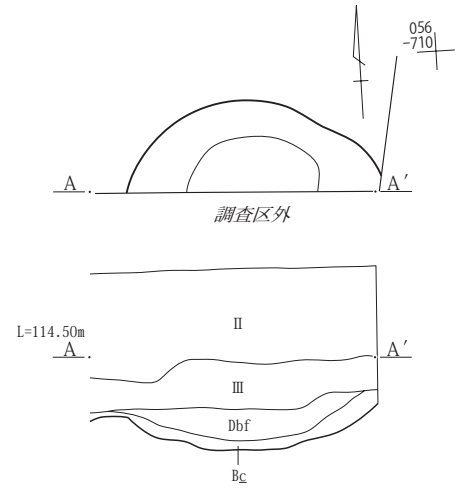
12号土坑



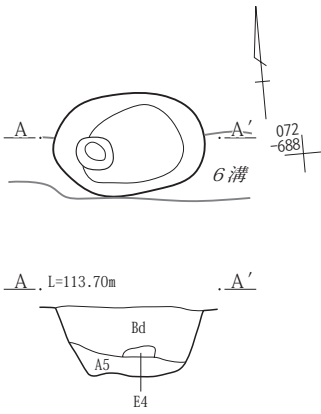
13号土坑



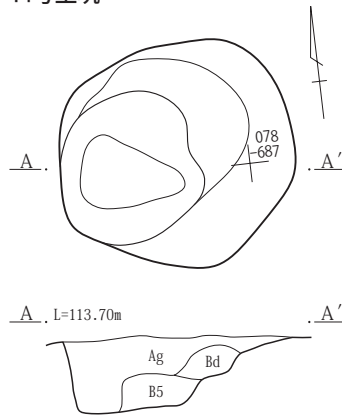
17号土坑



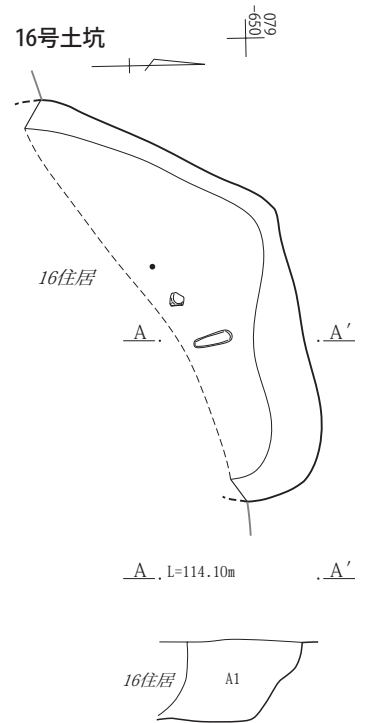
15号土坑



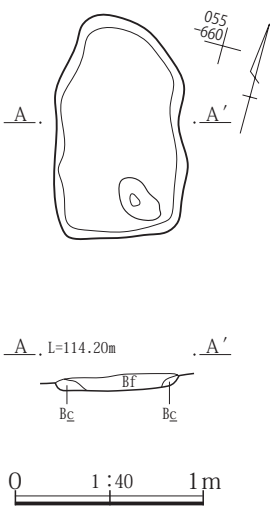
14号土坑



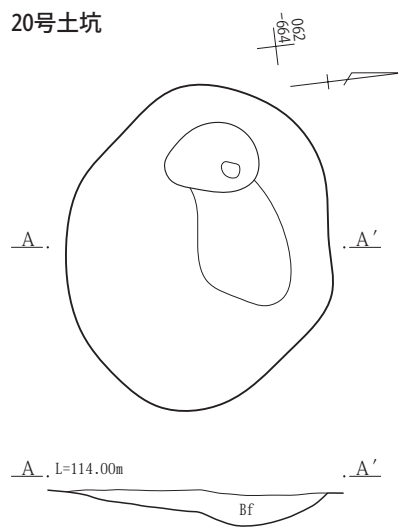
16号土坑



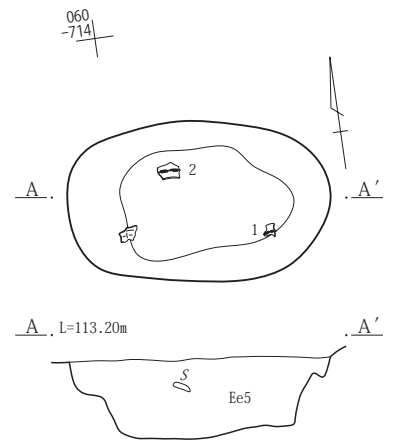
19号土坑



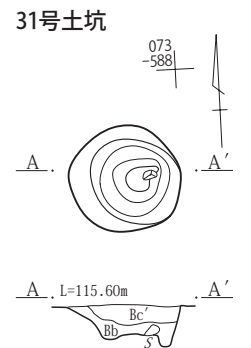
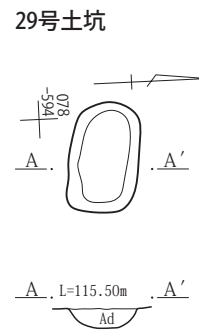
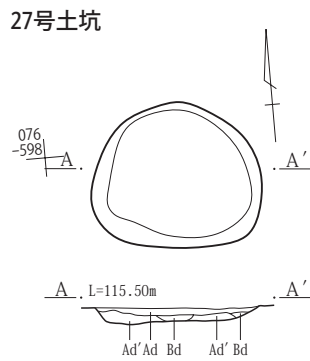
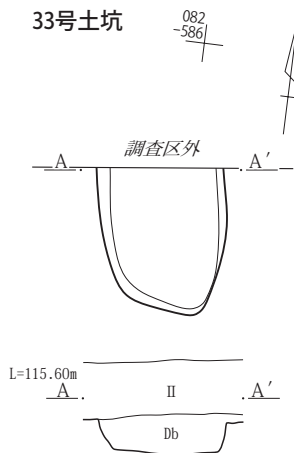
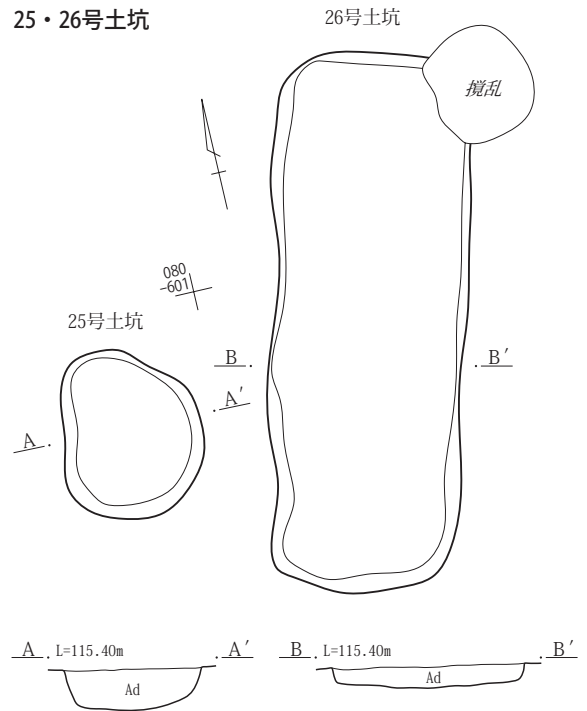
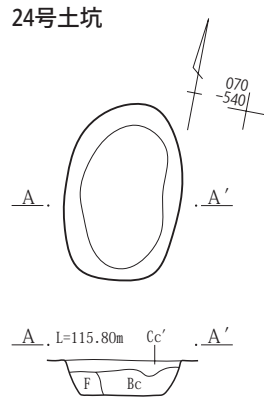
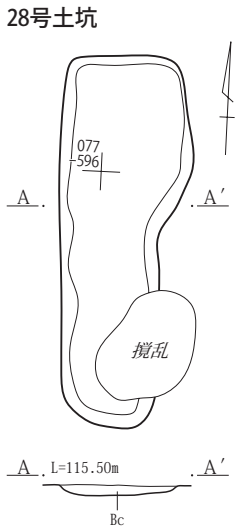
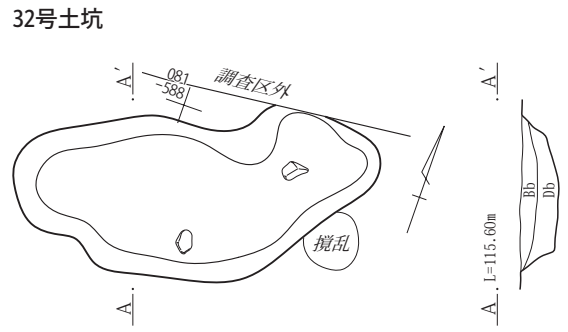
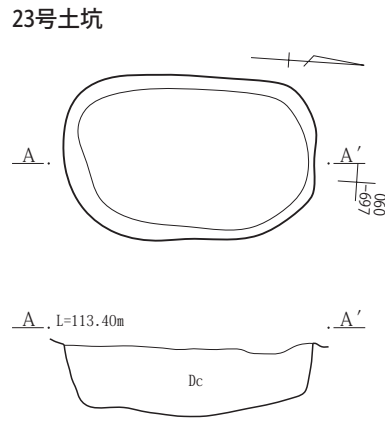
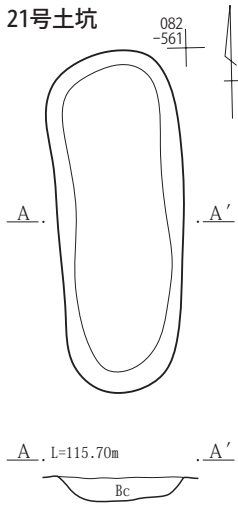
20号土坑



18号土坑

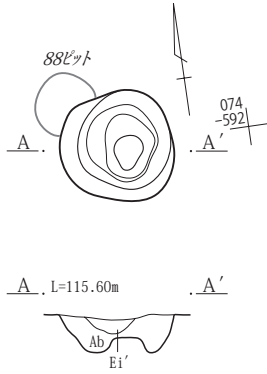


第54図 土坑(2)

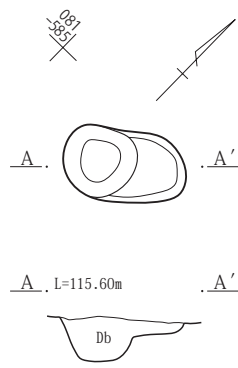


第55图 土坑(3)

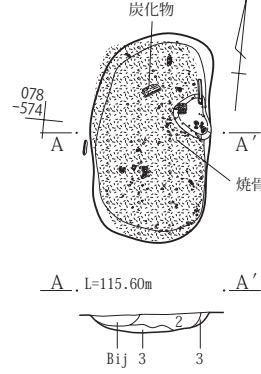
30号土坑



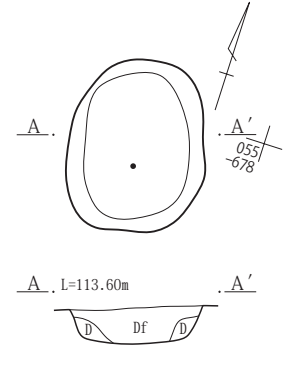
34号土坑



35号土坑



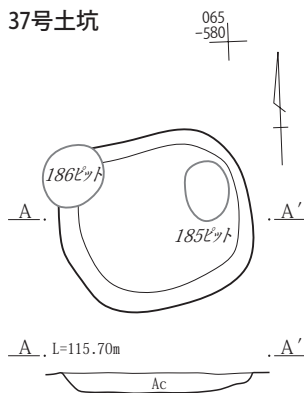
36号土坑



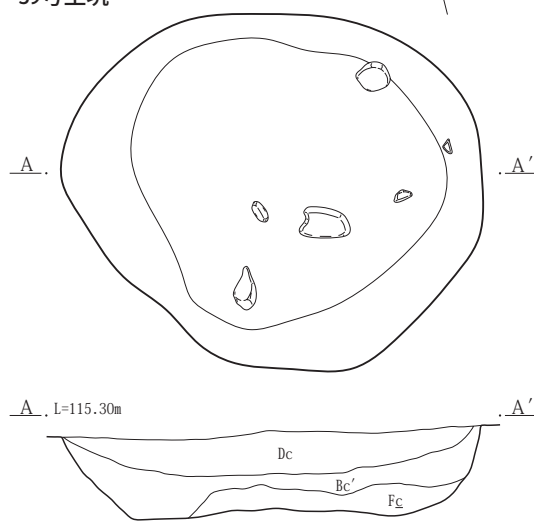
35号土坑土層説明

- 2 暗赤褐(5YR3/2)ややしまり欠く非粘性土で焼土粒・炭化物粒を不均等に含む。焼骨片多数見られる。
- 3 黒褐(5YR2/2)炭化物粒多く、細かな炭化材も混じる。焼土粒は少ない。

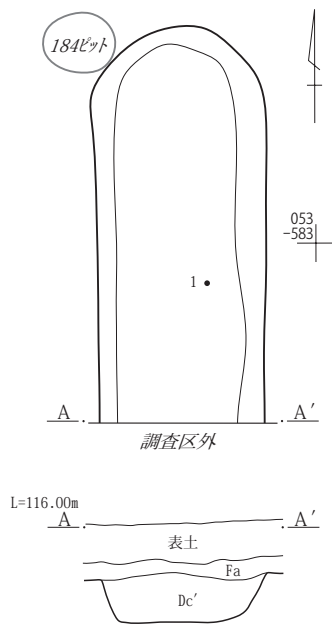
37号土坑



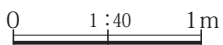
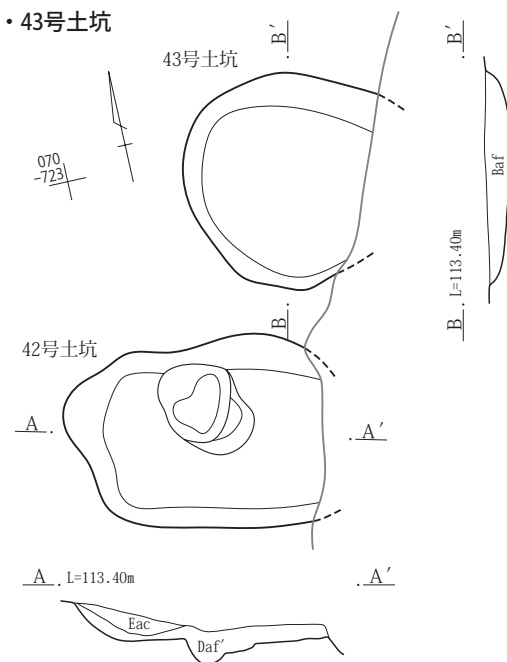
39号土坑



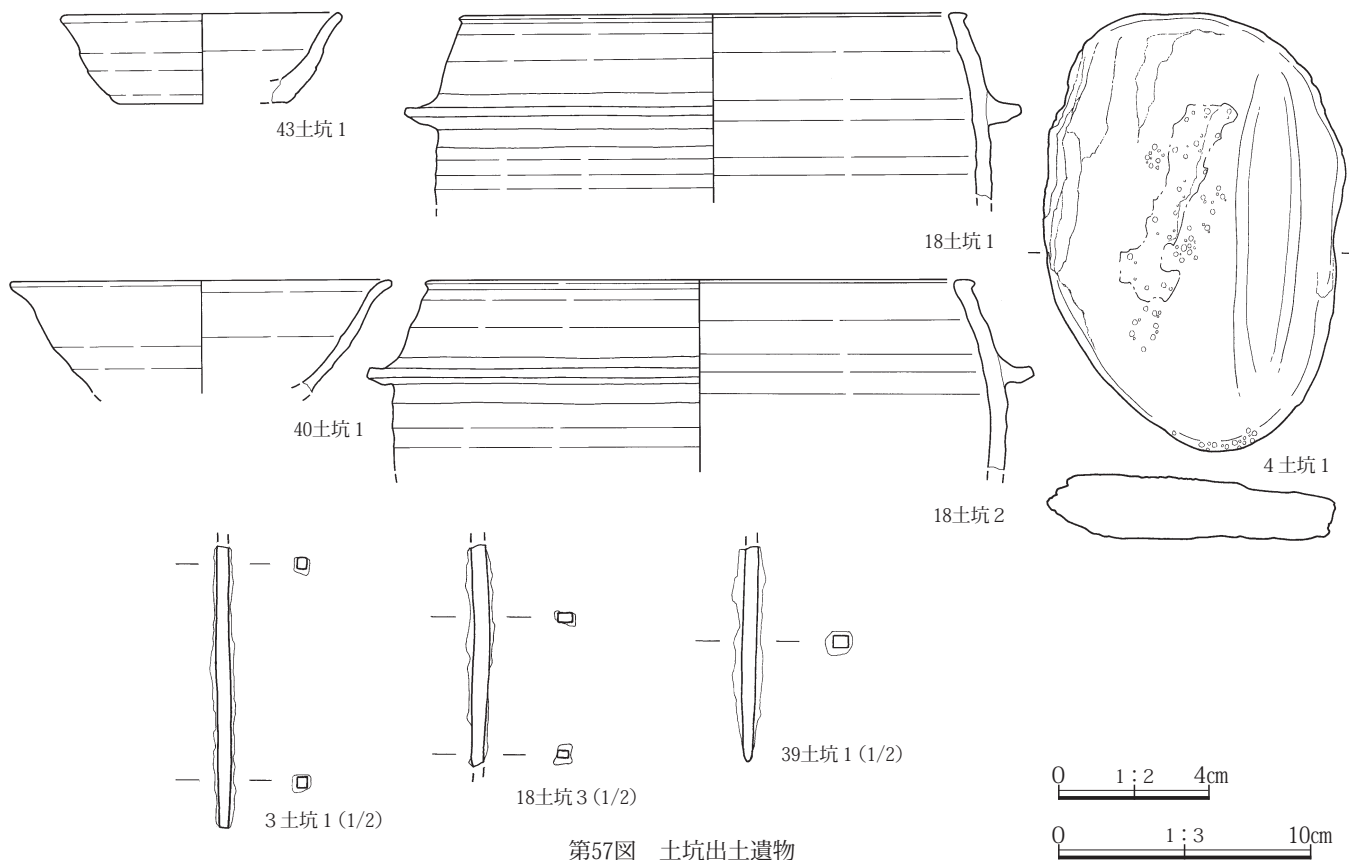
40号土坑



42・43号土坑



第56図 土坑(4)



第57図 土坑出土遺物

表5 土坑一覽 (第53~57 図、PL.17~19、34・46) (単位:cm)

No.	挿図	位置(X、-Y)	長軸×短軸×深さ	遺物と埋没土	備考
	写真	形状(分類)	軸方向		
1	図53 PL.17-①	087・088、-707・708 楕円形	127×90×33 N-31° W	土師器3片・須恵器1片・灰釉1片	2号土坑と接する。
2	図53 PL.17-②	086・087、-707~709 不整隅丸長方形	126×38×14 N-88° W		1号土坑と接する。底面不整で重複ピットの可能性。
3	図53・57 PL.17-③・④、 34・46	087・088、-711~713 不整楕円形	186×92×47 N-84° E	鉄器・1土師器3片・須恵器1片 下層に焼土散見。	馬頭骨あり(本文122・123頁、PL.4)。 近世以前。
4	図53・57 PL.17-⑤、34	079~081、-716~719 楕円形	287×133×86 N-43° W	不明石製品・1 縄文土器の微細片。	陥穴状。2号住居と重複。
5	図53 PL.17-⑥	067・068、-721・722 隅丸方形	102×98×33 N-41° W		列石上の窪みと重複。
6	図53 PL.17-⑦・⑧	082・083、-720・721 不整円形	(77)×73×31 -	礫の混入多い。	2号住居と重複。
7	図53 PL.17-⑨	085・086、-676・677 円形	108×99×12 -		
8	図53 PL.17-⑩	086・087、-661・662 円形	92×81×10 -		地山礫層を掘り込む。
9	図53 PL.17-⑪	087、-720 円形	47×42×13 N-86° W	土師器杯4片・礫の混入やや多い。	
10	図53 PL.17-⑫	086・087、-714・715 不整双円形	92×40×16 N-2° W	微細な土器片・上層に礫の混入やや多い。	6号住居と重複。
11	図53 PL.17-⑬	085・086、-717 円形	64×59×10 -	縄文遺構外深鉢・1 小礫。	6号住居と重複。
12	図54 PL.17-⑭・⑮	084・085、-639・640 楕円形	116×91×30 N-5° E	中層に小礫。	
13	図54 PL.18-①	070・071、-682・683 楕円形	(154)×113×43 N-53° E		
14	図54 PL.18-②	077・078、-686・687 不整円形	131×122×40 N-56° E		

第三章 調査の内容(古墳時代以降)

No.	挿図	位置(X、-Y)	長軸×短軸×深さ	遺物と埋没土	備考
	写真	形状(分類)	軸方向		
15	図54 PL.18-③	071・072、-688・689 楕円形	70×54×40 N-89° W		6号溝に前出か。底面西隅に深さ4cmの窪み。
16	図54 PL.18-④	077~079、-647~649 台形状か	[247]×[72]×41 N-60° E	土師器9片・須恵器2片	16号住居に前出。南半部不明。竪穴状遺構の可能性。
17	図54 PL.18-⑤	057、-710・711 円形か	[133]×[49]×23 N-87° W	しまり欠き、近代以降の遺構か?	東・南側は調査区外で全容不明。
18	図54・57 PL.18-⑥、34	058・059、-712~714 楕円形	139×85×44 N-87° W	羽釜. 1. 2 鉄器. 3 土師器3片・須恵器3片 しまり欠き、近代以降の遺構か?	1区縄文列石内側。地山礫の多い地点を掘り窪める。
19	図54 PL.18-⑦	053~055、-660・661 不整長方形	118×71×17 N-20° W		南隅に深さ10cmの窪み。
20	図54 PL.18-⑧	060~062、-662・663 不整円形	172×146×26 N-66° W		底面皿底状の不明瞭な窪み。
21	図55 PL.18-⑨	080・081、-561 隅丸長方形	180×69×14 N-2° W		
23	図55 PL.18-⑩	057・058、-696・697 隅丸長方形	132×88×39 N-6° W		2区縄文列石内側。
24	図55 PL.18-⑪	068・069、-540 楕円形	94×62×18 N-4° W		
25	図55 PL.18-⑫・⑬	078・079、-601 不整楕円形	93×79×24 N-16° W		26号土坑西側40cmに近接。
26	図55 PL.18-⑭・⑮	078~081、-599・600 長方形	287×106×14 N-16° E		北東隅は攪乱により不明。底面平坦。
27	図55 PL.18-⑯	075・076、-596・597 不整円形	141×128×9 N-70° E		
28	図55 PL.19-②	075~077、-595・596 不整長方形	196×71×8 N-1° E		南東一部攪乱にかかる。
29	図55 PL.19-③	078、-593・594 隅丸長方形	58×38×10 N-82° W		
30	図56 PL.19-④	073・074、-592・593 円形	63×61×20 -	下層に炭化物粒散見。	88号ピットと重複。
31	図55 PL.19-⑤・⑥	072、-588 円形	59×57×20 -	小礫	底面不整。
32	図55 PL.19-⑦	080・081、-586~588 不整形	194×87×21 N-65° E	礫	北側は調査区外で全容不明。複数の重複土坑の可能性。
33	図55 PL.19-⑧	080・081、-585・586 隅丸方形か	[85]×69×19 N-9° W		北側は調査区外。
34	図56 PL.19-⑨	080・081、-584 双円形	65×38×22 N-52° E		2基のピット状遺構重複の可能性。
35	図56 PL.19-⑩、46	077・078、-573 隅丸方形	110×64×10 N-1° W	焼骨 焼土・炭化物・灰	中世の火葬土坑か。
36	図56 PL.19-⑪	054・055、-678 隅丸方形	92×73×20 N-18° W	須恵器1片	
37	図56 PL.19-⑫	063・064、-579・580 隅丸方形	(108)×105×11 N-57° W		185・186号ピットと重複。
39	図56・57 PL.19-⑬・⑭、 34	070~072、-610~612 不整円形	225×183×44 N-65° W	須恵器1片・礫やや多い。	規模・形態が井戸に近似。
40	図56・57 PL.19-⑮	052~054、-583・584 隅丸方形	[209]×92×34 N-2° E	須恵器杯. 1 須恵器壺甕類3片	南側は調査区外。184号ピットと接する。
42	図56	067~069、-721~723 不整長方形か	(153)×103×33 N-73° W	土師器2片	縄文列石上の窪みと重複。43号土坑の南西20cmに近接。
43	図56・57	069・070、-721・722 不整円形か	(125)×110×16 N-79° E	土師器3片 小礫の混入やや多い。	縄文列石上の窪みと重複。東隅不明瞭。

6 溝

本遺跡では、1区から4区までの範囲で14条の溝を調査した。溝番号は調査段階で15まで付けたが、縄文時代の配石上の窪みにあたる3号溝が欠番になっている。また、10号溝・12号溝は3・4区の両区を繋いで確認されている。

中世方形館の区画溝のような4号溝、9号溝、11・14号溝や、畠の耕作痕のような5～7号溝など形状や規模は多様であるが、すべての溝をここで一括して扱った。

方形区画を作ると思われる溝のうち、2区4号溝は南辺の長さ60m近い本遺跡最長の規模で、ほぼ直角に屈曲する南西隅部分が確認できる。また11号溝と14号溝も直角に繋がっており、区画の南東隅部分にあたる可能性がある。9号溝は幅・深さが本遺跡最大の溝であるが、溝両端が確認できない。この溝は東側へ広がり、大型建物である5区3号掘立柱建物を取り囲む大きな区画を作る溝になる可能性がある。これらの溝は中世の『塩川の砦』推定地付近にあり、『砦』に伴う施設となると推定されるが、全容は把握できなかった。2区と3区、および3区と4区を区切る現道下に、屈曲した溝延長部分が隠れているようにも見える。中世の区画が現代の地割に残されている可能性がある。

溝は出土遺物に乏しく、時期を推定できる溝は中世の11・14号溝などわずかであった。

1号溝(第59図 PL.20-①)

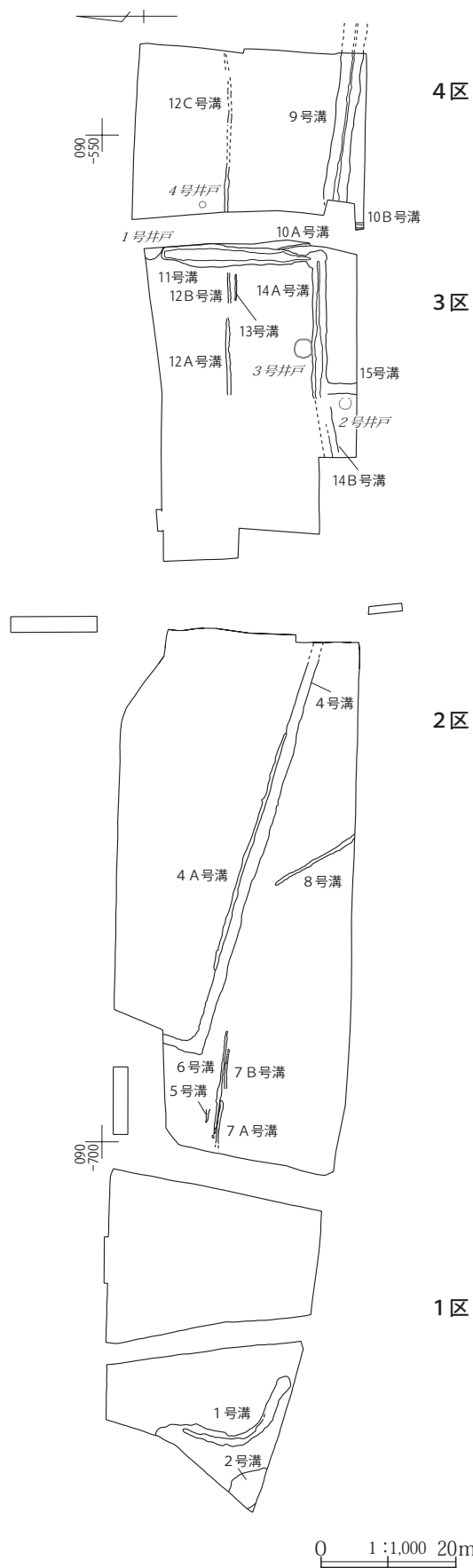
1区西隅の西側へ下がる傾斜面に、段差面直下を区切るように巡っている。幅広の長い弧状の溝内に、細く短い溝が重複してできた溝である。細い3箇所を北側より1A号溝・1B号溝・1C号溝とし、本文ではA溝・B溝・C溝と略した。溝東側では、段差と溝上端が一体化して区別できない部分がある。南側の段差は不明瞭になり、溝も確認できない。北側の段差は明瞭だが、A溝北端以北では溝は巡っていないようだ。

位置 南隅062、-735 北隅077、-743グリッド

(A溝)全体の北隅にある。

規模 長さ7.2m 幅52～67×深さ7～16cm

形状 細かな蛇行があるが、北隅で段差の湾曲に沿わず



第58図 溝配置図

に東側へ向かって傾斜している。底面レベルはほぼ水平で一定している。

方向 N-14° E

(B溝) A溝とC溝の間にある。

規模 残存長さ7.4m 幅82~108×深さ9~12cm

形状 北側はA溝に隠れて西隅周辺しか確認できない。他の2条の溝に比べ幅太であるが深度に乏しい。底面は波状の凹凸があり、全体では北側へ低く傾斜し南隅と8cmの比高差がある。

方向 N-5° E

(C溝) B溝南隅から南東方向へ向かっている。

規模 長さ4.9m 幅44~57×深さ5~16cm

形状 中央付近で小さな屈曲があるが、比較的直線的な溝である。底面はほぼ均等に北側へ低く傾斜し、南隅と28cmの傾斜がある。

方向 北側：N-32° W 南側：N-53° W

(1号溝全体)北半部は等高線に沿うような段差面となっているが、南半は傾斜面を削り込んで窪みが作られており、人為的な開削面上に穿たれた溝である。

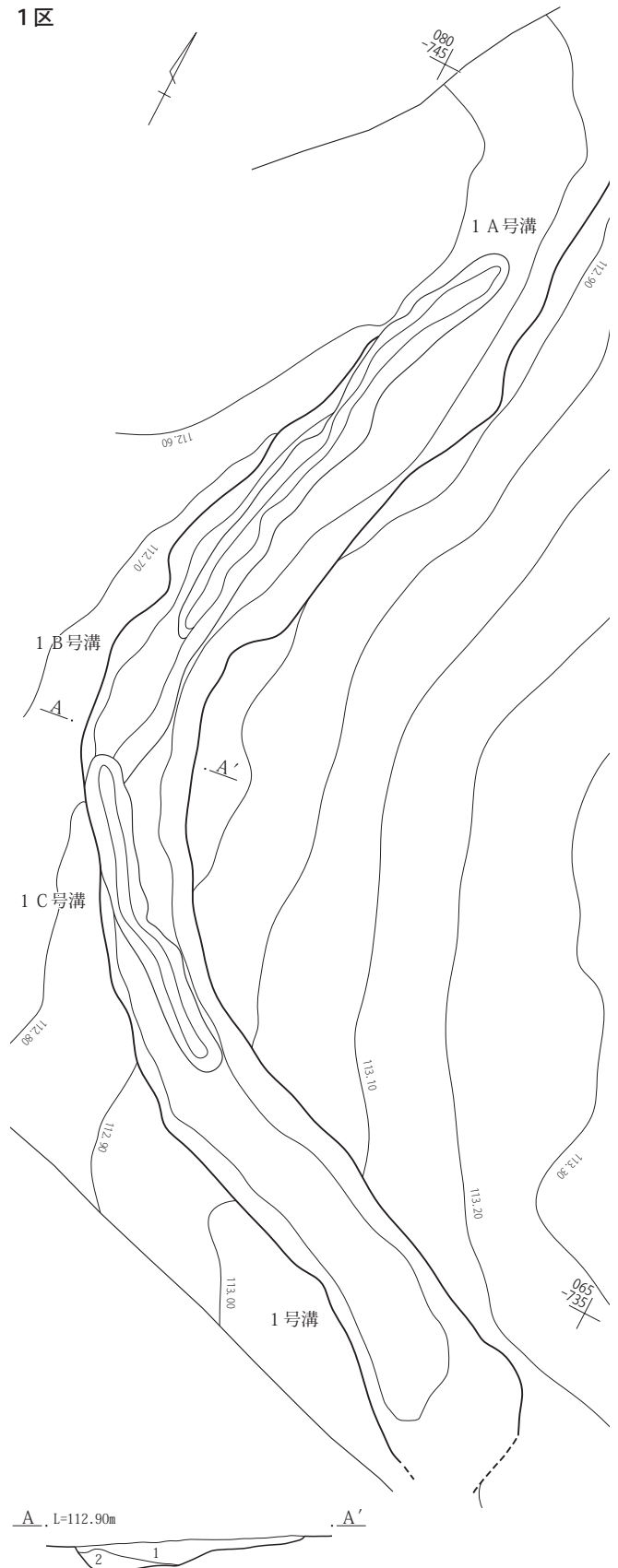
規模 長さ20.1m 幅135~186×深さ7~28cm

形状 段差に沿って弧を描くように湾曲している。浅い溝だが幅は比較的一定している。底面は比較的平坦で北側へ低く傾斜し、南隅と36cmの比高差がある。

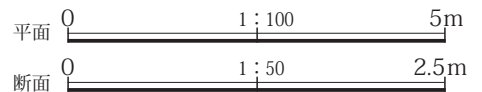
遺物 図示できる遺物の出土はなかった。上面から土師器・須恵器片6片、中世と思われる土器2片、近世の陶器1片、近現代の瓦3片など少量の遺物がみられるが、本溝の時期を確定できる資料は得られていない。

備考 全体にも、3条の小溝のいずれにも水流の痕跡はない。根切りの溝としては深度に欠けている。地境的な溝と思われ、大沢川沿いの通路として使われた可能性もあるが、顕著な踏み固めは確認できない。埋没土はしまりに欠き、近世以降の施設と思われる。

1区



- 1号溝土層説明
- 1 にぶい褐(7.5YR 5/3)砂礫・橙色土粒をわずかに含む粗粒土でややしまり欠く。
 - 2 にぶい橙(7.5YR 7/4)砂礫の混入やや多い粗粒土。



第59図 1A・B・C号溝

2号溝(第60図 PL.20-②、34 遺物観察表141頁)

1区西隅の大沢川縁に近い平坦面にある。東側を除く三方を調査区境に囲まれ全容は不明である。

位置 南隅065、-748 北隅071、-752グリッド

規模 長さ5.6×幅4.0・4.9m 深さ27cm

形状 東辺にごく緩やかな段差が見られる。調査範囲では東西各辺とも直線的で、東辺は調査区境付近で内側へ屈曲している。底面は皿底状に中央付近が窪み、壁直下と10cm前後の比高差がある。また、全体では底面は東から西へ、南から北へそれぞれ低く傾斜している。

方向 N-25° W

遺物 埋没土中より須恵器甕1を出土している。他にも

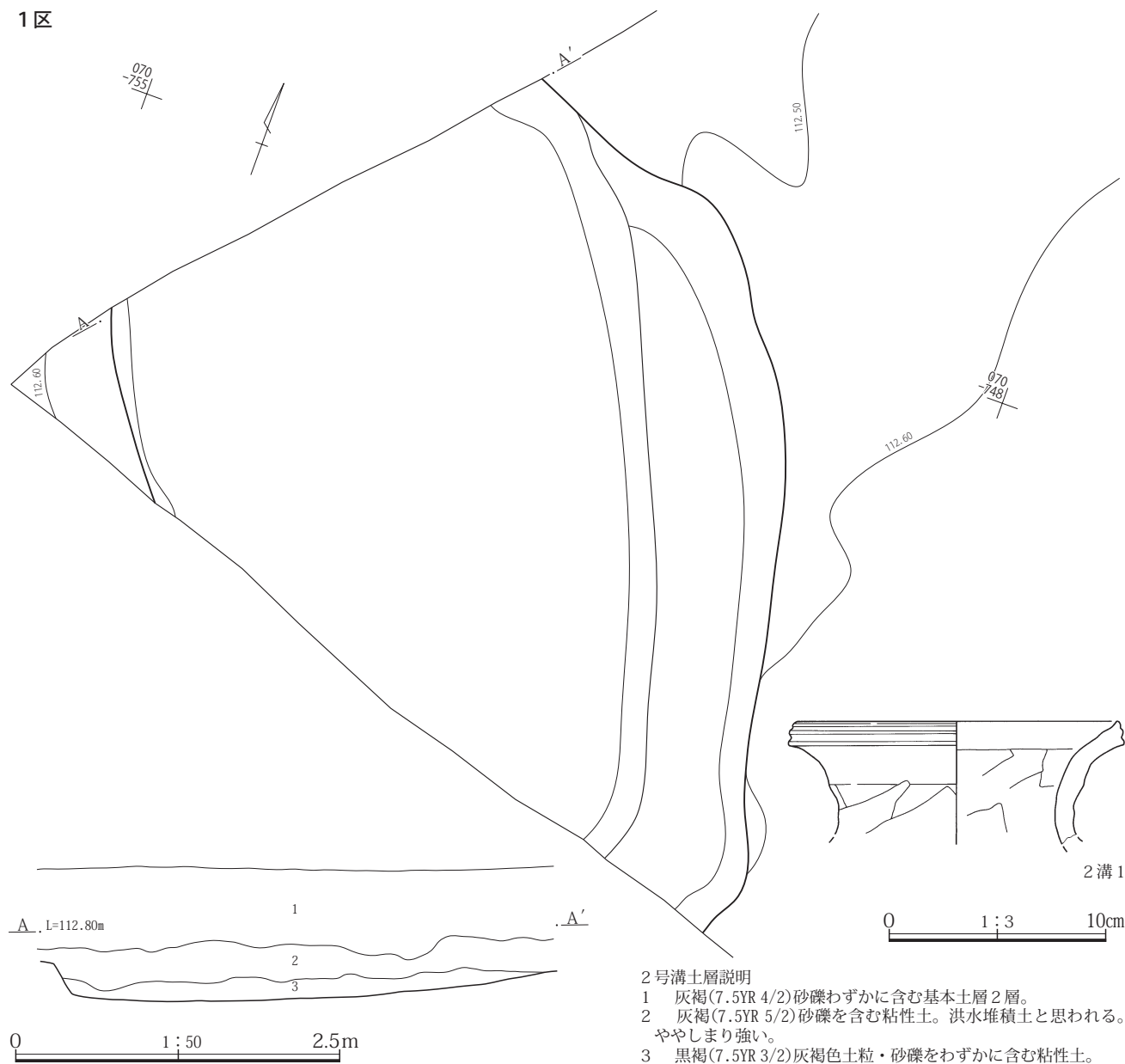
須恵器片が4片出土しているが、本溝の時期を確定する資料ではない。

備考 確認できた範囲のみでは住居や竪穴状遺構とすることも可能な規模で底面も平坦であるが、占地および底面の様子や埋没土から溝として扱った不明瞭な遺構である。

4号溝(第61図 PL.20-③~⑥、34 遺物観察表141頁)

2区中央を東西に横切る長い溝で、西隅で北側へ直角に屈曲している。本文では屈曲部を挟んで南溝・西溝と分けて呼称した。東隅は広い攪乱・西隅は調査区境に達して全容を把握できていない。南溝では上面まで埋没し

1区



第60図 2号溝と出土遺物

第Ⅲ章 調査の内容(古墳時代以降)

た後、一部北壁外まで浅い溝を掘り直し、多量の礫を埋め戻している。この部分を4 A号溝として併せて説明を加える。本文中ではA溝と略した。

位置 東隅058、-627 屈曲部分 075、-686 北隅684、-080グリッド

規模 西溝：長さ6.3m 幅1.3m 深さ29~35cm

南溝：長さ62.3m 幅1.6~1.9m 深さ26~54cm

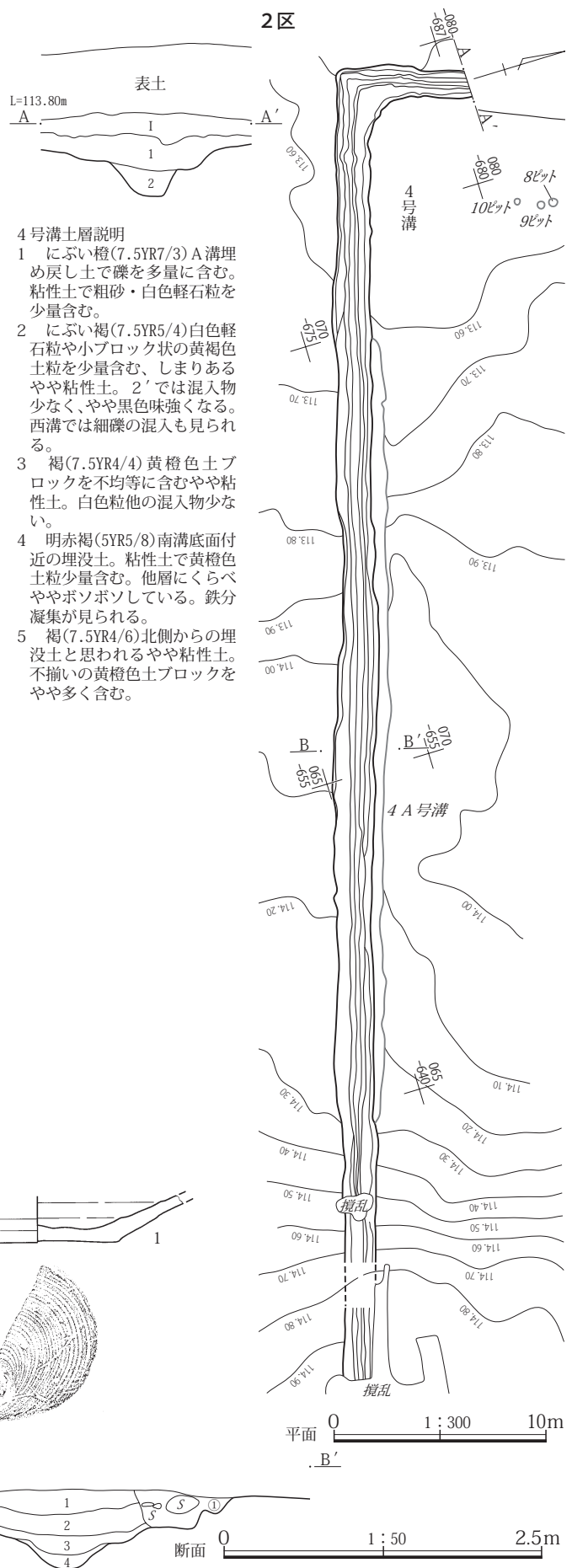
形状 直線的で屈曲部分も直角に曲がる整った形状の溝であるが、屈曲部分を境に西溝は幅をやや減じている。土層断面の観察では明確にできなかったが、南溝底面は二段底状で掘り直しの可能性がある。深さは南溝中央部分のA溝が見られる付近で深度を増す傾向がある。2区東側の地山が高くなる傾斜部分では傾斜に沿って底面も高くなり、深度に大きな変化はない。

方向 西溝：N-19° E 南溝：N-73° W

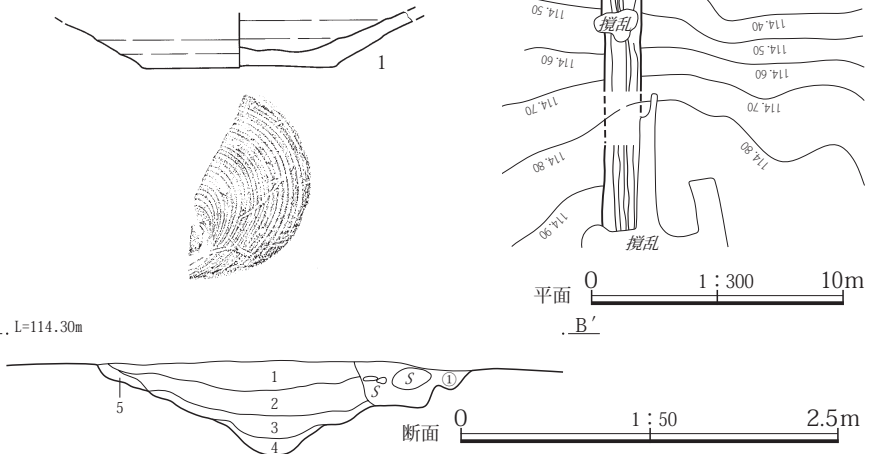
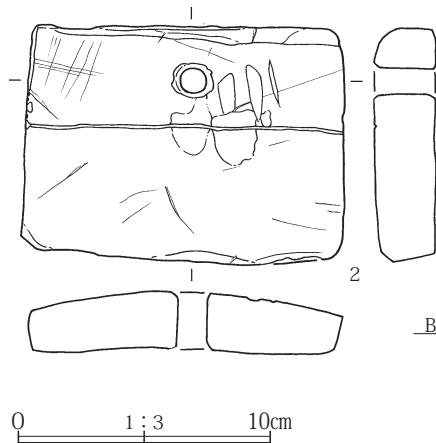
遺物 埋没土内出土の須恵器皿1、温石2の2点を図示した。図示した以外には土師器・須恵器17片が出土している。

備考 方形館の堀が想定される規模形状の遺構で、調査できなかった2区と3区を区切る東側の現道部分には、本溝が現状の規模で北側へ直角に屈曲しても収まる幅がある。その場合の南溝の長さは65m前後になる。

古代の遺物を出土しているが、中世以降の石製品と思われる温石の出土もあり、豪族居館と呼ばれる古代の区画溝を想定するのは難しい。中世以後の屋敷区画溝が推定されるが、東隅は勾配9.5/100の傾斜面を駆け登るような地形にあり、不自然な点がある。



- 4号溝土層説明
- 1 にぶい橙(7.5YR7/3)A溝埋め戻し土で礫を多量に含む。粘性土で粗砂・白色軽石粒を少量含む。
 - 2 にぶい褐(7.5YR5/4)白色軽石粒や小ブロック状の黄褐色土粒を少量含む、しまりあるやや粘性土。2'では混入物少なく、やや黒色味強くなる。西溝では細礫の混入も見られる。
 - 3 褐(7.5YR4/4)黄橙色土ブロックを不均等に含むやや粘性土。白色粒他の混入物少ない。
 - 4 明赤褐(5YR5/8)南溝底面付近の埋没土。粘性土で黄橙色土粒少量含む。他層にくらべややボソボソしている。鉄分凝集が見られる。
 - 5 褐(7.5YR4/6)北側からの埋没土と思われるやや粘性土。不揃いの黄橙色土ブロックをやや多く含む。



第61図 4号溝と出土遺物

4 A号溝(第62図 PL.20-③~⑥ 遺物観察表141頁)

遺構確認段階で石列と呼称したほど不揃いな礫が直線的に带状に確認できた部分である。埋められた礫は溝のほぼ中央にあたる068-656グリッド付近に長径65cmの大きな礫が1点見られるが、他はすべて人ひとりで持ち運びできる大きさである。

位置 東隅062、-639 西隅073、-674グリッド

規模 長さ37.3m×幅82×深さ5~13cm

形状 平面は直線的で底面は平坦で、ほぼ全域で同じ形状である。残存部分では東側で幅狭となるが、礫の範囲から西側とほぼ同規模の幅があったことが分かる。

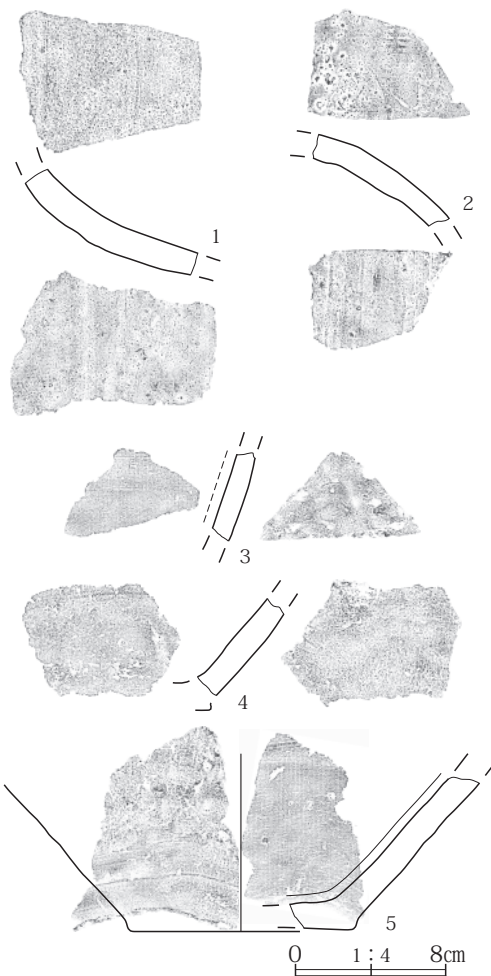
方向 N-73° W(4号溝南溝に平行)

遺物 中世陶器・在地系土器類5点を図示した。すべて小破片で、礫間に紛れ込むような出土状態だった。図示した以外に須恵器6片、在地系鍋類1点が出土している。

備考 4号溝がほぼ完全に埋没した段階で溝北縁を中心に掘削されており、同溝の区画が明確に意識されている。A溝のうち西隅0.5m、東隅5.5m部分を除いた約31mの範囲に礫が集中していた。礫は西側で径30cm前後の大きな材が多数見られ、東側では最大でも径15cm前後の小礫のみになり、東隅では礫はほとんど見られない。礫は密集した状態だったが、人為的に並べられたような痕跡は認められない。溝は深度に乏しいため、礫の垂直分布は底面から上面までほぼ全域に見られる。



第62図 4 A号溝と出土遺物



5～7号溝

2区東隅にほぼ平行な走向で、幅の近似した4条の密集する細い溝が見られた。畝畝間状、あるいは耕作痕状の細い溝で、これらを5・6・7A・7B号溝と呼称した。遺物はどの溝からも出土していない。

5号溝(第63図 PL.21-①)

2区東隅の溝群のうち最も北側にある溝を5号溝とした。東側は12号住居と重なり不明瞭で、さらに東側は攪乱により確認できない。

位置 東隅075、-695 西隅075、-697グリッド

規模 長さ2.15m 幅22～53×深さ3～7cm

12号住居断面(第25図)に本溝が確認でき、長さは3.4m以上となる。

形状 深度に乏しく、上端が不整で幅も一様でないが、走向はほぼ一定している。

方向 N-82° W

備考 平安時代の12号住居に後出している。耕作痕状である。

6号溝(第63図 PL.21-①)

5号溝の1m南側に平行して走向する溝で、溝の東西両端を確認できる。

位置 東隅071、-683 西隅073、-697グリッド

規模 長さ15.4m 幅23～66×深さ5～14cm

形状 中央西寄りでは幅が広がる部分があり、2条の溝が重複するような外観を呈しているが、明瞭にはできなかった。底面には緩やかに波打つような凹凸があるが、全体ではほぼ水平であった。西隅は一部で途切れている。

方向 N-83° W

備考 畝畝間状である。15号土坑に後出している。

7号溝(第63図 PL.21-①)

6号溝南側に近接する2条の溝で、西側を7A号溝、東側を7B号溝と名付け、本文ではそれぞれA溝・B溝と呼称した。A溝西隅は攪乱で壊され全容を把握できていない。Bの東隅は不明瞭で、西隅も小規模な攪乱にかけり端部を確認できない。A・B両溝の途切れた部分を復元して繋げると若干段差を生じてしまい、確実に同一の溝と想定することはできない。

位置 A溝東隅072、-693 西隅072、-700グリッド

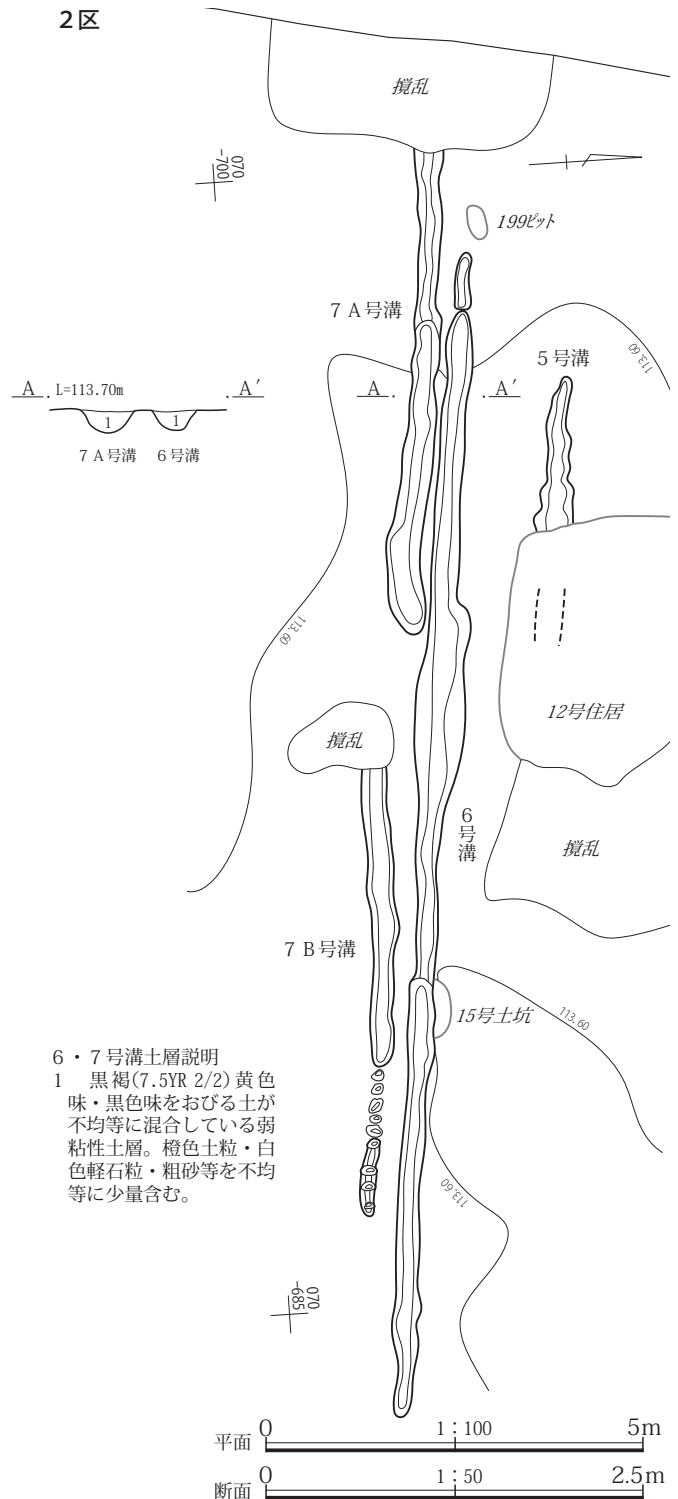
B溝東隅071、-686 西隅071、-692グリッド

規模 A溝：長さ6.4m 幅27～43×深さ10～17cm

B溝：長さ5.9m 幅27～36×深さ6～10cm

形状 A溝は東隅が北側へ緩やかに屈曲して直線的ではない。底面は中央付近で10cmの段差があり、二段階の掘削または掘り直しの可能性がある。また地山の傾斜以上

2区



第63図 5・6・7A・B号溝

に西側へ低く傾斜している。

B溝は東隅が浅く、掘削工具痕状の連続する窪みとなっている。底面は緩やかな凹凸があるが全体ではほぼ水平である。

方向 A溝：N-83° W B溝：N-86° W

備考 B溝東隅には耕作痕状の窪みが残るが、他の部分は畝畝間状である。6号溝とは埋没土が近似するが、A溝は近接し、B溝は軸方向がやや異なり同時存在の畝畝間とは想定できない。

8号溝(第64図 PL.21-②)

2区南隅にある。南側は調査区境にかかり、全容を把握できていない。

位置 北西隅064、-661 南東隅052、-654グリッド

規模 長さ13.9m 幅38~71×深さ6~15cm

形状 細かな屈曲があるが、全体では直線的な溝で幅や深さも比較的变化が小さい。北西隅へ向かって幅を狭める傾向がある。底面は北西側のみ地山傾斜に沿って北西側へ低く傾斜し、15cmの比高差を生じているが、他はほぼ水平で比較的平坦である。

方向 N-29° W

備考 21号住居に後出している。埋没土に流水や溜まり水の痕跡は認められない。区画溝的な施設が想定されるが、地山傾斜には斜行する軸方向で、本溝に近似もしくは直交するような走向・軸方向の遺構も見られない。遺物の出土はなく、埋没土からも年代を想定する根拠を得られていない。小礫の混入がやや多い。

9号溝(第65図 PL.21-③~⑤ 遺物観察表141表)

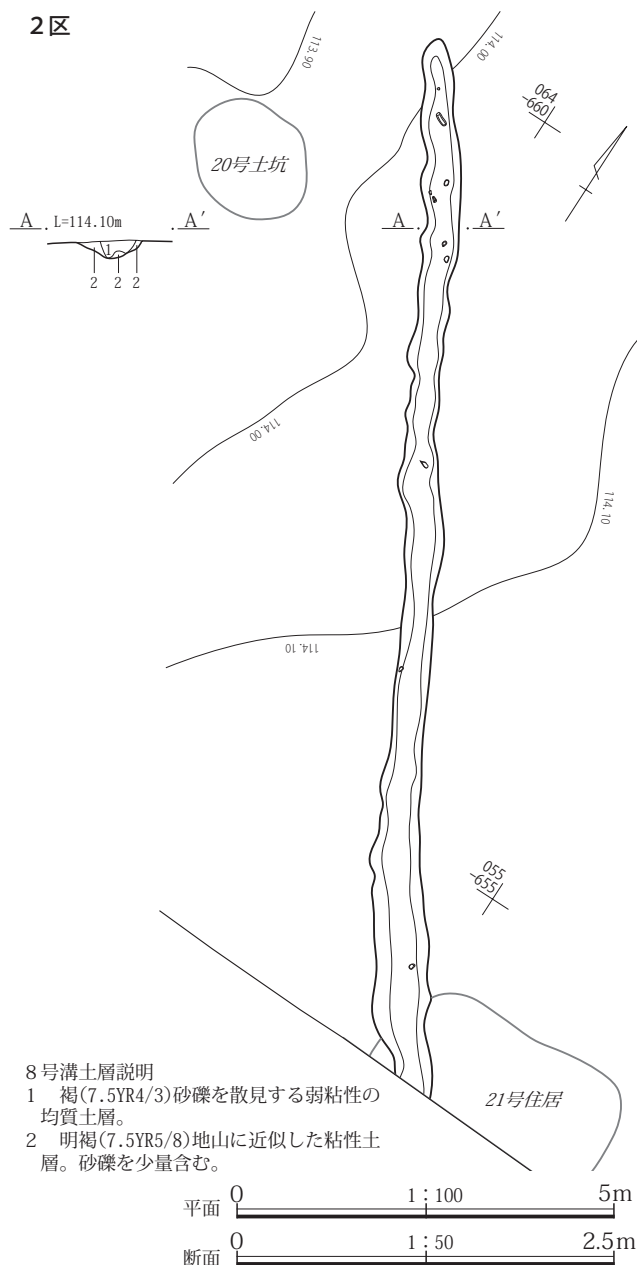
4区南隅にある溝で、幅・深さ共に、備えた本遺跡では最も規模の大きな遺構である。西側は調査区境にかかり、東側は調査区境と現道に挟まれた狭隘な調査地点で、全容を把握できていない。

位置 東隅052、-537 西隅055、-559グリッド

規模 長さ20.2×幅2.7~3.5m 深さ74~110cm

本溝東隅からさらに東側3.5m付近まで、トレンチ調査を行い、本溝が続くことを確認している。

形状 直線的で歪みの少ない溝である。底面から40cm前後の付近まで幅が狭く、稜を作って上方へ開く葉研堀の名残を留めるような断面形状である。底面は緩やかな凹



第64図 8号溝

凸があり、さらに調査範囲の中央付近が深くなる傾向があって、両隅と10cm前後の比高差を生じているが、全体ではほぼ水平である。

方向 N-84° W

遺物 埋没土内で出土した近世のすり鉢片2点を図示した。図示以外には土師器・須恵器・近世以降の土器各1片を出土したのみである。

備考 出土遺物より中世以降の遺構である。埋没土にはレンズ状堆積がみられ自然堆積と思われる。また砂粒の堆積が多く、溜まり水があった可能性がある。方形館や屋敷の外堀的な溝であるが、方形区画を築くための屈曲部分を推定する手がかりを得られていない。方形区画を

第三章 調査の内容(古墳時代以降)

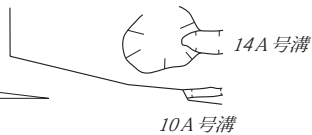
作る可能性のある2区4号溝とは軸方向が大きく異なり、3区14号溝ともやや異なっている。

4号溝同様に北側へ屈曲することを想定すると、西隅ではやや鈍角気味に開くが、3・4区境の現道部分に隠れるようにして延びる可能性がある。東隅ではトレンチにより延長部分を確認しているので4・5区境に本溝が伸びることは難しく、本溝調査範囲より25m以上東側の5区以東で屈曲することになる。

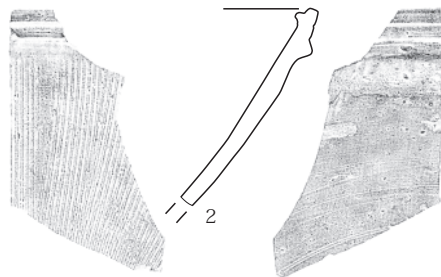
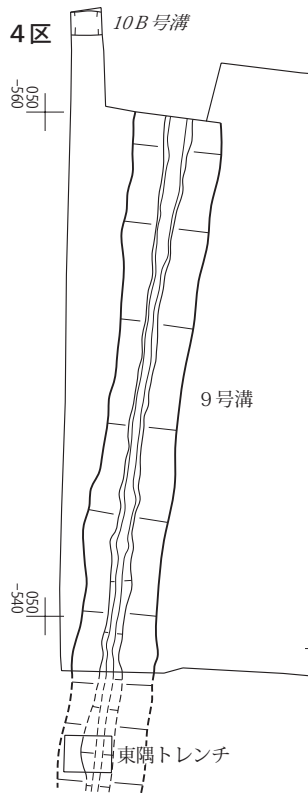
南側へ屈曲することを想定すると、西側では4区南西隅で小規模の10B号溝が見られ、本溝が確認された部分と同規模のまま屈曲するスペースは残されていない。

周辺の遺構

3区



4区

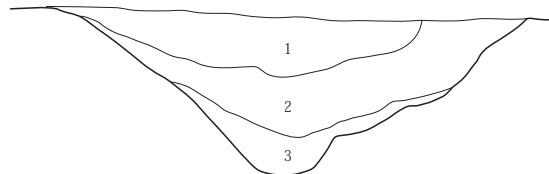


0 1:4 8cm

9号溝土層説明

- 1 暗褐(10YR3/4)白色・褐色粒子を少量含む。礫を少量含む。
- 2 褐(10YR4/6)やや砂質土。溝埋没土の大半を占める土。ラミナ状の堆積は認められない。不均等に礫を含む。
- 3 黄褐(10YR5/8)最下層埋没土で砂礫を多く含む。

A, L=116.00m



断面 0 1:50 2.5m

4区



平面 0 1:100 5m

第65図 9号溝と出土遺物

10号溝(第66図 PL.21-⑥・⑦)

3区と4区の境を結ぶようにして繋がる、1条の細い南北走向溝を想定した遺構である。底面レベルが近似する反面、埋没土や走向および規模には齟齬があり、同一の溝とするには疑問点も多いが、調査時の遺構名称を踏襲した。3区東隅で確認した部分を10A号溝、4区南西隅で確認した部分を10B号溝とし、本文中ではそれぞれA溝・B溝と略した。

位置 A溝北隅058、-566 南隅063、-567グリッド

B溝北隅051、-563 南隅052、-563グリッド

規模 A溝長さ4.7m 幅26~33×深さ3~8cm

B溝長さ1.2m 幅91~96×深さ24cm

形状 A溝は南半でほぼ直線的だが、北隅付近で緩やかに西側へ湾曲している。11号溝へ合流するように曲げられたものと考えられる。底面は地山の傾斜に沿って北側へ低く緩やかな傾斜が見られたが、水流の痕跡は確認できない。

B溝はやや幅太で走向も真北に近い。底面は、確認できた範囲で中央付近がやや高く、南北両隅と5cm前後の比高差があり、凹凸のある底面となりそうである。

方向 A溝：N-7° W B溝：N-2° E

備考 A溝は11号溝との合流点のすぐ北側にある同溝A断面に続きが観察されず、11号溝に前出もしくは同時存在と思われる。出土遺物はないが、11号溝と近似した時期の遺構と推定する。B溝は11号溝に近い走向であり、A溝と合流するには未調査部分での屈曲が必要となる。また9号溝と合流する可能性も考えられる。

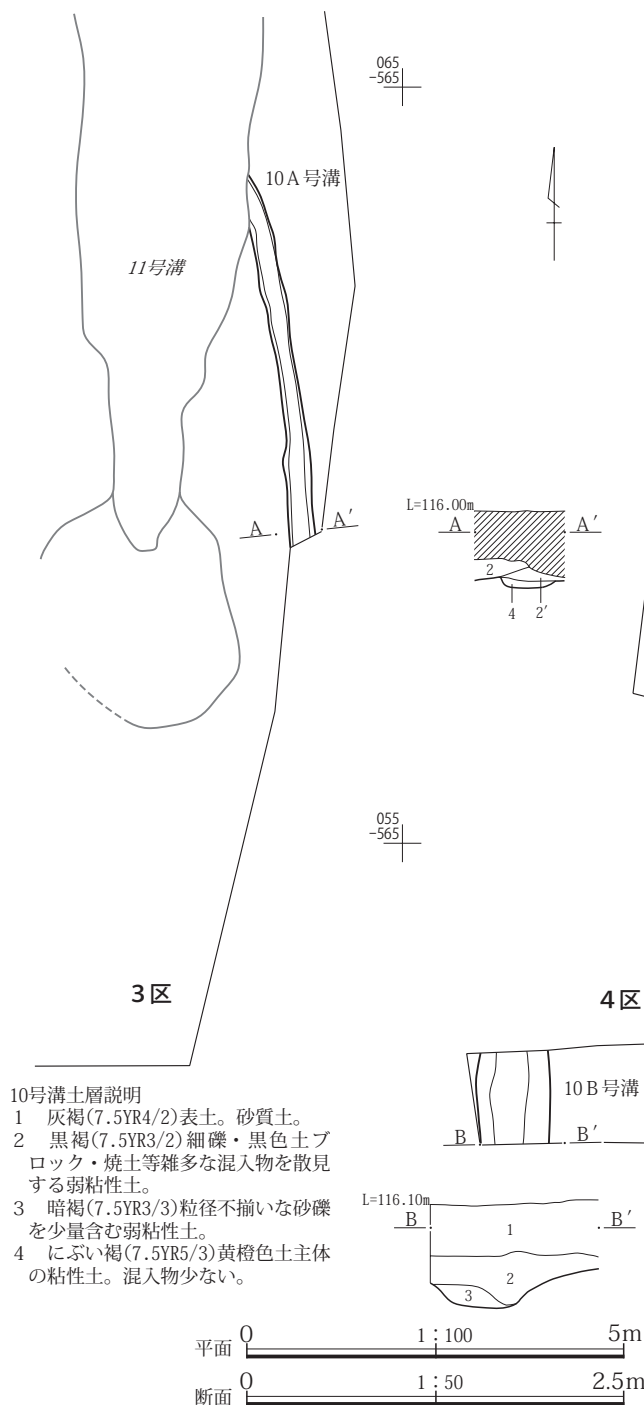
11号溝(第67図 PL.22-①~⑤、34 遺物観察表141頁)

3区東隅で確認した幅太の溝で全容を把握できた。底面付近から礫が多量に出土している。南北両隅で底面レベルそのまま幅が細くなる。南側ではそのままの深さで土坑状の円形の窪みに、北端ではテラス状の高まりを挟んで1号井戸に重複している。

位置 北隅081、-567 南隅058、-568グリッド

規模 長さ22.5×幅0.9~3.45m 深さ35~62(北隅テラス状の高まり部分では16)cm

形状 溝幅は南北両端で細く、中央北寄りで太くなっているが、上端・下端とも共通して変化しており、壁の崩落など後世の変形ではない。確認できた範囲では掘り直



第66図 10A・B号溝

しの痕跡は見られず、開削当初からの形状と思われる。底面は広く比較的平坦であり、壁は稜のない直線的な傾斜で断面は逆台形を呈している。幅太になる北寄り部分が最も深く、北隅と11cm、南隅と40cmの比高差を生じている。北端のテラス状部分は緩やかな傾斜壁面で、溝の他部分とは様相を異にしている。

方向 N-2° E

礫 本溝内に見られる礫はほとんどが底面のほぼ直上であり、平坦面を上に向けるような並びになっている。礫

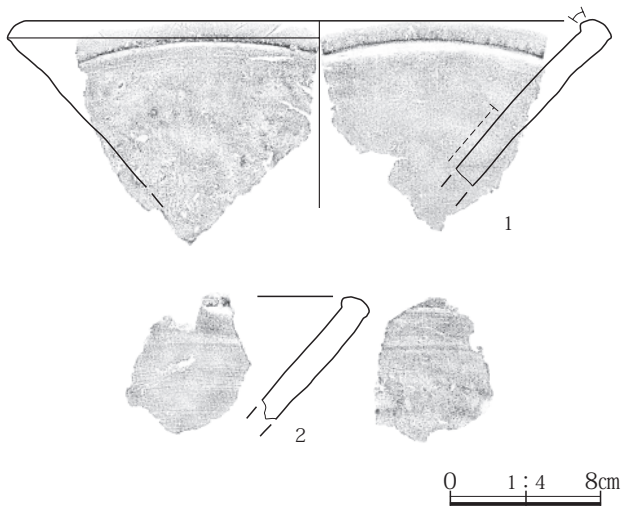
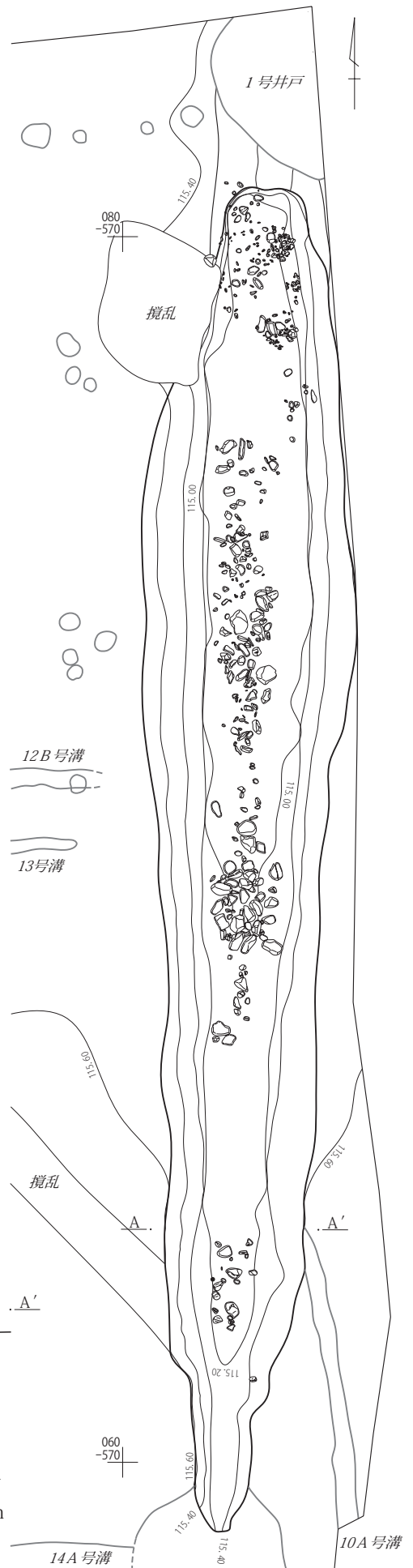
第三章 調査の内容(古墳時代以降)

は最大でも径40cmほどで、人が一人で持ち運べる大きさである。溝廃棄時に投げ込まれたのではなく、埋没前に底面に散乱するような状態だったと想定されるが、踏み石のように規則的に並べられた痕跡は見られない。

遺物 下層で礫に混じって出土した中世の在り系土器2点を図示した。特に2は14号溝1の土器と同一個体と思われる。図示した以外の出土遺物は少なく、須恵器1点と中世在り系土器3点のみである。

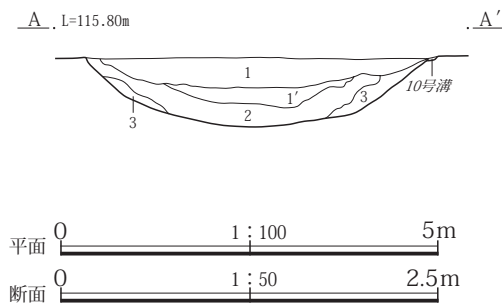
備考 出土遺物より14世紀から15世紀の遺構と想定される。同一個体と思われる遺物の出土があり、14号溝とは同時存在であったことが分かる。これより本溝と14号溝とは直交して方形区画の南東隅部分を構成すると思われる。南側に重複する円形土坑状の窪み断面に本溝の痕跡は確認できず、この部分に前出している。

3区



11号溝土層説明

- 1 にぶい橙(7.5YR7/3)やや砂質土で細礫・黄橙色土小ブロックを不均等に含む。1'では大粒の黄橙色土ブロックを多く含む。
- 2 にぶい褐(7.5YR5/3)黄橙色土粒少量含むしり強い弱粘性土。底面付近では砂礫が混じる。
- 3 橙(7.5YR6/8)黄橙色土小ブロックを多く含む弱粘性土。



第67図 11号溝

12号溝(第68図 PL.22-⑥・⑦)

3区から4区にかけて、幅は狭いがほぼ直線的な溝が部分的に途切れながら続いている。3区では攪乱のある中央付近で途切れており、ここを境に西側を12A号溝、東側を12B号溝とした。4区は攪乱の著しい調査区だが、部分的に3区12号溝から繋がるとされる溝が確認でき、全体を12C号溝とした。本文中ではそれぞれA溝・B溝・C溝と略した。

A溝は東西両端とも攪乱付近で途切れ、その先が不明瞭になる。B溝西端は攪乱周辺で、東端は11号溝周辺で不明瞭になる。C溝西端はB溝東端から9m離れた調査区境から確認でき、東隅でも調査区境で痕跡をわずかに確認できる。B溝端とはややズレを生じている。5区では溝の痕跡は全く見られない。

位置 C溝西隅071、-571～東隅071、-537グリッド

A溝西隅071、-588～東隅071、-578グリッド

B溝西隅071、-575～東隅071、-570グリッド

規模 全体の長さ51.3m

A溝長さ10.3m 幅44～62×深さ7～13cm

B溝長さ4.6m 幅28～37×深さ3～6cm

C溝長さ24.1m 幅35～64×深さ5～14cm

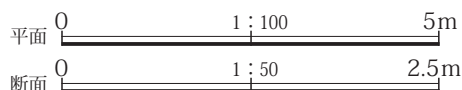
形状 A溝西隅からC溝中程の約50m部分はほぼ直線的で、C溝東側が不規則に北側へ向かって湾曲している。底面は細い部分や広く平坦な部分などがあって一様ではない。平坦底面な調査区にあるため底面傾斜もごく弱く、東側へ低く傾斜していて東隅との比高差は15cm、勾配にして0.3/100のわずかな値である。

方向 N-89° E C溝東端：N-84° E

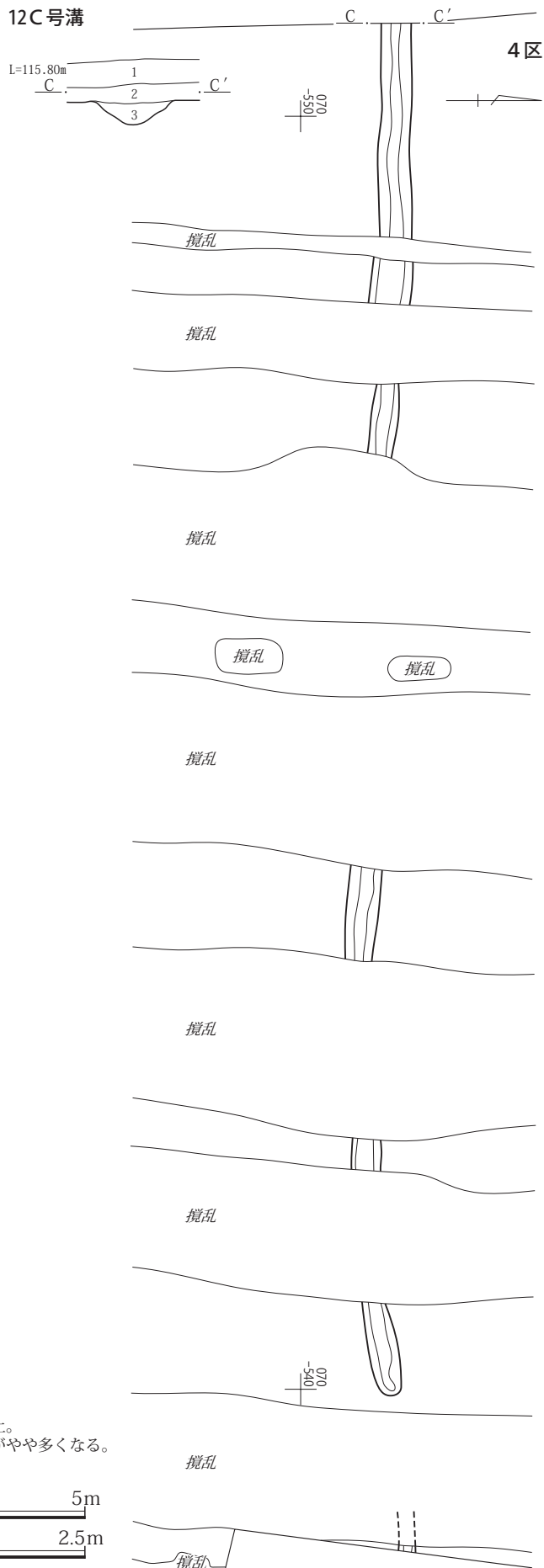
備考 出土遺物はなく時期を確定できないが、調査段階では古代・中世の埋没土と異なる近世以降の埋没土と想定している。A・B溝は南側約12mの14号溝と近似した軸方向にある。またA溝の西端から約95m西側に規模・走向等がやや近い5～7号の溝群がある。

12号溝土層説明

- 1 灰褐(7.5YR4/2)砂質の表土。
- 2 黒褐(7.5YR3/2)細礫・黒色土ブロックをわずかに含む弱粘性土。
- 3 暗褐(7.5YR3/3)2層土をベースとし、底面付近で砂礫の混入がやや多くなる。



第68図 12C号溝



13号溝(第69図 PL.22-⑥)

3区東寄り12B号溝の南側に、同溝にほぼ平行して確認された細い溝である。

位置 西隅070、-574～東隅070、-570グリッド

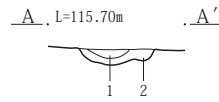
規模 長さ3.9m 幅18～22×深さ2～5cm

形状 ほぼ直線的で、全体を通じて幅・深さも比較的近似している。

方向 N-89° W

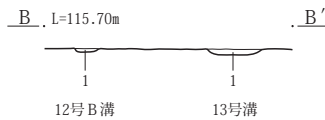
備考 遺物の出土はない。12B号溝の南側75cm前後の位置にほぼ平行して並んでおり、道の側溝状であるが12B号溝より幅狭である。また両溝の間に踏み固めのような痕跡は確認できない。

3区



12A号溝土層説明

- 1 褐(7.5YR4/6)白色軽石・小ブロック状の黒色土を散見する弱粘性土層。不均等に斑鉄が見られる。
- 2 褐(7.5YR4/3)1層に同質の層。混入物は少ないが斑鉄やや多くなる。

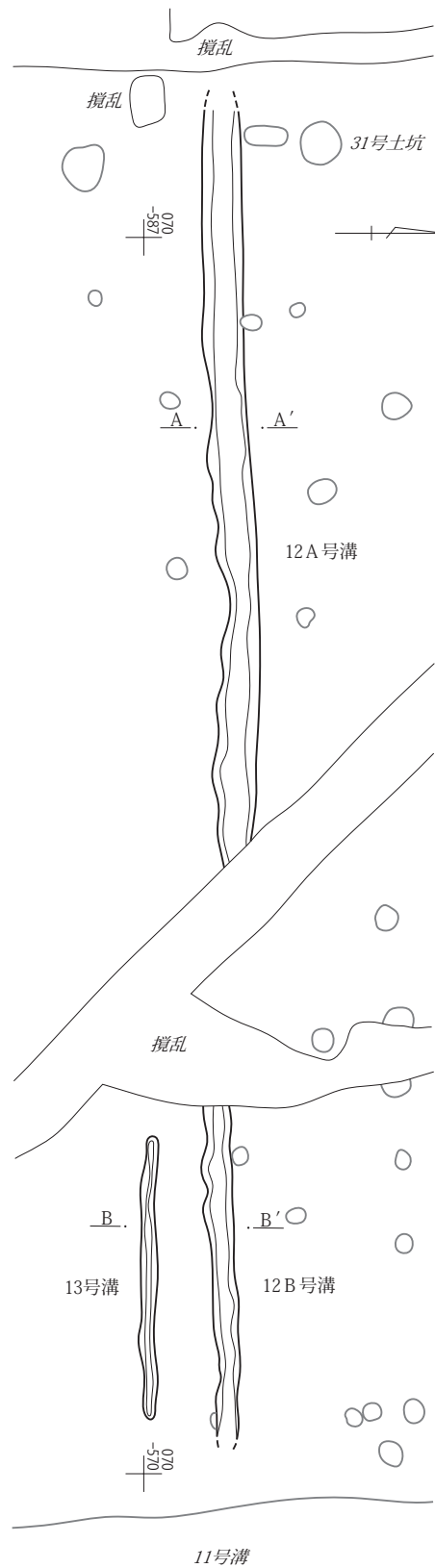
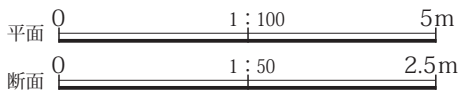


12B号溝

- 1 褐(7.5YR4/3)粘性土層。地山の砂礫が不均等に混じる。

13号溝

- 1 暗褐(7.5YR3/4)砂礫混じりの粘性土。12号溝埋没土に類似している。



第69図 12A・B号溝と13号溝

14号溝(第70・71図PL.23-①～⑤・24-④、34 遺物観察表141・142頁)

3区南寄りで確認した溝で、東側は円形土坑状の窪みとの重複部分を端部としている。西側は調査区境に達し、西北隅も攪乱により大きく壊され全容を把握できていない。攪乱を挟んだ西隅は走向が異なり、南側を向いている。深度に富む東側を14A号溝、北壁を確認できなかった西隅周辺を14B号溝とし、本文ではA溝・B溝と略した。

位置 A溝西隅057、-589～東隅057、-568グリッド
B溝西隅、055-597～東隅055、-590グリッド

規模 A溝長さ20.9m 幅190～228×深さ37～55cm

B溝長さ7.6m 幅推定220×深さ50cm

形状 A溝は直線的な溝で幅もほぼ一定している。底面レベルは西側中央付近でやや深く、東隅と18cm、西隅と5cmの比高差がある。断面形状は東側南壁で小さな段があり、掘り直しの痕跡の可能性はあるが、土層の観察からは確認できていない。B溝は北壁を攪乱で壊され不明瞭だが、南壁の規模や形状からA溝と同規模と想定できる。底面の細さが共通しており、底面レベルもA溝とほぼ同じで中央付近でやや低くなっている。A溝と走向で9°の差があるが、連続する同一の溝として齟齬はない。また、11号溝とも底面レベルは近似している。

方向 A溝N-89° E B溝N-80° E

礫 大きさが一様でない多量の礫が、A溝西側にのみに集中して見られた。北側から流れ込んだような状態で、底面直上から上層まで広範囲に及んでいたが、中層付近で最も多く分布していた。大きさは1点だけ径50cmを超える礫があったが、他は径30cm前後で11号溝の礫とほぼ同じ規模である。

遺物 在地系土器5点と砥石1点を図示した。礫と共に投げ込まれたような状態の出土で、垂直分布は底面直上から中層付近まであって一定してない。在地系土器はいずれも破片であった。図示した以外に土師器1点、須恵器4点、中世在地系土器1点を出土している。

備考 A溝出土遺物より14世紀から15世紀の遺構と想定される。11号溝と共に方形区画を築く施設である。北側から礫が廃棄されていて人為的な埋戻しが行われたはずだが、土層断面は水平に近い堆積で埋没の過程は不明瞭である。同時に埋没土に一方からの堆積は認められず、

土塁の存在を推定する資料は得られない。東隅の円形土坑状の窪み・15号溝に前出している。しかしA・B両溝は15号溝との交点付近から走向を違えており、同時存在していた時期があった可能性がある。A溝西側北壁に3号井戸が一部重複している。新旧を確認する観察は欠いているが、同井戸上層にはA溝西側同様に礫の混入が多く、同時存在の可能性がある。A溝東隅付近で286号ピットを確認した。深度18cmの小規模な遺構だが溝底部中央にあり、本溝埋没前に穿たれたものと思われる。

本溝西側延長部分を想定すると、西側にある3区4号溝とは断面形状や深度が異なり、同溝に繋がるとは想定しにくい。2区と3区を区切る現道部分を通るように北側へ屈曲すると考えられるが、屈曲部分を4号溝と共有することも想定される。

15号溝(第70図 PL.23-⑥・⑦)

14A号溝西隅付近から南側へほぼ直各に分岐する溝である。南側は調査区境にかかり、把握できたのは一部のみである。

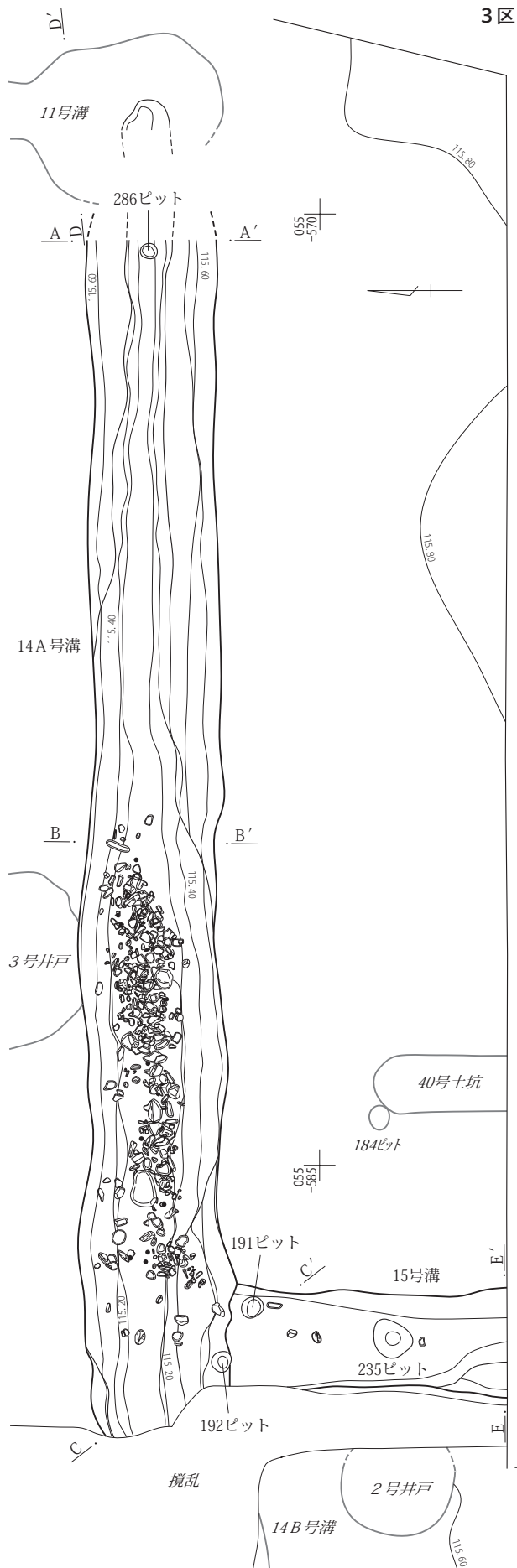
位置 南隅052、-587～北隅056、-587グリッド

規模 長さ4.35m 幅149～173×深さ9～20cm

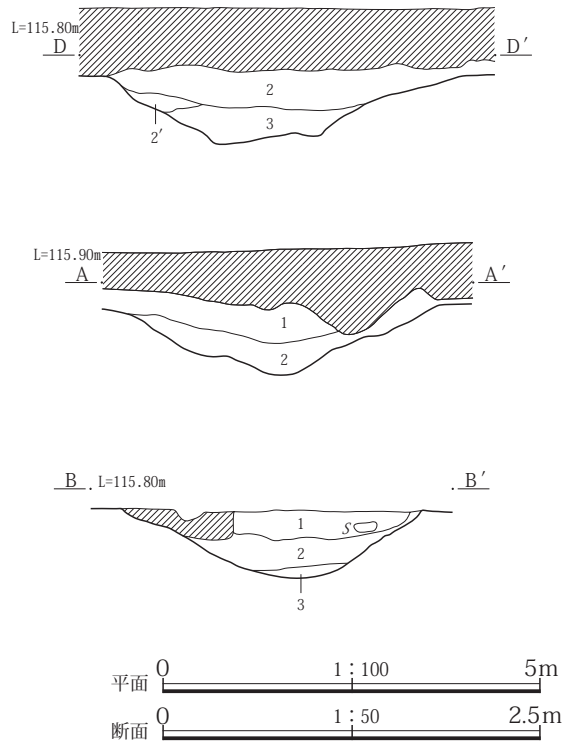
形状 確認できた範囲で、上幅はほぼ一定している。底面はきわめて広いが、東側へ低く傾斜していて西側と5～16cmの比高差がある。特に南隅では一部に小さな段が見られる。14A号溝の南側へ分岐するような溝であるが、上面幅や断面形状が異なり、深度に乏しく、14A号溝より底面は30cm以上高い位置にある。

方向 N-2° E

備考 14A号溝に後出している。出土遺物はなく時期推定の資料に欠くが、14A号溝上を北端としていて同溝とは近接した時期の施設と想定する。底面から性格不明の3基のピットを確認しているが、本溝との新旧を確認する観察を欠いている。ピットの配置に規則性は見られず、本溝に伴う施設とする根拠はない。底面直上およびやや浮いた状態で北側から流れ込んだものと思われる礫が少量出土している。



3区

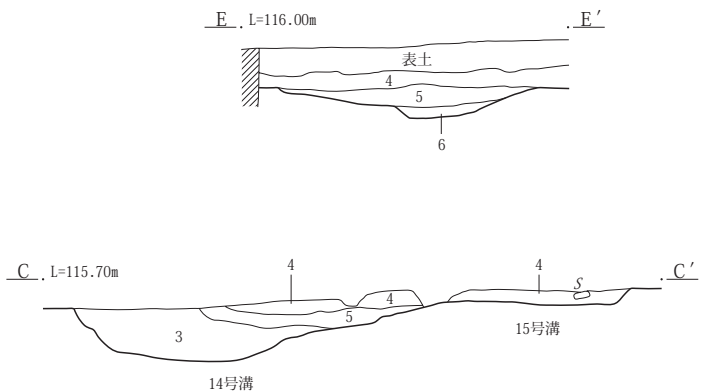


14号溝土層説明

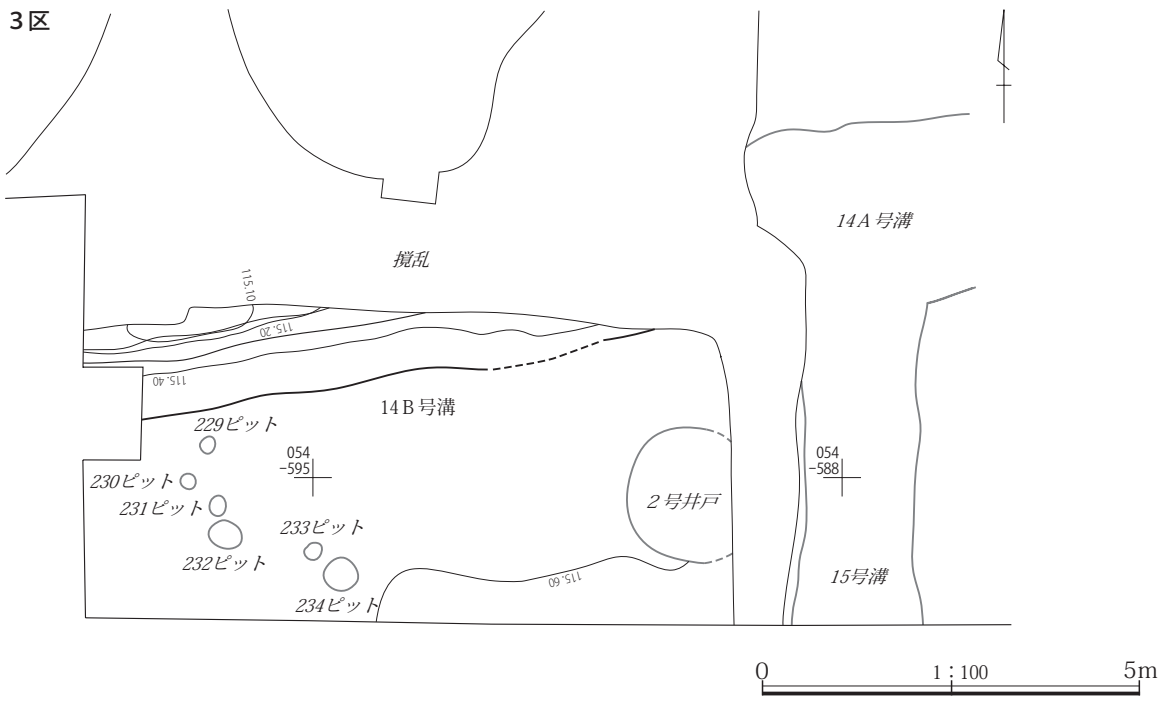
- 1 にぶい橙(7.5YR7/3)混入物の少ないやや砂質土。
- 2 褐(7.5YR4/3)ややしまりある弱粘性土。不均等に砂礫を含む。一部斑鉄あり。
- 3 明褐(7.5YR5/6)ややしまりある弱粘性土。底面直上を中心に砂粒の混入あり。

15号溝土層説明

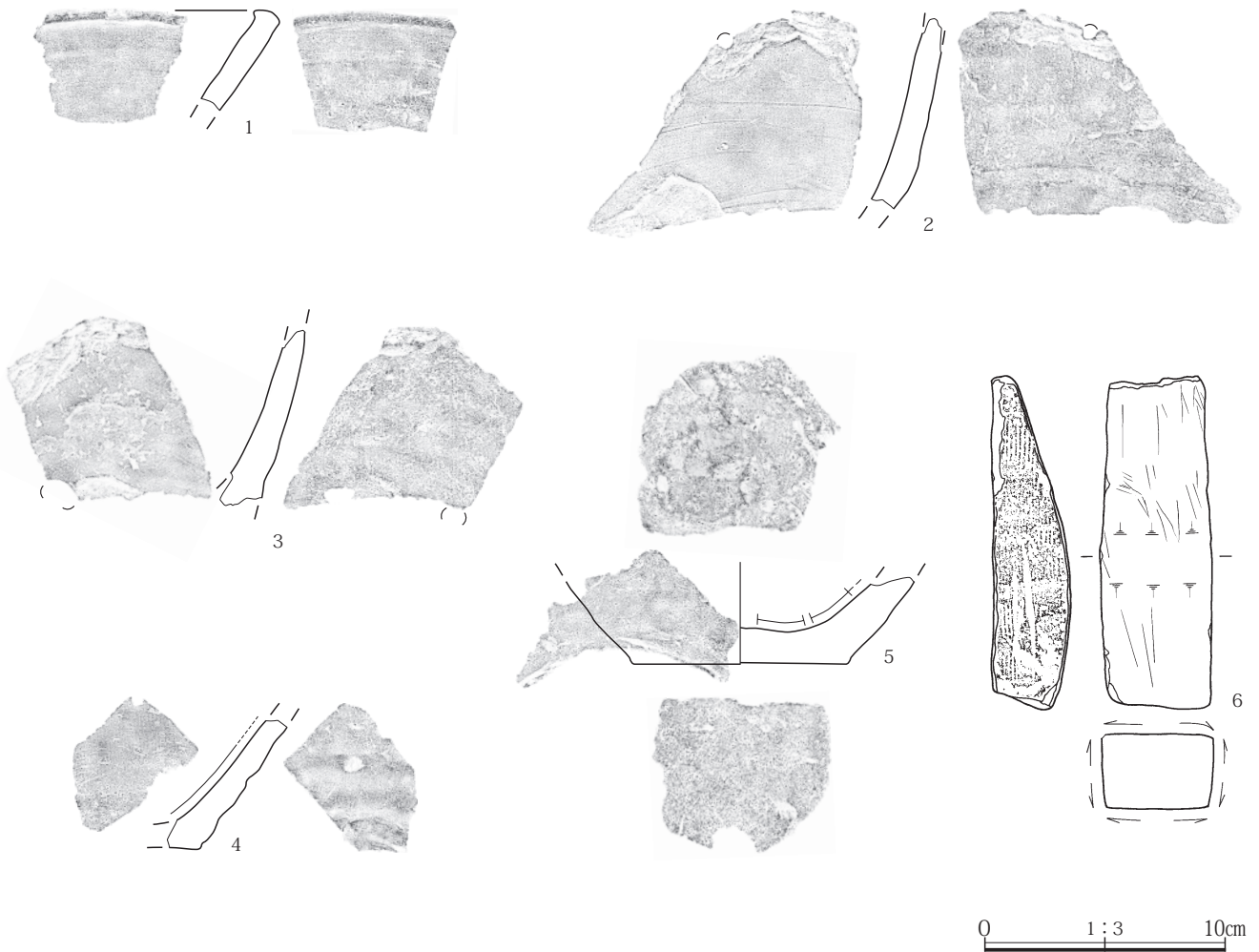
- 4 にぶい黄橙(10YR6/3)混入物の少ない砂質土。
- 5 暗褐(7.5YR3/3)粗砂混じりの弱粘性土。
- 6 にぶい橙(7.5YR6/4)雑多な混入物を不均等に含む弱粘性土。上半では黄褐色土ブロック、下半では砂礫の混入やや多い。



第70図 14A号溝・15号溝



14号溝出土遺物



第71図 14B号溝と出土遺物

7 井戸

本遺跡では4基の井戸を調査した。この内3基が3区に、1基が4区にある。井戸は中世方形館の区画堀が想定される11号溝・14A号溝に沿って分布し、古代の集落周辺では確認されないことから、いずれも中世以降の所産と思われる。1号井戸以外は土坑として掘り下げを始めたもので、整理段階で井戸番号に変更している。

地山が砂礫層のため安全を考慮して、井戸下層は人力を用いず、重機を使って地山ごと半截するようにして掘り下げた。

1号井戸(第72図 PL.24-①・②)

3区北東隅付近にあり、11号溝の北側に隣接している。現道に接しているため下層まで掘り下げることができなかった。上層に多量の礫を含んでいる。

位置 082、-567グリッド周辺

規模形状 推定径約3m、深さ1.4m以上。開口部は広いが中層で稜をもち、稜以下では細くなる断面漏斗状の井戸が想定される。

備考 地山礫層を掘り込んだ湧水量の比較的豊富な井戸である。11号溝とはテラス状の窪地を挟んで重複しているが、同溝との新旧関係は確認できない。礫は深さ70cm前後を残した埋没過程の後半に、主に北側から廃棄されたような出土状態で、最大径40cmの大きさがある。南側の11号溝底面で見られる礫と同規模であるが、同溝側から流れ込んだものではない。

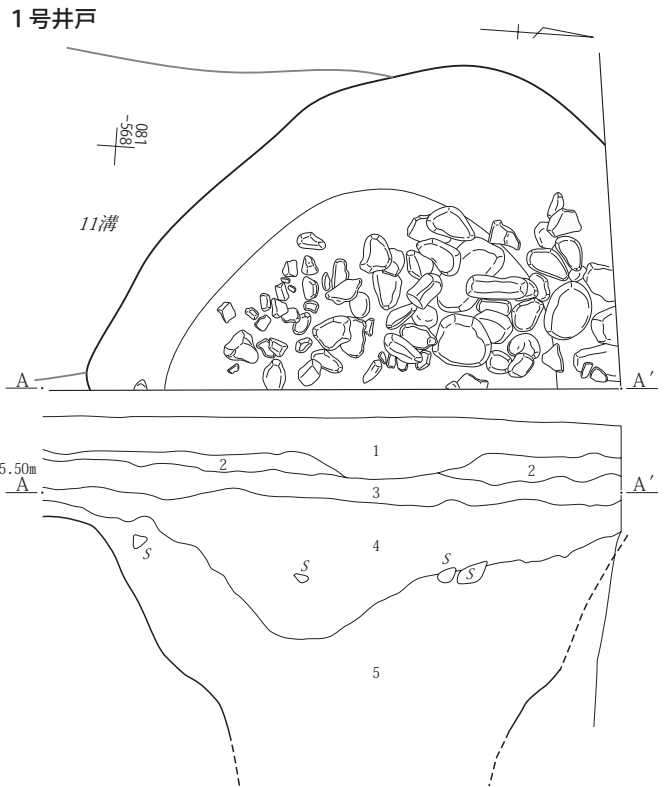
2号井戸(第72図 PL.24-③)

2区南隅の、15号溝西側にある。東側半分は障害物のため完掘できていない。

位置 054、-590グリッド周辺

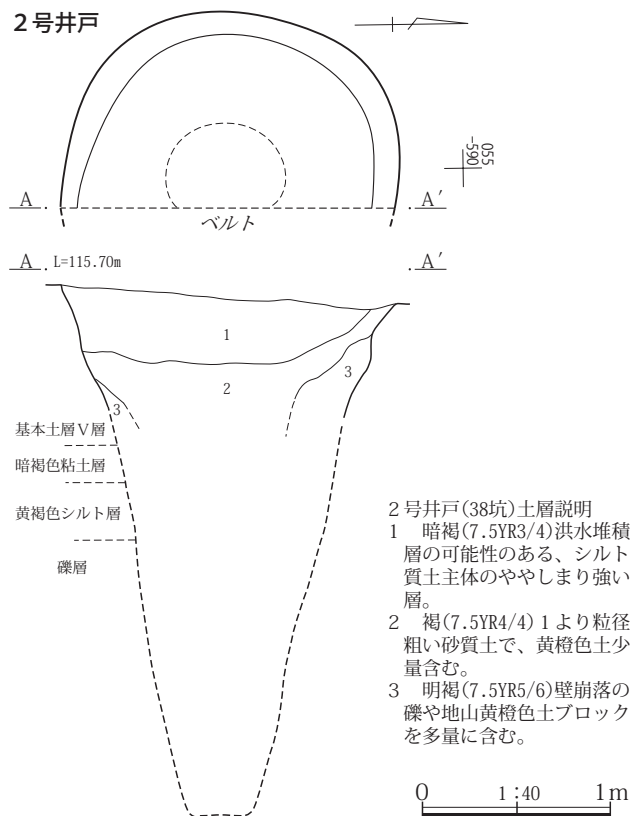
規模形状 径1.76m、深さ2.28m。開口部はやや小さく、中段に稜を持たずに徐々に細くなって底面に至っている。

備考 地山礫混じり層を掘り込んだ湧水量の比較的豊富な井戸である。不安定な地山を掘り込んだ井戸としては壁の崩落は少なく、比較的早い段階で埋没した可能性がある。



1号井戸土層説明

- 1 暗褐(10YR3/4)表土
- 2 浅黄橙(10YR8/4) As-Aの可能性のある軽石を含む。やや砂質土。
- 3 黄橙(10YR8/6)洪水堆積層の可能性のあるシルト質土。
- 4 黄褐(10YR5/6)シルト質やや粘性土で礫の混入のやや多い層。黄橙色土をブロック状に含む。
- 5 暗褐(10YR3/3)壁崩落の礫や地山黄橙色土ブロックを多量に含む。



2号井戸(38坑)土層説明

- 1 暗褐(7.5YR3/4)洪水堆積層の可能性のある、シルト質土主体のややしまり強い層。
- 2 褐(7.5YR4/4) 1より粒径粗い砂質土で、黄橙色土少量含む。
- 3 明褐(7.5YR5/6)壁崩落の礫や地山黄橙色土ブロックを多量に含む。

0 1:40 1m

第72図 1・2号井戸

3号井戸(第73図 PL.24-④・⑤、34 遺物観察表141頁)

3区の14号溝北側に接するような位置にある。

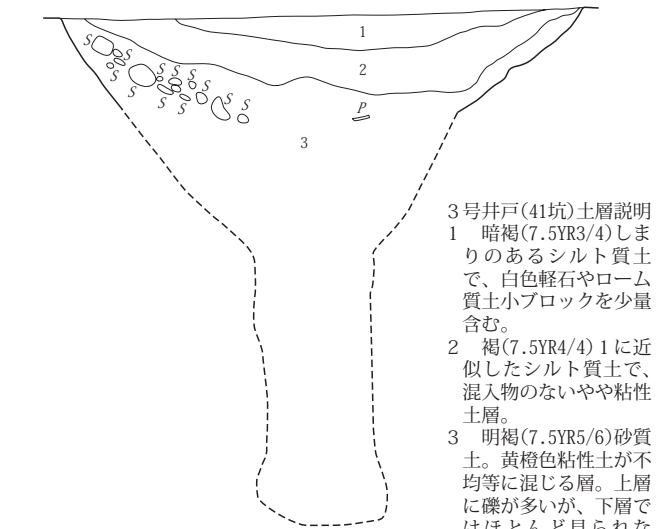
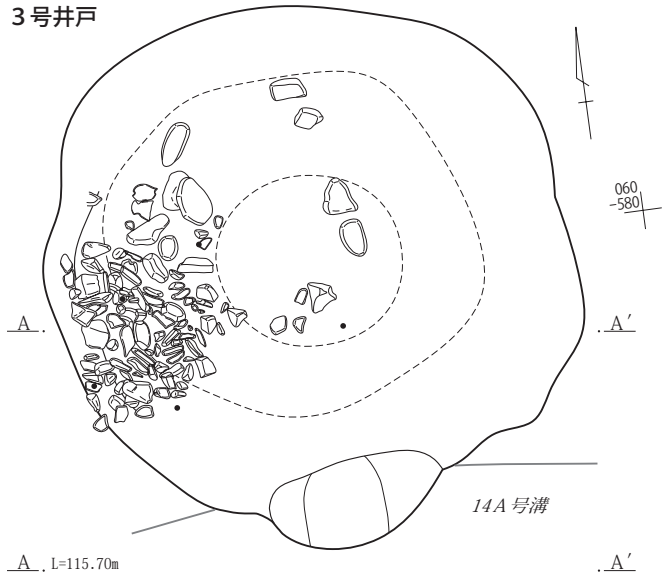
位置 060、-581グリッド周辺

規模形状 径2.7m、深さ2.66m。調査できた範囲では本遺跡で最も深さのある井戸である。開口部は広い円形だが中層で稜をもち、稜以下では細くなる断面漏斗状の井戸で1号井戸に近似している。井戸水汲み上げ痕と思われる下幅40cmの窪みが、14A号溝に接した南側にある。

遺物 中世在地系土器4点を図示した。いずれも確認面下30~40cm前後の高さから、礫に混じって出土した破片である。

備考 礫は深さ50cm前後になった埋没過程の終盤に、西側から廃棄したような状態で確認される。本井戸に接する14A号溝からも多量の礫が見られるが、汲み上げ痕の位置が同溝と重なり、同時存在は想定しにくい。

3号井戸



- 3号井戸(41坑)土層説明
- 1 暗褐(7.5YR3/4)しまりのあるシルト質土で、白色軽石やローム質土小ブロックを少量含む。
 - 2 褐(7.5YR4/4)1に近似したシルト質土で、混入物のないやや粘性土層。
 - 3 明褐(7.5YR5/6)砂質土。黄橙色粘性土が不均等に混じる層。上層に礫が多いが、下層ではほとんど見られない。

4号井戸(第73図 PL.24-⑥)

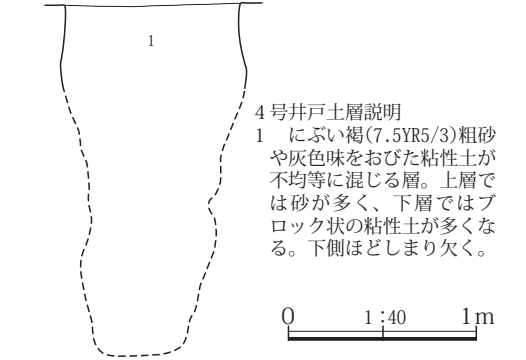
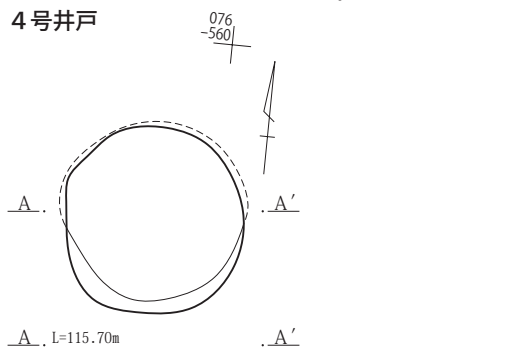
4区11号溝の東側約5mの位置にある。深度にやや乏しく、湧水量はあまり豊富ではない。本遺跡では礫のない地山を掘り込まれた唯一例である。

位置 076、-560グリッド周辺

規模 径0.9m、深さ1.85m。狭い開口部からほぼ垂直に掘り下げられた井戸である。

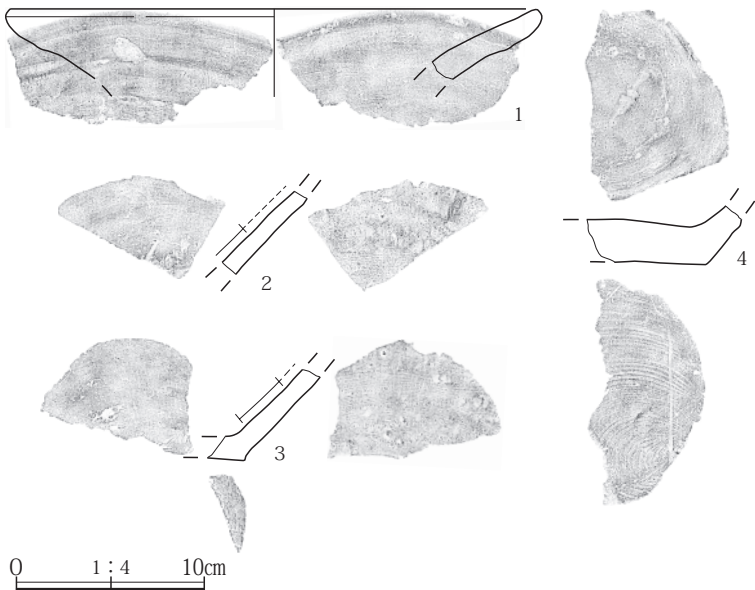
備考 北側壁に、一部タナ落ちの痕跡が見られる。礫の混入がなく、人為的に埋め戻された痕跡は認められない。

4号井戸



- 4号井戸土層説明
- 1 にぶい褐(7.5YR5/3)粗砂や灰色味をおびた粘性土が不均等に混じる層。上層では砂が多く、下層ではブロック状の粘性土が多くなる。下側ほどしまり欠く。

3号井戸出土遺物



第73図 3・4号井戸と3号井戸出土遺物

8 遺物集中地点

(第8・74図 PL.24-⑦・⑧、35 遺物観察表142頁)

2区北東隅付近の竪穴住居が密集する地点の東隅付近に、古代の遺物がまとまって出土する地点があった。竪穴住居の確認に努めて、基盤層直上の礫混じり層まで掘り下げたが住居の痕跡を見つけれず、遺物集中地点として扱った。

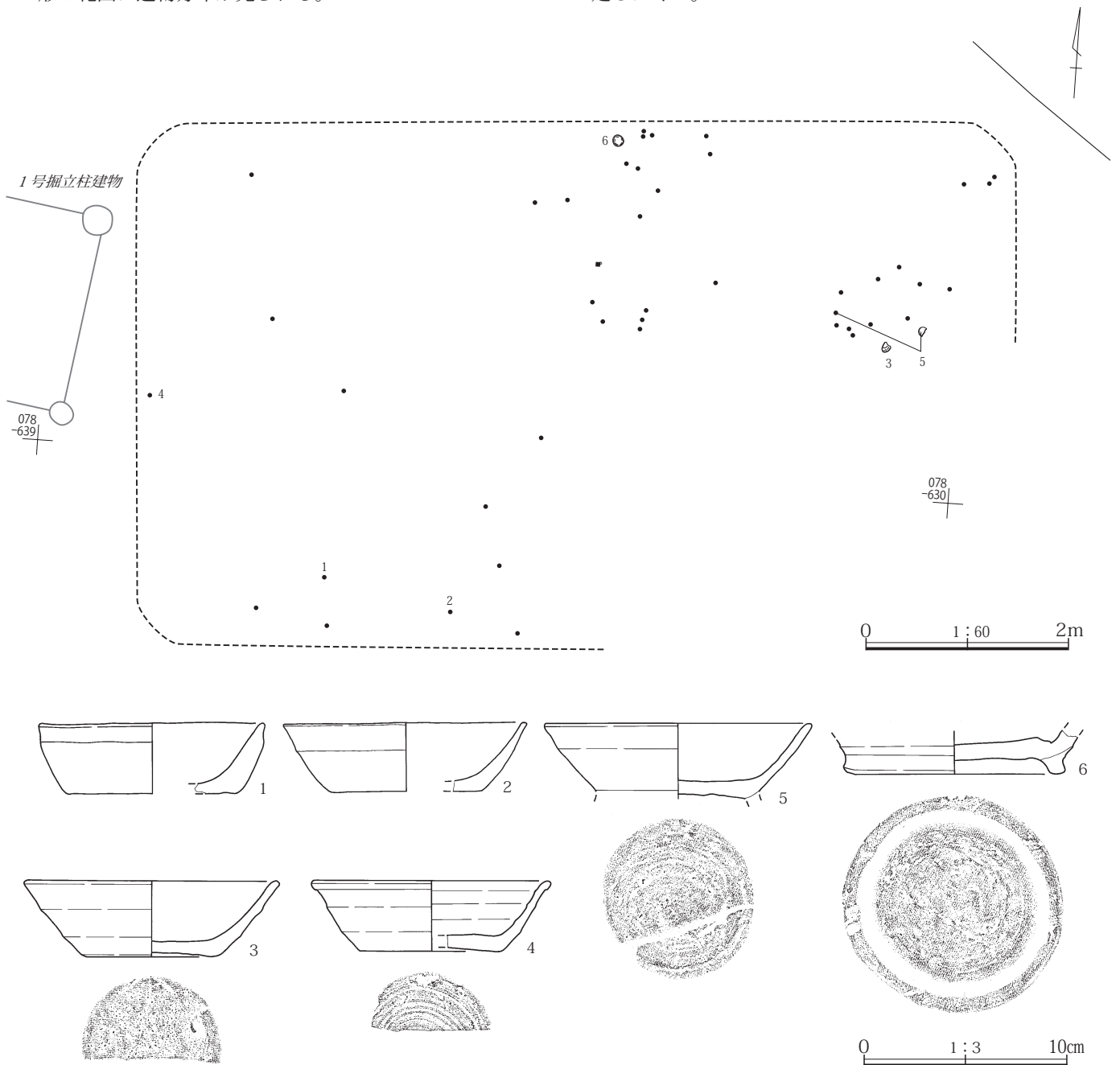
位置 076～081、-629～638グリッドにある。

規模形状 東西約8.6m、南北約5.2mの東西に長い長方形の範囲に遺物分布が見られる。

方位 N-87° E(長軸)

遺物 杯類6点を図示した。分布範囲全域に散らばるようになっている。図示した以外に土師器325点、須恵器189点、灰釉陶器5点の出土があるが、土師器甕が約6割を占めている。他にスサ入りの焼土塊(7)や微細な鉄滓が3点(8～10)があり、写真のみ掲載した。

所見 図示した土器は底径の広い8世紀後半から9世紀前半の遺物だが、灰釉陶器片の出土もあり、やや長い時期の遺物が混在しているようだ。鉄滓等の出土があるが、焼土・炭化物粒の散布は見られず、鍛冶関連の施設は想定しにくい。



第74図 遺物集中地点と出土遺物

9 遺構外の遺物

(第75図 PL.35 遺物観察表142頁)

遺構外の遺物、および別遺構に混入した古代・中世の土器・石製品11点をこの項で一括して扱った。

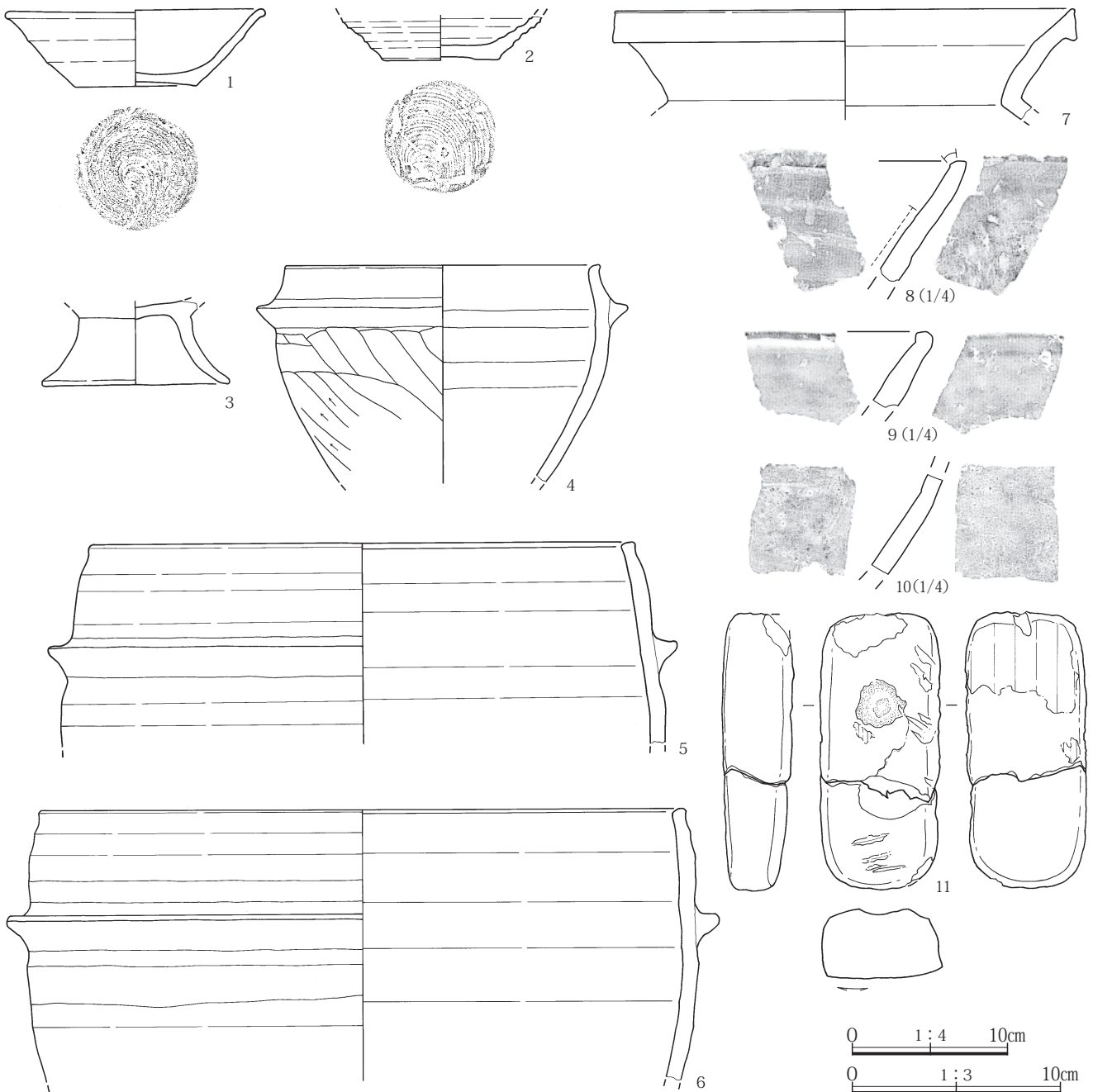
1・7は1区包含層内の出土である。2は縄文時代の22号住居上面からの出土である。

3および8～11は縄文時代の列石上にある窪みからの出土で、このうち8～10は1・2区からほとんど出土しない中世の遺物である。11は縄文時代の他の石製品とは

異なる砥石で、古代以降の遺物と想定した。

4～6は古墳時代の3号住居に混入した平安時代の遺物で、まとめて出土していることより該期の遺構が3号住居上面に存在していた可能性がある。

図示した以外の遺物はきわめて少なく、土師器約150点、須恵器約100点、中近世土器10点ほどで、土師器須恵器類はほとんどが1・2区の出土であった。



第75図 遺構外の遺物(古墳時代以降)

第IV章 調査の内容(縄文時代)

1 調査の概要

塩川砂井戸遺跡で調査された縄文時代の遺構は、2区西隅の後期前半の堀之内式の柄鏡形敷石住居(22号住居)と1区から2区へ繋がる半円形を呈す1号列石、および1区北隅の6号住居である。特に、本遺跡で特筆されるのは、22号住居とそれに繋がる弧状の列石が確認されたことである。両者は一連の遺構と考えられるが、本報告書では便宜的に別の遺構名をつけ、別々に記載した。また1号列石とは別に、22号住居の本体と柄部分の境付近から延びる小規模な列石(所謂ヒゲ)部分があり、ここは

住居列石と呼んで区別した。

調査された縄文時代の遺構は、遺跡の西側を南流する大沢川の右岸段丘上の平坦面にあり、川から約35mの距離に作られている。遺物の出土は遺構が確認された1・2区に集中しており、調査地の東側にあたる3区以東からはほとんど出土していない。縄文時代の遺構は本調査地の中では、大沢川右岸の限定された場所に作られていたといえ、古墳時代後期の遺構の分布に近い。



第76図 縄文時代遺構配置図

2 22号住居(敷石住居)

(第77～81図 PL.25・26、35 遺物観察表142・143頁)

22号住居は2区西隅にあり、上面を広く覆う攪乱直下から敷石の一部が確認された遺構で、埋没土の調査ができなかった。柄鏡形敷石住居で、住居柄部分南端から繋がるように弧状の列石が確認されている。また、敷石住居と重なるように住居の下面から炉が検出されており、同じ場所に新旧の住居が作られている。

住居西半部は生活道路のため調査できなかったが、バイパス工事の際、立ち合い調査を行い、追加できた部分を加筆している。

位置 071～077、-699～704グリッド

規模形状 敷石住居の規模は、住居本体部で南北方向に5.0m、東西5.0m程の規模である。掘り込みは断面から確認できない。住居本体部のプランは、敷石の平面の配置状況および遺物出土範囲から、円形ではなく八角形になると思われる。敷石は床面全面に敷かれるのではなく、住居の縁辺と炉周辺、柄部に集中している。

方向 上面炉N-22° E、下面炉N-35° E

住居柄部分N-24° E

上面炉 住居本体部中央やや南寄りに石囲い炉がある。石囲いの範囲は、長軸(南北)方向130cm、短軸方向80cmの長方形を呈しているが、南側は扁平な割石を敷いてお



第77図 22号住居(1)

り、南北方向の炉の長さは60cm前後である。石囲いには長さ30~40cmほどの扁平な長楕円形の礫を細長く使い、東隅では三重に囲っている。この炉に続くように柄部の敷石が続き、住居内で最も明瞭な敷石部分となっている。炉東外縁と直線的に繋がるような位置に、扁平な長楕円形の礫を側縁として用いている。柄内側には扁平な礫を丁寧に敷連ねている。

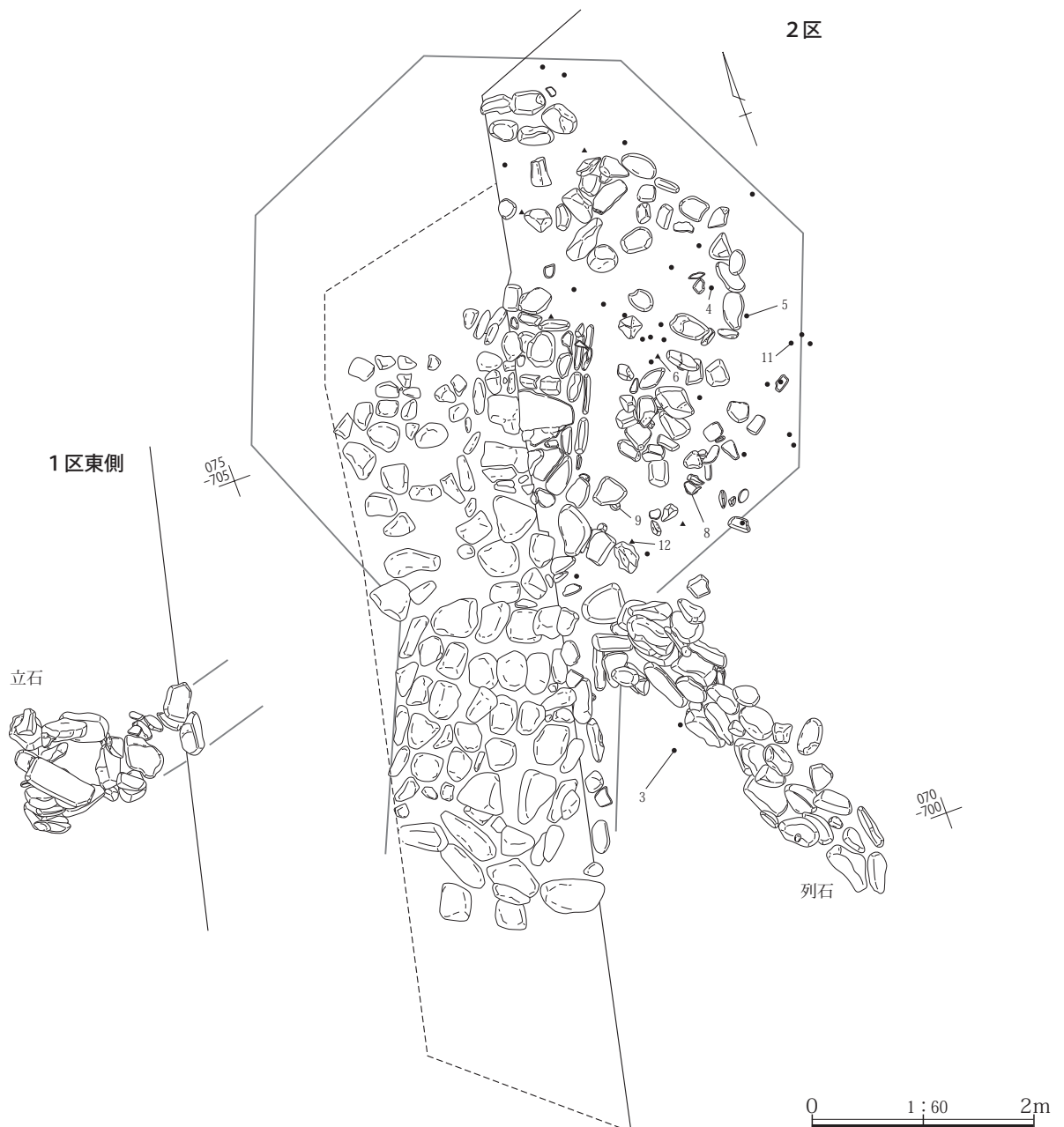
下面炉 本住居の下面確認の石囲い炉は、上面の炉より規模がやや大きいものである。主軸を上面の炉より東寄りして、30cmほどの扁平な長楕円形の礫を細長く用い、長軸(南北)方向110cm、短軸方向85cmの炉を作っている。

炉の内には、さらに円礫で方形に区画し、炉体土器の深鉢底部を置いている。

この炉の確認面は、敷石住居の礫下面よりさらに下から検出されている。床面は、上面の敷石住居より約10cm下にあり、部分的に炭化物粒の散布が見られたが、全体の形状を把握するには至らなかった。また、住居の先に続く列石との関係も不明であるが、列石は下面の住居構築以降に作られ、上面の敷石住居構築まで続くものと思われる。

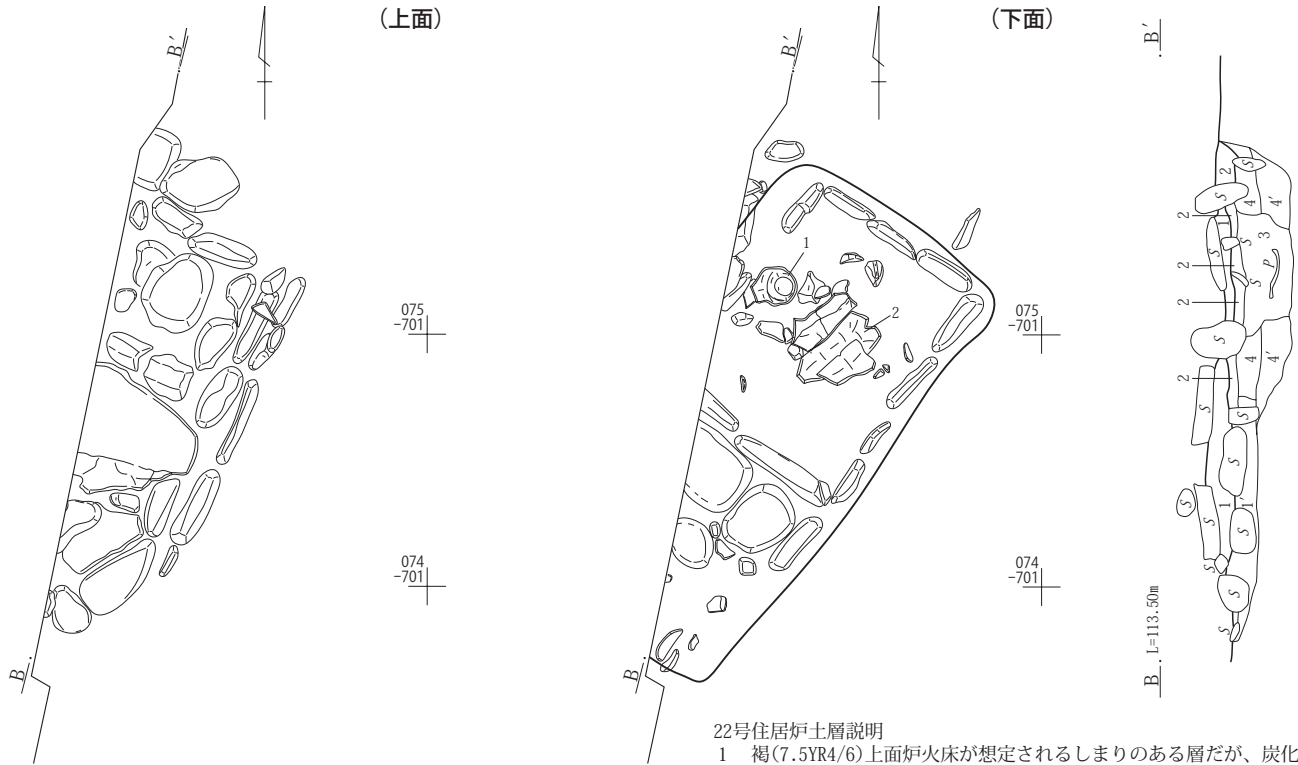
その他 壁溝および柱穴等の施設は、明確なものが確認出来なかった。

敷石面



第78図 22号住居(2)

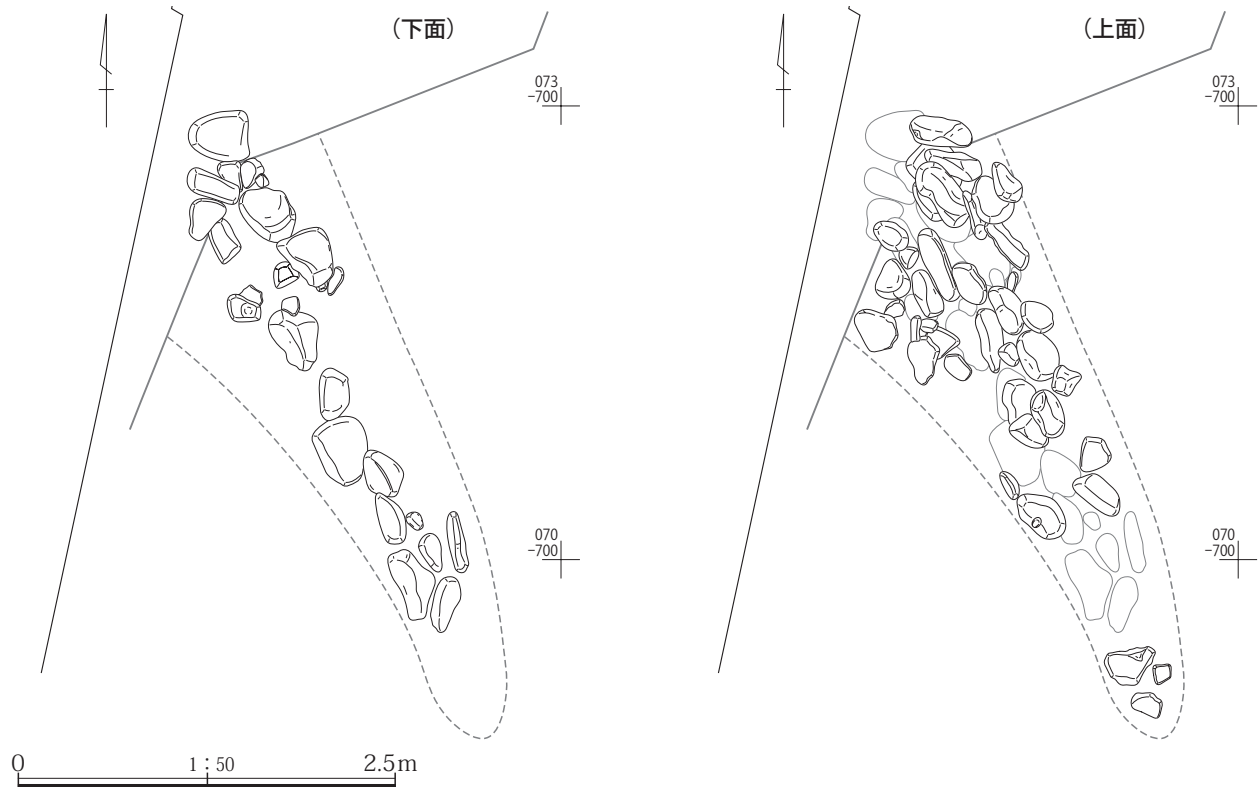
炉



22号住居炉土層説明

- 1 褐(7.5YR4/6)上面炉火床が想定されるしまりのある層だが、炭化物粒・焼土粒の混入は少ない。軽石粒含む。1'は下面炉に伴うと思われる層だが1との区別難しい層。焼土の混入はさらに少ない。
- 2 暗褐(10YR3/4)下面炉上に見られる層で、上面炉火床下に貼った層と思われる。
- 3 にぶい黄褐(10YR4/3)炉体土器を含む層で、下面炉に伴う掘り込み埋没土と想定される。炭化物粒・焼土粒をやや多く含む。
- 4 にぶい黄褐(10YR5/3)下面炉周辺のローム状土主体の埋戻し土で、炭化物粒・焼土粒を含。4'ではローム状土の比率が高い。

住居列石(ヒゲ)



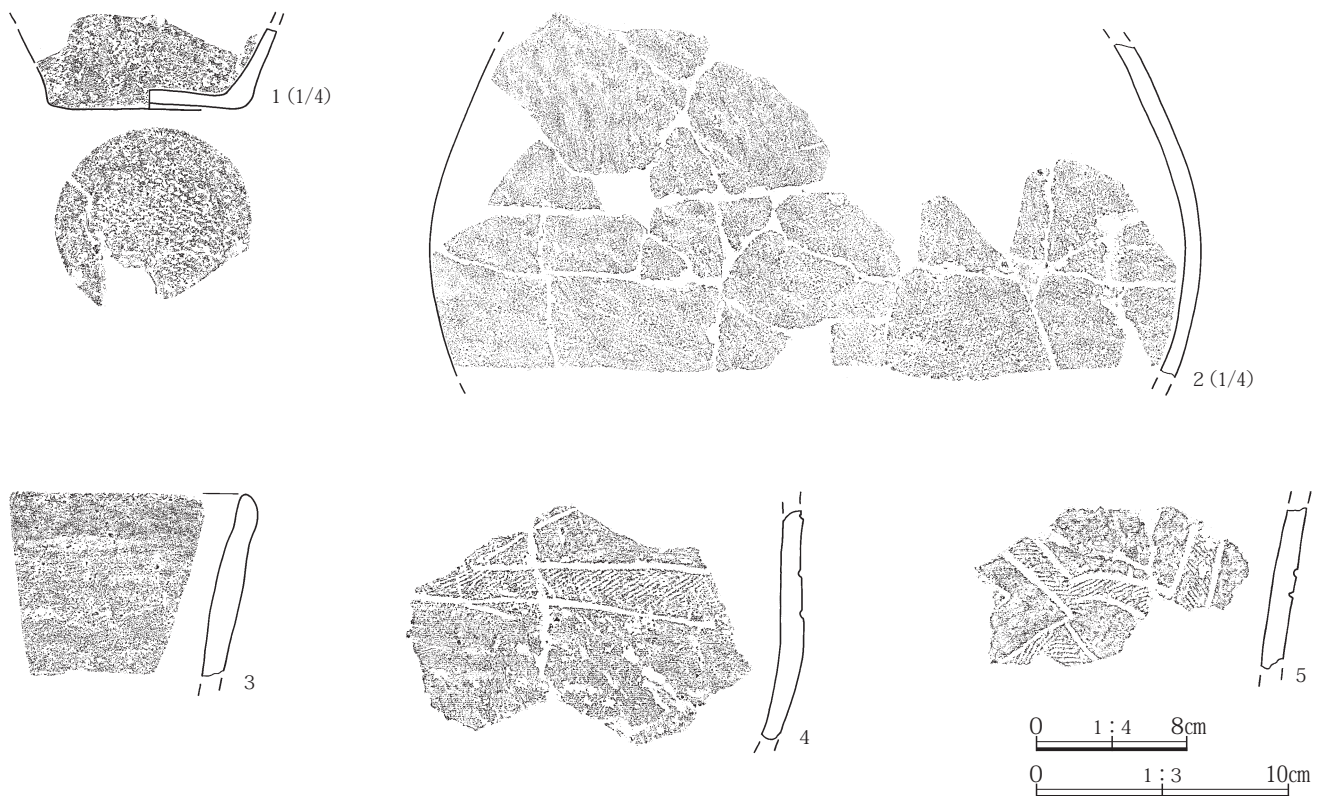
第79図 22号住居炉(上)と住居列石(下)

列石 住居本体部と柄部境付近から南東側に「ヒゲ」と俗称される列石が延びている。この部分には、長さ30cm前後の細長い石材を列石の長軸方向に揃えるように据えている。列石は約5mの長さがあるが、数次に渡って礫が積まれたようで、確認できる範囲で下面礫と上面礫を分けて第79図下図に記した。列石は先端方向の南東側へ順次伸ばしたのではなく、当初から長さのあった石列上に、礫を繰り返し積み重ねたものと想定される。南西側にも対になるように列石が伸びるはずだが、生活道と下水管等の構造物により壊され明瞭ではない。先端部分は1区東隅で1号列石に繋がっていると思われ、立石と想定される部分と近接している。

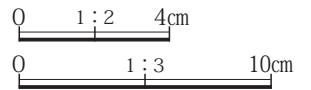
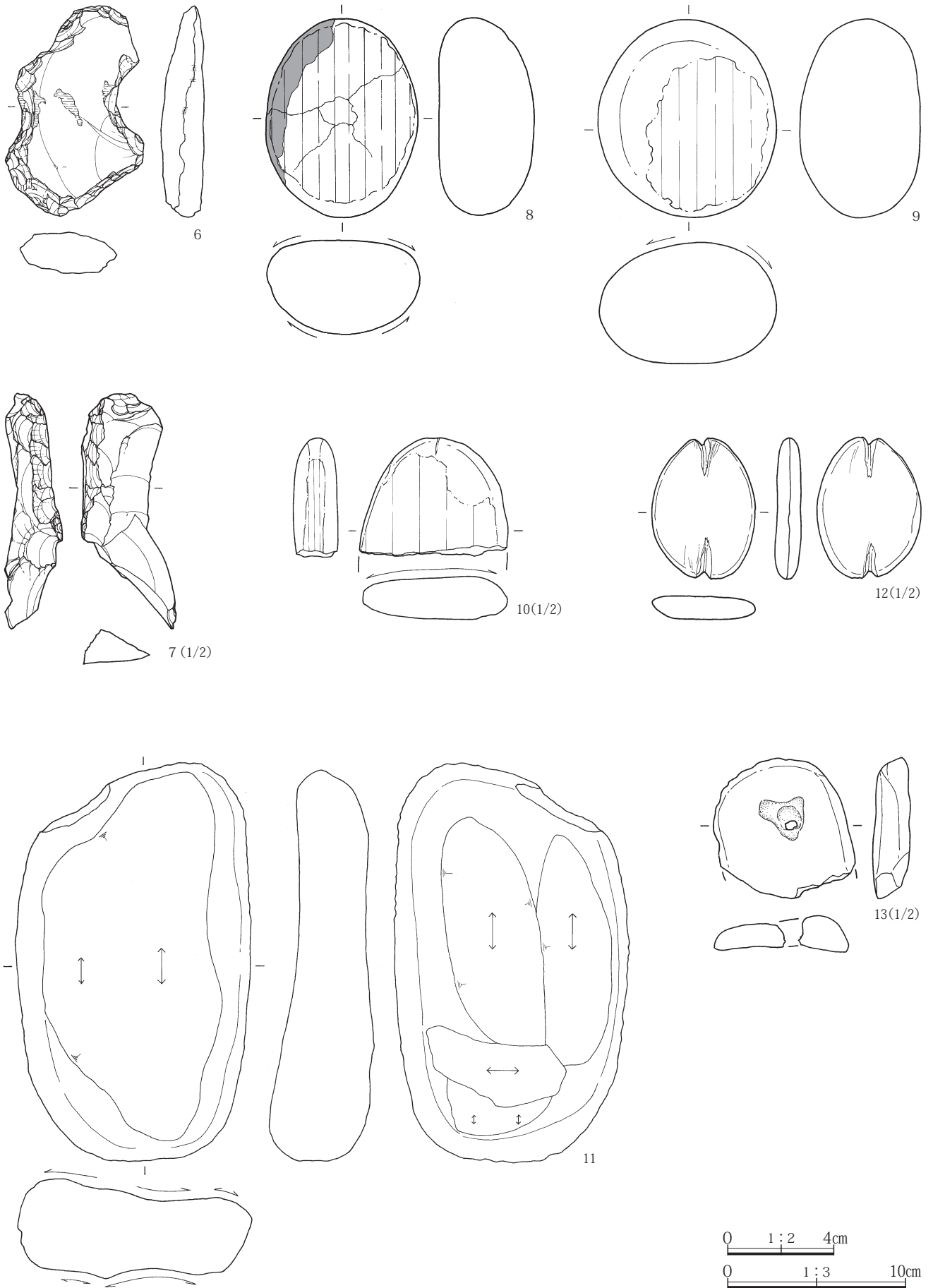
遺物 遺物は土器5点と石器8点を図示した。器形復元

できる土器は、炉内出土の多数の小破片を接合した2のみである。1～3は、粗製の土器で無文である。4・5は、沈線による三角文施文の土器である。1は、下面の炉に埋設されていた土器である。底面に網代痕が認められるが、器面文様が無いため、堀之内2式の範疇ではあるが、列石遺構出土の土器との新旧をつかむには至らない。

石器は、打製石斧、磨石、石錘、砥石などが出土している。本遺跡のすぐ西側に大沢川があり、石錘は列石遺構からも4点出土していることから、漁撈関連の生業があったことを予想させるものである。図示した以外に、土器類は重量1960g、石器類は44点・重量で1224gの出土があった。



第80図 22号住居出土遺物(1)



第81图 22号住居出土遺物(2)

3 1号列石

(第82～106図 PL.27～29-①～⑤、36～45
遺物観察表143～150頁)

1号列石は、1区と2区を跨ぐようにして確認された。古代の遺構確認面(第1面)でも黒色味をおびた溝状の窪み部分として把握できたもので、当初は溝として扱っていた。掘り下げの中で、縄文時代の遺物が多数出土し、石組みが弧状に繋がることから列石であると確認された。規模は、外径約25mの円形の範囲に作られている。確認できた範囲では弧状に溝を掘り、その排土を中央部において盛り土状にしたと推定される。現況で石組が確認された範囲は、敷石住居(22号住居)部分から南東に4m、1区東隅から西に12mである。住居の東西で列石の状況が若干異なっている。東側は、22号住居柄部分南端付近から地山を幅2m程を溝状に掘り窪め、地山と斜面の変換点に沿って住居列石に接続するようにして、列石外側を築く礫を並べている。溝底面付近にも礫が出土しているが、底面から浮いた状態で不規則に礫が重なっていることから、列石から崩落した礫と思われる。溝内側にも石列が僅かであるが検出されている。

西側では、上端幅2.5m、下端幅1.5m程の弧状の溝が中央で25m程の長さで、明瞭に掘られている。溝外側では上端ラインと斜面部に礫が置かれている。内側では、溝の掘り込み部分に礫を二・三段に重ね、環状になる中央部盛り土の土留めをするかのように石列がある。内側で最も明瞭な石列が見られ、外側では石垣上に石を積み上げるような所作が確認された。内外両石列の間隔は下端で0.9m、上端で2.5m前後の規模になる。

西側の列石は11m程続きその先南西側では、地山の整形が行われ溝の続きを予想させる状況であった。石列の延長上に飛び石状に礫が置かれていた。列石の設計があり、その核になる部分に石を置き将来的に列石を延長



第82図 1号列石西側(1)

するような所作が見てとれることから、本列石は、未完の状態であったと考えられる。

東側の列石は西側ほど明瞭ではない。西側で明瞭だった内側石列が長さ2m前後で途切れ、石列自体も明瞭ではない。外側石列は長さ4m付近まで確認できるが、外側へ石が積み上げられているのは長さ2m付近までで、その南東側では下端石列のみとなっている。内外両石列の間隔は80cm前後で、西側と同規模である。現状で確認された列石の先は、地山の整形がされておらず、意図的に置かれた石との区別が難しく規則的な配列が見られないことから自然地形で、地山に含まれている自然礫が散らばっている状況と考えられる。

弧状列石の内側部分からは、縄文時代の遺構は確認されなかった。調査された土坑やピットは、列石周辺の土と明らかに異なる古代以降の土で埋没しており、縄文時代の遺物の出土もきわめて少なかった。列石を含む溝状の窪み部分の掘削土をこの内側部分に盛ったと思われるが、盛土部分も確認できていない。



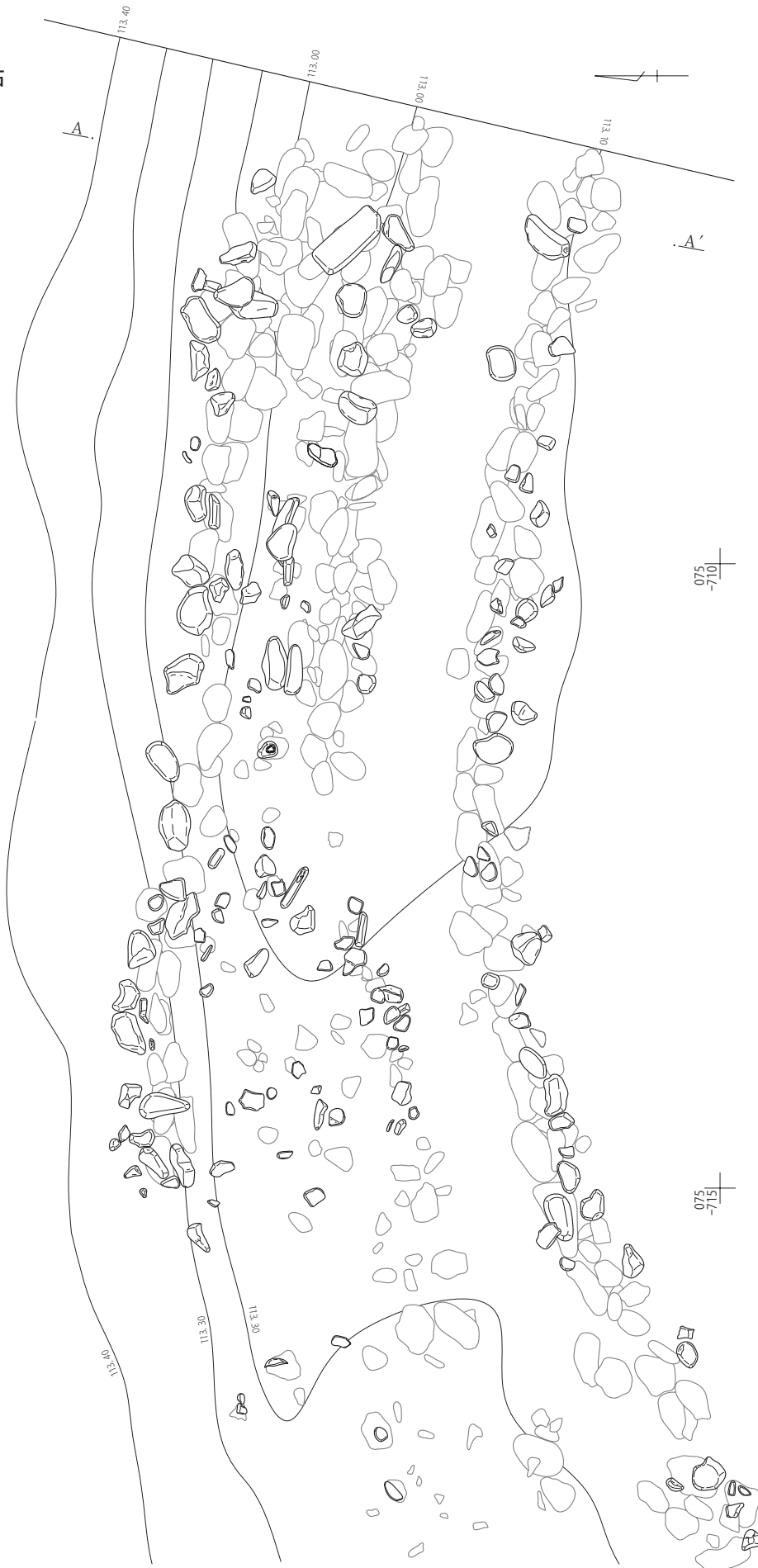
第83図 1号列石西側(2)

列石第2石



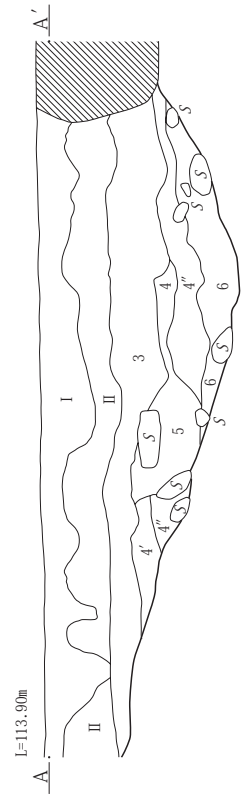
第84图 1号列石西侧(3)

列石第3石



第85図 1号列石西側(4)

3 1号列石



- 1号列石土層説明
- 1・II 基本土層のI・II層。古代以降の埋没土。
 - 3 にぶい褐(7.5YR5/3)しまりある弱粘性土。炭化物粒・焼土粒等を少量含み、地山より黒色味をおびて見える。
 - 4 明褐(7.5YR5/3)地山の粘性土が不均等に混じり合うようないしあり層。小礫を含み、4'で小礫が目立ち、4''で黄色味増す。
 - 5 暗褐色土(7.5YR3/3)掘り込部分の可能性のあるやや砂質土。
 - 6 灰黄褐(10YR5/2)しまりある粘性土の混土。小礫を不均等に含む

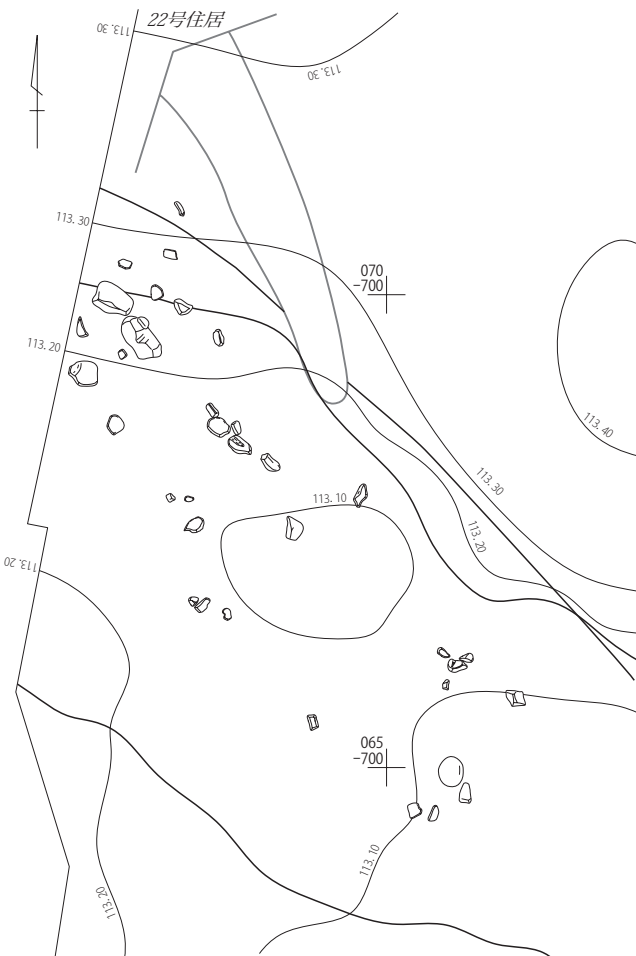
1号列石から出土した遺物はきわめて豊富だった。第88図には出土位置の記録のある実測個体をドットと番号で示した。

土器は127点を図示した。後期前半の堀之内2式を主体としている。この時期の特徴として粗製土器が多く、精製土器の文様が確認されるものも少ない傾向にある。その中で、深鉢の出土量に比して注口土器の出土量が多いことが特徴である。第88図下には図示した以外の注口土器についても■で出土位置を示した。反面、浅鉢形の土器が少ない点も注目される。

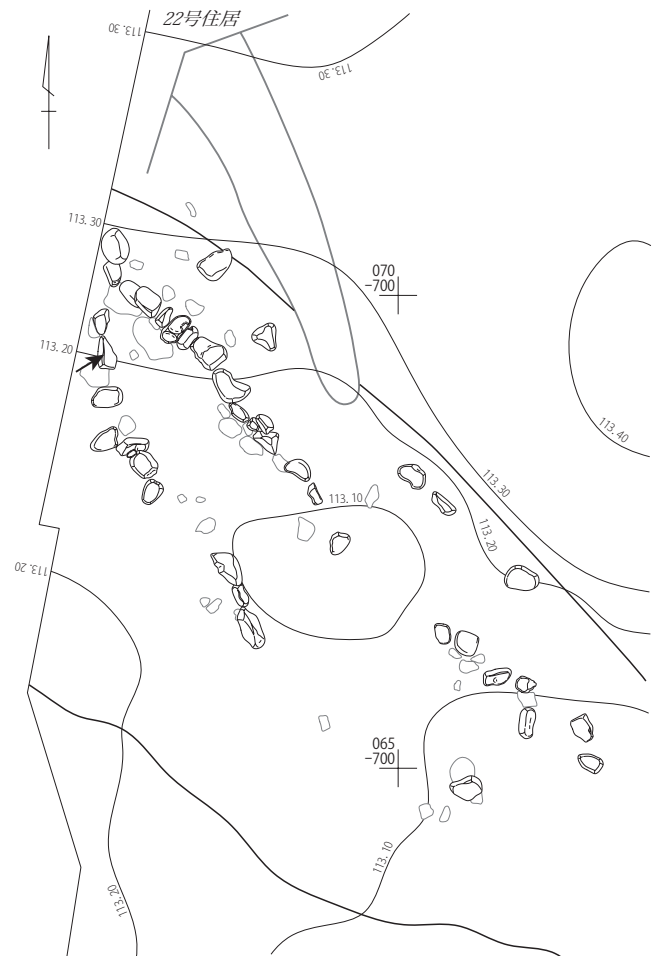
本遺構から出土した縄文土器は、後期堀之内2式が大半を占めている。それ以外では、加曽利B式が少量出土しているのみである。

第89～98図は土器である。1は、深鉢で、胴部上半部が復元できた。口唇部内面に一条の沈線を施す。外面は、直線やU字状の懸垂文を施文する。4は、口唇部内面に横位沈線を一条施文する。外面は、頸部に横位沈線を廻らせ施文域を区画し、格子状の沈線が充填される。5は、捻転状の小突起が付く。渦巻文や8字状貼付文が施文される。頸部文様帯に楕円文や三角文が施文されるが、文様区画内に縄文が施文されない。6も基本的には、5と同様の文様構成をし、文様区画内に縄文が施文されない。同様に縄文の施文されない土器は、25・41等がある。7～43は17・25・41・43を除いて、文様区画内に縄文が充填される。44～48は、口縁が3単位波状になり、突起貼付される小形の深鉢である。8字状貼付文を施文し、頸

列石下の礫



列石第1石



0 1:80 2m

第86図 1号列石東側(1)

部に横位沈線による横位区画文が施文される。表文は摩滅が多く、縄文施文の有無は不明である。61から66は粗製の土器で横位の擦痕が表面に観察できる。68～77・81～83は、底部網代痕の土器である。84・85は、浅鉢である。86・87は、壺形土器。88～114・120・121は注口土器である。115～125は、加曽利B式土器を集めた。126は土偶胴部、127は匙形土製品で、どちらも本遺跡唯一例である。

石器は、石皿4点、磨石2点、凹石12点、多孔石6点、敲石3点、磨製石斧1点、打製石斧10点、石鏃13点、石錘4点などが出土した。土偶、石棒、垂飾品各1点が出土している他、第二の道具と呼べる器種の出土は少ない。出土した石器類の詳細は第VI章1に記した。また、黒曜石の産地分析を行い、第V章3に結果を記した。

図示した以外に、重量で118.9kgの土器が出土し、そのうち約6割を無文の厚手土器が占めていた。石器では395点・重量で16.1kgの剥片類があった。そのうち点数で8割近く、重量で7割近くを硬質泥岩が占めていた。また褐色碧玉や石英など、図示遺物には見られない石材もわずかに含まれていた。

出土土器は、堀之内2式の古段階ごろから見られ、中段階に広がり、新段階でピークとなった後、一気に終息している。加曽利B式期への過渡的な土器も見られるが、堀之内2式にほぼ集約されることから22号住居と列石は、当該期の所産と考えられる。

列石第2石



列石第3石



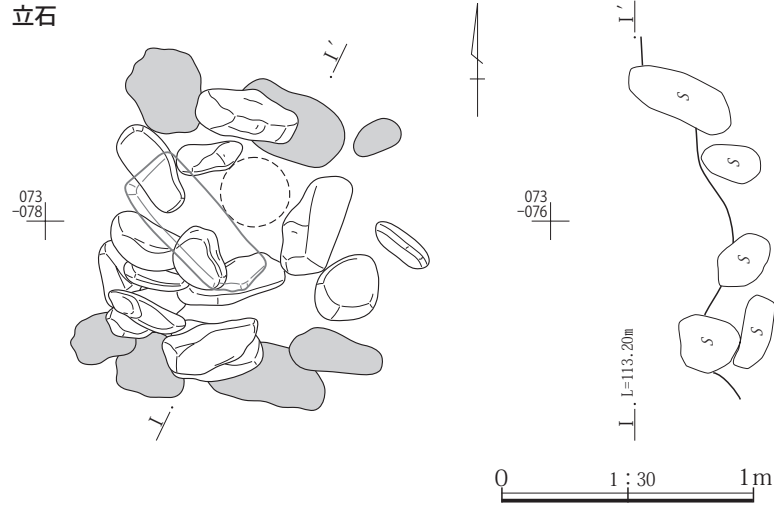
0 1:80 2m

第87図 1号列石東側(2)

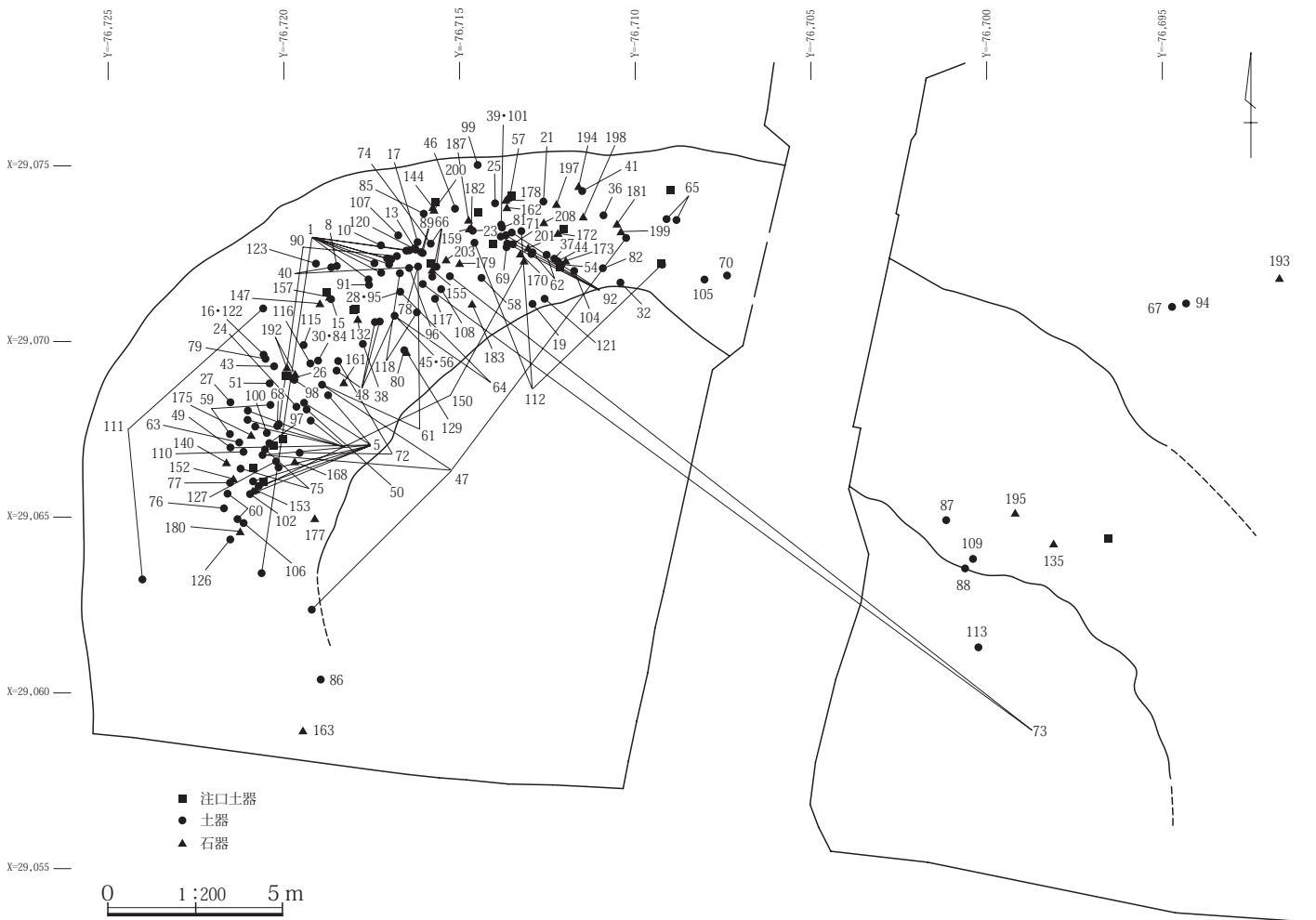
第IV章 調査の内容(縄文時代)

西側の弧状になる石列の中心部分で、22住居列石との接点と推定される場所には、長さ60cm程の四角柱状の礫があり、立石として置かれていたと思われる(第88図上)。

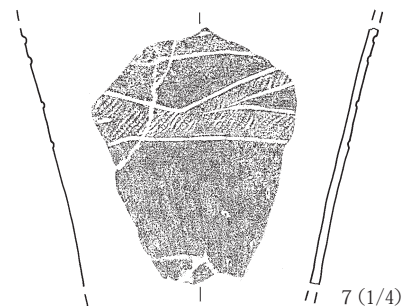
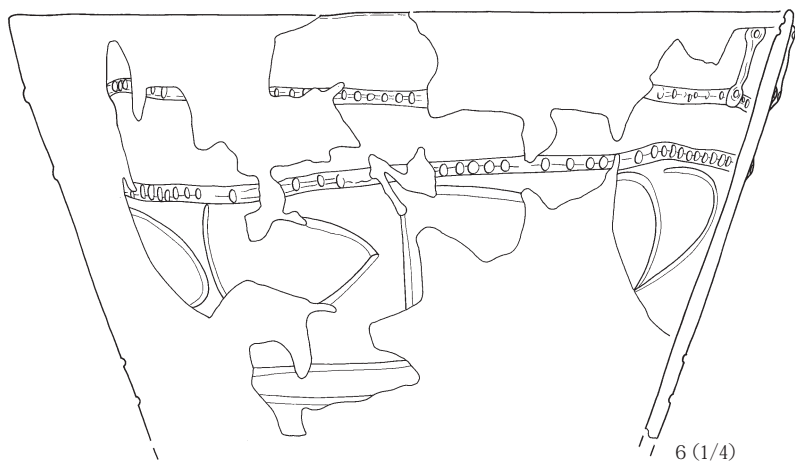
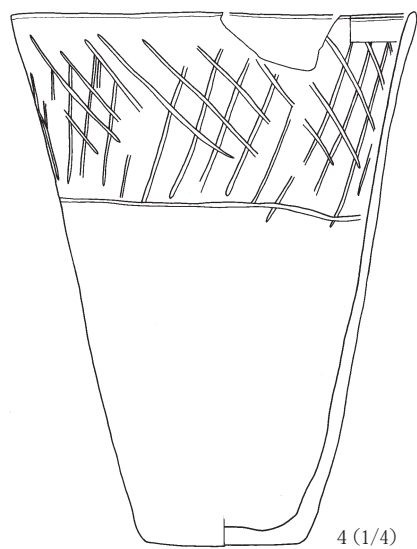
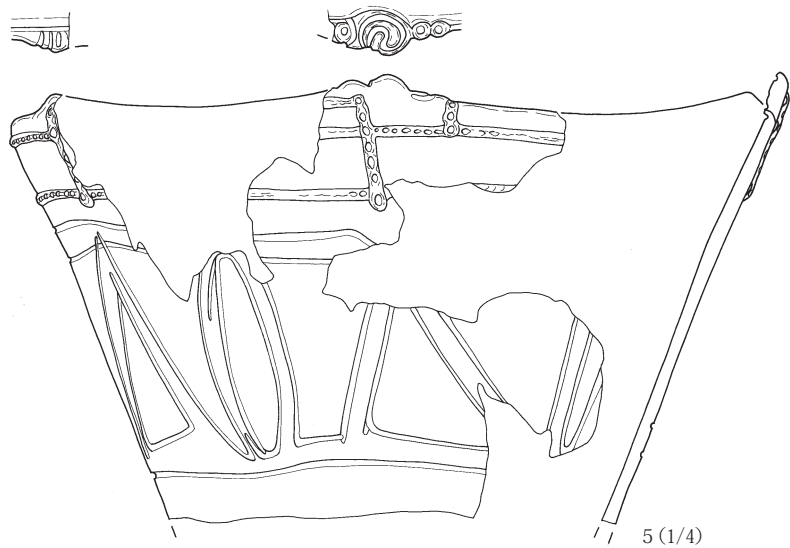
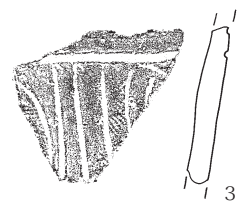
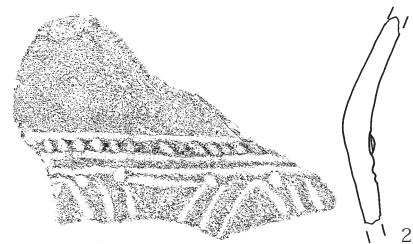
立石の石材は、牛伏砂岩である。この弧状に延びる列石内の立石に接するように、柄鏡形敷石住居西側列石が作られていると推定される。



遺物出土状態



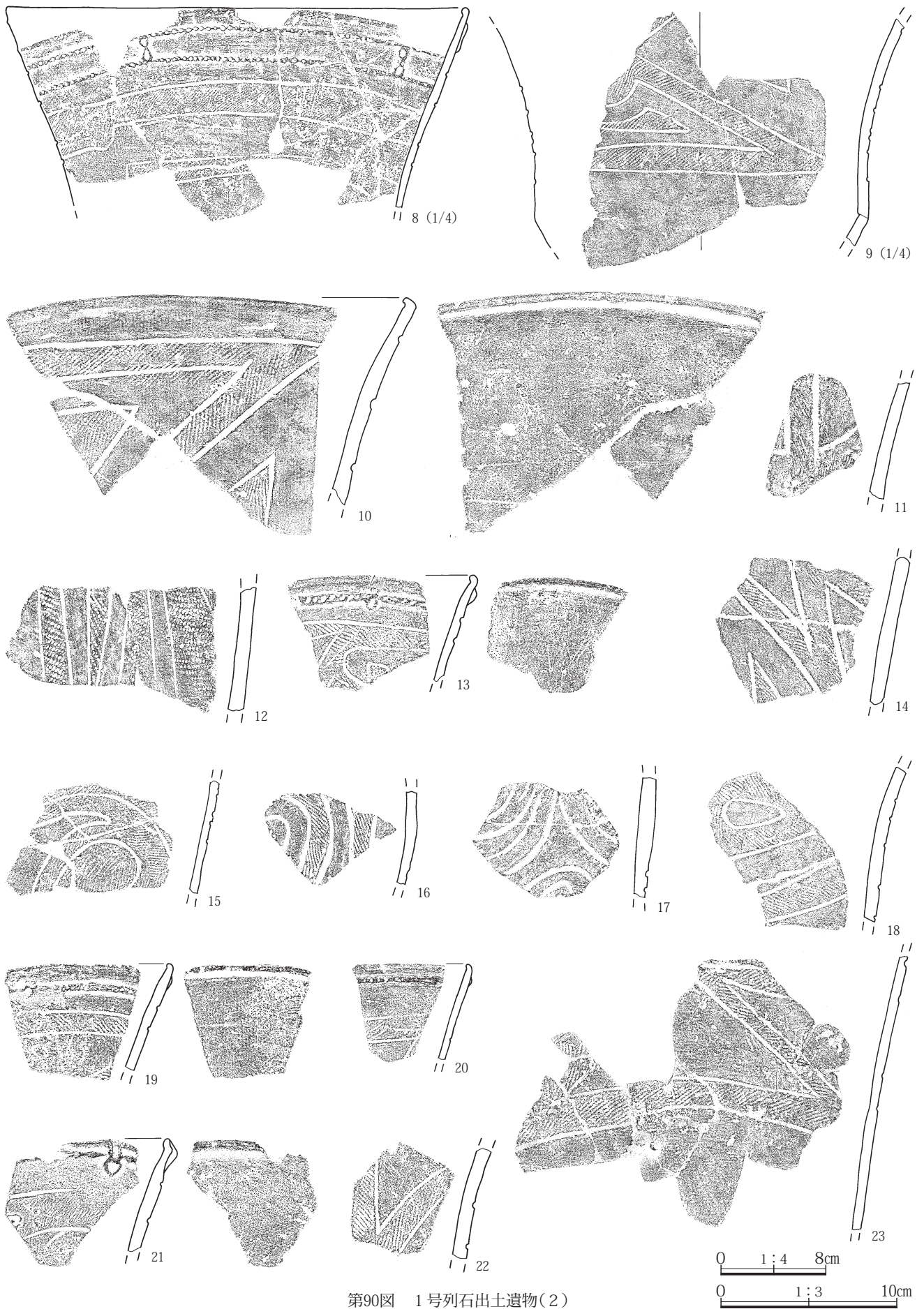
第88図 1号列石立石(上)と遺物出土状態(下)



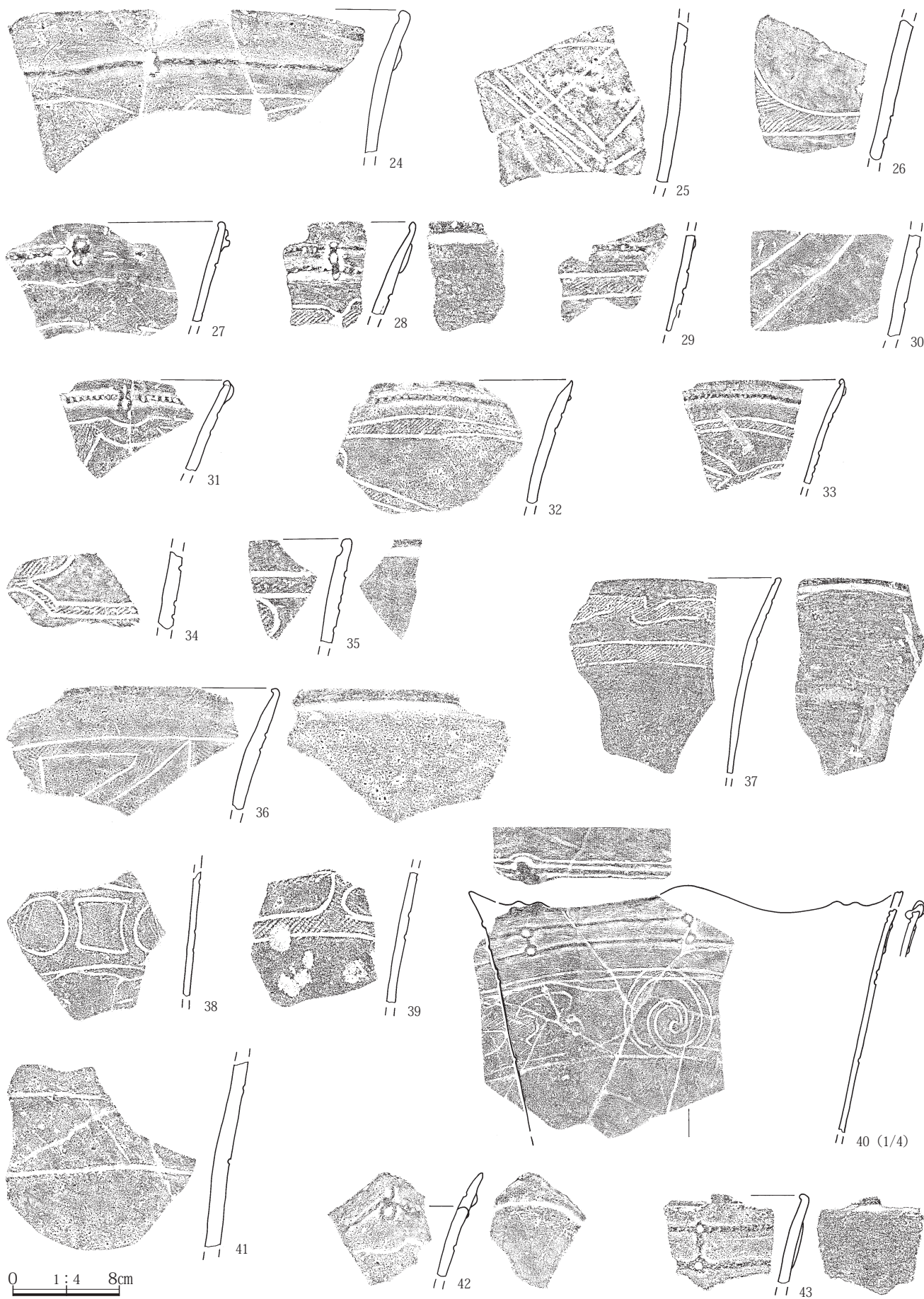
0 1:4 8cm

0 1:3 10cm

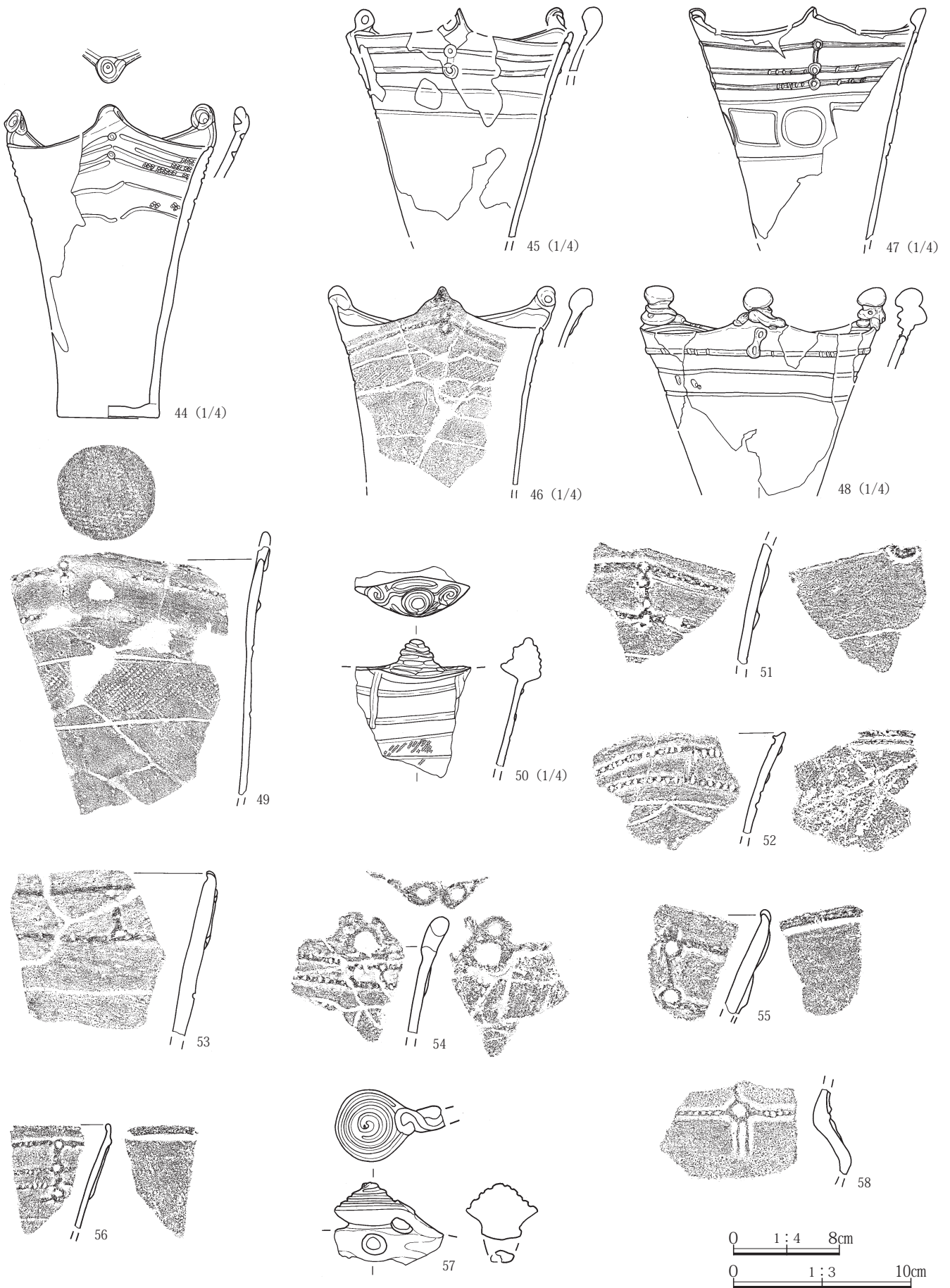
第89图 1号列石出土遺物(1)



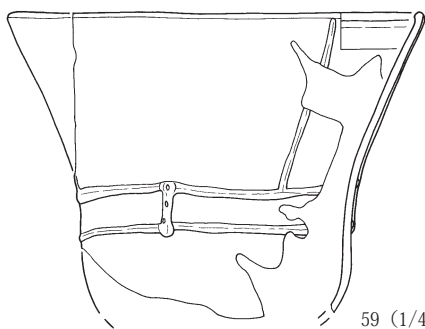
第90図 1号列石出土遺物(2)



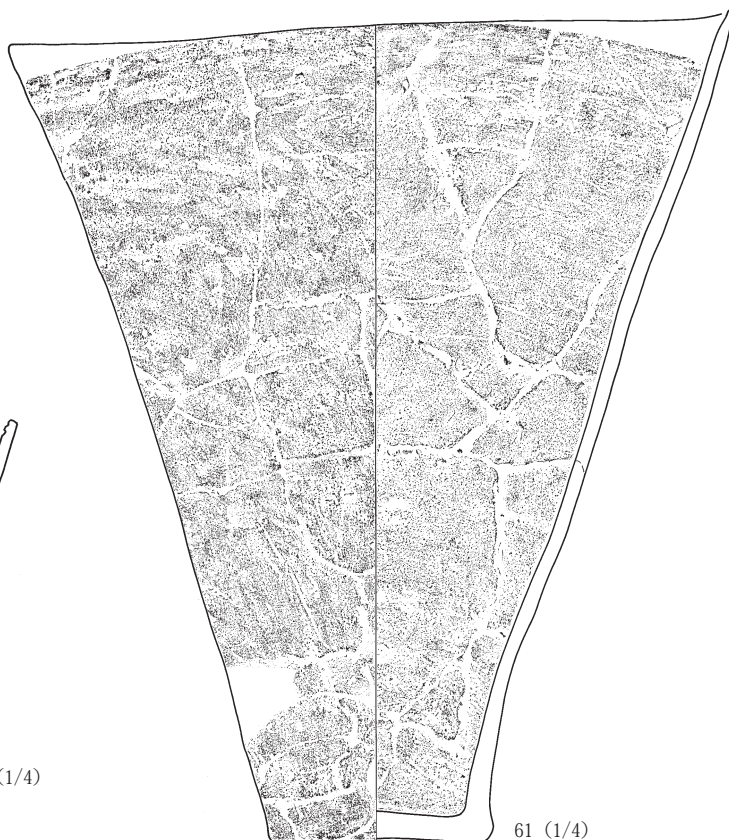
第91图 1号列石出土遺物(3)



第92図 1号列石出土遺物(4)



59 (1/4)



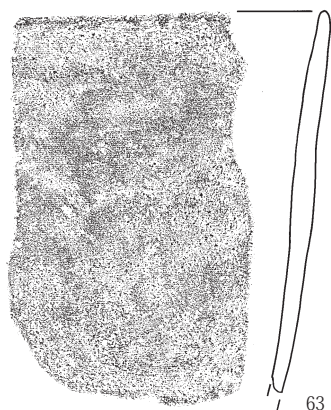
61 (1/4)



60 (1/4)



62 (1/4)



63

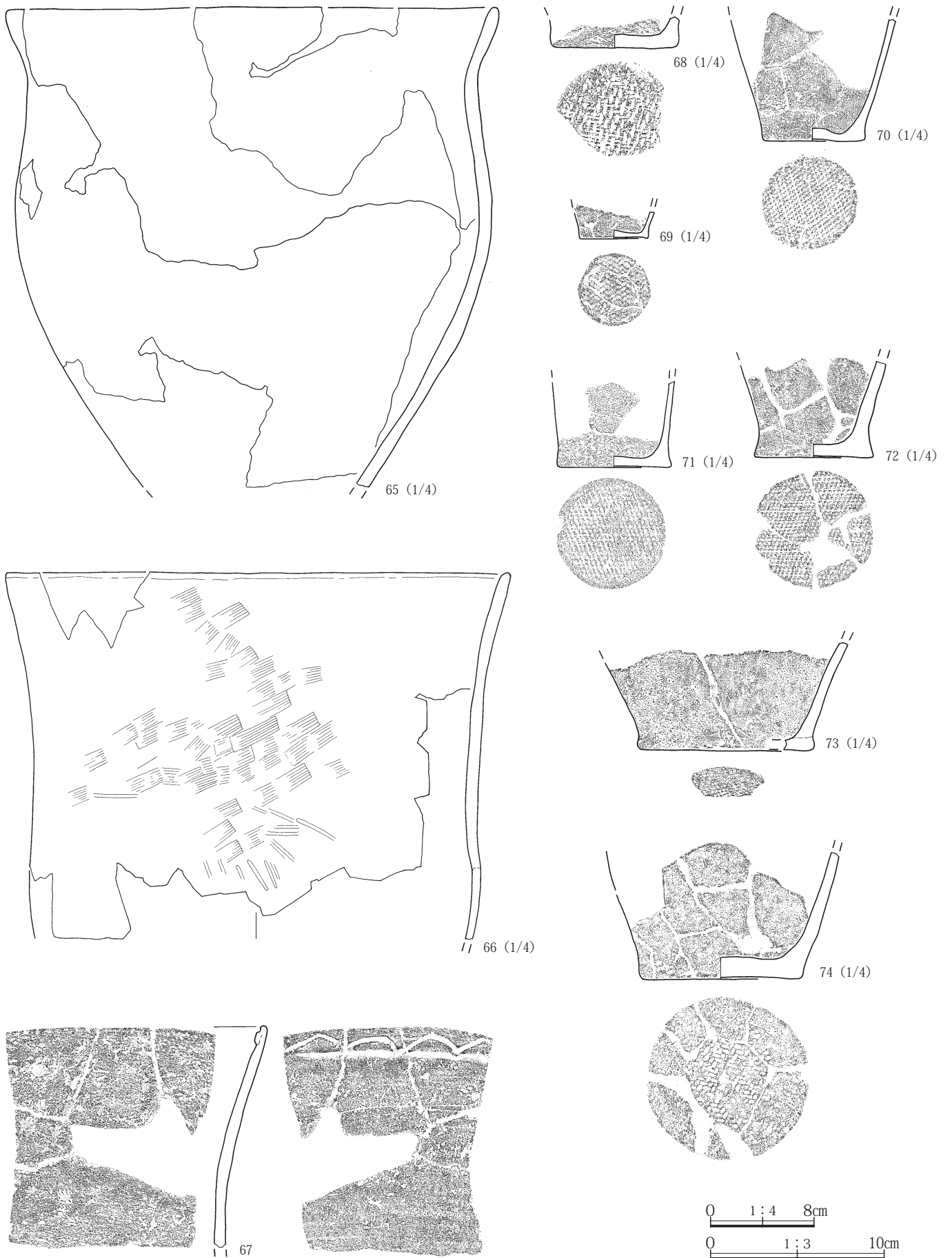


64 (1/4)

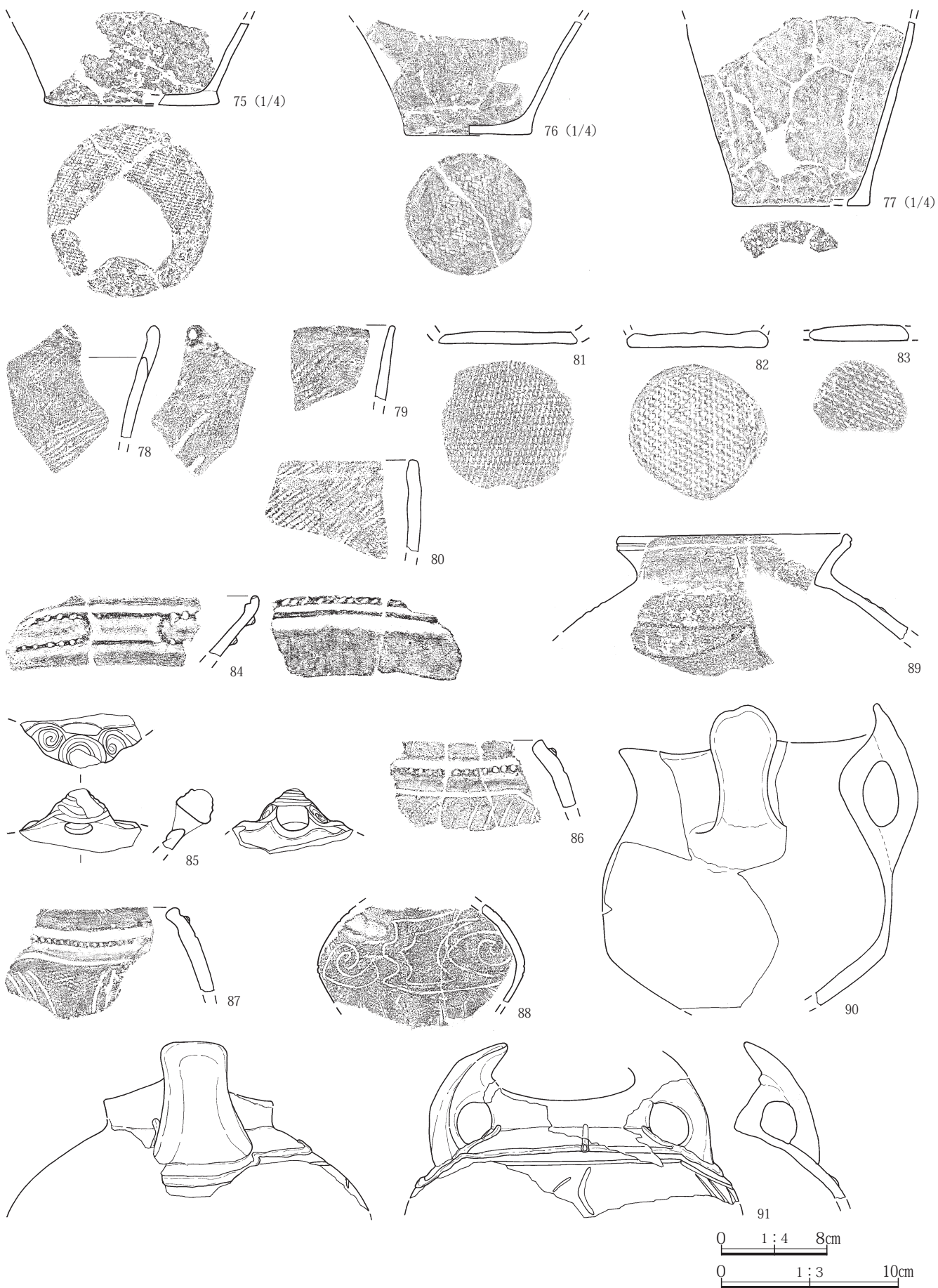
0 1:4 8cm

0 1:3 10cm

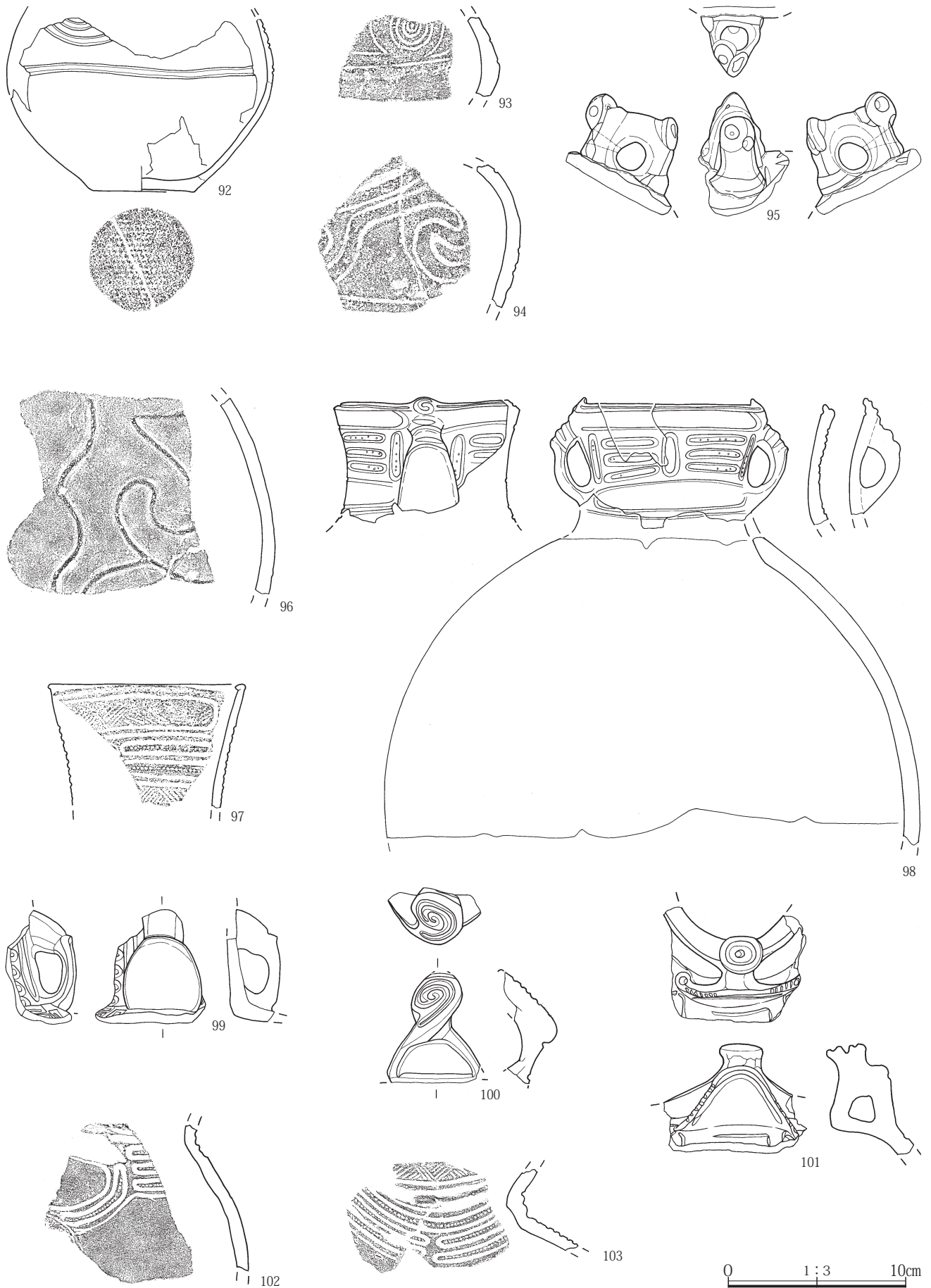
第93图 1号列石出土遺物(5)



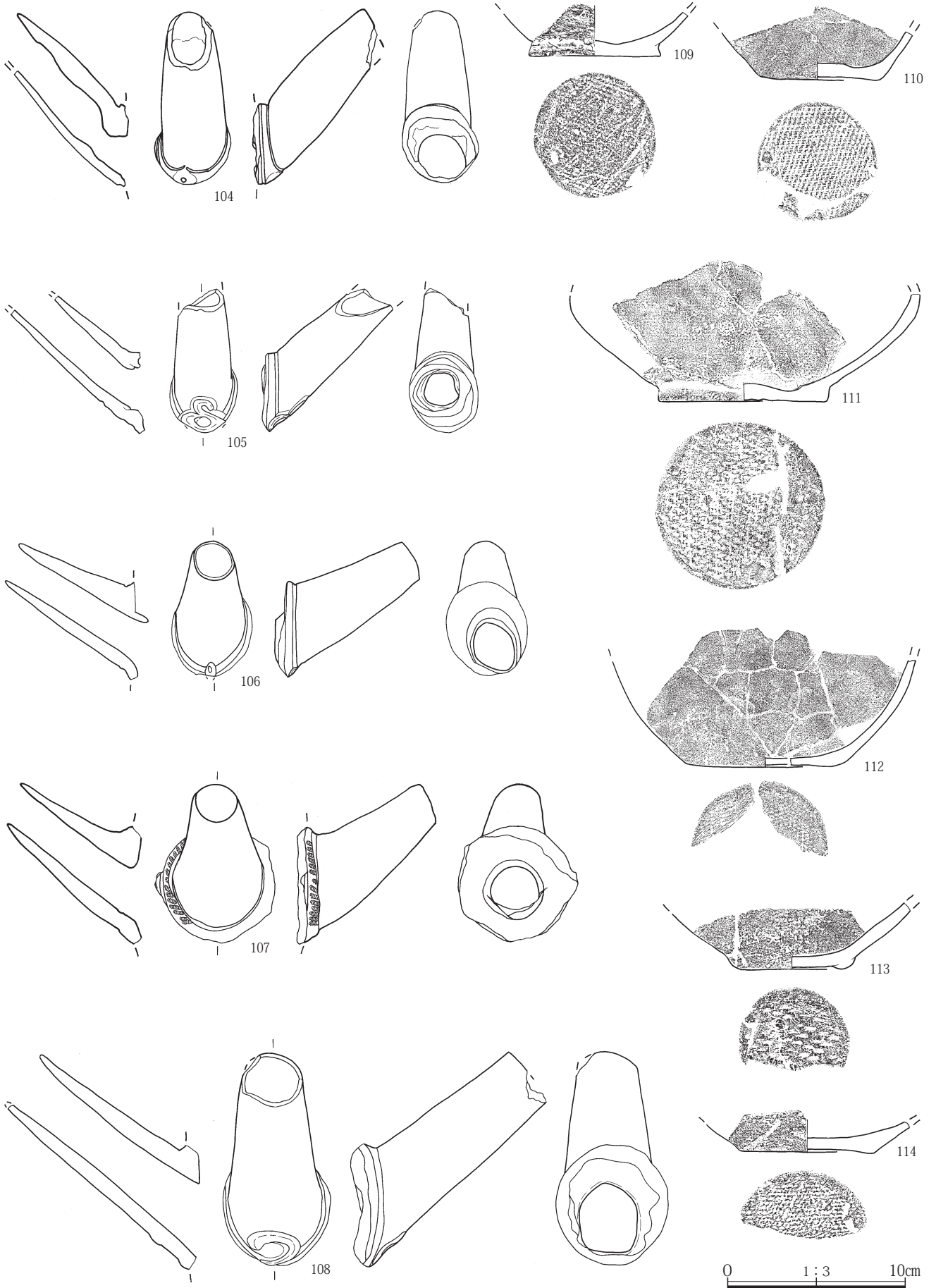
第94図 1号列石出土遺物(6)



第95图 1号列石出土遺物(7)

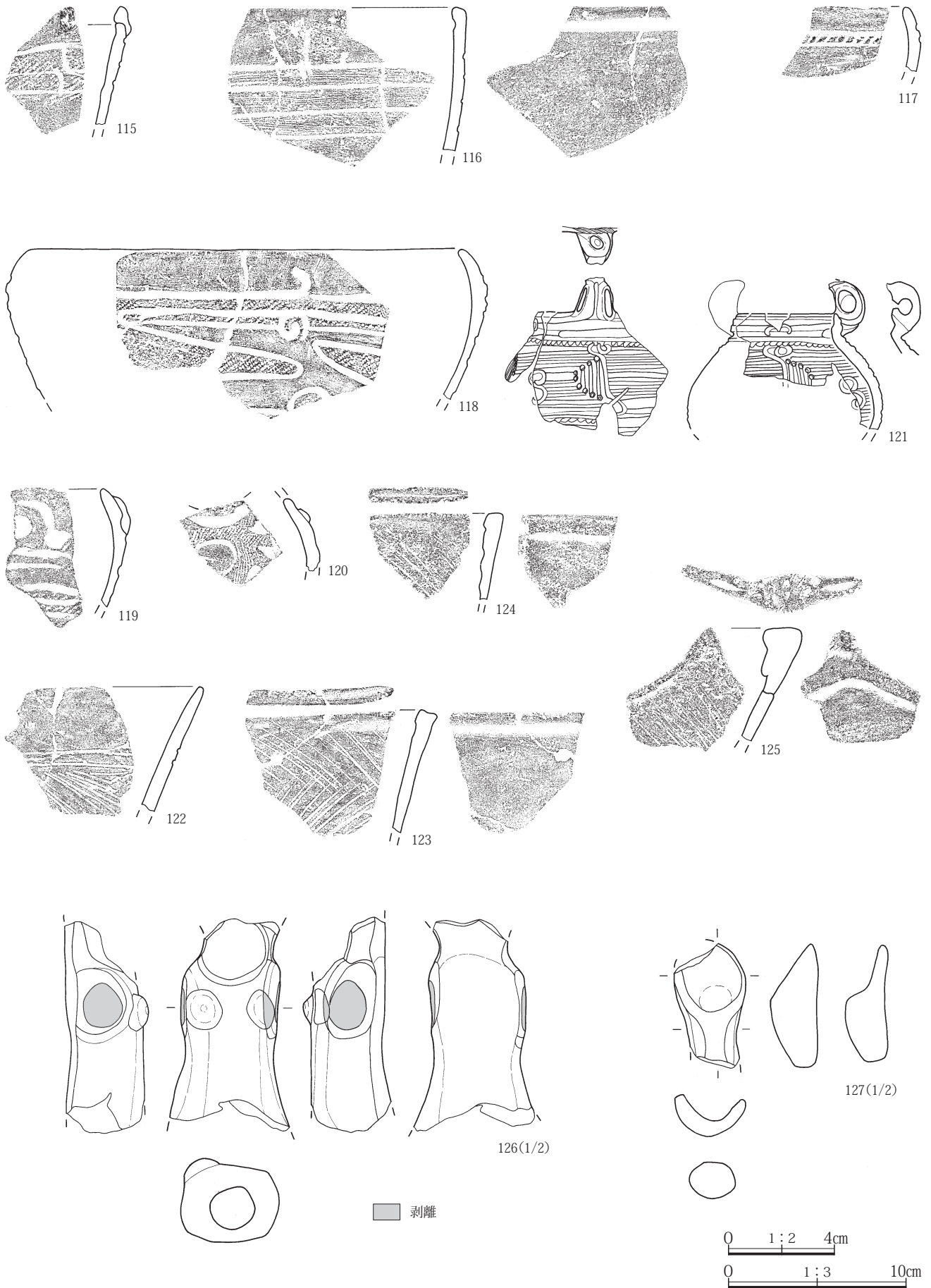


第96図 1号列石出土遺物(8)

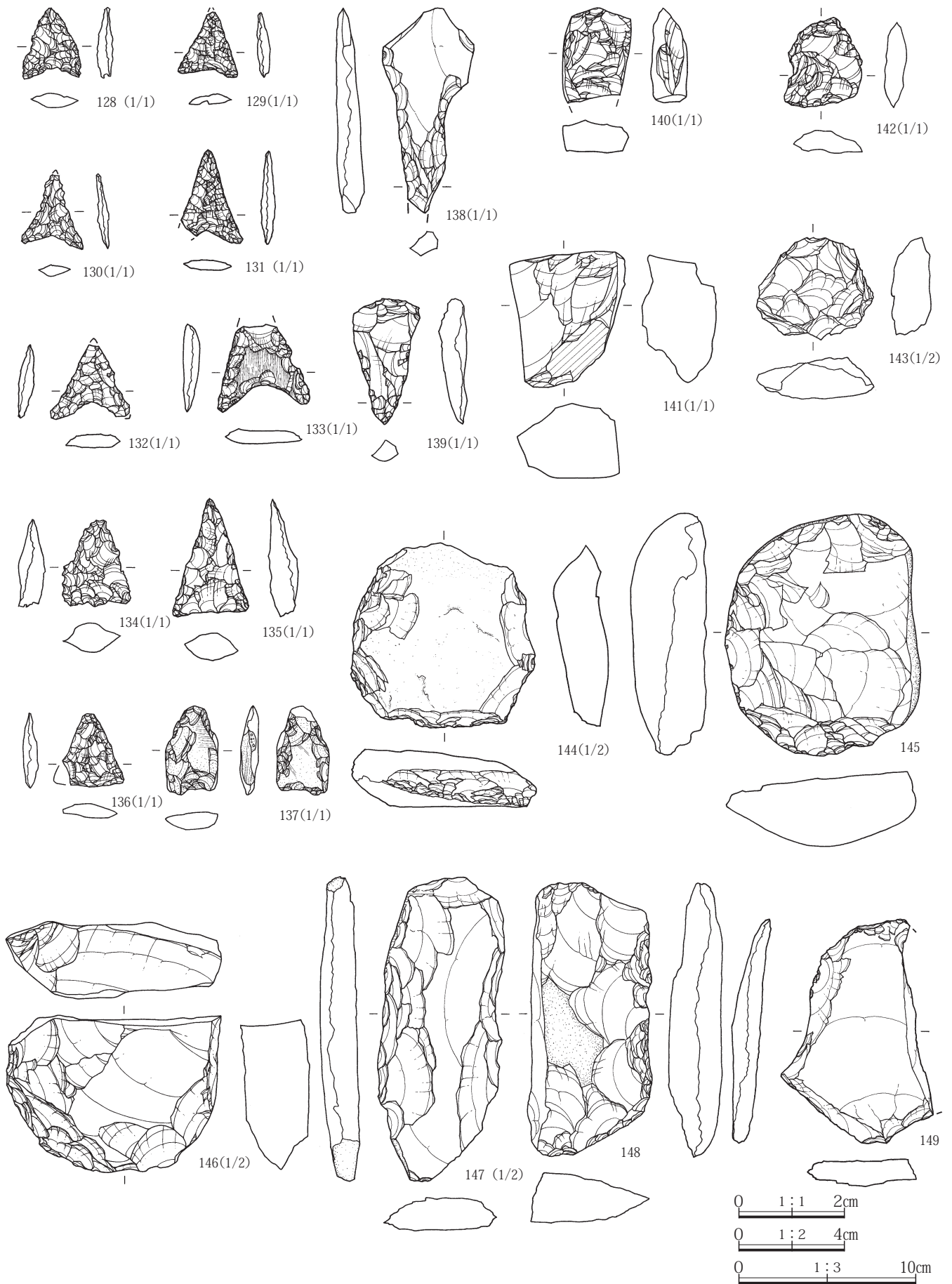


第97图 1号列石出土遺物(9)

第IV章 調査の内容(縄文時代)



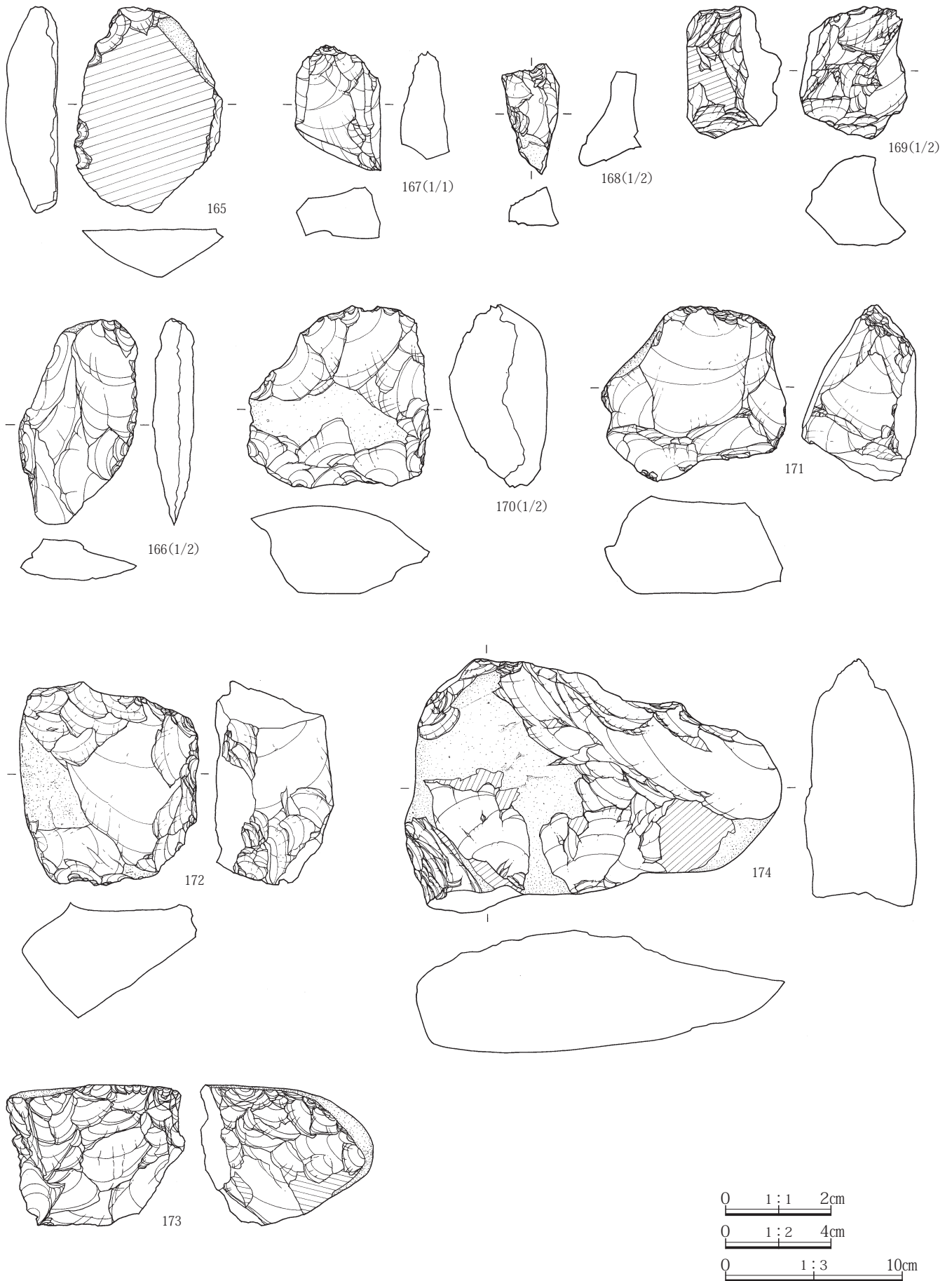
第98図 1号列石出土遺物(10)



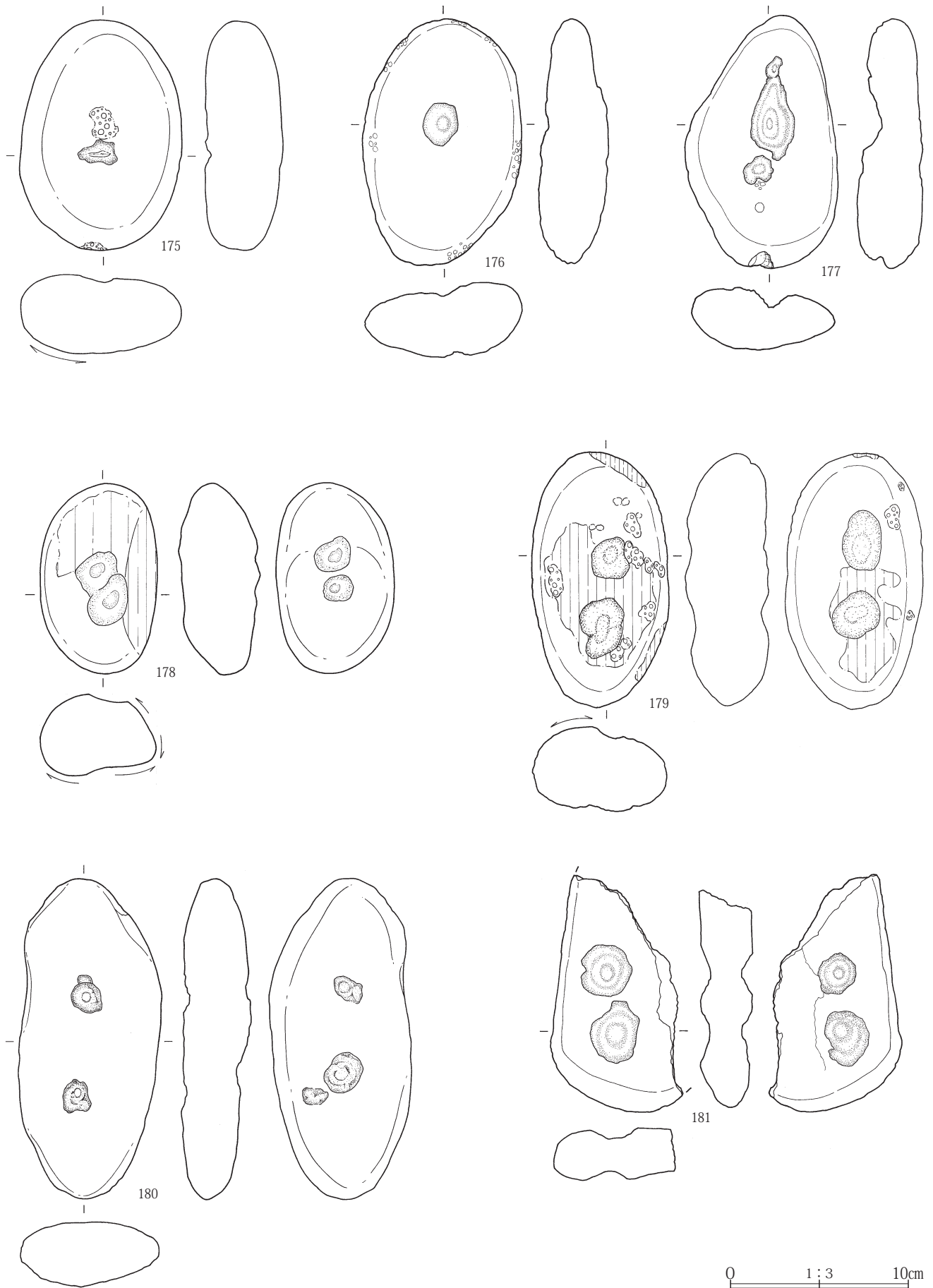
第99图 1号列石出土遺物(11)



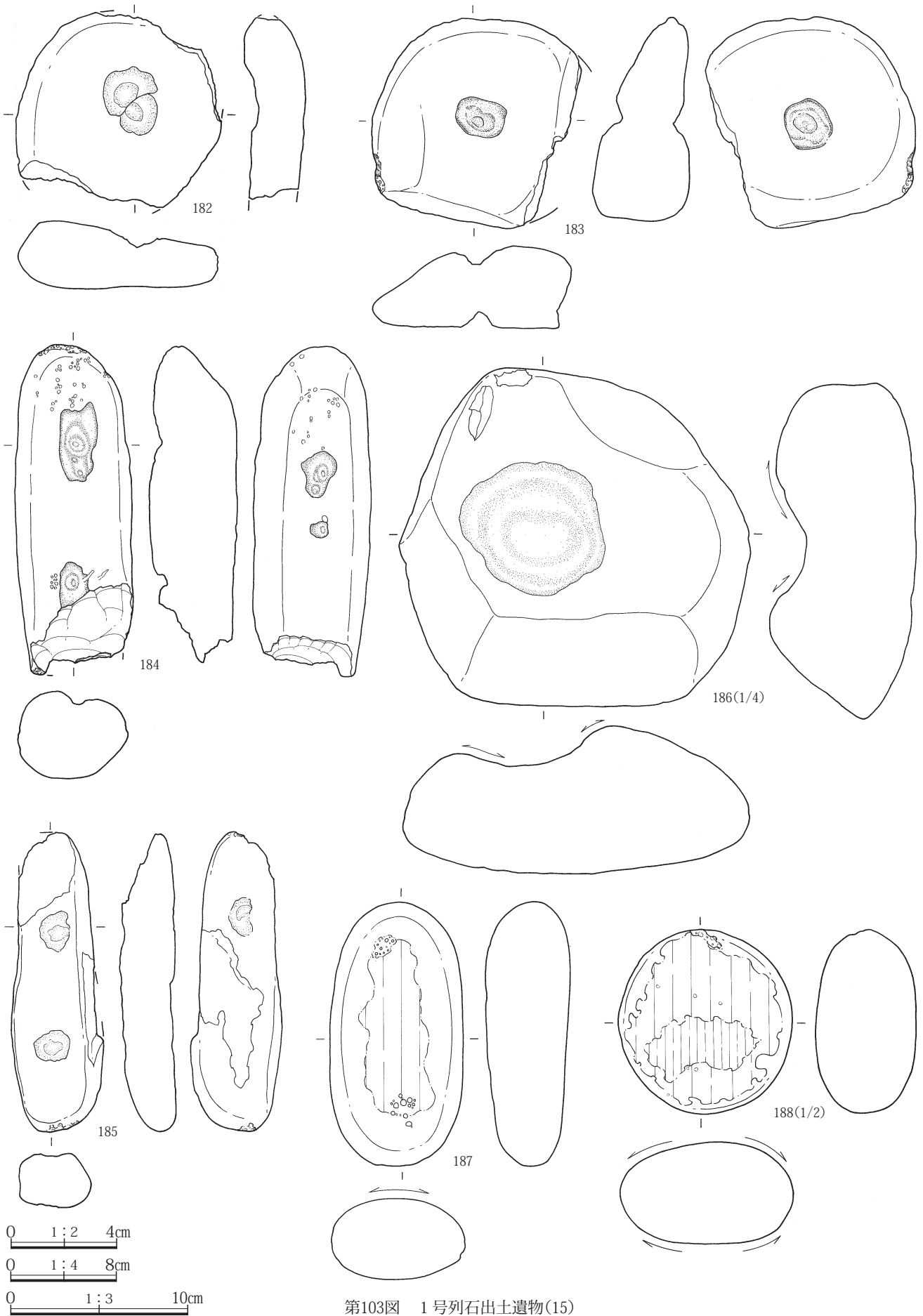
第100図 1号列石出土遺物(12)



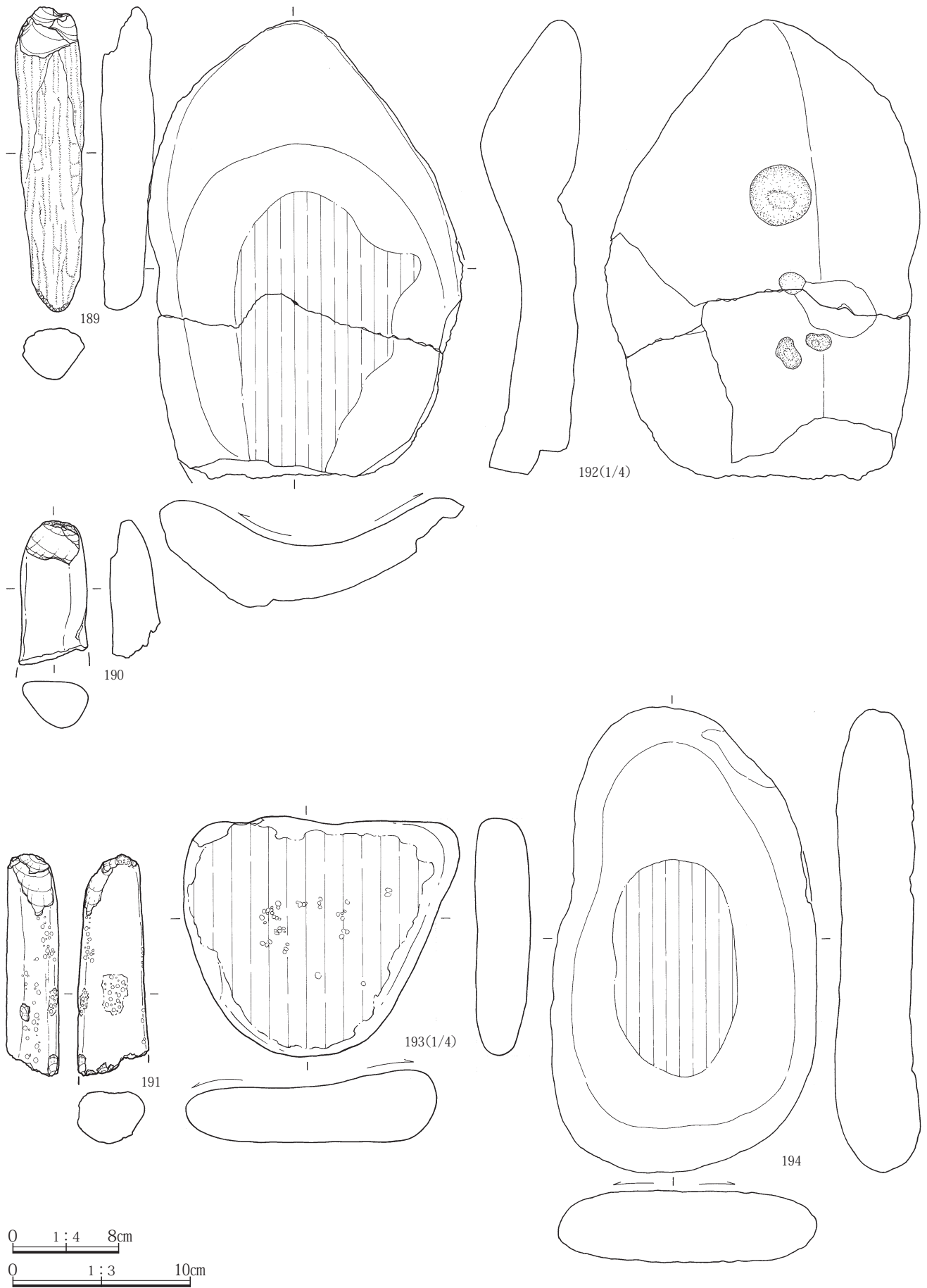
第101图 1号列石出土遺物(13)



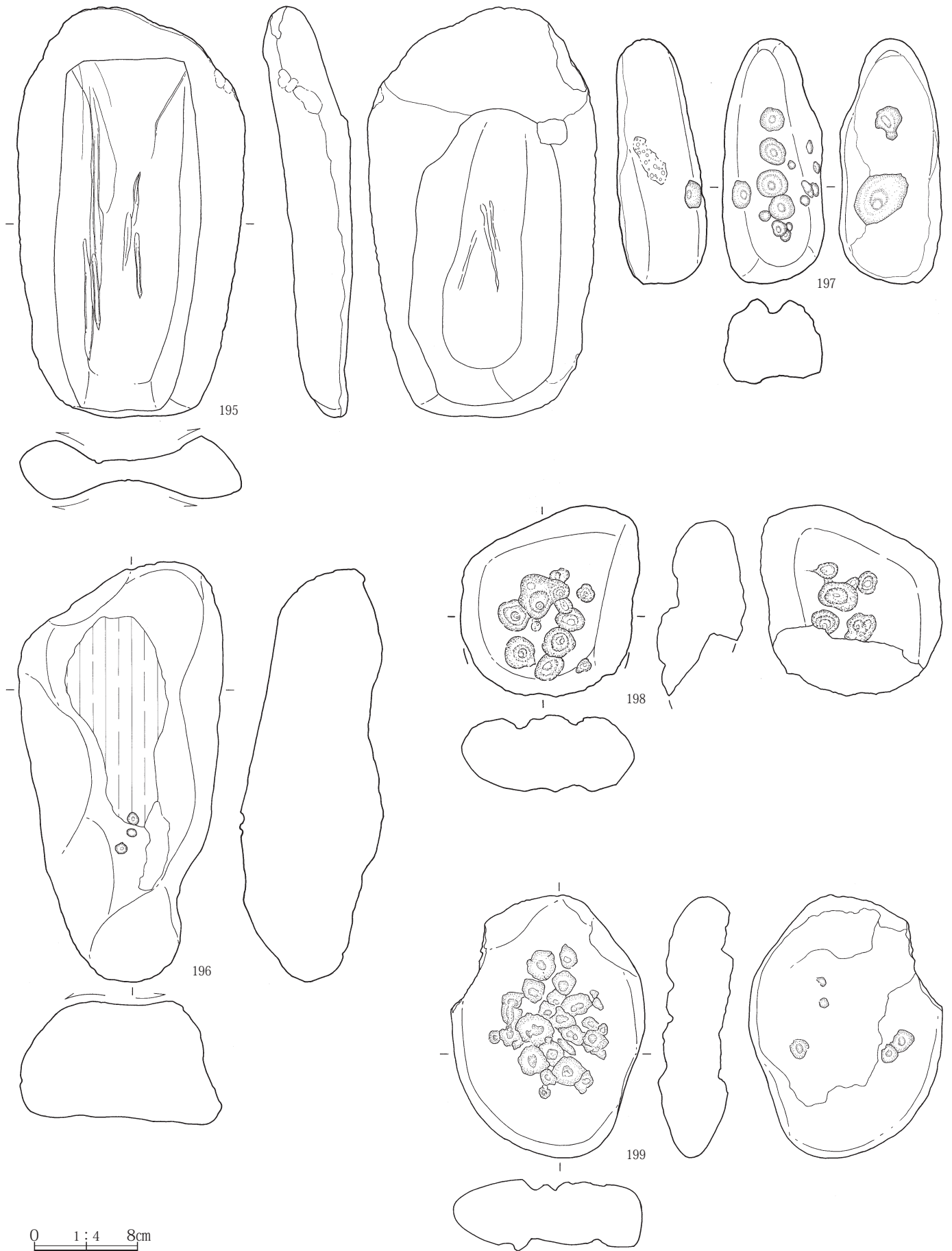
第102図 1号列石出土遺物(14)



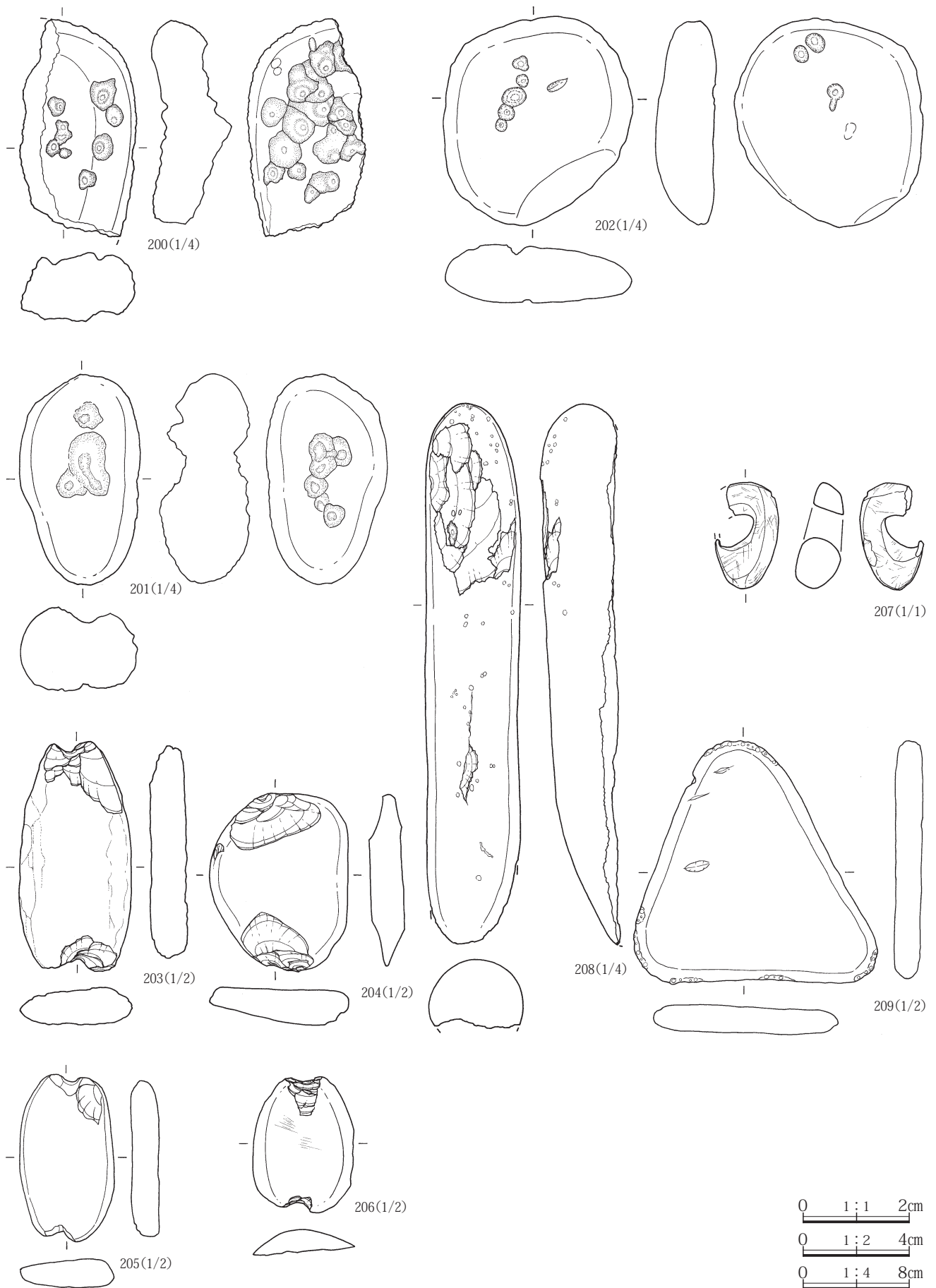
第103图 1号列石出土遺物(15)



第104図 1号列石出土遺物(16)



第105图 1号列石出土遺物(17)



第106図 1号列石出土遺物(18)

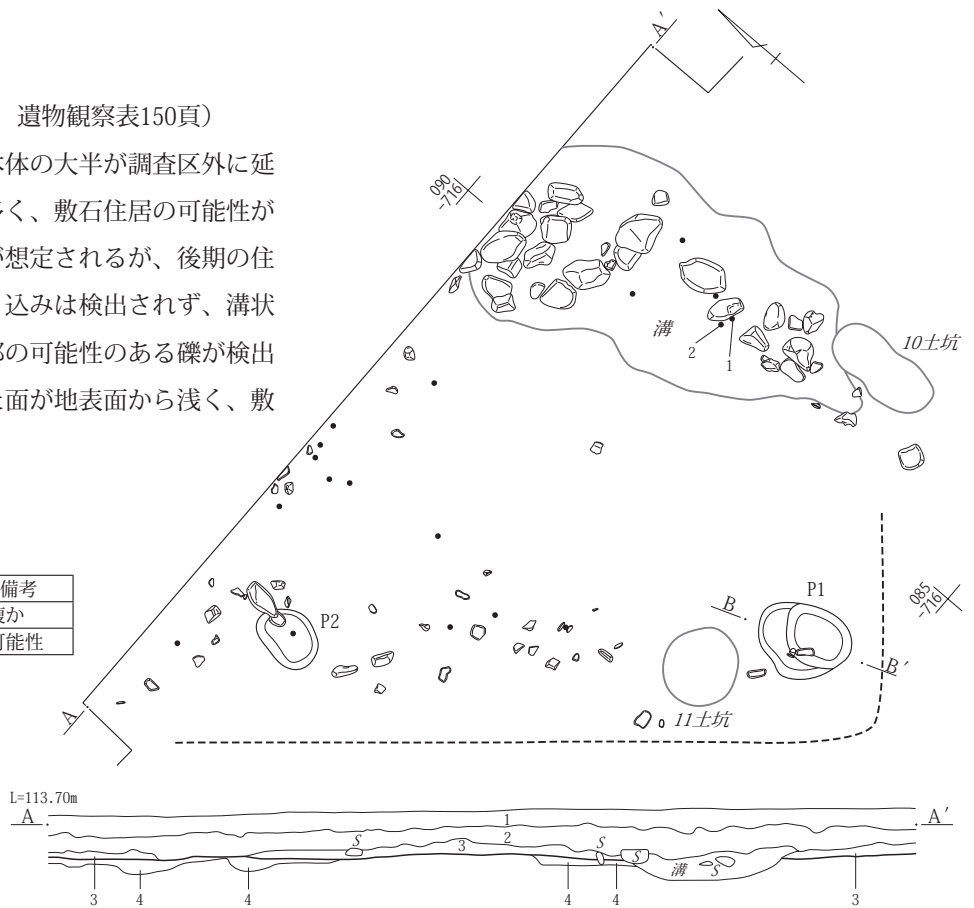
4 6号住居

(第107図 PL.29-⑥・⑦、45 遺物観察表150頁)

1区の北側に位置し、住居本体の大半が調査区外に延びている。平板な礫の出土が多く、敷石住居の可能性はある。住居の形は大型の方形が想定されるが、後期の住居としては不自然である。掘り込みは検出されず、溝状の窪み部分に僅か、敷石の一部の可能性のある礫が検出されたのみである。確認された面が地表面から浅く、敷

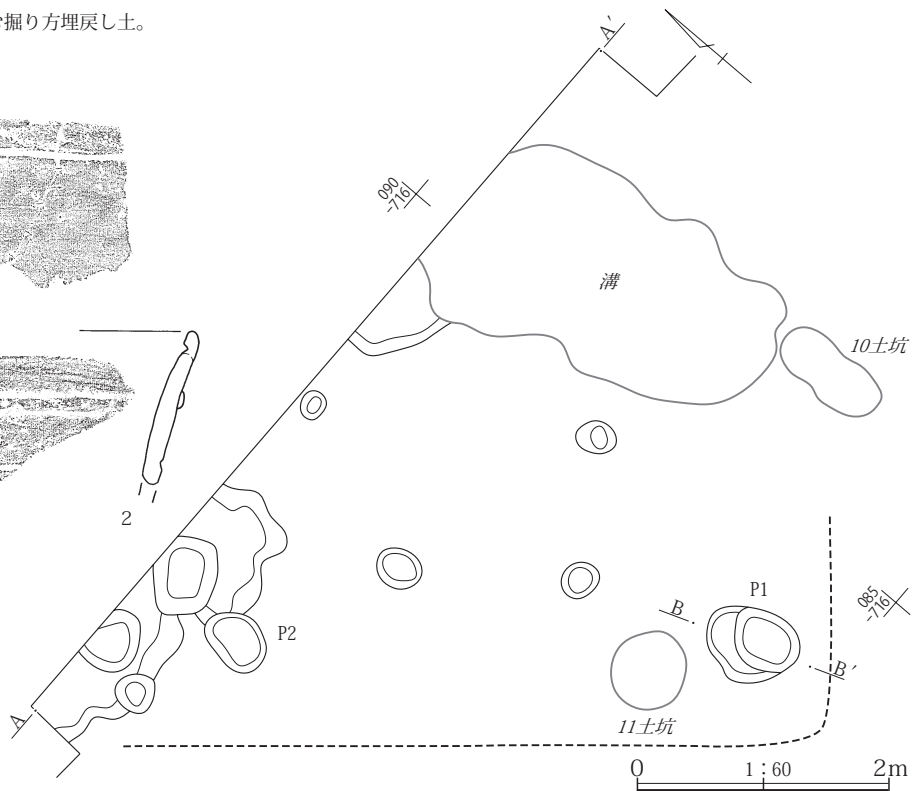
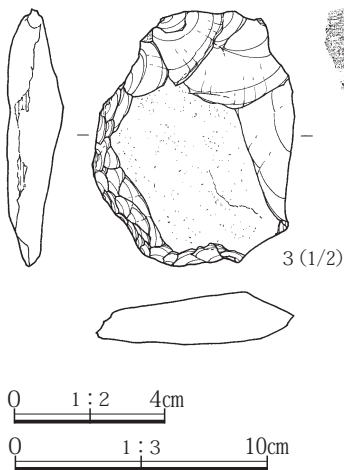
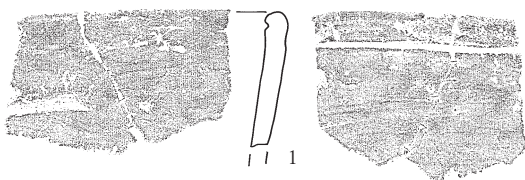
6号住居ピット一覧(単位:cm)

No.	長径×短径×深さ	種類・備考
1	76×58×5・14	2基の重複か
2	53×31×11	主柱穴の可能性



6号住居土層説明

- 1 基本土層I層に近いやや砂質土。砂礫を含む。
- 2 暗褐(7.5YR3/3)住居土層埋没土。白色軽石を少量含み、黄橙色土粒を散見する。
- 3 褐(7.5YR4/6)礫を包含する層。黄橙色土ブロックを少量含む。ピット内の埋没土はやや砂質。
- 4 橙(7.5YR7/6)黄橙色土ブロックを多く含む掘り方埋戻し土。



第107図 6号住居と出土遺物

石の大半が後世の攪乱により壊されたと想定した。敷石の残存状況と遺物の分布から柄鏡形敷石住居と推定した。住居内には、住居に伴う土坑や柱穴と思われる施設が検出されているが、確認面が現地表面から浅く、攪乱を受けさらに住居本体が調査区外にあるため、詳細はつかめていない。

本住居から出土した遺物のうち図示出来るものは、堀之内2式土器片と、剥片石器である。22号住居や1号列石と同時期の遺構である。図示した物以外に、重量で810gの小片や無文の土器、およびや石器の剥片が3点出土している。

5 遺構外の遺物

(第108図 PL.45 遺物観察表150頁)

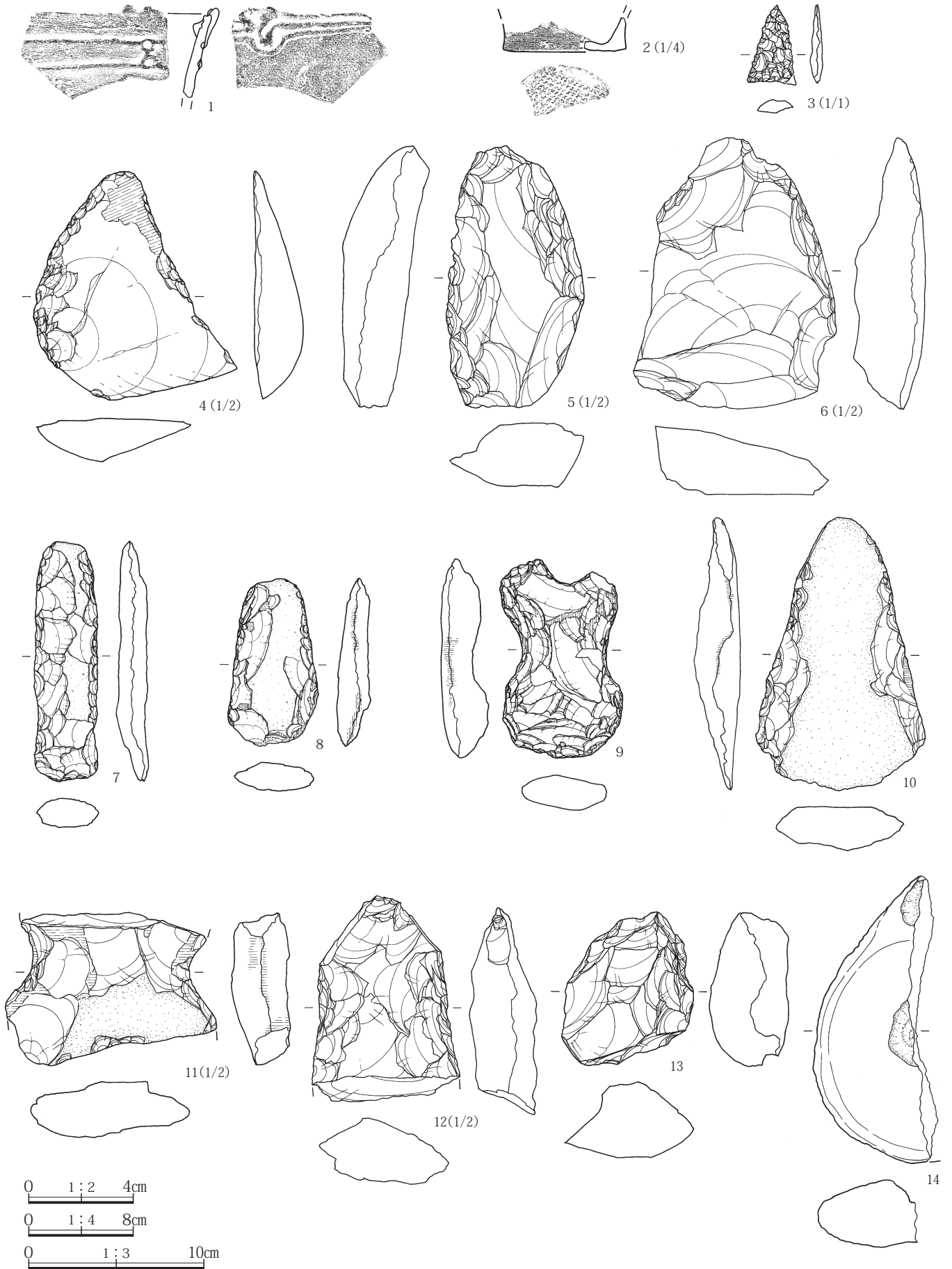
土器2点と石器12点を図示した。本遺跡から出土した縄文時代の遺物の大半は、1号列石と住居に集中し、時期も堀之内2式期にほぼ限定される。本項で扱った遺物も、これらの遺構に関連する遺物と推定される。

縄文土器のうち、1は縄文時代の6号住居と重複する11号土坑の出土、2は1号列石に隣接する4号住居の出土で、それぞれの遺構からの混入と考えられる。いずれも堀之内2式の小片である。

石器は定型的な遺物を中心に選んだ。短冊形や分銅形の打製石斧や剥片石器等である。4～8・11は1区遺構外の遺物である。12は1号列石の隣接する4号住居の出土で、列石からの混入と考えられる。1号列石から14m離れた18号住居から12、40m離れた16号住居から13が出土している。また、3区からの出土遺物(9・10)がわずかに確認される。

遺構外のその他の縄文土器は重量で約6.0kgを測るが、列石出土の土器重量の5%前後であり、土器の大半が列石や22号住居周辺に集中していたことが分かる。遺構外のその他の石器は剥片類が重量で930gを測り、列石出土剥片の約6%で、土器と近似した傾向である。この内の7割が2区の出土であった。

5. 遺構外の出土遺物



第108図 遺構外の遺物(縄文時代)

第V章 分析

1 分析の目的

本章では、整理作業時に行った出土骨類の鑑定および出土黒曜石産地分析について、その目的と成果を記す。

・馬歯および焼骨の鑑定

1区3号土坑出土の馬骨類、3区35号土坑出土の焼骨片について、鑑定を行った。本遺跡では40基の土坑を調査したが、時期決定できた土坑はほとんどなく、遺構の性格および時期を推測するためにも、これら遺物の鑑定が必要であった。

鑑定は古生物学会会員、宮崎重雄氏に委託し、当事業団内でクリーニング作業を行いながら、計測・観察を加えた。その結果、比較的良好な残存状態であった歯より、日本在来馬の中型馬から小型馬の中間に位置する体高が推定され、3号土坑を近世以前の遺構と推定する資料となった。35号土坑の焼骨はヒトの骨と推定されるにとどまったが、同土坑が火葬土坑となり、中世を中心とする時期の所産と確認できた。

・黒曜石の産地分析

1号列石内の縄文土器は、ほとんどが後期堀之内2式に比定されるもので、同遺構の出土石器類もその時期に含まれると考えられた。群馬県内では、本遺跡はこの時期のまとまった資料として代表的な例といえる。黒曜石の産地分析を加えることで、本遺跡での黒曜石流通の傾向を確認し、周辺地域を含め縄文時代の流通を把握する基本資料となり得るもので、非破壊の産地分析を実施することとし、東京学芸大学二宮修治氏・文化庁建石徹氏・国学院大学大工原豊氏のグループに蛍光X線分析作業を委託した。微細片を含む全資料52点のうち、40点の分析が実現できた。

黒曜石の産地は長野県の星ヶ塔および小深沢産が拮抗し、西毛地域周辺遺跡で縄文時代後期中葉から後半にかけてみられる傾向が、遡って本遺跡でも確認できた。

2 塩川砂井戸遺跡出土の馬骨と焼骨

塩川砂井戸遺跡からの人骨・獣骨類の出土は、3号土

坑・35号土坑の2カ所からで、発掘現場からは埋没土とともに取り上げられた。これらを剖出作業を行いながら観察を行った。

I 3号土坑馬骨(表6～10 PL.46)

3号土坑(第53図 PL.17-③・④)は1区北東隅にあり、中世から近世初頭の馬骨が出土した。

長径185cmの不整長方形土坑の一方に偏った位置に、頭骨と保存不良の肢骨が残存していた。肢骨はおそらく前肢であろう。当初は全身埋存していたものと思われる。

頭蓋は土塊ごと取上げられ、室内で剖出作業を行うことができたことで、馬歯は保存が極めて良好な状況での調査が可能となった。

頭蓋骨はほとんど失われているものの、臼歯は上顎・下顎、左顎・右顎すべての歯がほぼ完存し、下顎骨も槽間縁と前歯部は欠損しているものの、臼歯部はほぼ完存していた。

上顎歯列弓、下顎歯列弓の咬合は極めて正常で、咀嚼が健全に行われていたことを示している。ただし、上顎の第2後臼歯では左臼歯・右臼歯共に咬合面舌側の原錘部が、大きく欠損している。これは剖出作業中、土塊中から取り出し中に発見されたもので、発掘作業時に傷ついたものではなく、埋存以前にすでに損傷していたものである。これに対応する下顎第2後臼歯には左・右ともなんの損傷も起こっていない。今のところ損傷の原因は不明である。

年齢：9才前後の壮齡馬

西中川・松元(1991)に従って、歯冠高より年齢を推定すると、9才前後の壮齡馬となる。ヒトでいえば30歳前後に相当する血氣盛んな年齢であるが、若くしてなぜ死に至ったかは知る手掛かりがない。

体高：日本在来馬の中型馬と小型馬の中間に相当

体高を知るのに最も有効な四肢骨が現存しないので、歯列長を参考にせざるを得ない。歯列長は老齡馬になるにつれて徐々に減少し、逆に咬耗の進んでない幼齡馬では大きめの計測値となる。この点注意を要するが、本馬

表6 上顎臼歯計測値

	第2前臼歯		第3前臼歯		第4前臼歯		第1後臼歯		第2後臼歯		第3後臼歯	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
歯冠近遠心径	35.3	34.0	26.0	25.7	25.6	25.4	22.6	22.6	23.0	22.6	26.2	25.6
歯冠頬舌径	21.6	21.7	24.1	23.7	24.1	24.2	23.2	22.9	22.4+	22.4+	21.4	20.8
原錘幅	8.9	8.8	12.3	12.0	13.6	13.6	12.0	11.9			14.4	13.9
頬側歯冠高	32.7	32.0	40.4	37.2	46.2	39.0+	39.0	38.0	48.2	43.8	47.6	49.5
舌側歯冠高	32.4	33.8	38.7	37.1	46.0	40.9	38.6+	34.6	44.6	41.8	41.4	43.6+
咬合面の傾斜	110°	110°	96°	96°	92°	93°	86°	88°	86°	85°	65°	67°
中附錘幅	4.1	3.9	4.7	4.4	4.5	4.4	3.2	3.5	3.9	3.4	3.6	3.8

単位：mm

表7 下顎臼歯計測値

	第2前臼歯		第3前臼歯		第4前臼歯		第1後臼歯		第2後臼歯		第3後臼歯	
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
歯冠近遠心径	33.1	31.2	26.0	26.2	25.6	25.3	23.6	23.4	24.1	24.3	29.3	29.5
歯冠頬舌径	14.5	13.8	15.5	15.3	15.2	15.3	13.6	11.9+	13.3	12.9	12.5	12.4
頬側歯冠高		28.7		40.7		47.6		40.1		43.9		44.6
下後錘谷長	6.9	6.2	9.3	9.7	8.7	8.8	7.7	7.7	7.8	8.2	8.0	8.0
下内錘谷長	14.3	14.4	12.0	11.8	10.4	11.2	7.1	7.2	8.7	8.1	10.0	10.4
doubleknot長	14.0	8.2	16.3	16.0	14.7	14.7	13.3	13.0	12.7	12.5	11.8	11.9
下内錘幅	6.2	5.4+	6.3	6.8	5.8	5.7	4.1	4.3	4.4	4.7	4.7	4.8

単位：mm

のように9才程の壮齡馬だと、老齡化による歯列長の減少はあってもごくわずかで、体高を知る一つの目安とすることは、意味があると考えられる。

そこで、西中川・松元(1991)の示す現生馬の計測値に照らしてみると、ほぼ日本在来馬の中型馬と小型馬の中間に位置する。体高120cm代の個体を思わせる。

II 35号土坑焼骨(PL.46)

35号土坑(第56図 PL.19-⑩)は3区北東隅にあり南北方向に長軸を持つ、火葬土坑と推定される中世の遺構である。長径110cmの隅丸方形の土坑中から多量の炭化物、焼土粒とともに、焼骨片が多数出土した。

骨片は最大で26.2×16.6mmほどで、やや大きめのものが25片、土と一体化しているものを加えると100片以上を数える。

骨片は白色～灰白色で、亀裂・歪みのあるものもあって、典型的な焼骨の特徴を呈している。骨片表面には骨軸方向のスジが観察され、このことと埋存状況・環境を考え合わせると人骨と判断される。人骨の焼細骨片でも時に歯根が発見されることもあり、ある程度の年齢推定に役立つことがあるが、ここでは見当たらない。年齢・性別を知る手掛かりに欠ける。

主な参考文献・引用文献

- 西中川駿・松元光春(1991)遺跡出土骨同定のための基礎研究—特に在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較「古代遺跡から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、164-188.
- 野村晋一(1977)「概説馬学」西川書店

表8 上顎臼歯列長

	全臼歯列長	前臼歯列長	後臼歯列長
左	155.9	86.0	70.5
右	155.6	85.5	70.4

単位：mm

表9 下顎臼歯列長

	全臼歯列長	前臼歯列長	後臼歯列長
左	158.0	83.0	75.5
右	157.0	81.4	76.3

単位：mm

表10 切歯計測値

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高
左上顎第1切歯	16.7	10.4	37.2+
左下顎第1切歯	14.6	9.0+	47.7+
左下顎第2切歯	16.6	9.3	45.9+

単位：mm

3 塩川砂井戸遺跡1号列石出土 黒曜石資料の産地分析

1. はじめに

塩川砂井戸遺跡(群馬県高崎市吉井町塩川)の1号列石より出土した黒曜石資料の産地分析を実施したので、その方法と得られた結果について報告する。

2. 黒曜石の産地分析

2-1. 資料(試料)

産地分析に供した資料は、塩川砂井戸遺跡1号列石より出土した黒曜石資料40点である。調査所見より、いずれの資料も縄文時代後期前半堀之内2式に帰属するものと考えられる。分析資料を表11、写真1(127頁)・写真2(128頁)に示した。

2-2. 産地分析の方法

産地分析に用いる各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光X線分析(非破壊法)を用いた。測定条件を以下に示す。

分析装置：セイコーインスツルメント製エネルギー分散型蛍光X線分析装置SEA-5120S、線源ターゲット：モリブデン(Mo)管球、電圧：45kV、X線照射径：φ1.8mm、測定雰囲気：大気、測定時間：100秒、定量分析の計算法：FP法、標準試料：なし

黒曜石の主成分元素であるケイ素(Si)、チタン(Ti)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、ナトリウム(Na)、カリウム(K)の8元素のうち、Fe、Ca、Kの3元素は、黒曜石の産地間の識別・分類に特に有効であり、産地分析の指標元素となる。筆者らはこれら3元素と、これらと挙動に相関性のある微量成分元素であるマンガン(Mn)、ストロンチウム(Sr)、ルビジウム(Rb)を加えた6元素による検討が東日本の黒曜石の産地分析に有効であることを示してきた。本研究においても、この6元素の測定をおこなった。

測定に際しては機器に備えられたCCDカメラの画像観察により、X線照射範囲(分析範囲)をなるべく平滑かつ(原礫面等でない)新鮮な面とすることを心がけた。

産地分析のための基準資料として、東日本の代表的な黒曜石産地に島根県隠岐を加え、北海道白滝・置戸・十

勝三股・赤井川、青森県小泊・出来島・鶴ヶ坂・深浦、岩手県雫石・折居・花泉、秋田県金ヶ崎・脇本、宮城県湯の倉・色麻・秋保、山形県月山、新潟県板山・上石川・佐渡、栃木県高原山・日光、長野県小深沢・男女倉・星ヶ塔・麦草峠、神奈川県畑宿、静岡県上多賀・柏峠、東京都神津島(恩馳島)、島根県隠岐(久見)の各産地黒曜石を使用した。各産地黒曜石の分析値(代表値)を表12に示した。

産地分析は、先の6元素の測定の結果をもとに、Word法によるクラスター分析を実施し、分析資料(1点ずつ)と産地資料群の併合距離を検討し、産地資料と分析資料の類似性(非類似性)を検討した。クラスター分析には、IBM社製SPSS Statistics 20を用いた。

2-3. 産地分析の結果

表11に6元素組成(岩石学の慣例に従い酸化物の形で表記、以下同様)を示した。また、個々の分析資料と産地資料群の分析値をクラスター分析した結果、最も類似性の高い(非類似性の低い)産地資料との併合距離が比較的小さい(0.1以下)場合は、これを推定産地とし、第1表に示した。

本分析により得られた塩川砂井戸遺跡1号列石出土黒曜石の産地構成は、星ヶ塔産19点、小深沢産17点、男女倉産3点、不明1点と推定された。

小深沢産と星ヶ塔産がほぼ拮抗する在り方は、後期中葉～後葉の安中市五料野ヶ久保遺跡(包含層)や天神原遺跡(C区)でも同じ傾向が認められている(鈴木 1997、建石ほか 2008、大工原 2011等)。本遺跡の分析結果もこれを追認するものである。しかし、今回の分析で男女倉産が3点検出されている点は注目されよう。これまで、群馬県内において後・晩期で男女倉産の事例は、藤岡市中栗須滝川Ⅱ遺跡(後・晩期包含層)の1点しか確認されていない(建石ほか 2011)。さらに周辺地域をみても、埼玉県秩父地域の関場遺跡(後期中葉～晩期前葉)1点、栃木県神畑遺跡(安行1～大洞C2式期)2点のみである(杉原ほか 2009、建石ほか 2011)。下諏訪町教育委員会の宮坂清氏によれば、星ヶ塔原産地の下流にある観音沢の黒曜石は、男女倉産と判別されることを指摘されている(2013年秋、原産地巡見の際にご教示)。後・晩期における男女倉産とされるものは、本来の男女倉産ではなく、観音沢の黒曜石であった可能性も考えておく必

第V章 分析

要があろう。

黒曜石産地分析を実施するにあたり、東京学芸大学文化財科学研究室が所有する各産地黒曜石とともに、國學院大學博物館所有の「吉谷昭彦博士寄贈黒曜岩資料」のうち北海道・東北地域の産地黒曜石を基準資料として利用させていただきました。

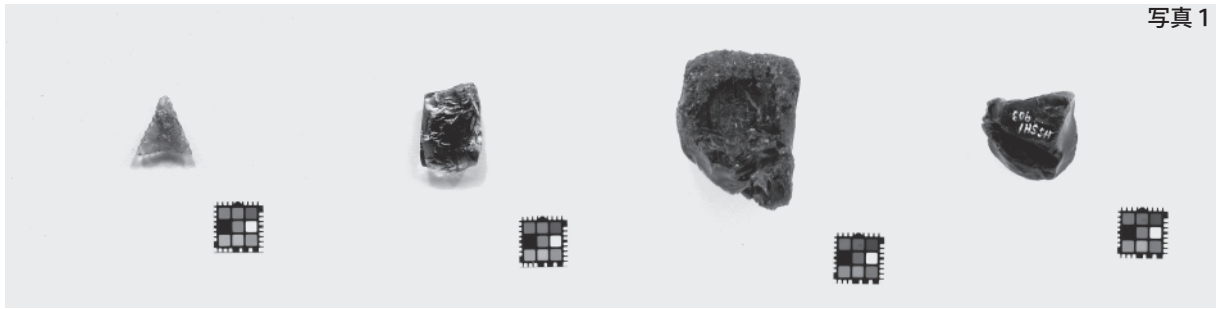
文献

國學院大學研究開発推進機構考古学資料館編 2008『國學院大學考古学資料館要覧2007 吉谷昭彦博士寄贈黒曜岩資料』國學院大學研究開発推進機構考古学資料館

杉原重夫・嶋野岳人・鈴木尚史・長井雅史・柴田 徹・金成太郎 2009『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集—』明治大学学術フロンティア推進事業事務局・明治大学古文化財研究所
鈴木正男 1997「関越自動車道(上越線)関連遺跡の黒曜石分析結果」『行田二本杉遺跡(八城南遺跡)』群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会
大工原 豊 2011「縄文時代における黒曜石の利用と展開—北関東の様相を中心として—」『日本考古学協会2011年度栃木大会 研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会編
建石 徹・菅頭明日香・津村宏臣・二宮修治 2008「黒曜石の縄文石器—産地分析の現状と天神原遺跡出土資料の産地分析—」『ストーンツールズ』安中市ふるさと学習館
建石 徹・三浦麻衣子・村上夏希・井上優子・朴 嘉瑛・津村宏臣・二宮 修治 2011「栃木県・群馬県内諸遺跡出土黒曜石の産地分析」『日本考古学協会2011年度栃木大会 研究発表資料集』日本考古学協会2011年度栃木大会実行委員会編

表12 東日本の主な産地黒曜石の6元素組成
(6元素の酸化物の総和を100としたときの百分率)

都道府県	産地	MnO	Fe ₂ O ₃	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O
北海道	白滝	1.5	38.9	0.2	11.8	1.0	46.7
	置戸	1.3	37.6	0.4	18.2	0.9	41.7
	十勝三股	1.6	36.1	0.3	16.6	1.0	44.4
	赤井川	1.5	36.2	0.3	18.0	0.8	43.1
青森	小泊	0.9	38.4	0.4	20.8	0.9	38.7
	出来島	4.9	32.7	0.7	19.6	0.6	41.4
	鶴ヶ坂	1.7	36.6	0.4	15.1	1.0	45.2
	深浦	1.4	55.9	0.0	4.1	0.6	37.9
岩手	雫石	2.0	44.9	0.6	23.1	0.5	28.8
	折居	2.0	45.7	0.6	20.6	0.6	30.5
	花泉	2.1	45.7	0.6	22.3	0.5	28.7
秋田	金ヶ崎	1.9	39.1	2.1	26.9	0.6	29.4
	脇本	5.4	24.1	0.5	22.3	1.1	46.6
宮城	湯の倉	1.9	56.0	1.0	27.3	0.2	13.6
	色麻	3.8	55.3	1.1	24.3	0.2	15.2
	秋保	2.3	58.4	0.9	29.0	0.2	9.3
山形	月山	4.3	30.0	0.6	17.4	0.8	46.8
新潟	板山	3.3	29.0	0.4	17.7	1.1	48.5
	上石川	1.7	34.5	0.6	19.9	0.9	42.4
	佐渡	0.9	36.7	0.3	14.7	1.1	46.3
栃木	高原山	1.4	48.5	0.6	20.7	0.6	28.2
	日光	1.7	62.1	0.8	27.5	0.1	7.8
長野	小深沢	3.7	28.2	0.1	14.7	1.8	51.5
	男女倉	2.5	32.0	0.4	16.1	1.0	48.0
	星ヶ塔	3.1	27.3	0.2	13.8	0.9	54.6
	麦草峠	1.6	33.8	0.7	17.2	0.6	46.0
神奈川	畑宿	2.4	61.4	1.0	23.9	0.1	11.3
静岡	上多賀	1.7	53.1	0.9	24.2	0.2	19.9
	柏峠	1.4	51.1	0.6	24.0	0.3	22.7
東京	神津島	3.2	33.8	0.5	19.1	0.6	42.8
島根	隠岐	1.6	45.1	0	10.2	1.1	42.1



分析No.1
小深沢

分析No.2
小深沢

分析No.3
小深沢

分析No.4
星ヶ塔

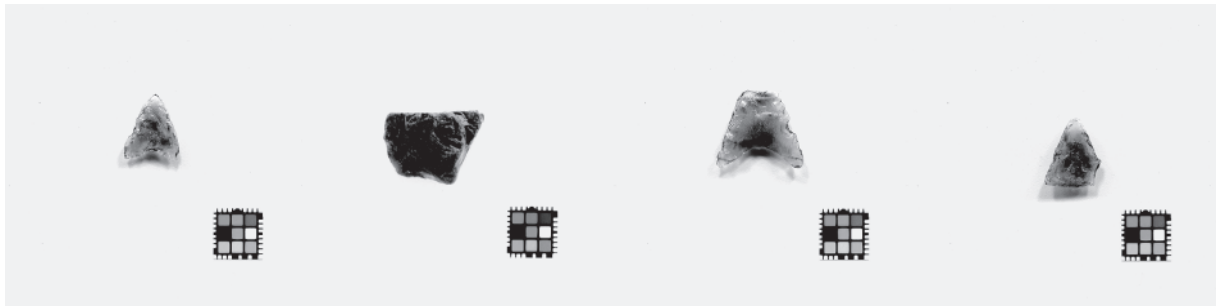


分析No.5
星ヶ塔

分析No.6
小深沢

分析No.7
星ヶ塔

分析No.8
星ヶ塔

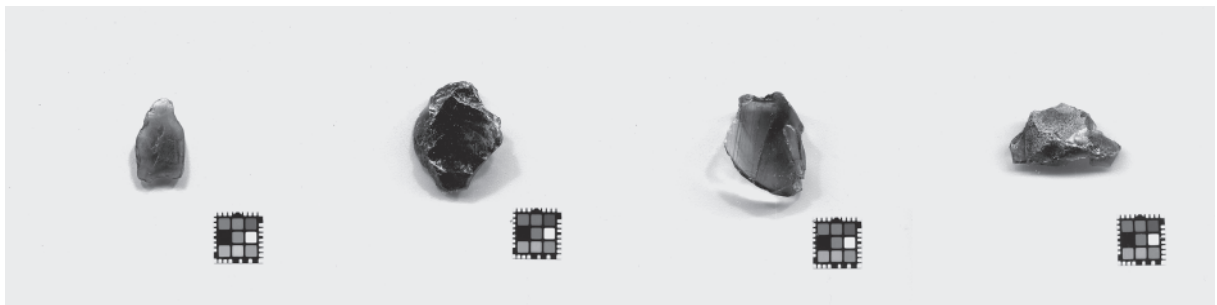


分析No.9
小深沢

分析No.10
星ヶ塔

分析No.11
星ヶ塔

分析No.12
小深沢

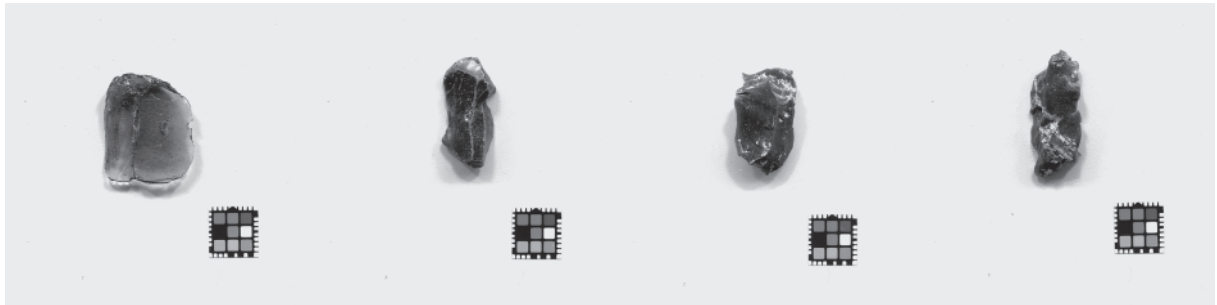


分析No.13
小深沢

分析No.14
星ヶ塔

分析No.15
星ヶ塔

分析No.16
小深沢



分析No.17
小深沢

分析No.18
星ヶ塔

分析No.19
男女倉

分析No.20
男女倉

第 109 図 塩川砂井戸遺跡の分析資料 (写真 1) 縮尺 : 2/3

写真 2



第 110 図 塩川砂井戸遺跡の分析資料 (写真 2) 縮尺 : 2/3

第Ⅵ章 総括

1 塩川砂井戸遺跡の石材について

塩川砂井戸遺跡は、群馬県西部を流れる鎭川右岸の下位段丘上に所在する。遺跡の西側には牛伏山から鎭川に向かって北流する大沢川が接している。北側の鎭川河床までは、距離400m、標高差12m前後の位置である。また、調査範囲は氾濫層上にあり、現地表面下60cmほどで砂礫層に達している地点も見られる。

遺跡内で確認された石材については、調査段階と整理段階でそれぞれ飯島静男氏の鑑定を受けた。列石や敷石住居に用いられた石材と、石器に使用された石材について、それぞれ以下に要約する。

・遺構に用いられた石材

本遺跡で調査された1号列石および柄鏡形敷石住居(22号住居)の構築に用いられた石材のうち、ここで扱うのは総数603点の27種類である。鑑定作業を行った岩石は約1000点におよぶが、遺構を構築している部材と認定した資料のみ扱い、攪乱や崩落などで元の位置が不明な石材については対象外とした。

付図にその概要を記したが、種類別にすべてを表現できなかったため、4グループに別けトーンで示した。

27種類の内訳をグループ毎に記すと、第1のグループは鎭川上流域の岩石で、粗粒輝石安山岩427点(70.6%)、細粒輝石安山岩4点(0.6%)、角閃石輝石安山岩1点(0.1%)、角閃石安山岩2点(0.3%)、変質安山岩6点(1.0%)、はんれい(斑糲)岩1点(0.2%)、溶結凝灰岩2点(0.3%)である。第2のグループは鎭川上流域の安山岩以外の岩石で、変玄武岩6点(1.0%)、ひん岩4点(0.6%)、閃緑岩2点(0.3%)、石英閃緑岩2点(0.3%)、デイサイト12点(1.9%)、圧碎岩1点(0.2%)である。このうち変玄武岩は三波川帯の岩石でやや異なった性質である。第3のグループは結晶片岩類で、緑色片岩28点(4.6%)、黒色片岩12点(1.9%)、雲母石英片岩25点(4.1%)、珪質準片岩2点(0.3%)、変輝緑岩3点(0.5%)が該当する。第4のグループは新第三紀層由来の岩石で、

白色凝灰岩6点(1.0%)、牛伏砂岩19点(3.1%)、凝灰質砂岩3点(0.5%)、凝灰質泥岩1点(0.1%)、硬質泥岩1点(0.2%)が該当する。これに属さない石材はチャート(CH)14点(2.3%)、輝緑岩(DB)3点(0.5%)、砂岩(SS)14点(2.3%)、礫岩(CG)4点(0.7%)で、付図にはアルファベット略語で示した。それぞれの石材の産出地域をもとに分類したので、通常岩石分類に用いられる火成岩・堆積岩・変成岩の区分けとは異なる分類となっている。

600点を超える石材のうち、粗粒輝石安山岩が約70%を占めている。次に多いのは緑色片岩であるが、その割合は5%以下であり、残りの石材も極めて低い割合である。その他の安山岩を含めても粗粒輝石安山岩が非常に多い結果は、以下に記す鎭川の岩石構成比率と異なる成果であり、これまでの研究成果と比較する必要がある。

遺跡の石器石材を分析する目的で県内の河川ごと、あるいは地域別の河川の石材構成調査の嚆矢となったものに中束耕次・飯島静男氏の報告(文献55)がある。鎭川流域の石材については挿図中のグラフから判断して、吉井町周辺で最多の安山岩類とそれに次ぐ結晶片岩がそれぞれ4割近くを占めていた。

地学団体研究会による下仁田自然学校が刊行した冊子(文献58)でも、高崎市馬庭付近で安山岩が35.5%、チャート19.0%、結晶片岩16.0%、砂岩9.5%とし、安山岩が多いことが読み取れる。

本遺跡の縄文時代遺構に用いられた石材が、河川に見られる石材構成と一致していないことが分かる。

下仁田自然学校の小林忠夫・中村由克氏には、発掘調査時に見学に見えた際に幾つかの所見を頂いた。まず、列石が調査された1・2区西側を北流する大沢川が運んでくる特徴的な石材は、牛伏砂岩があげられるとの事である。この石材は本遺跡の南側に広く分布しており、独特の色調から他の砂岩と区別しやすく、大沢川での採取が可能との事である。

また、遺跡で確認できる地山の礫集中部分について、2区は河床礫の様子を示しているのに対して、1区はやや不自然で、雑然として混在する感じがあり、実際には

環状の列石下の溝部分を掘った際に出てきた小礫を載せたのではないかと考えられるとの事である。

さらに、大沢川に接する道路の橋脚建設工事の現場での断面観察から、遺跡の基本土層の下位には庭谷層が確認され、その上面が不整合な状態で、そこに鑄川などによる砂礫の堆積が確認された。

立石(第88図上)に用いられた石材は、他の石材(主に垂円礫)とは形状・大きさが明らかに異なる長さ約60cmの四角柱状である。飯島静男氏によれば、南側の牛伏山の山裾・斜面などに見られるもので、本遺跡より数キロ程上流に遡れば容易に入手できたと考えられるが、近年には枯渇して、切り出されるようになったとの事である。この石材に関しては、遺跡近辺から離れた場所から持ち込まれた可能性がある。

それ以外の列石内の石材はすべて遺跡周辺で採取できるものであり、立石以外に遠方より確実に持ち込まれた石材は選べないとのことである。石材を地山中の石と河原より持ち込んだ石とを、石材種類から区別することは難しいと指摘された。

列石に用いられた石材は最大で長さ45cm前後、幅25cmの楕円形を呈したものの、平均的な石材でも長さ30cm前後の石材が特に石列内に多用されていた。遺跡内でみられた範囲では、列石の主な石材として用いられたサイズの礫は、地山上の礫集中部分では多数露出しておらず、河床から持ち込んだ可能性が高いように思われる。

・石器に用いられた石材

本遺跡の位置する群馬県西毛地区での考古資料の観点から石材を見た事例としては、安中市教育委員会で発掘調査を実施した大下原遺跡・吉田原遺跡(文献56)の考察がある。大工原豊氏が群馬県内の旧石器時代・縄文時代の石器石材について、在地系と遠隔地系の2系統に大きく分けている。在地系の頁岩・安山岩・チャート・砂岩などは比較的手軽に入手が可能だが、石器石材としては最良でない場合もあり、代用品として用いられた可能性が高いと指摘している。

そして、碓氷川と鑄川のほぼ中間に位置する同遺跡で採取される石材を、6種類に分類している。

石材Ⅰ類は黒曜石・チャート・硬質頁岩・黒色安山岩でそのほとんどの産地が遠隔地であり、入手しにくい貴

重な資源であったと考えられる。それに対して、石材Ⅱ～Ⅴ類は近・中距離圏の石材で、比較的手に入れやすい石材であったと推定される。石材Ⅱ類は頁岩・泥岩・輝緑凝灰岩で、鑄川上流域から主に産出される。石材Ⅲ a類は安山岩類で鑄川や碓氷川などで最も手軽に採取される。石材Ⅲ b類は砂岩で主に鑄川流域の吉井地区で、石材Ⅳ類は結晶片岩類で主に鑄川流域の富岡地区から甘楽地区にかけての三波石帯で、石材Ⅴ類は緑色岩で下仁田地区から富岡地区にかけて採取される。このように鑄川流域から多様な石材の搬入を想定した。

本遺跡から出土した縄文時代の石器・石製品には、石鏃、削器、打製石斧、磨製石斧、凹石、磨石、石皿、砥石等があり、22号住居・1号列石以外からも、6号住居や遺跡内での表採・混入品の形で数多く出土している。本書ではそのうち101点を図示した。主な石器には石鏃12点(未成品1点を含む)、スクレイパー10点、石錘2点、石錘5点、楔形石器2点、打製石斧17点、磨製石斧1点、敲石3点、磨石5点、凹石12点、多孔石6点、石皿4点、砥石2点、石核9点、二次加工ある剥片3点、使用痕ある剥片1点、石棒1点などがあり、その他に多数の剥片・破片が出土している。

まず、打製石鏃の細分については、従来の形を踏襲すると、平基無茎3点、凹基無茎8点、凹基有茎1点となる。このうち両面研磨の資料が1点存在する。

打製石斧は、短冊形が3点、撥形が4点、分銅形が10点である。撥形のうちの1点は大形の石鏃とも考えられる。また、中央で破損した資料は分銅形と判断した。分銅型が多いのは、縄文時代中期後半から後期にかけての特徴であり、本遺跡も例外ではない。

石器石材については、第111図に本遺跡の傾向の一部を示した。石器は剥片石器と礫石器に別け、剥片石器では定形石器の小型と中型、不定形石器、石核の4通りに別けた。礫石器は石錘・磨製石斧を一括し、その他の石皿等大型石製品を含む石器を一括し、2通りに別けた。

剥片石器類では硬質泥岩の比率の高さが目立った。その他石鏃では75%が黒曜石、多孔石では全点が牛伏砂岩など、石材の偏りが見られた。

これとは別に、本遺跡では図示した以外の全剥片395点の石材分類と重量計測(全重量16,168g)を行っている。硬質泥岩(263点・12699g)が点数の66.6%、重量の

78.5%を占め圧倒的に用いられていた。点数では黒曜石37点(9.4%)、赤碧玉29点(7.3%)、チャート16点(4.1%)、粗粒輝石安山岩15点(3.8%)と続く。重量では硬質泥岩と2番目に多い粗粒輝石安山岩2374g(14.7%)と併せると93%が占められ、それに続く細粒輝石安山岩309g(1.9%)、珪質頁岩164g(1.0%)、黒色片岩158g(1.0%)、黒色頁岩154g(1.0%)と低い割合となる。

鎚川流域の石器石材については、詳細な調査(文献57)がある。この中で本遺跡に近い吉井町小棚で粗粒安山岩・変質安山岩を主体とする安山岩46%・結晶片岩21%、塩基性岩類13%、次いでチャート、砂岩・泥岩等、凝灰岩という組成が報告されている。基本組成外の少量の石材として細粒安山岩、珪質頁岩、赤碧玉(赤色珪質岩)も確認されている。

黒曜石以外のほとんどの石材が遺跡周辺で採取されるが、斑晶の多い安山岩類を避け、硬質泥岩を石器素材として特に選んで用いた傾向が看取できる。

・まとめ

縄文時代後期前半の時期と判断される列石内の出土石器では、注口土器の多さと浅鉢形土器の少なさが特徴的であった。注口土器を用いる祭祀のあり方が想定されたが、石器類で見ると、石棒は1点、他に立石が1カ所確認されたのみである。石皿や多孔石・凹石は定量の出土があり、突出して出土する石製品は確認されない。

土器・石器のセットから、本遺跡の列石・敷石住居の性格を検討する資料と考えられる。

石錘は小型石器の中では打製石斧や石鏃に次ぐ出土量であるが、河川に近いことを考えると特に多い遺物とは考えられない。その他、蛇紋岩製の垂飾の出土があるが、全体に特殊遺物の出土は少ない。石匙も確認されなかった。

本遺跡出土の黒曜石については、蛍光X線による産地分析を行い、小深沢と星ヶ塔産の石材が拮抗する状態が方向されている。縄文時代後期には中葉以降、西毛地域でこのような傾向が指摘されていたが、本遺跡の例で縄文時代後期を通じた傾向であることが確認された。

遺構に用いられる粗粒輝石安山岩、剥片石器に用いられる硬質泥岩が際立って多いことが本遺跡の特徴として指摘できる。特に石器石材の硬質泥岩が、遺跡周辺で採

取可能であるが、上流域から搬入された可能性も考慮すべき量である。これが本遺跡独自のものなのか、時期的あるいは地域的特徴として分布域を迫るものなのか、比較資料を持たない。本遺跡でも、地山に含まれる礫の石材分類など、資料を揃えきれなかった部分もあるが、今後の周辺遺跡調査の分析にむけての資料としたい。

参考文献は本文151頁に一括して記した。



第111図 石材比率グラフ

2 中世塩川砂井戸遺跡の遺構について

塩川の砦^(註)については不明瞭な部分が多い。出典が江戸時代に記された軍記物語「箕輪軍記」であり信憑性に問題はあるが、それによれば、城主は菅沼之常で、永禄六年(1563)に武田信玄に攻略されている。山崎一氏は本遺跡南側に隣接する平館の地名からこの城を想定している。しかし、城柵の縄張りは明確ではなく、段差や窪地が記録されていた。著作中のこれらの痕跡を都市計画図上におとすと、おおよそ第112図ようになる。それに今回の調査で確認された方形館の館堀と想定される溝を併せて示し、地形や道などからおおよそ推定される方形館を破線で足した。

東西に並ぶ3区画が想定される。西側区画は北側に大沢川方向へ向かう窪地が接しており、館に適した立地にある。西側区画以外は調査での確認範囲が不十分で、明確なものではない。特に東側区画は溝の屈曲が確認できておらず、区画自体が北側に向かう根拠がないが、想定範囲だと、南・東の2辺が100m前後(ほぼ1町)の規格となる。東区画では1町四方の方形区画(細破線部分)を

想定することも、近年の地割からは必要と思われ、様々な検討を加えることが課題である。

中央区画にあたる本遺跡3区は、掘立柱建物を復元することはできなかったが、ピットの確認は最も多い一画だった。また、区画を築く11・14号溝や1・3号井戸に多量の礫が投げ込まれている。特に3号井戸は西側からの混入が顕著で、この部分に石組みの施設が存在していた可能性がある。

調査区全体を通じて、内部施設や遺物には乏しかった。中央区画では15世紀後半頃までの遺物、東区画では18世紀代の遺物が出土するが、箕輪軍記の舞台となった16世紀後半の遺物を欠いている。武田信玄によって攻略された塩川の砦と確認するには資料に欠けるが、中世に鑄川沿いに作られた小城群の中の一城と推定することができる。ただし、居城としては遺構・遺物が乏しく、砦のような一時的な施設と想定することが、調査範囲からは妥当と思われる。

(註)文献2。同書では本文中では塩川城、縄張り図に塩川の砦と記される。



第112図 中世の溝と周辺の地形

遺物観察表

凡例

出土位置 竪穴住居など遺構から出土している遺物のうち、出土位置を挿図に番号で示してあるものについては、遺構内のおおよその出土位置を記述し、同時に床面からのレベル差を+○(単位cm)と示した。±0や床面にわずかにめり込んでいる場合は「床直上」と記述した。-○(単位cm)で示したものは、貯蔵穴内や床下土坑・掘り方埋戻し土内の遺物で、床面からの深さを表している。

計測値 土器・陶磁器は口径(口縁上端径)・底径・器高を計測し、古墳時代～古代の土器の場合はそれぞれ「口」・「底」・「高」と略している。底部が残存するが丸底のため計測できない土器には、計測値欄に「丸底」と記した。その他、「胴」=胴部最大径、「台」=高台径、「摘」=摘み径などを追加計測したことがある。ただし縄文土器はすべて小破片であるため、計測値は示していない。土製品・石製品・金属製品などでは長さ・幅・厚さなどを計測しているが、形状により異なるので表中に計測項目を明示した。単位はすべてcmである。重さを計測した場合もあり、その場合の単位はgである。なお()は復元値、[]は残存値を表している。

胎土 土器の夾雑物を記述した。

古墳時代～古代の土器では、砂粒の場合は2mm以下を細砂粒、2mm以上を粗砂粒とした。その他に、白色・黒色鉱物粒、暗赤色・赤色・灰黒色・灰白色粘土粒、雲母・石英粒などの混入を記述した。夾雑物の少ない精良な胎土は「精選」と記した。

縄文土器の胎土については、以下のように、肉眼観察による相対的な特徴を記号で表した。

A：多量の黒・白色粗砂礫と少量の石英・輝石を含むやや粗雑な胎土。

B：中量の黒・白色粗細砂と少量の石英・輝石を含むやや緻密な胎土。

C：多量の黒・白色粗砂礫、片岩礫と少量の石英を含む粗雑な胎土。

D：中量の黒・白色粗砂礫や片岩粗砂礫と少量の石英を含むやや粗雑な胎土。

焼成 古墳時代～古代の土器については、土師器の場合は「良好」か「やや不良」かを区別した。須恵器の場合は「還元焰」か「酸化焰」かを区別した。縄文土器・陶磁器等は記入していない。

色調 古墳時代～古代・陶磁器の土器について記述した。色調の名称は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。

石材・素材 石製品の石材名を記した。

成形・整形の特徴 主に遺物製作段階の特徴を示したが、摩滅等、製作特徴を不明とした原因を記す場合がある。

備考 被熱・摩滅・付着物および墨書や線刻など、焼成後に加わった特徴の他、型式名などを記した。

遺物観察表

1号住居遺物観察表(第10図 PL.30)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高	頸			
第10図 PL.30	1	土師器 杯	貯蔵穴・南東隅 壁密着床面下7 ～床面上8cm 口縁一部欠	口	12.0	高 4.1	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は底部との間に稜を有する。横ナデ。底部外面は手 持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第10図 PL.30	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口 頸	18.6 17.4	胴 19.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられる。内面 は横位のヘラナデ。	器面摩滅
第10図	3	土師器 壺か	中央～西寄り床 面直上～5cm 胴部片				粗砂粒/良好/にぶ い赤褐	外面は斜位・横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅

3号住居遺物観察表(第13～15図 PL.30・31)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高	頸			
第13図 PL.30	1	土師器 杯	P3内・北西隅寄り 床面直上～2cm 1/3	口	14.0	高 4.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は底部との間に稜を有する。横ナデ。底部外面は手 持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	2	土師器 杯	P1北脇床面上2cm 口縁一部欠	口	13.9	高 4.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は底部との間に弱い稜を有する。横ナデ。底部外面 は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	3	土師器 杯	中央南寄り床面 直上 口縁一部欠	口	14.6	高 4.6	粗砂粒少/良好/明 赤褐	口縁部は底部との間に稜を有する。横ナデ。底部外面は手 持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	4	土師器 杯	北西隅寄り床面 上6cm 口縁一部欠	口	17.6	高 5.6	粗砂粒少/良好/橙	口縁部は底部との間に弱い稜を有する。横ナデ。底部外面 は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	5	土師器 高杯	北壁中央寄り床 面上6cm 杯部1/2～脚部 上位片	口	18.3	柱 5.2	細砂粒/良好/橙	杯部は口縁部に横ナデ。受け部にヘラ削り。内面はナデ。 脚部外面は縦位のヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	6	土師器 高杯	中央南寄り床面 上4cm 杯部口縁部上位 ～脚部下位			柱 5.0	細砂粒/良好/橙	杯部は口縁部に横ナデ。受け部にヘラ削り。内面はナデ。 脚部外面は縦位のヘラ削り。内面はナデ。	器面摩滅
第13図	7	土師器 高杯	西寄り床面上2 cm 脚部下位1/3			裾 18.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	外面に縦位のヘラ削り。裾部は横位の横ナデ。内面は横位 のヘラナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	8	土師器 鉢	中央・南壁密着 床面直上～2cm 1/3	口 底	12.8 6.2	高 頸 胴 9.6 11.9 13.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面はヘ ラナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	9	土師器 鉢	南壁際中央床面 直上～2cm 1/2	口 底	13.6 9.0	高 頸 胴 (9.4) 12.9 13.9	細砂粒/良好/明黄 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削りと考えられるが、器 面は摩滅。内面はナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	10	土師器 鉢	埋没土 口縁部～胴部下 位1/3	口	12.2	頸 胴 12.0 12.6	粗砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	11	土師器 有孔鉢	中央床面直上 口縁一部欠	口 底	19.2 7.1	高 孔 12.0 2.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	平底を意識した底部中央に直径2.7cmの焼成前穿孔。口縁 部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のヘラ削り。内面は横位の ヘラナデ。	器面摩滅
第13図 PL.30	12	土師器 甕	北西隅寄り・P4 寄り床面直上～ 5cm 2/3	口 底	24.3 9.8	高 頸 胴 30.3 19.8 20.0	粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位・斜縦位のヘラ削り。内 面はナデの上に縦位のヘラ磨き。	器面摩滅
第13図 PL.30	13	土師器 甕	北西隅寄り床面 直上 口縁一部欠	口 底	22.5 10.8	高 頸 胴 31.0 19.7 20.0	粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はヘラ削り。内面はヘラナデか。 器面摩滅により詳細不明。	器面摩滅
第14図 PL.31	14	土師器 小型甕	北西隅・南壁際 床面直上～11 cm 口縁部・胴部一 部欠	口 底	17.8 9.2	高 頸 胴 14.5 18.2 20.0	粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	器面摩滅
第14図 PL.31	15	土師器 小型甕	中央・北西隅寄 り床面直上～6 cm 2/3	口 底	20.0 6.8	高 頸 胴 15.8 16.2 19.1	粗砂粒少・赤色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	器面摩滅
第14図 PL.31	16	土師器 小型甕	中央北西寄り床 面上6cm 口縁部～胴部中 位1/4	口	16.6	頸 胴 13.6 14.9	小礫・粗砂粒・片岩 /良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削りの上に斜横位 のヘラ削りを重ねる。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅
第14図 PL.31	17	土師器 小型甕	西壁際中央床面 上10cm 口縁部～胴部中 位1/3	口	16.4	頸 胴 13.4 14.2	小礫・粗砂粒/良好 /橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削りの上に斜横位 のヘラ削りを重ねる。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅
第14図 PL.31	18	土師器 甕	中央・南壁際床 面直上～2cm 2/3	口 底	19.9 5.2	高 頸 胴 30.5 15.4 17.8	小礫・粗砂粒多/良 好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位～中位は縦位の、下位は斜 位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。底部外面に木葉痕。	器面摩滅

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高頸	高			
第14図 PL.31	19	土師器 甕	北西隅寄り床面 直上～3cm 口縁・胴部一部 欠	19.3 5.1	高頸 胴	33.4 15.8 17.1	小礫・粗砂粒多/良 好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位～中位は縦位の、下位は斜 横位・横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。底部に木 葉痕。	器面摩滅
第15図 PL.31	20	土師器 甕	北西隅床面上3 cm 口縁部～胴部下 位3/4	21.3 8.0	高頸 胴	35.5 17.0 19.3	小礫・粗砂粒多・片 岩/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位・中位は縦位の、下位は斜 縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅
第15図 PL.31	21	土師器 甕	南壁寄り中央床 直上+かド 胴部下位～底部 欠	20.2	頸 胴	15.9 18.0	小礫・粗砂粒多・片 岩/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のヘラ削り。内面は横 位のヘラナデ。	器面摩滅
第15図 PL.31	22	土師器 甕	北西隅・南壁際 床面直上～6cm 口縁部～胴部 中位1/4	16.8	頸 胴	17.4 20.6	粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面上位は横位の、中位以下は斜縦 位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面摩滅
第15図 PL.31	23	土師器 甕	南壁際中央床直 上+かド 胴部下位1/2～ 底部片	5.0			粗砂・細砂粒/良好 /橙	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。	器面摩滅

7号住居(第18図 PL.32)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高台	高			
第18図 PL.32	1	須恵器 椀	かド内床面直上 1/2	13.0	高台	4.8 5.6	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面は摩滅。
第18図 PL.32	2	須恵器 椀	かド内床面下7 ～床面上2cm 1/2	13.8	高台	5.4 6.8	粗砂粒・赤色粘土 粒/酸化焰/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面は摩滅。
第18図 PL.32	3	須恵器 椀	かド内床面上4 ～6cm 1/3	13.8	高台	4.9 7.0	粗砂粒少/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	
第18図 PL.32	4	須恵器 羽釜	南壁密着床面上 5cm 口縁部～胴部 中位片	20.8	罎 胴	24.1 23.0	粗砂粒/酸化焰/灰 白	紐づくり後、ロクロ整形。罎部は外面整形後に貼付。その 後、周縁部にナデ調整。	器面に炭素吸着。

8号住居(第20・21図 PL.32)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	高			
第20図 PL.32	1	土師器 杯	埋没土 破片	11.4 7.2	高	(3.1)	粗砂粒少/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。底部外面は手持ちヘラ 削り。内面はナデ。	器面は摩滅。
第20図 PL.32	2	須恵器 蓋	北東隅寄り床面 下2cm 1/3	19.8	高 摘み	5.2 4.2	粗砂粒少・黒色粘 土粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部を回転糸切り後、摘み部を貼 付。天井部外面の中心寄りには回転ヘラ削り。	
第20図 PL.32	3	須恵器 杯	埋没土 破片	13.9 4.6	高	5.1	細砂粒/還元焰軟 質/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切りと考えられる。	
第20図 PL.32	4	須恵器 杯	貯蔵穴埋没土 1/4	12.8 5.4	高	3.4	粗砂粒少・白色鈹 物粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第20図 PL.32	5	須恵器 杯	貯蔵穴内床面下 12cm 1/3	12.0 5.2	高	3.5	白色鈹物粒/還元 焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第20図 PL.32	6	須恵器 杯	貯蔵穴内床面下 8cm 1/4	13.0 6.5	高	3.8	粗砂粒少/酸化焰/ 灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に焼成時 の炭素吸着。 摩滅。
第20図 PL.32	7	須恵器 杯	貯蔵穴埋没土 口縁部下半～底 部1/2	5.6			白色鈹物粒少/還 元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第20図 PL.32	8	須恵器 杯	東寄り中央床面 直上 口縁部下半～底 部	6.4			灰黒色粘土粒/還 元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面やや摩 耗。
第20図 PL.32	9	須恵器 皿	貯蔵穴内床面下 6cm 完形	12.1	高台	3.5 6.4	粗砂粒・片岩/酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	内外面の一部 に焼成時の炭 素吸着。
第20図 PL.32	10	須恵器 椀	埋没土 1/2	13.0	高台	5.2 6.0	粗砂粒多・白色鈹 物粒他/還元焰/黄 灰	整形が粗雑なため器形は大きく歪む。ロクロ整形(右回転)。 高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナ デ調整。	
第20図 PL.32	11	須恵器 椀	埋没土 1/3	15.2	高台	5.6 8.1	粗砂粒少/酸化焰/ 明褐灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	
第20図 PL.32	12	須恵器 椀	貯蔵穴内床面下 4cm 口縁部下半～高 台部		台	6.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	内面やや摩 耗。
第20図 PL.32	13	須恵器 椀	埋没土 口縁部下半～高 台部		台	7.4	粗砂粒少/酸化焰/ 黒褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面やや摩滅。 外面焼成時に 炭素吸着か。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第21図 PL.32	14	灰釉陶器 皿	北寄り中央床面上 直上 3/4	口	15.0	高台 2.7 7.0	白色鈹物粒多/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。断面三日月状を呈する。貼付後、周縁部にナデ調整。内面全面に施釉。外面にも釉が付着。	光ヶ丘1号窯式期。
第21図 PL.32	15	灰釉陶器 皿	貯蔵穴埋没土 破片	口	15.3	高台 3.1 6.5	細砂粒少/還元焰/灰白	ロクロ整形(左回転)。高台部は底部切り離し後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。内面に重ね焼き痕。口縁部内面に施釉。刷毛掛け。底部にも一刷毛。	光ヶ丘1号窯式期。
第21図 PL.32	16	土師器 小型甕	貯蔵穴内床面下 15cm 口縁部~胴部上 位1/4	口	11.2	頸 10.6 13.3	粗砂粒/良好/褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位・斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	外面に炭素吸着。
第21図	17	土師器 台付甕	埋没土 脚部片			台 7.6	細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。	
第21図 PL.32	18	土師器 甕	埋没土 口縁部~胴部上 位1/3	口	19.8	頸 17.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜横位のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第21図 PL.32	19	土師器 甕	貯蔵穴内床面下 19~20cm 口縁部片	口	20.4	頸 18.2	細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。	
第21図 PL.32	20	須恵器 甕	埋没土 胴部下位~底部 1/2	底	13.4		白色鈹物粒/還元焰/黄灰	紐づくり後、ロクロ整形。底部は周縁部が輪状に厚みを増す。胴部外面は回転ヘラ削り。	
第21図 PL.32	21	鉄製品 刀子	中央南寄り床直 上 2/3	長 幅	7.0 1.6	厚 重 0.4 8.85		刀子破片で、刀身は6cm程で先端部を劣化破損する。棟側に明瞭な関を持つが、刃側はなだらかに茎に移行する。茎は0.6cm程で劣化破損する。刃・茎とも木質等の付着は見られない。	
第21図 PL.32	22	鉄製品 刀子	埋没土 2/3	長 幅	4.9 1.4	厚 重 0.3 4.31		刀子破片で、刀身は3.7cm程で先端部を劣化破損する。棟側に明瞭な関を持つが、刃側はなだらかに茎に移行する。茎は1cm程で劣化破損する。刃・茎とも木質等の付着は見られない。	

9号住居(第22図 PL.32)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第22図	1	須恵器 杯	西寄り北床面上 8cm 口縁部片	口	12.3		粗砂粒少/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	器面は摩滅。
第22図 PL.32	2	須恵器 椀	南東隅床面下13 cm 2/3	口	14.6	高台 5.2 6.2	粗砂粒・黒色粘土粒・雲母/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面は焼成時に炭素吸着。摩滅。
第22図	3	土師器 甕	埋没土 口縁部~胴部上 位片	口	11.8	頸 11.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第22図	4	須恵器 甕	埋没土 口縁部片				白色鈹物粒/還元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形と考えられる。	

10号住居(第23図 PL.32)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第23図 PL.32	1	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 底	12.4 7.0	高 3.6	粗砂粒少/還元焰/灰白	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第23図 PL.32	2	須恵器 椀	南東隅寄り床面 上20cm 口縁部下位~底 部1/4	底	6.8		粗砂粒少/酸化焰/にぶい黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	器面は摩滅。
第23図	3	須恵器 椀	埋没土 底部~高台部 1/4			台 8.0	粗砂粒少/酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部に粗雑なナデ調整。	外面に炭素吸着。
第23図	4	須恵器 椀	埋没土 底部~高台部 1/3			台 7.2	粗砂粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部に粗雑なナデ調整。	器面は摩滅。
第23図 PL.32	5	須恵器 椀	東寄り床面上20 cm 口縁部下位~高 台部			台 8.0	粗砂粒・赤色粘土粒/酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	器面は摩耗。
第23図	6	土師器 甕	埋没土 口縁部上半片	口	21.0	頸 18.0	細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。	

11号住居遺物観察表 (第24図 PL.32)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図	1	須恵器 杯	埋没土 口縁部下位~底 部1/4	底	6.2		白色鈹物粒/還元焰/灰	底部回転糸切り後、無調整。	
第24図 PL.32	2	須恵器 椀	南壁外床面上13cm 口縁部下位~高 台部			台 7.8	粗砂粒少/還元焰 軟質/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	内面やや摩耗。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第24図	3	須恵器 椀	埋没土 口縁部下半～高 台部1/2			台	8.0	粗砂粒少/酸化焰/ 黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部に粗雑なナデ調整。 外面に炭素吸着。

12号住居遺物観察表 (第25・26図 PL.32)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第25図 PL.32	1	須恵器 椀	南壁際床面上直上 1/3	口	15.3	高台	5.3 7.2	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	整形は粗雑。ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。
第25図 PL.32	2	須恵器 椀	南東隅寄り床面 下2cm 3/4	口	14.4	高台	5.2 5.7	粗砂粒少・片岩/酸 化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。 器面に焼成時の炭素吸着。 摩滅。
第25図 PL.32	3	須恵器 椀	南東隅寄り床面 下2～床面上15 cm 2/3	口	16.2	高台	7.8 7.7	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰・軟質/ 灰白	整形が粗雑なため器形は大きく歪む。ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。 器面は摩滅。
第26図 PL.32	4	須恵器 椀	南東隅寄り床面 直上 口縁部下半～高 台部1/2			台	6.4	白色鈹物粒・雲母/ 酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。内面に重ね焼きの痕跡。 器面やや摩滅。
第26図 PL.32	5	須恵器 椀	北・東寄り床面 上6～9cm 口縁部下半～底 部	底	6.6			粗砂粒・雲母/酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。 高台部剥離後も継続して使用か。器面は摩滅。
第26図 PL.32	6	須恵器 羽釜	南壁・南東隅寄 り床面直上 口縁部～胴部下 位片	口	17.8	鰐胴	22.8 22.3	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	紐づくり後、ロクロ整形。鰐部は外面整形後に貼付。その後、周縁部にナデ調整。
第26図 PL.32	7	須恵器 羽釜	埋没土 口縁部～胴部上 位1/4	口	20.5	鰐胴	25.1 25.7	粗砂粒/酸化焰/黄 灰	紐づくり後、ロクロ整形。鰐部は胴部整形後に貼付。その後、周縁部にナデ調整。 外面は被熱。 内面は摩滅。

14号住居遺物観察表 (第27図 PL.33)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第27図 PL.33	1	須恵器 杯	北東隅寄り床面 上7cm 1/4	口底	12.0 7.4	高	3.4	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。
第27図 PL.33	2	須恵器 杯	貯蔵穴内床面下 10cm 完形	口底	13.5 6.8	高	4.2	粗砂粒・雲母/酸化 焰/黒	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。 器面は摩滅。 焼成時に炭素吸着。
第27図 PL.33	3	須恵器 杯	埋没土 口縁部下半～底 部1/3	底	6.1			粗砂粒少/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。 器面は摩滅。
第27図 PL.33	4	須恵器 杯	南寄り中央床面 上5cm 1/2	口底	13.4 6.3	高	4.7	粗砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。 内面は摩滅。
第27図	5	須恵器 杯	南寄り中央床面 上6cm 1/4	口底	15.4 6.8	高	5.0	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。 器面の一部に 焼成時の炭素 吸着。
第27図	6	須恵器 杯	埋没土 1/4	口	15.0			粗砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形(右回転)。
第27図	7	灰釉陶器 壺	中央北寄り床面 上22cm 胴部片					粗砂粒・黒色鈹物 粒/還元焰/灰白	ロクロ整形(左回転か)。外面は回転ヘラ削り。外面に薄く 施釉。 光ヶ丘1号窯 式期。
第27図	8	土師器 甕	貯蔵穴内床面下 18cm 口縁部上半部片	口	19.2	頸	17.0	細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。
第27図	9	土師器 甕	掘り方埋没土 口縁部～胴部上 位1/3	口	19.8	頸	17.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。

16号住居遺物観察表 (第31・32図 PL.33)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第31図 PL.33	1	土師器 杯	南壁際床面上7 cm 口縁部一部欠損	口底	11.3 8.5	高	3.0	細砂粒・雲母/良好 /にぶい橙	口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。底部外面は手持ちヘラ 削り。内面はナデ。 器面はやや摩滅。
第31図 PL.33	2	土師器 杯	貯蔵穴内床面下 27cm 3/4	口底	11.7 8.2	高	3.0	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。 器面は摩滅。
第31図 PL.33	3	土師器 杯	貯蔵穴内床面下 8cm 一部欠損	口底	11.8 8.1	高	3.5	黒色粘土粒/良好/ にぶい橙	口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。底部外面は手持ちヘラ 削り。内面はナデ。 器面はやや摩滅。
第31図 PL.33	4	土師器 杯	南壁寄り西床面 上9cm 口縁～底部1/4	口底	13.0 8.0	高	3.3	細砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。体部外面はナデと考えられる。底部外面 は手持ちヘラ削り。 器面は摩滅。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				天	口	底				
第31図 PL.33	5	須恵器 蓋	掘り方カマド寄り 床面下12cm 摘み～天井部 1/4	天	6.3	摘	3.6	白色鉍物粒少/還元 焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部を切り離し後、摘み部を貼付。 天井部外面の中心寄りに回転ヘラ削り。	
第31図	6	須恵器 蓋	掘り方中央東寄り 床面下11cm 口縁部～天井部 1/4	口 天	16.3 7.9			細砂粒少/還元焰/ 灰	ロクロ整形(右回転)。天井部は回転糸切り。天井部外面は 中心寄りに回転ヘラ削り。	
第31図 PL.33	7	須恵器 皿	貯蔵穴上11cm 完形	口	13.2	高 台	3.0 6.9	小礫・粗砂粒・片岩 /還元焰軟質/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	内面に重ね焼き 痕。
第31図 PL.33	8	須恵器 皿	貯蔵穴内床面下 3cm 2/3	口	13.0	高 台	3.3 6.7	粗砂粒・片岩・雲母 /酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面に炭素吸着。 器面にナデ調整。
第31図 PL.33	9	須恵器 杯	西壁下周溝上4 cm 1/3	口 底	12.6 7.2	高	3.4	粗砂粒少・雲母/還 元焰・酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	底部外面に墨 書「□」。
第31図 PL.33	10	須恵器 杯	南壁寄り中央床 面上3cm 2/3	口 底	12.5 7.0	高	3.6	粗砂粒・白色鉍物 粒/還元焰/灰褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
第31図 PL.33	11	須恵器 杯	カマド掘り方埋 没土 1/3	口 底	13.2 6.1	高	4.1	茶褐色粘土粒/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面は摩滅。
第31図 PL.33	12	須恵器 杯	中央西寄り床面 上4cm 1/2	口 底	13.2 5.8	高	3.6	黒色粘土粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面は摩滅。
第31図 PL.33	13	須恵器 杯	中央・貯蔵穴内 床面下2～床面 上7cm 1/2	口 底	13.0 6.3	高	4.2	粗砂粒・赤色粘土 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内面に炭素吸着。 器面は摩滅。
第31図 PL.33	14	須恵器 椀	貯蔵穴内床面下 8cm 高台部一部欠	口	14.4	高 台	5.1 7.0	粗砂粒・黒色鉍物 粒/酸化焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	器面は摩滅。
第31図 PL.33	15	須恵器 椀	南西隅寄り床面 上7～8cm 口縁部～底部 1/3	口	16.0	高 台	6.1 9.2	黒色粘土粒・粗砂 粒/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	
第31図 PL.33	16	須恵器 椀	貯蔵穴内床面下 11cm 口縁部～底部 1/3	口 底	15.0 6.4			黒色粘土粒/酸化 焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。高台部欠損後も継続して使用 している。	内面はやや摩滅。
第32図 PL.33	17	須恵器 椀	貯蔵穴内床面下 4cm～床面直上 3/4	口 底	13.8 6.8			白色鉍物粒少・雲 母/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。 貼付後、周縁部にナデ調整。	高台部欠損後 も使用。
第32図 PL.33	18	須恵器 椀	北寄り中央床面 上9cm 口縁部下半～高 台部1/2			台	6.5	粗砂粒少・片岩/酸 化焰/オリープ黒	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部回転糸切り後の付高 台。	器面に炭素吸着。 摩滅。
第32図	19	灰釉陶器 椀	北壁下周溝上10 cm 口縁部片	口	17.8			黒色鉍物粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。内外面に施釉。	光ヶ丘1号窯 式期。
第32図	20	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	11.9	頸 胴	9.9 11.7	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位・斜横位のヘラ削り。内 面は横位のヘラナデ。	
第32図 PL.33	21	土師器 台付甕	南壁際南東隅寄 り床面上17cm 台部1/2			台	8.4	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	内外面は横ナデ。内面はヘラナデ。	
第32図 PL.33	22	土師器 台付甕	南壁際床面上4 cm 胴部下位～台部 上位片					細砂粒/良好/にぶ い赤褐	胴部外面はヘラ削り。基部以下はヘラナデ。胴部内面もヘ ラナデ。	器面は摩滅。
第32図 PL.33	23	土師器 甕	貯蔵穴北東脇床 面上2cm 口縁部～胴部上 位片	口	13.2	頸	12.6	粗砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位 のヘラナデ。	外面に炭素吸着。
第32図	24	土師器 甕	埋没土 胴部下位～底部 2/3	底	4.4			粗砂・細砂粒/良好 /にぶい褐	胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は縦位・斜位のヘラナデ。	被熱。
第32図 PL.33	25	須恵器 甕	中央西寄り床面 上19cm 口縁部片	口	20.6	頸	14.3	粗砂粒/還元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形(右回転)。	
第32図	26	須恵器 甕	貯蔵穴上3cm 底部～高台部			台	15.0	白色鉍物粒/酸化 焰/暗灰黄	紐づくり後、ロクロ整形(右回転)。高台部は断面台形の低 い付高台。	
第32図 PL.33	27	鉄製品 不詳	北壁寄り床上2 cm 破片	長 幅	8.2 1.9	厚 重	0.8 13.22		断面ほぼ正方形の棒状鉄製品の端部が、1.3～1.5cm程匙状 に広がる鉄製品2点が平行に並び錆化癒着する。2点とも反 対側端部は劣化破損している。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	4.8 2.8	厚 重	1.5 19.69			
第32図 PL.33	28	鉄製品 鉸具	北西隅壁密着床 上10cm 3/4	長 幅	4.8 2.8	厚 重	1.5 19.69		鉸具破損品。端部に丸みを持つ長方形鉄板二枚の上に輪金と見られるC型の鉄製品が錆付その内側にT字型の刺金が収まるように錆付。長方形鉄板の端部は破損するものの、両端に輪金・中央に刺金を挿入する凹を有する痕跡を残す。2枚の鉄板の間は僅かに空間を残すが皮等の痕跡は見られない。	

17号住居遺物観察表 (第34図 PL.33)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	12.0 6.8	高	4.3			
第34図 PL.33	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	12.0 6.8	高	4.3	粗砂粒/良好/橙	器面摩滅の為、整形不明。	
第34図	2	須恵器 杯	掘り方埋没土 口縁部上位～底 部1/4	底	7.0			白色鈹物粒/還元 焰/褐灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	器面に炭素吸 着。
第34図	3	須恵器 椀	南東隅寄り床面 上2cm 口縁部片	口	14.8			粗砂粒少・雲母/酸 化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	器面に炭素吸 着。
第34図 PL.33	4	須恵器 椀	東壁際床面直上 口縁部1/4	口	15.2			粗砂粒少/酸化焰/ 黒褐	口縁部はもう少し傾く可能性あり。ロクロ整形(右回転)。	器面に炭素吸 着。黒色。
第34図 PL.33	5	須恵器 椀	掘り方東寄り床 面下4cm 口縁部下位～高 台部			台	6.2	黒色粘土粒・雲母/ 酸化焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後の付高台。粗雑な調整。貼付後、周縁部にナデ。	器面は摩滅。
第34図	6	須恵器 椀	埋没土 口縁部上位～高 台部片			台	6.5	粗砂粒少/還元焰/ 黄灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は付高台。	
第34図	7	灰釉陶器 椀か	埋没土 口縁部片	口	16.0			黒色鈹物粒少/還 元焰/にぶい黄	ロクロ整形(右回転か)。外面は回転ヘラ削り。外面は下位を除き、内面は全面に施釉。	
第34図	8	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	10.4	頸	9.6	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面やや摩 滅。
第34図	9	土師器 台付甕	埋没土 台部1/3			台	10.8	細砂粒/良好/橙	内外面とも横ナデ。	
第34図 PL.33	10	土師器 甕	南壁寄り床面下 7cm 口縁部～胴部上 位1/4	口	19.0	頸	17.2	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第34図 PL.33	11	須恵器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	30.2	鏝	32.2	粗砂粒少/還元焰 軟質/黄灰	紐づくり後、ロクロ整形。鏝部は胴部整形後に貼付。その後、周縁部にナデ調整。	
第34図 PL.33	12	須恵器 甕	南東隅寄り床面 直上 胴部下位～底部 片	底	19.6			細砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/黄灰	胴部下位に直径0.7cmの焼成前穿孔あり。下端は底部欠損か。紐づくり後、ロクロ整形。	
第34図 PL.33	13	須恵器 壺	東寄り床面下4 cm 胴部下位～高台 部片			台	13.0	黒色・白色鈹物粒/ 還元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。高台部は断面台形の付高台。	
PL.33	14	鉄滓 椀形鍛冶滓	埋没土 破片	長 幅	6.5 4.9	厚 重	3.3 131.23		重厚で表面および破断面を酸化土砂が覆う。	写真のみ
PL.33	15	鉄滓 椀形鍛冶滓	南西床上2cm 破片	長 幅	4.1 3.4	厚 重	2.3 34.65		軽く気泡が目立つ鉄滓で、一部表面を酸化土砂が覆う。	写真のみ

18号住居遺物観察表 (第36図 PL.33・34)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 <th>14.6</th> <th>高 台</th> <th>5.5 6.0</th>	14.6	高 台	5.5 6.0			
第36図 PL.33	1	須恵器 椀	カマド内床面直 上 1/3	口	14.6	高 台	5.5 6.0	粗砂・細砂粒・雲母/ 酸化焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	高台部端部は 摩滅。器面は 炭素吸着。
第36図 PL.33	2	須恵器 椀	カマド南脇床面 直上 3/4	口	14.8	高 台	5.6 6.5	粗砂粒少・雲母/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	
第36図	3	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部中 位片	口	13.1	頸 胴	11.2 13.9	粗砂粒少/良好/に ぶい橙	口縁部～肩部外面は横ナデ。以下胴部は斜位のヘラ削り。	内面は摩滅。
第36図 PL.34	4	須恵器 鉢	カマド内床面直 上 口縁部～胴部中 位1/4	口	19.0	胴	23.3	粗砂粒/酸化焰/灰 黄	鉢状を呈する。紐づくり後、ロクロ整形と考えられる。	被熱。外面に 煤付着。
第36図 PL.34	5	須恵器 壺	カマド内床面直 上 胴部中位～高台 部			台	9.6	粗砂粒/酸化焰/橙	紐づくり後、ロクロ整形か。高台部は低い付高台。貼付後、周縁部にナデ調整。	

3号井戸遺物観察表 (第73図 PL.34)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第73図 PL.34	1	在地系土器 片口鉢か	中央上層 口縁部1/8	口	(28.0)		//にぶい橙・褐灰	断面外面側にぶい橙色、断面内面側褐灰色。器表灰色。口縁部回転横撫で。外面口縁部下撫で。口縁部外反し、端部付近は内湾気味。	中世
第73図	2	在地系土器 片口鉢	西寄り上層 体部下位片				//にぶい褐	外面指頭圧痕状凹凸多い。外面下位刷毛状工具による回転横撫で。使用により体部内面中位平滑、内面下位の器表摩滅。	中世か。3と同一個体の可能性。
第73図	3	在地系土器 片口鉢	上層埋没土 体部下位片				//にぶい褐	外面指頭圧痕状凹凸多い。外面下位刷毛状工具による回転横撫で。使用により体部内面中位平滑、内面下位の器表摩滅。底部回転糸切無調整。	中世か。2と同一個体の可能性。
第73図 PL.34	4	在地系土器 片口鉢	底部1/2				//にぶい黄橙	胎土中に片岩含む。底部右回転糸切無調整。内面器表摩滅し、使用痕不明瞭。	中世。

2号溝遺物観察表 (第60図 PL.34)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第60図 PL.34	1	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口	14.8	頸 10.6	粗砂粒少/還元焰 軟質/浅黄	紐づくり後、ロクロ整形。内外面とも斜位のナデが重ねられている。	

4号溝遺物観察表 (第61図 PL.34)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第61図 PL.34	1	須恵器 皿	埋没土 口縁部下半～底 部1/3	底	7.7		白色鉄物粒少・雲 母/還元焰/暗灰黄	口縁部は外傾著しく立ち上がる。皿状を呈する。ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	内面は摩滅。
第61図 PL.34	2	石製品 温石	埋没土 略完形	長 幅	6.3 8.5	厚 重 1.6 185.1	蛇紋岩	研磨および摩滅で全体的に表面が平滑である。上部に直径9mmの穴をもつ。表面および裏面に細い線刻が横方向に見られる。小口面には加工痕を残す。	

4A号溝遺物観察表 (第62図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第62図	1	常滑陶器 甕か	肩部片				//黒褐	器表にぶい赤褐色。外面自然釉斑状にかかる。	中世。
第62図	2	常滑陶器 甕か	礫群内 肩部片				//灰白	器壁やや薄い。外面器表赤褐色色、内面器表灰白色。外面上半自然釉かかる。	中世。
第62図	3	在地系土器 片口鉢	礫群内 体部片				//灰	還元炎焼成。内面回転横撫で。外面指頭圧痕状凹凸。内面使用により器表平滑。	中世。
第62図	4	在地系土器 片口鉢か	礫群内 体部下位片				//灰	酸化炎焼成。内面回転横撫で。外面撫で。底部内面付近僅かに使用により平滑。	中世。
第62図	5	在地系土器 片口鉢	体部下位から底 部1/4	底	(12.0)		//暗灰黄	外面下位を除き指頭圧痕状凹凸多い。外面下位回転横撫で。底部外面中央付近回転糸切り痕残る。内面使用により器表摩滅。	14世紀後半～ 15世紀か。

9号溝遺物観察表 (第65図)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65図	1	堺陶器 すり鉢	埋没土 口縁部片				//橙	口縁部内面に凸帯び巡る。口縁部外面縁帯下の窪み以下回転削り。	18世紀前葉～ 中葉。
第65図	2	堺陶器 すり鉢	埋没土 口縁部片				//橙	口縁部内面に凸帯び巡る。口縁部外面縁帯下の窪み以下回転削り。	18世紀前葉～ 中葉。

11号溝遺物観察表 (第67図 PL.34)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第67図 PL.34	1	在地系土器 片口鉢	下層 1/6	口	(30.0)		//にぶい黄褐	外面器表褐灰色。口縁部端部付近強い回転横撫で。内面回転横撫で。外面指頭圧痕状凹凸多い。口縁部端部上面丸みを持ち、内側に突き出る。突出部上面器表摩滅。体部内面下位使用により器表平滑。	14世紀後半～ 15世紀前半。
第67図	2	在地系土器 片口鉢	下層 口縁部片				//にぶい褐	内面器表と外面器表下半黒褐色。内外面回転横撫で。	14世紀後半～ 15世紀前半。 14溝-1と同一 個体か。

14号溝遺物観察表 (第71図 PL.34)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第71図 PL.34	1	在地系土器 片口鉢	口縁部片				//にぶい褐	内面器表と外面器表黒褐色。内外面回転横撫で。口縁部端部内面内側に突き出、端部は丸味を帯びる。	14世紀後半～ 15世紀前半。 11溝-2と同一 個体か。
第71図 PL.34	2	在地系土器 不詳	体部片				//灰白	胎土中に片岩含む。断面中央灰白色、外面器表付近にぶい黄褐色。外面器表灰色、内面器表黒褐色。外面器表摩滅。内面撫で。残存部上端に直径6mmの円孔1カ所残る。	中世か。
第71図 PL.34	3	在地系土器 不詳	体部片				//灰白	胎土中に片岩含む。断面中央灰白色、外面器表付近にぶい黄褐色。外面器表灰色、内面器表黒褐色。外面器表摩滅。内面撫で。残存部下端に直径2cm以上の円孔1カ所残存。	中世か。

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第90図 PL.37	21	縄文土器 深鉢	北側列 口縁部片				B	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を1条横位施文し、8字状貼付文を接続施文。下位に横位沈線文や三角文を施し、区画内にLR縄文を充填。内外面風化。	堀之内2式
第90図 PL.37	22	縄文土器 深鉢	胴部片				B	沈線三角文を施し、外縁区画内にLR縄文を充填。	堀之内2式
第90図 PL.37	23	縄文土器 深鉢	北側窪み 胴部片				C	所謂「体部屈曲鉢」で、上半部に沈線三角文を施しその外縁区画内にLR縄文を充填。外面風化、内面横磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	24	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁1/6				A	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を横位施文し、縦位の8字状貼付文を施す。頸部は横位の沈線区画文を施すが、風化により縄文の有無不明。	堀之内2式
第91図 PL.37	25	縄文土器 深鉢	北側列 胴部片				C	重三角文を施す。内面風化。	堀之内2式
第91図 PL.37	26	縄文土器 深鉢	北西側窪み 胴部片				D	弧状または楕円状の沈線文を施し、外縁区画内にLR縄文を充填。内外面磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	27	縄文土器 深鉢	西側窪み 口縁部片				C	低い台形状の波状口縁。内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を1条横位施文し、波頂下に8字状貼付文を接続施文。下位にやや蛇行した横位沈線文を施し、LR縄文を充填。	堀之内2式
第91図 PL.37	28	縄文土器 深鉢	北側窪み 口縁部片				D	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を2条横位施文し、8字状貼付文を接続施文。直下の横位沈線文は弧状に窪み、区画内にLR縄文を充填。	堀之内2式
第91図 PL.37	29	縄文土器 深鉢	口縁部片				B	口縁に横位の刻目細隆起線文とLR縄文を充填した沈線区画文を施す。内外面横磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	30	縄文土器 深鉢	北西側窪み 胴部片				D	沈線区画文内にLR縄文を充填。内面横磨き、一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第91図 PL.37	31	縄文土器 深鉢	口縁部片				B	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を1条横位施文し、8字状貼付文を接続施文。下位に沈線三角文を施し、外縁区画内にLR縄文を充填。内面磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	32	縄文土器 深鉢	内側列 口縁部片				A	口縁に刻目細隆起線文を廻らせ、LR縄文を充填した幅狭の沈線区画文を施す。内外面風化。	堀之内2式
第91図 PL.37	33	縄文土器 深鉢	口縁部片				B	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を1条横位施す。下位に幅狭の沈線区画文を施し、細密なLR縄文を充填。内面に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第91図 PL.37	34	縄文土器 深鉢	胴部片				D	沈線文の外縁区画内にLR縄文を充填。内面横磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	35	縄文土器 深鉢	口縁部片				D	内面口縁にやや幅広の横位沈線を1条施文。沈線区画文内にLR縄文を充填。内外面風化。	堀之内2式
第91図 PL.37	36	縄文土器 深鉢	外側列 口縁部片				A	波状口縁。内面口縁に1条の横線文を施す。口縁には沈線三角文とその外縁区画内にLR縄文を充填。内外面風化。	堀之内2式
第91図 PL.37	37	縄文土器 深鉢	列内溝部分 口縁部片				A	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に連続した横位のS字状沈線区画文や横帯沈線区画文を施し、細密なLR縄文を充填。内外面横磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	38	縄文土器 深鉢	北西側窪み 胴部片				B	沈線の円形文や方形文を施し、外縁区画内に細密なLR縄文を充填。内外面風化。	堀之内2式
第91図 PL.37	39	縄文土器 深鉢	北側窪み 胴部片				B	杵状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填。	堀之内2式
第91図 PL.37	40	縄文土器 深鉢	北側窪み、北西側窪み 口縁-胴上半1/4	口	(31.2)		B	内面に延びる捻転状の小突起を推定3箇所につす波状口縁。内面口縁に2条の横位沈線を施文。口縁に刻目細隆起線文を2条横位施文し、小突起及び波頂部下に8字状貼付文を接続施文。以下に細密なLR縄文を充填した渦巻状の沈線区画文を施す。内外面共に内外面風化により文様不明瞭。	堀之内2式
第91図 PL.37	41	縄文土器 深鉢	外側列 胴部片				C	2条の横位沈線文を施し、区画内の磨削り整形痕を残す。内面横磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	42	縄文土器 深鉢	口縁部片				B	波状口縁。内面口縁に1条の横線文を施す。口縁に横位刻目細隆起線文を1条施し、波頂下に8字状貼付文を接続施文。その下に弧線表現の横線文を施す。外面風化により縄文施文の有無不明。内面磨きに近い磨き。	堀之内2式
第91図 PL.37	43	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				B	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を2条横位施文し、8字状貼付文を接続施文。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.37	44	縄文土器 深鉢	列内溝部分 口縁-底部1/4	口底	(15.4) 7.5	高 23.4	B	捻転状小突起を推定3単位につす波状口縁。内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に沈線文を4条横位施文し、LR縄文を充填。波頂部下に8字状貼付文が略化した2単位の円形刺突文を施す。下にクランク状に屈折する横帯状沈線区画文を施す。底面に網代痕。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.37	45	縄文土器 深鉢	北側窪み 口縁~胴下半	口	(17.0)		A	捻転状小突起を3単位につす波状口縁。内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線文を2条横位施文し、波頂部や波底部下に8字状貼付文を接続施文。下位に横帯状の沈線区画文を施すが、器面風化により縄文施文の有無不明。	堀之内2式
第92図 PL.37	46	縄文土器 深鉢	北側窪み 口縁-胴上半1/6	口	(16.0)		B	捻転状の小突起を付す波状口縁。内面口縁に横位沈線を施文。口縁に刻目細隆起線文を施し、小突起下に8字状貼付文を接続施文。頸部は細密なLR縄文を充填した横帯状の沈線区画文を施すが小突起下は弧線化。内外面風化。	堀之内2式

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第92図 PL.38	47	縄文土器 深鉢	外側列、北西側 窪み、西側窪み、 中央西側 口縁-胴下半1/3	口	(17.7)		B	捻転状小突起を3単位に付す波状口縁。内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に横位の刻目細隆起線を3条横位施文し、波頂部下に8字状貼付文を接続施文。下に円・方形の沈線区画文を施すが、器面風化により縄文施文の有無不明。	堀之内2式
第92図 PL.38	48	縄文土器 深鉢	北側窪み、北西 側窪み 口縁~胴下半 2/3 底部欠損	口	17.7		B	球状突起を3単位に付す波状口縁。内面口縁に横位沈線を2条施文。口縁に刻目細隆起線を1条横位施文し、波頂下に8字状貼付文を接続施文。下に横帯状の沈線区画文を施すが、縄文の充填なし。一对の補修孔。外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第92図 PL.38	49	縄文土器 深鉢	西側窪み 口縁部片				B	波状口縁。内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線を2条横位施文し、波頂下に8字状貼付文を2単位施文。以下にLR縄文を充填した幅狭の横位沈線区画文を施文。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.38	50	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				D	口唇上面に半月状の平坦部を作出し、同心円状に沈線文や細隆起線を施した球状把手を付す。口縁に刻目細隆起線を2条横位施文し、口唇下から刻目細隆起線を縦位に接続施文。下に横帯状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.38	51	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				D	内面口縁に捻転状小突起の端部が垂下し、1条の沈線が廻る。口縁に刻目細隆起線を2条横位施文し、波頂下に8字状貼付文を接続施文。下に横位沈線を施す。	堀之内2式
第92図 PL.38	52	縄文土器 深鉢	口縁部片				A	内面口縁と口唇上面に横位沈線を各1条施文。口縁に刻目細隆起線を2条横位施文し、推定波頂下に8字状貼付文を接続施文。下に横位の連続弧線文を施すが、内外面風化により縄文の有無不明。	堀之内2式
第92図 PL.38	53	縄文土器 深鉢	口縁部片				D	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線を2条横位施し、縦位の8字状貼付文を接続施文。下に横位沈線を施すが、内外面風化により縄文の有無不明。	堀之内2式
第92図 PL.38	54	縄文土器 深鉢	列内溝部分 口縁部片				D	8字状の捻転状小突起を付した波状縁。内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線を2条横位施文し、波頂部下に8字状貼付文を2単位に接続施文。下に沈線区画文を施す。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.38	55	縄文土器 深鉢	口縁部片				D	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に細隆起線を2条横位施文し、8字状貼付文を接続施文。	堀之内2式
第92図 PL.38	56	縄文土器 深鉢	北側窪み 口縁部片				B	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁に刻目細隆起線を4条横位施文し、8字状貼付文を接続施文。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.38	57	縄文土器 深鉢	外側列 突起部完存				B	突起頭頂部に沈線渦巻文を施し、捻転した8字状隆帯文を口唇部にかけて接続貼付する。内外面風化。	堀之内2式
第92図 PL.38	58	縄文土器 深鉢	口頸部片				C	口縁から頸部にかけて刻目細隆起線を十字状に施し、交点に円形貼付文を施文。内外面風化。	堀之内2式
第93図 PL.38	59	縄文土器 深鉢	西側窪み 口縁-胴上半1/3	口	(21.0)		B	内面口縁に横位沈線を1条施文。口縁~頸部にかけて細隆起線を縦位施文。括れ部に横位の細隆起線を2条施し、8字状貼付文を接続施文。縄文の施文なし。	堀之内2式
第93図 PL.38	60	縄文土器 深鉢	西側窪み 口縁~頸部片	口	(30.4)		C	内面口縁に横位沈線を2条施文。口縁~体上部に縦位及び横位の細隆起線を施す。内外面風化。	堀之内2式
第93図 PL.38	61	縄文土器 深鉢	北側窪み、北西 側窪み ほぼ完形	口 底	38.0 11.2	高 43.0	C	粗製土器。外面に粗い撫で痕残る。底面に網代痕。内面底部周縁に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第93図 PL.38	62	縄文土器 深鉢	列内溝部分 口縁-胴上半1/8	口	(35.3)		C	粗製の深鉢。外面口縁~頸部斜位の粗い撫で、胴下半部横篋撫で。内面磨きに近い横篋撫で、一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第93図 PL.39	63	縄文土器 深鉢	西側窪み 口縁部片				C	無文土器。内外面風化。	堀之内2式
第93図 PL.39	64	縄文土器 深鉢	北側窪み 口縁-胴上半1/8	口	(33.5)		A	無文土器。外面縦篋撫で、下半部被熱風化。	堀之内2式
第94図 PL.39	65	縄文土器 深鉢	外側列 口縁-胴下半1/2	口 胴	(37.3) (36.4)	高 [37.5]	A	無文土器。器面風化により整形痕不明瞭。内面胴部下半に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第94図 PL.39	66	縄文土器 深鉢	北側窪み 胴下半1/3 底部 欠損	口	38.5		A	粗製に近い無文土器。外面にハケ状工具による斜位篋撫で痕が残る。内面風化。	堀之内2式
第94図 PL.39	67	縄文土器 深鉢	北東側窪み外 口縁部片				A	内側に折り返す複合口縁で、当該部位に連続する弧線文を施す。外面は無文だが、風化により整形痕不明瞭。	堀之内2式
第94図 PL.39	68	縄文土器 深鉢	西側窪み 底部完存	底	(9.5)		C	底面に網代痕。内外面風化により整形痕不明瞭。	堀之内2式
第94図 PL.39	69	縄文土器 深鉢	北側窪み 底部完存	底	5.3		B	朝顔形深鉢の底部。底面に網代痕。外面風化、内面横篋撫で。	堀之内2式
第94図 PL.39	70	縄文土器 深鉢	列内溝部分 底部完存	底	7.8		C	深鉢の底部。底面に網代痕。外面被熱風化、内面横篋撫で。	堀之内2式
第94図 PL.39	71	縄文土器 深鉢	北側窪み 底部完存	底	8.5		A	朝顔形深鉢の底部。底面に網代痕。外面被熱風化。	堀之内2式
第94図 PL.39	72	縄文土器 深鉢	北西側窪み、西 側窪み 底部完存	底	8.8		A	朝顔形深鉢の底部。底面に網代痕。外面風化、内面煤状炭化物付着。	堀之内2式
第94図 PL.39	73	縄文土器 深鉢	北東側窪み、北 側窪み 底部1/2	底	(13.1)		A	深鉢の底部。外面縦篋撫で、内面横篋撫で。内外面風化。	堀之内2式

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底					
第94図 PL.40	74	縄文土器 深鉢	北側窪み 底部完存	底	12.1		A	深鉢の底部。底面に網代痕。器面被熱風化により整形痕等不明瞭。内面に煤炭炭化物付着。	堀之内2式
第95図 PL.40	75	縄文土器 深鉢	西側窪み 底部完存	底	(13.1)		A	深鉢の底部。底面に網代痕。外面被熱風化により整形痕等不明瞭。内面横磨き、一部に煤炭炭化物付着。	堀之内2式
第95図 PL.40	76	縄文土器 深鉢	西側窪み 胴下半~底部1/2	底	9.4		C	深鉢の底部。底面に網代痕。外面被熱風化。	堀之内2式
第95図 PL.39	77	縄文土器 深鉢	西側窪み 胴下半~底部1/2	底	(10.3)		A	深鉢の底部。底面に網代痕。器面被熱風化により整形痕等不明瞭。内面に煤炭炭化物付着。	堀之内2式
第95図 PL.39	78	縄文土器 深鉢	北側窪み 口縁部片				B	8字状の捻転状小突起を付した波状口縁。全面にLR縄文を横位・多段に施文。内外面風化。	堀之内2式
第95図 PL.40	79	縄文土器 深鉢	北側窪み 胴部片				D	LR縄文を横位・多段に施文。内外面風化。	堀之内2式
第95図 PL.40	80	縄文土器 深鉢	中央北側 口縁部片				A	口唇上面に刻目を施し、以下にLR縄文を横位・多段に施文。内面風化。	堀之内2式
第95図 PL.40	81	縄文土器 深鉢	北側窪み 底部完存	底	(7.6)		A	底面に網代痕。円盤状成形と周縁部に接合痕が認められる。	堀之内2式
第95図 PL.40	82	縄文土器 深鉢	列内溝部分 底部完存	底	(7.5)		A	底面に網代痕。円盤状成形と周縁部に接合痕が認められる。	堀之内2式
第95図 PL.40	83	縄文土器 深鉢	底面2/3	底	(5.5)		B	底面に網代痕。破片を円盤状に整形している可能性あり。内外面風化	堀之内2式
第95図 PL.40	84	縄文土器 浅鉢?	北西側窪み 口縁部片				D	短く内反する内面口縁に刻目と横位の沈線文及び隆帯文を施す。口縁には刻目隆線により横位の楕円区画文を施文。	堀之内2式
第95図 PL.40	85	縄文土器 浅鉢	北側窪み 口縁部片				B	同心円状の沈線文を施した球状突起を付す。突起の両側には渦巻文を施す。内外面風化。	堀之内2式
第95図 PL.40	86	縄文土器 無頸壺	中央西側 口縁部片				D	87と同一個体。	堀之内2式
第95図 PL.40	87	縄文土器 無頸壺	北東側窪み 口縁部片				D	口唇下に横線文と刻目隆帯を各1条廻らせ、体部に5本単位の沈線懸垂文とLR充填縄文を施す。内面一部に煤炭炭化物付着。	堀之内2式
第95図 PL.40	88	縄文土器 注口土器	北東側窪み 胴部片	胴	(11.6)		B	体上半部に沈線渦巻文を施し、外縁区画内に細密なLR縄文を充填。	堀之内2式
第95図 PL.40	89	縄文土器 注口土器	北側窪み 口縁-頸部1/5	口	(12.7)		A	く字状に短く内折する口縁内外面に横位沈線文を施文。肩部に細隆起線による楕円状の区画文を施すが、風化により不明瞭。	堀之内2式
第95図 PL.40	90	縄文土器 注口土器	北側窪み、西側 窪み 口縁-胴下半1/3	口	(15.0)		A	無文。橋状把手を付すが、推定2単位。内外面風化。	堀之内2式
第95図 PL.40	91	縄文土器 注口土器	北側窪み 口縁~胴上半				C	口頸部に1対の橋状把手を付す。内面口縁に横位沈線を1条施文。肩部に横位細隆起線文を施し、縦位細隆起線文との交点に刺突文を施す。以下に横位沈線文や曲線文を施すが、器面風化により詳細不明。	堀之内2式
第94図 PL.40	92	縄文土器 注口土器	北側窪み 胴上位~底部1/3	底	5.8		B	体部上半に半截竹管による円形状や横位の平行沈線文を施す。底面に網代痕。内外面風化。	堀之内2式
第94図 PL.40	93	縄文土器 注口土器	埋没土器 胴部片				D	沈線渦巻文を施すが、器面風化により縄文施文の有無不明。	堀之内2式
第94図 PL.40	94	縄文土器 注口土器	北東側窪み 胴部片				A	幅広の半截竹管により横位のS字文を施す。内外面風化。	堀之内2式
第94図 PL.40	95	縄文土器 注口土器	北側窪み 把手完存				B	口唇に接して動物意匠的な橋状把手を付す。把手の上下両端に8字状の捻転小突起を付し、上端部には小突起の下部に径4mmの焼成前尖孔がある。内外面風化。	堀之内2式
第94図 PL.40	96	縄文土器 注口土器	北側窪み 胴部片				A	細隆起線により渦巻状の文様を構成。内外面被熱風化。	堀之内2式
第94図 PL.40	97	縄文土器 注口土器	西側窪み 口縁1/4	口	(10.9)		B	内面側への折返し口縁。口縁に重層的な沈線鋸歯文や刺突文を充填した横位の長楕円形区画文を施す。内外面風化。	堀之内2式
第94図 PL.41	98	縄文土器 注口土器	北西側窪み 口縁-頸部1/2	口	9.5		B	口頸部に1対の橋状把手を付し、口唇上に渦巻文を施した小突起が延びる。内面口縁と口唇上面に横位沈線を各1条施文。口頸部に長楕円区画文を縦・横位に施し刺突文を充填するが、器面風化により不鮮明。球状の胴部は無施文で、下半部は意図的な欠損か。注口部不明。	堀之内2式
第94図 PL.40	99	縄文土器 注口土器	外側列北縁 頸部・把手1/8				B	口縁~肩部にかけて長楕円形状の沈線区画文を縦・横位に施文。内面風化。	堀之内2式
第94図 PL.40	100	縄文土器 注口土器	西側窪み 把手完存				B	捻転状の把手頂部に沈線渦巻文を、基部に弧状文を施す。内外面風化。	堀之内2式
第94図 PL.41	101	縄文土器 注口土器	北側窪み 口縁-肩部・把手 1/4				B	把手頭頂部に円文と刺突文を施文し、下位に弧線文やその縁辺に刻目を施す。基部両側には刺突文を施す。	堀之内2式
第94図 PL.41	102	縄文土器 注口土器	西側窪み 胴部片				D	体部上半に沈線の長楕円区画文を横位・多段に施し、刺突文を充填。外面丁寧な磨き。内面風化。	堀之内2式
第94図 PL.41	103	縄文土器 注口土器	頸部-胴上半1/6				B	口頸部に横位の重層鋸歯文や横線文を施す。肩部に横線文や横長の楕円区画文を施文し、区画内に細かい連続刺突文を施す。	堀之内2式
第97図 PL.41	104	縄文土器 注口土器	内側列 注口部完存				B	体部との接合基部に1条の隆帯を廻らせ、背面に捻転した8字状隆線文を施文。接合基部内面に接合痕が残存。先端部に煤炭炭化物付着。	堀之内2式

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第97図 PL.41	105	縄文土器 注口土器	列内溝部分 注口部完存				B	体部との接合基部に1条の隆帯を廻らせ、背面に捻転した8字状隆線文を施文。接合基部内面に接合痕が残存。内外面風化。	堀之内2式
第97図 PL.41	106	縄文土器 注口土器	西側窪み 注口部完存				B	体部との接合基部に1条の隆帯を廻らせ、背面に8字状隆帯文の一部が連接。接合基部内面に接合痕が残存。注口部は直径23mmの円筒をベースにその外周に粘土を附加して作出。内外面風化。	堀之内2式
第97図 PL.41	107	縄文土器 注口土器	北側窪み 注口部完存				B	体部との接合基部に1条の隆帯を廻らせ、LR縄文を施文。内外面風化。	堀之内2式
第97図 PL.41	108	縄文土器 注口土器	北側窪み 注口部完存				B	体部との接合基部に1条の隆帯を廻らせ、背面に8字状文の一部と推定される隆帯渦巻文が連接。接合基部内面に接合痕が残存。内外面風化。	堀之内2式
第97図 PL.41	109	縄文土器 注口土器	北東側窪み 底部完存	底	(7.3)		B	底面に網代痕。底面端部がやや突出する。内外面風化。	堀之内2式
第97図 PL.41	110	縄文土器 注口土器	西側窪み 底部完存	底	6.4		B	底面に網代痕。外面丁寧な横磨き、内面風化。	堀之内2式
第97図 PL.41	111	縄文土器 注口土器	北西側窪み、西側窪み 底部1/2	底	9.5		B	底面に網代痕。内外面共に丁寧な横磨き。	堀之内2式
第97図 PL.41	112	縄文土器 注口土器	北側窪み、列内溝部分 底部1/2	底	(11.0)		B	底面に網代痕。内外面共に風化により整形痕不明瞭だが、一部に丁寧な横磨き残存。	堀之内2式
第97図 PL.41	113	縄文土器 注口土器	中央北東側 底部完存	底	(5.4)		A	底面に網代痕。内外面風化により整形痕不明瞭。	堀之内2式
第97図 PL.41	114	縄文土器 注口土器	0 底部1/4	底	(7.4)		B	底面に網代痕。外面風化、内面磨き。	堀之内2式
第98図 PL.41	115	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				B	8字状の捻転状小突起を付した波状口縁。3条の横線区画文を施し、クランク状の区切り文を施文。区画内にLR縄文を充填。	加曾利B1式
第98図 PL.41	116	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				D	内面口縁に幅広の横線文を施す。口縁に4条の沈線文を廻らせて縦区切り文を施し、区画内に櫛歯状工具による横位条痕文を施文。内面横磨き。	加曾利B1式
第98図 PL.41	117	縄文土器 鉢	内側列 口縁部片				B	半截竹管による横位の半隆起線文上に刻目を施す。内外面風化。	加曾利B1式
第98図 PL.41	118	縄文土器 鉢	北側窪み、内側列 口縁-胴上半1/4	口	(24.2)		B	口縁に横線文を3条廻らせ、その上位に連接して弧線文を、また下位に対向して「の字文」を施す。体部は渦巻状の区画文を施文。口縁・体部の区画内にLR縄文を充填。	加曾利B2式
第98図 PL.41	119	縄文土器 鉢	口縁部片				B	口縁にC字状の隆帯を貼付し、以下に横位の沈線区画文を施す。区画内にLR縄文を充填。内面横磨き。	加曾利B2式
第98図 PL.41	120	縄文土器 注口土器?	北側窪み 口縁部片				B	幅広の低位隆帯貼付により半肉彫的な円文等を構成し、沈線により縁取る。隆帯上に細密なLR縄文を施文。	加曾利B2式 併行
第98図 PL.42	121	縄文土器 注口土器	中央北側 口縁~胴上半	口	(5.5)		B	口頸部に推定1対の橋状把手を付す。内面口縁は凹線状の幅広沈線を1条横位施文。頸部下にS字状連鎖文を横位に施すが、上位横線の描き直しにより寸断されている。下位に櫛歯状工具による入れ子状の方形区画文を施し、コーナー部に刺突文を、文様隣接部にS字状区切り文を施文。	加曾利B1式
第98図 PL.42	122	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				B	口唇下に無文部を置き、2条の横位沈線文と密集した斜線文を施文。内外面風化。	加曾利B2式
第98図 PL.42	123	縄文土器 深鉢	北西側窪み 口縁部片				A	内面口縁と口唇上面に横線文を施す。口縁には密集した斜線文を羽状に施文。内面から外面方向の補修孔あり。内面横磨き。	加曾利B3式
第98図 PL.42	124	縄文土器 深鉢	口縁部片				A	内面口縁と口唇上面に横線文を施す。口縁には密集した斜線文を施文。内外面風化。	加曾利B3式
第98図 PL.42	125	縄文土器 深鉢	口縁部片				D	内面に折り返す複合状口縁。小突起を付した波状縁。口唇上面に沈線を施し、口縁に密集した斜線文を施文。	加曾利B3式
第98図 PL.42	126	土製品 土偶	西側窪み 1/3(体部)				B	中空土偶で器肉は5~8mmとやや薄手。頭部、腕・脚部及び左乳房欠落。外面風化により、文様の有無不明。	後期中葉
第98図 PL.42	127	匙形土製品	西側窪み 柄部欠損				B	直径15mmの棒状粘土先端部を指頭で押圧して匙部を作出。内外面風化。	堀之内2式
第99図 PL.42	128	剥片石器 石鏃	埋没土 完形	長幅	1.3 1.1	厚重 0.3 0.3	黒曜石	両面全面に押圧剥離を施し整形。	凹基無茎鏃 黒曜石分析9
第99図 PL.42	129	剥片石器 石鏃	中央北側 ほぼ完形	長幅	(1.7) 1.1	厚重 0.3 0.2	黒曜石	両面全面に押圧剥離を施し整形。	凹基無茎鏃 黒曜石分析1
第99図 PL.42	130	剥片石器 石鏃	埋没土 ほぼ完形	長幅	(1.4) 1.1	厚重 0.2 0.1	黒曜石	両面全面に二次加工を施し整形している。先端部折れ。	凹基無茎鏃 黒曜石分析6
第99図 PL.42	131	剥片石器 石鏃	埋没土 3/4	長幅	(1.8) (1.2)	厚重 0.3 0.3	チャート	両面全面に押圧剥離による二次加工を施す。左返し部欠損。	凹基無茎鏃
第99図 PL.42	132	剥片石器 石鏃	北西側窪み ほぼ完形	長幅	(1.4) (1.5)	厚重 0.3 0.3	チャート	両面全面に押圧剥離による二次加工を施す。先端および右返し部欠損。	
第99図 PL.42	133	剥片石器 石鏃	埋没土 3/4	長幅	(1.6) 1.8	厚重 0.3 0.6	黒曜石	両面で基部を中心に縦方向の擦痕が明瞭に観察できる。両側縁の剥離には擦痕を切っているものと切られているものがあり、擦りの前後に二次加工を施している。上部折れ。	凹基無茎鏃 黒曜石分析11
第99図 PL.42	134	剥片石器 石鏃	埋没土 完形	長幅	1.6 1.3	厚重 0.5 0.7	黒曜石	両面に二次加工を施しているが、中央部に厚みを残し形状も不整なことから、未成品と考えられる。	平基無茎鏃 黒曜石分析7

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第99図 PL.42	135	剥片石器 石鏃	北東側窪み 完形	長幅 2.2 1.5	厚 0.6 1.0		赤碧玉	両面全面に押圧剥離による二次加工を施し整形。	平基無茎鏃
第99図 PL.42	136	剥片石器 石鏃	埋没土 3/4	長幅 1.4 (1.2)	厚 0.3 0.3		黒曜石	両面全面に二次加工を施す。左返し部付近の形状が周囲よりやや大きいので、製作途中の欠損の可能性がある。	平基無茎鏃 黒曜石分析12
第99図 PL.42	137	剥片石器 石鏃	埋没土 完形	長幅 1.7 1.0	厚 0.4 0.6		黒曜石	石器全体が水による影響を受け著しく摩滅。正面右側縁周辺では横方向の線状痕が認められる。	凹基無茎鏃 黒曜石分析13
第99図 PL.42	138	剥片石器 石鏃	埋没土 3/4	長幅 3.8 1.8	厚 0.5 2.5		硬質泥岩	両面縁辺に二次加工を施し、刃部を作り出す。側縁の加工は鋸歯状である。先端部欠損。	
第99図 PL.42	139	剥片石器 石鏃	埋没土 完形	長幅 2.3 1.2	厚 0.5 1.1		赤碧玉	両面縁辺に二次加工を施し、先端部を作り出す。裏面に主要剥離面を大きく残す。	
第99図 PL.42	140	剥片石器 楔形石器	西側窪み ほぼ完形	長幅 (1.9) 1.3	厚 0.7 1.9		黒曜石	上下方向からの剥離痕が認められる。下端折れ。	黒曜石分析2
第99図 PL.42	141	剥片石器 楔形石器	埋没土 完形	長幅 2.1 2.2	厚 1.4 9.4		チャート	上下方向からの剥離痕が見られる。	
第99図 PL.42	142	剥片石器 石鏃未成品	埋没土 完形	長幅 0.7 1.5	厚 0.4 1.0		黒曜石	両面全面に二次加工を施し整形。	黒曜石分析8
第99図 PL.42	143	剥片石器 スクレイパー	埋没土 完形	長幅 3.9 4.4	厚 1.6 28.7		黒色安山岩	平面形は円形に近く、背面全面と腹面縁辺に二次加工を施す。小形石核の可能性もある。	
第99図 PL.42	144	剥片石器 スクレイパー	北側窪み 完形	長幅 6.9 6.9	厚 2.2 117.2		硬質泥岩	両面縁辺に二次加工を施し整形・刃部作出。	
第99図 PL.42	145	剥片石器 スクレイパー	埋没土 完形	長幅 13.6 11.0	厚 4.2 799.1		細粒輝石安山岩	大形剥片素材。周縁に二次加工を施し整形。裏面に自然面を大きく残す。	
第99図 PL.42	146	剥片石器 スクレイパー	埋没土 完形	長幅 5.9 8.1	厚 3.0 178.8		硬質泥岩	正面左縁辺に刃部を作出している。	
第99図 PL.42	147	剥片石器 スクレイパー	北西側窪み 完形	長幅 11.4 4.7	厚 1.4 92.6		硬質泥岩	横長剥片を素材とし、両面縁辺に二次加工を施す。裏面に主要剥離面を大きく残す。	
第99図 PL.42	148	礫石器 スクレイパー	埋没土 完形	長幅 15.4 6.9	厚 3.0 390.5		硬質泥岩	板状の礫を素材とする。両面に二次加工を施し整形。左側面は折れ面だが、折れ面を二次加工が切っている。	
第99図 PL.42	149	剥片石器 スクレイパー	埋没土 完形	長幅 12.5 (8.6)	厚 2.2 165.5		珩質頁岩	板状剥片を素材として縁辺に二次加工を施している。	
第100図 PL.42	150	剥片石器 打製石斧	列内溝部分、西 側窪み 完形	長幅 18.2 8.4	厚 2.9 464.5		細粒輝石安山岩	表面が全体的に摩耗しているものの、正面の方が裏面よりも著しい。両面全面に二次加工を施し、左右側縁に抉りを作り出す。	
第100図 PL.42	151	剥片石器 打製石斧	埋没土 ほぼ完形	長幅 11.9 5.8	厚 2.1 140.1		硬質泥岩	中央部に括れをもつ形状で、刃部の摩滅が著しい。	
第100図 PL.42	152	剥片石器 打製石斧	西側窪み 2/3	長幅 (10.7) 7.6	厚 3.6 291.8		細粒輝石安山岩	上部欠損。抉り部の摩滅が顕著。	
第100図 PL.42	153	剥片石器 打製石斧	西側窪み 2/3	長幅 (10.8) (6.4)	厚 2.9 191.4		硬質泥岩	右側縁の摩滅顕著。上下欠損。	
第100図 PL.42	154	剥片石器 打製石斧	埋没土 完形	長幅 13.8 10.6	厚 2.5 354.6		変質安山岩	大形剥片素材。縁辺に二次加工を施し整形。刃部やや摩滅。裏面に自然面を大きく残す。	
第100図 PL.42	155	剥片石器 打製石斧	北側窪み 2/3	長幅 (7.6) (4.6)	厚 1.2 40.7		珩質頁岩	分銅形。抉り部は摩滅している。下半部欠損。	
第100図 PL.42	156	剥片石器 打製石斧	埋没土 2/3	長幅 8.6 5.7	厚 1.7 82.9		細粒輝石安山岩	左右側面に抉りをもち、抉り内部は摩滅している。正面刃部周辺では摩滅が認められる。上部欠損。	
第100図 PL.42	157	剥片石器 打製石斧	北西側窪み 2/3	長幅 (8.5) 4.5	厚 2.0 81.4		硬質泥岩	上部欠損。刃部周辺に摩滅が見られる。	
第100図 PL.42	158	剥片石器 打製石斧	埋没土 完形	長幅 6.8 7.9	厚 2.4 162.8		硬質泥岩	大形剥片を素材とし、両面縁辺に二次加工を施す。左右側縁の一部に潰れが見られる。	
第100図 PL.42	159	剥片石器 打製石斧	北側窪み ほぼ完形	長幅 (10.9) 5.5	厚 1.8 129.8		細粒輝石安山岩	刃部周辺の摩滅が著しい。上端欠損。裏面に自然面を残す。	
第100図 PL.42	160	礫石器 磨製石斧	埋没土 2/3	長幅 9.2 5.7	厚 3.8 340.4		変玄武岩	研磨痕が顕著。整形時の敲打痕が一部残る。刃部では使用による摩滅・欠損が見られる。上端部は稜線および内部の摩滅が著しく、欠損後再利用したと推定される。	
第100図 PL.43	161	剥片石器 二次加工ある剥片	北西側窪み 破片	長幅 (6.9) (8.0)	厚 1.7 97.6		硬質泥岩	右側縁に二次加工を施す。裏面に自然面を大きく残す。	
第100図 PL.43	162	剥片石器 二次加工ある剥片	外側列 完形	長幅 7.9 4.9	厚 2.6 69.9		硬質泥岩	左側縁に二次加工を施す。右側面の折れ面は同時割れと考えられる。	
第100図 PL.43	163	剥片石器 二次加工ある剥片	中央西側 完形	長幅 6.5 3.2	厚 1.8 29.2		硬質泥岩	素材剥片の腹面縁辺にのみ二次加工を施す。	
第100図 PL.43	164	剥片石器 二次加工ある剥片	埋没土 完形	長幅 9.2 8.9	厚 3.9 272.1		硬質泥岩	大形剥片素材。周縁に粗い二次加工を施す。石核の可能性もある。	
第101図 PL.43	165	剥片石器 二次加工ある剥片	埋没土 完形	長幅 (11.7) 8.3	厚 2.9 343.2		変質玄武岩	大形剥片素材。裏面は自然面。左側縁に粗い二次加工を施す。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第106図 PL.45	201	礫石器 多孔石	列内溝部分 完形	長幅 9.0	厚 15.8	重 6.7 1066.2	牛伏砂岩	表裏面中央部に断面漏斗状の凹みがある。凹みが連続し、平面的には楕円形に見えるものもある。	
第106図 PL.45	202	礫石器 多孔石	埋没土 完形	長幅 14.2	厚 15.6	重 4.4 1075.1	牛伏砂岩	扁平礫の表裏面に断面漏斗状の凹みがある。	
第106図 PL.45	203	礫石器 石錘	北側窪み ほぼ完形	長幅 4.2	厚 8.6	重 1.4 79.3	黒色片岩	扁平な楕円礫の上下端部に切り込みや剥離痕をもつ。	
第106図 PL.45	204	礫石器 石錘	埋没土 完形	長幅 5.2	厚 6.5	重 1.4 63.9	珪質頁岩	扁平な楕円礫を素材とし、対向する上下端部に剥離痕が認められたため石錘と判断した。	
第106図 PL.45	205	礫石器 石錘	埋没土 完形	長幅 3.5	厚 6.3	重 1.2 43.3	緑色片岩	扁平な小形の楕円礫を素材とし、上下端に切り込みや剥離痕が認められる。	
第106図 PL.45	206	礫石器 石錘	埋没土 完形?	長幅 3.8	厚 5.0	重 1.0 23.5	珪質頁岩	上下に挟りをもつ。裏面は剥離痕で、断面形はかまぼこ状を呈する。	
第106図 PL.45	207	石製品 垂飾	埋没土 3/4	長幅 (1.2)	厚 2.2	重 0.8 2.0	蛇紋岩	長径8mmの穴を穿孔。長さのわりに穴が大きく、穴の位置が左に偏っている。作り替えの可能性がある。	
第106図 PL.45	208	石製品 石棒	外側列 3/4	長幅 7.3	厚 (40.4)	重 (5.8) 2639.6	変質玄武岩	無頭。わずかに敲打痕が残るものの、表面は非常に丁寧に研磨されている。	
第106図 PL.45	209	石製品? 不明	埋没土 完形	長幅 9.1	厚 9.1	重 1.1 100.5	凝灰質砂岩	平面形は扁平な三角形を呈する。	

6号住居遺物観察表 (第107図 PL.45)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第107図 PL.45	1	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片				A	内面口縁に1条の横線文を施す。無文土器か。内面磨き状の横篋撫で。	堀之内2式
第107図 PL.45	2	縄文土器 深鉢	遺構外 口縁部片				A	内面口縁に1条の横線文を施す。口縁に横位刻目細隆起線文を2段に施し、波頂下に8字状貼付文を連続施文。外面風化により細隆起線文上の刻目の有無不明。	堀之内2式
第107図 PL.45	3	剥片石器 スクレイパー	埋没土 完形	長幅 5.3	厚 6.7	重 1.5 53.7	硬質泥岩	横長剥片素材。周縁に二次加工を施し、刃部を作り出す。	

遺構外遺物観察表 (第108図 PL.45)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第108図 PL.46	1	縄文土器 深鉢	11号土坑埋没土 口縁部片				B	波状口縁。口縁に内面まで垂下する8字状の捻転状小突起を付し、2条の横線文を施す。口縁に横位細隆起線文を2段に施し、波頂下に8字状貼付文を連続施文。外面風化により細隆起線文上の刻目の有無不明。	堀之内2式
第108図 PL.46	2	縄文土器 深鉢	4号住居埋没土 底部完形	底	(9.2)		B	朝顔形深鉢の底部。底面に網状痕。内面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第108図 PL.46	3	剥片石器 石鏃	2区 ほぼ完形	長幅 (1.4)	厚 (1.5)	重 0.3 0.2	黒曜石	両面全面に押圧剥離による二次加工を施す。右返し部欠損。	凹基無茎鏃
第108図 PL.46	4	剥片石器 スクレイパー	1区2面 完形	長幅 7.7	厚 8.7	重 1.9 91.7	硬質泥岩	先端部周辺の摩滅が顕著。腹面縁辺に二次加工を施す。	
第108図 PL.46	5	剥片石器 スクレイパー	1区2面 完形	長幅 5.2	厚 10.0	重 3.3 154.7	硬質泥岩(珪化凝灰質泥岩)	厚手の剥片を素材とし、両面縁辺に二次加工を施す。裏面に自然面を残す。打製石斧未成品の可能性もある。	
第108図 PL.46	6	剥片石器 スクレイパー	1区2面 完形	長幅 7.7	厚 10.3	重 2.7 217.6	細粒輝石安山岩	大形剥片を素材とし、縁辺に二次加工を施し刃部を作り出す。裏面に自然面を大きく残す。	
第108図 PL.46	7	剥片石器 打製石斧	1区 完形	長幅 3.6	厚 13.1	重 1.8 110.6	砂岩	両面全面に二次加工を施し短冊形に整形。刃部および側縁に摩滅が認められる。	
第108図 PL.46	8	剥片石器 打製石斧	1区 完形	長幅 5.1	厚 9.5	重 1.9 95.3	細粒輝石安山岩	刃部周辺および側縁に摩滅が見られる。	
第108図 PL.46	9	剥片石器 打製石斧	14号溝埋没土 完形	長幅 7.0	厚 11.2	重 2.7 192.4	硬質泥岩	刃部および挟り部が摩滅。裏面に自然面を残す。	
第108図 PL.46	10	剥片石器 打製石斧	14号溝埋没土 完形	長幅 9.6	厚 14.5	重 2.6 338.1	変質安山岩	大形剥片素材。刃部には刃こぼれ状の微小剥離痕と摩滅が見られる。左右側縁に二次加工を施し整形。側縁中央部には摩滅が認められ、捲縛痕と推定される。	
第108図 PL.46	11	剥片石器 打製石斧	1区表層 破片	長幅 (8.0)	厚 (5.8)	重 2.2 110.9	細粒輝石安山岩	上下部欠損。挟り部周辺の摩滅が顕著。	
第108図 PL.465	12	剥片石器 打製石斧	4号住居埋没土 1/2	長幅 (5.6)	厚 (7.8)	重 2.5 114.6	硬質泥岩	基部のみ。下半部欠損。左右側縁に潰れが見られる。	
第108図 PL.46	13	剥片石器 石核	18号住居埋没土 完形	長幅 7.5	厚 8.7	重 4.5 288.2	硬質泥岩	厚手の大形剥片素材。打面転移をして剥片剥離を行っている。	
第108図	14	石器 凹石	16号住居埋没土 1/2	長幅 (7.0)	厚 (16.3)	重 (4.1) 372.5	牛伏砂岩	扁平な楕円礫の中央部に断面漏斗状の凹みをもつ。被熱によるのか表面にスス付着。	

参考文献一覧

周辺遺跡引用文献

- 1 吉井町教育委員会『入野遺跡』1962
- 2 山崎一『群馬県古城址の研究 下巻』1972
- 3 群馬県立博物館『東吹上遺跡』1973
- 4 吉井町誌編さん委員会『吉井町誌』1974
- 5 尾崎喜左雄『上野国の古墳と文化』1977
- 6 群馬県教育委員会群馬県歴史の道調査報告書第十集『下仁田道』1981
- 7 吉井町教育委員会『川内遺跡』1982
- 8 吉井町教育委員会『道六神遺跡』1986
- 9 吉井町教育委員会『川福遺跡調査報告書』1986
- 10 吉井町教育委員会『入野遺跡』～『入野遺跡Ⅲ』1985～1986
- 11 吉井町教育委員会『東沢遺跡 折茂東遺跡』1987
- 12 吉井町教育委員会『西馬脇・長根 宿遺跡』1987
- 13 吉井町教育委員会『蛇田古墳』1987
- 14 吉井町教育委員会『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』1989
- 15 吉井町教育委員会『富岡遺跡』1989
- 16 吉井町教育委員会『柳田遺跡発掘調査報告書』1989
- 17 吉井町教育委員会『竹腰遺跡』1990
- 18 吉井町教育委員会『椿谷戸遺跡Ⅱ』1990
- 19 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『矢田遺跡』～『矢田遺跡Ⅷ』1990～1997
- 20 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『長根羽田倉遺跡』1990
- 21 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『神保下條遺跡』1992
- 22 吉井町教育委員会『多比良遺跡発掘調査報告書』1992
- 23 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『黒熊中西遺跡(1)(2)』1992・1994
- 24 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『神保富士塚遺跡』1993
- 25 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『多胡蛇黒遺跡』1993
- 26 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』1994
- 27 吉井町教育委員会『ヌカリ沢 A 築址発掘調査報告書』1995
- 28 吉井町教育委員会『御門遺跡発掘調査報告書』1995
- 29 吉井町教育委員会『入野遺跡群 馬場遺跡発掘調査報告書』1995
- 30 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』1995
- 31 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』1996
- 32 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『神保植松遺跡』1997
- 33 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『多比良追部野遺跡』1997
- 34 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』1998
- 35 吉井町教育委員会『多比良観音山遺跡発掘調査報告書』1999
- 36 吉井町教育委員会『矢田遺跡発掘調査報告書』2001
- 37 吉井町教育委員会『川福遺跡第二次発掘調査報告書』2002
- 38 吉井町教育委員会『川内遺跡第二次発掘調査報告書』2004
- 39 吉井町教育委員会『多比良笠掛遺跡発掘調査報告書』2003
- 40 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』2003
- 41 吉井町教育委員会『椿谷戸遺跡第四次発掘調査報告書』2004
- 42 吉井町教育委員会『矢田遺跡(第3次)発掘調査報告書』2004
- 43 吉井町教育委員会『上河原遺跡発掘調査報告書』2004
- 44 吉井町教育委員会『下条遺跡発掘調査報告書』2004
- 45 吉井町教育委員会『片山遺跡群発掘調査報告書』2004
- 46 吉井町教育委員会『安坪古墳群・長根遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』2004
- 47 吉井町教育委員会『安坪古墳群・長根遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』2005
- 48 吉井町教育委員会『東シメ木・多胡松原遺跡発掘調査報告書』2005
- 49 吉井町教育委員会『中林遺跡』2006
- 50 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』2006
- 51 吉井町教育委員会『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』2007
- 52 公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『吉井川下宿遺跡』2013
- 53 高崎市教育委員会『多胡碑周辺遺跡』第4次調査現地説明会資料2014
- 54 公益財団法人群馬県埋蔵文化財事業団『本郷畑内遺跡』2015

その他の引用・参考文献

- 55 中東耕志・飯島静男『群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材 - 黒色頁岩と黒色安山岩 - 』『群馬県立歴史博物館年報』第5号 群馬県立歴史博物館1984
- 56 磯貝基一・大工原豊『大下原遺跡・吉田原遺跡』安中市教育委員会1993
- 57 桜井美枝・井上昌美・関口博幸『群馬県における石器石材の研究(1)』『研究紀要』11 財団法人群馬県埋蔵文化財事業団1993
- 58 下仁田自然学校・竈川の石図鑑編集委員会『かぶら川の石図鑑』地学団体研究会2005

写真図版



① 塩川砂井戸遺跡1・2区全景(東より)



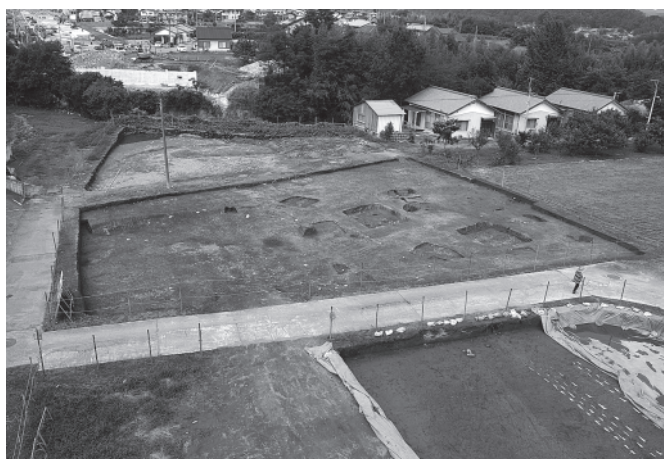
② 塩川砂井戸遺跡1・2区全景(南より)



① 塩川砂井戸遺跡西側遠景(南西より：手前が大沢川)



② 調査前の2・3区遠景(東より)



③ 1・2区1面遠景(東より)



④ 1・2区2面遠景(東より)



⑤ 3区遠景(東より)



⑥ 5区遠景(南より)



⑦ 2区西側調査風景(東より)



⑧ 現地説明会と2区遠景(南西より)

1・2号住居



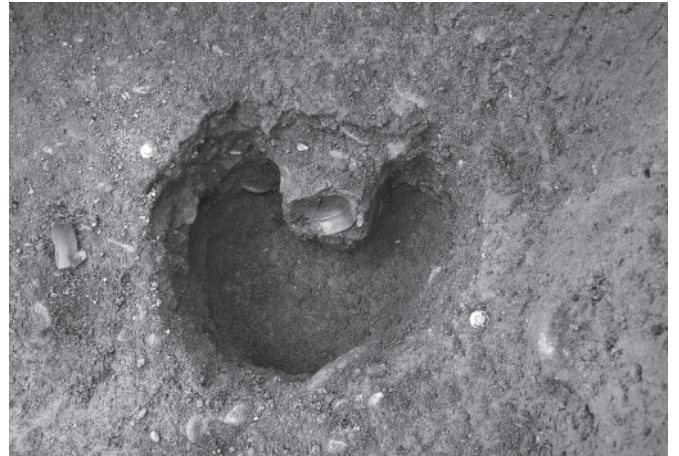
① 1号住居全景(西より)



② 1号住居床上礫確認状態(西より)



③ 1号住居断面(南より)



④ 1号住居貯蔵穴(西より)



⑤ 1号住居カマド(西より)



⑥ 1号住居カマド掘り方(南西より)



⑦ 2号住居全景(南より)



⑧ 2号住居断面(南より)



① 3号住居全景(西より)



② 3号住居床上礫確認状態(西より)



③ 3号住居北西隅付近遺物出土状態(南東より)



④ 3号住居南壁下遺物出土状態(南より)



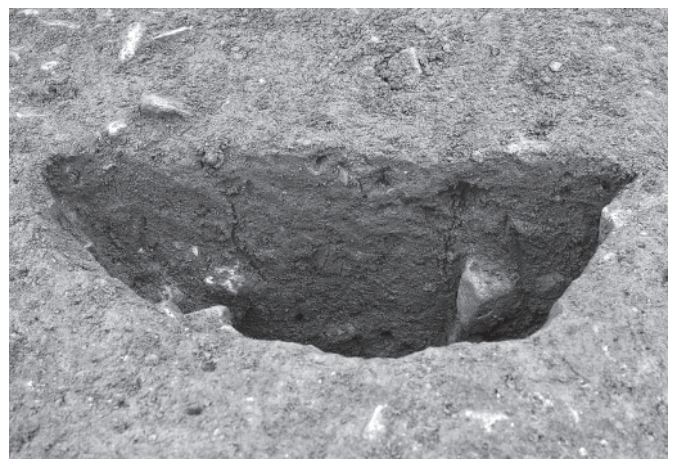
⑤ 3号住居断面(西より)



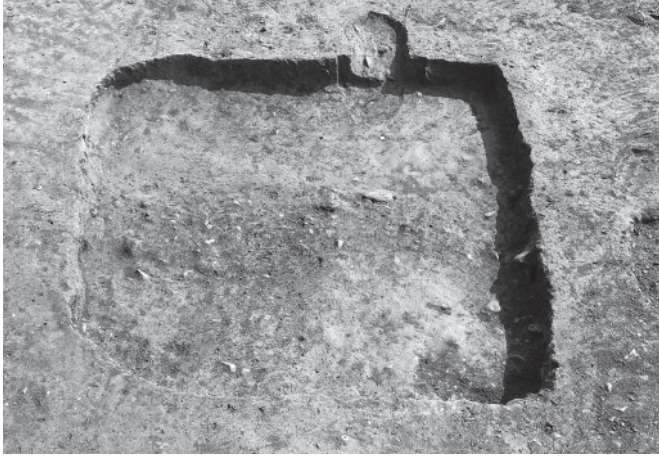
⑥ 3号住居カマド(南西より)



⑦ 3号住居カマド断面(西より)



⑧ 3号住居貯蔵穴断面(西より)



① 4号住居全景(南西より)



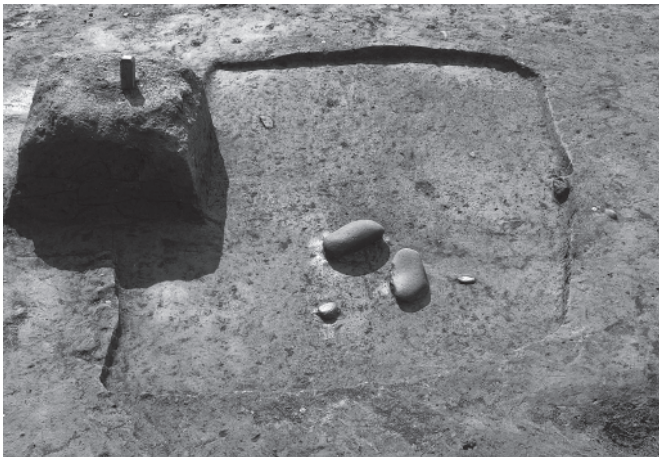
② 4号住居断面(南東より)



③ 4号住居カマド(南東より)



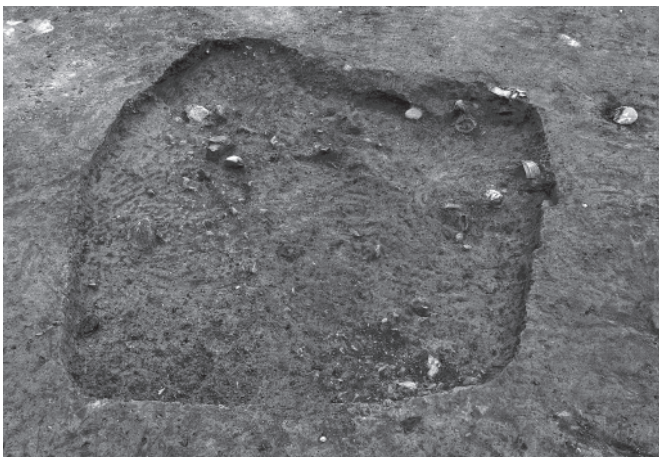
④ 4号住居カマド(南西より)



⑤ 5号住居全景(東より)



⑥ 5号住居断面(東より)



⑦ 7号住居全景(西より)



⑧ 7号住居カマド(西より)



① 7号住居カマド内出土遺物(西より)



② 7号住居カマド断面(南より)



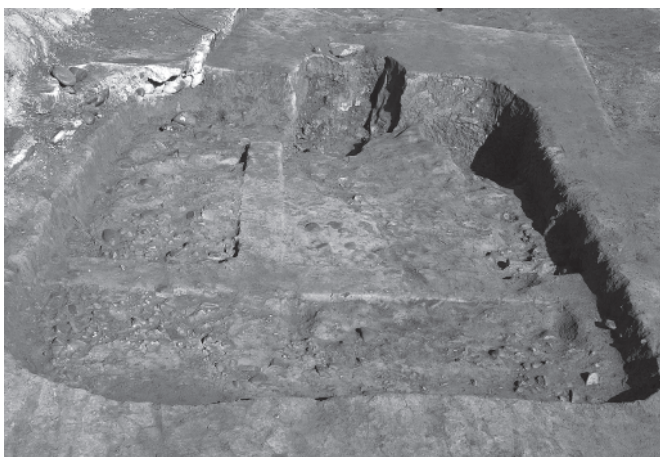
③ 2区北西隅の住居群(南より)



④ 8号住居全景(西より)



⑤ 8号住居断面(南より)



⑥ 8号住居掘り方(西より)



⑦ 8号住居貯蔵穴(西より)



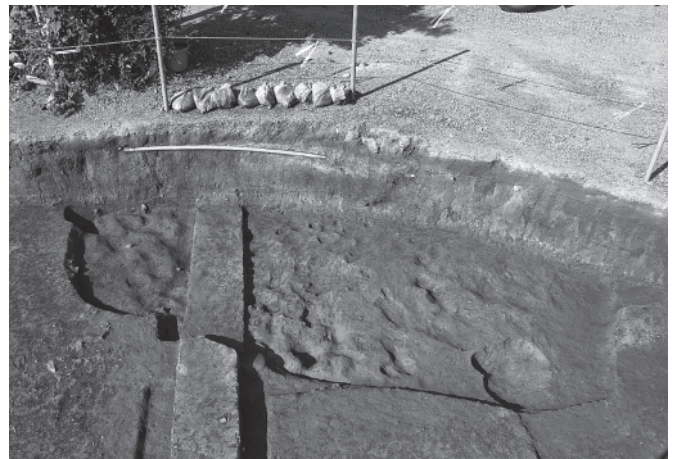
① 9号住居全景(南より)



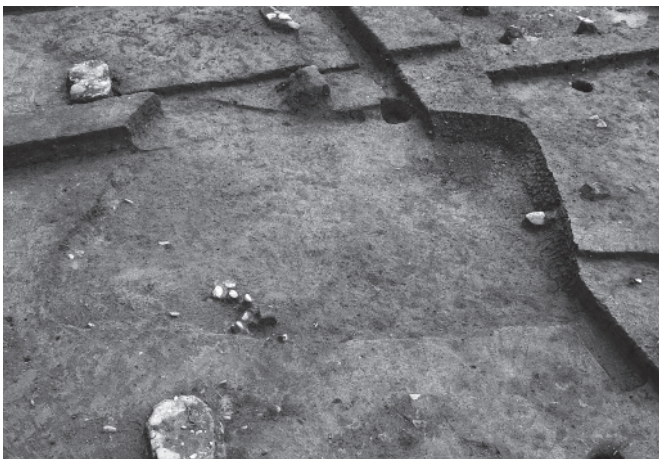
② 9号住居遺物出土状態(北より)



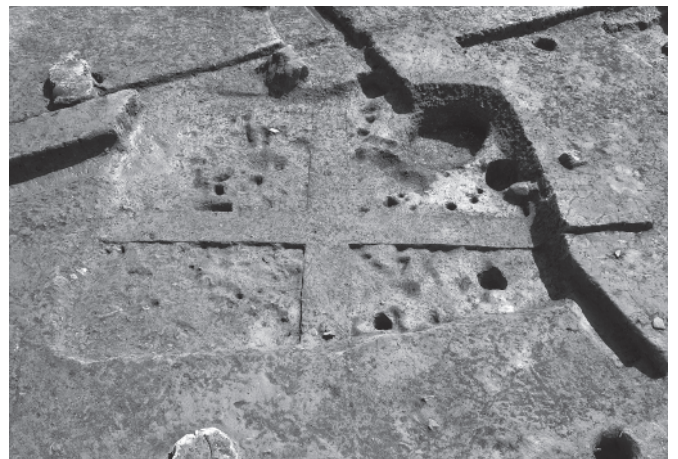
③ 10号住居全景(南より)



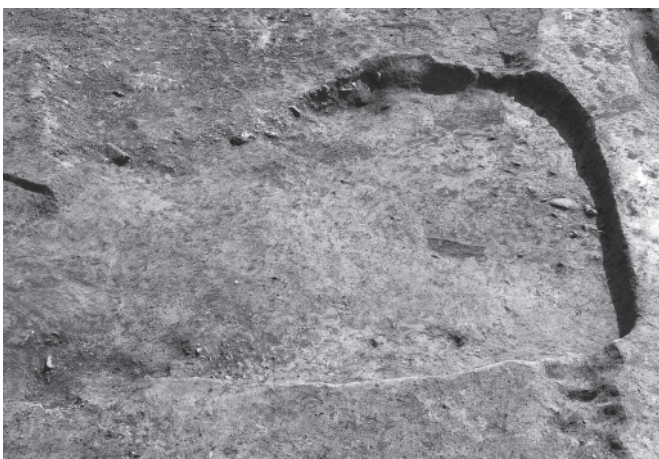
④ 10号住居掘り方(南より)



⑤ 11号住居全景(北西より)



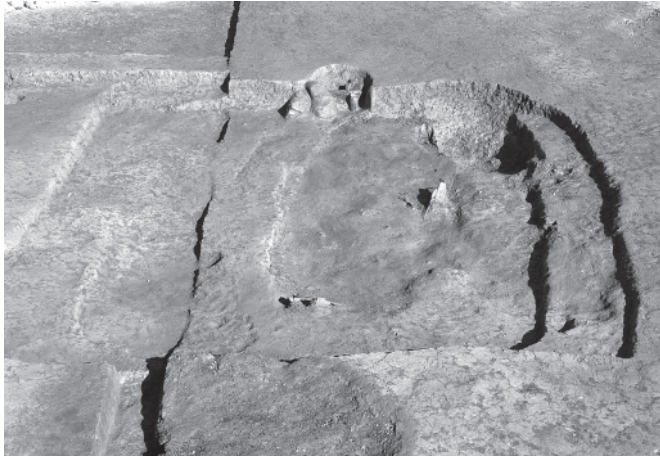
⑥ 11号住居掘り方(北西より)



⑦ 12号住居全景(西より)



⑧ 12号住居断面(南より)



① 14号住居全景(西より)



② 14号住居遺物出土状態(西より)



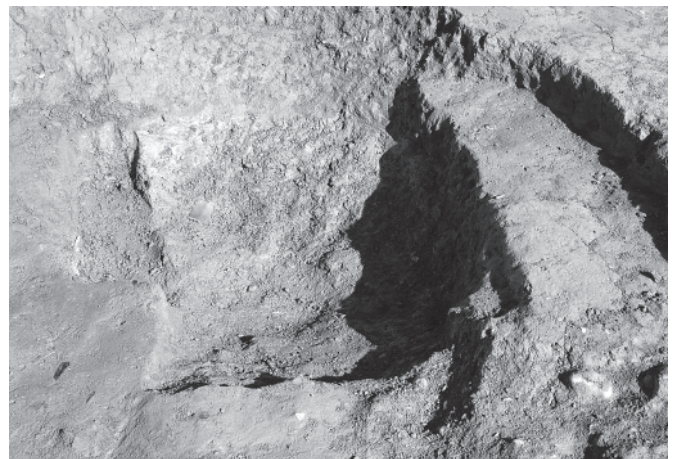
③ 14号住居カマド(西より)



④ 14号住居カマド断面(南より)



⑤ 14号住居カマド周辺掘り方(西より)



⑥ 14号住居貯蔵穴(西より)



⑦ 14号住居断面(南より)



⑧ 14号住居貯蔵穴遺物出土状態(北より)



① 15号住居全景(西より)



② 15号住居カマド断面(西より)



③ 16号住居全景(西より)



④ 16号住居北西隅遺物出土状態(北より)



⑤ 16号住居断面(東より)



⑥ 16号住居貯蔵穴(北より)



⑦ 16号住居カマド(西より)



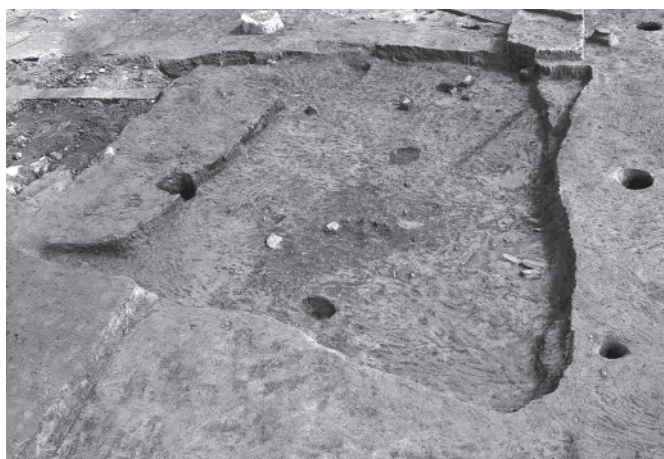
⑧ 16号住居カマド掘り方(西より)



① 16号住居床下土坑断面(南より)



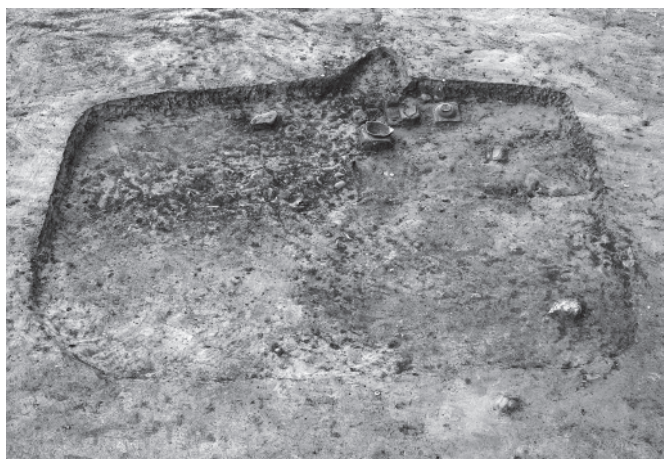
② 16号住居貯蔵穴断面(南より)



③ 17号住居全景(南西より)



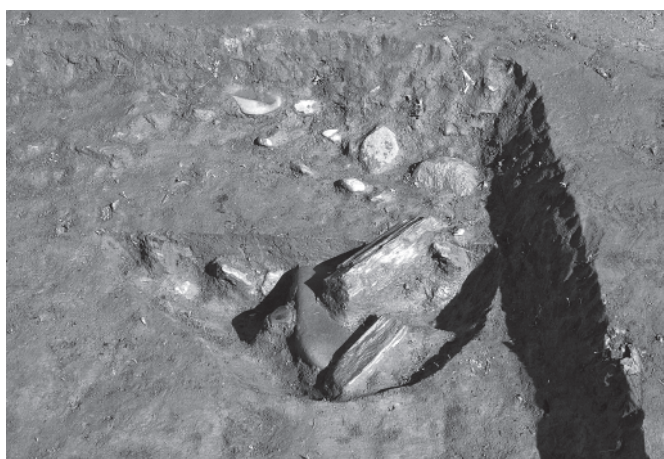
④ 17号住居断面(南西より)



⑤ 18号住居全景(西より)



⑥ 18号住居遺物出土状態(西より)



⑦ 18号住居貯蔵穴断面(西より)



⑧ 18号住居カマド(西より)



① 19号住居全景(南より)



② 19号住居遺物出土状態(南より)



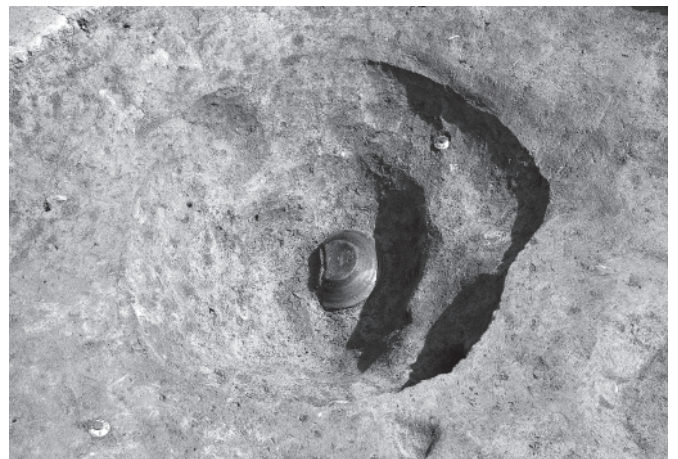
③ 19号住居カマド前遺物出土状態(西より)



④ 19号住居カマド断面(南東より)



⑤ 19号住居掘り方(南より)



⑥ 19号住居貯蔵穴と遺物出土状態(南西より)



⑦ 20号住居全景(南より)



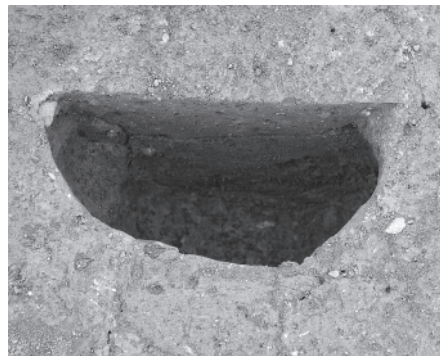
⑧ 21号住居全景(北より)



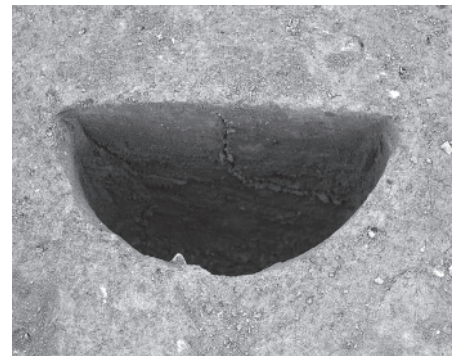
① 1号掘立柱建物全景(南より)



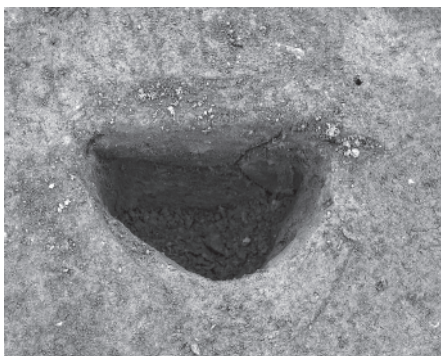
② 1号掘立柱建物P 1断面(南より)



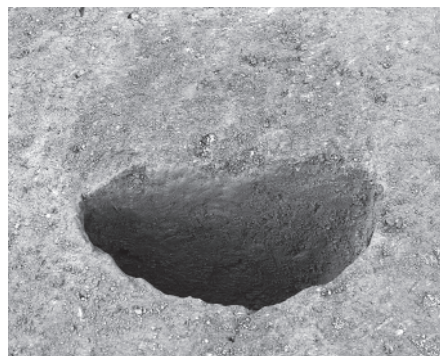
③ 1号掘立柱建物P 2断面(南より)



④ 1号掘立柱建物P 3断面(南より)



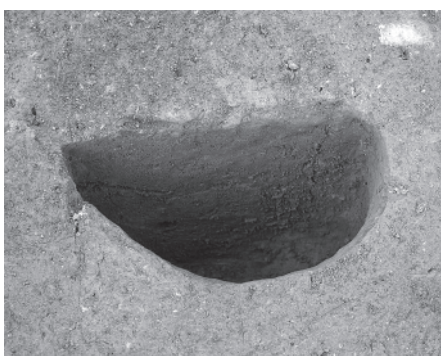
⑤ 1号掘立柱建物P 4断面(南より)



⑥ 1号掘立柱建物P 5断面(南より)



⑦ 1号掘立柱建物P 6断面(南より)



⑧ 1号掘立柱建物P 7断面(南より)



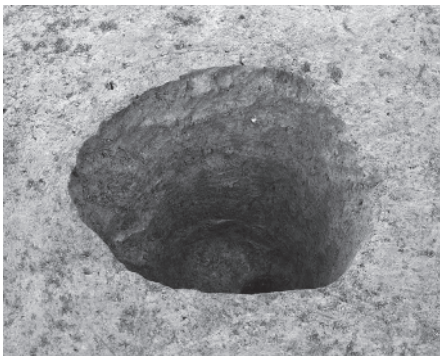
⑨ 1号掘立柱建物P 8断面(南より)



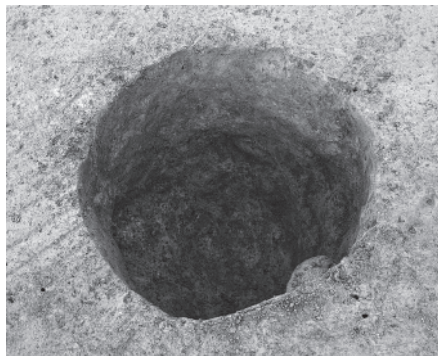
⑩ 1号掘立柱建物P 9断面(南より)



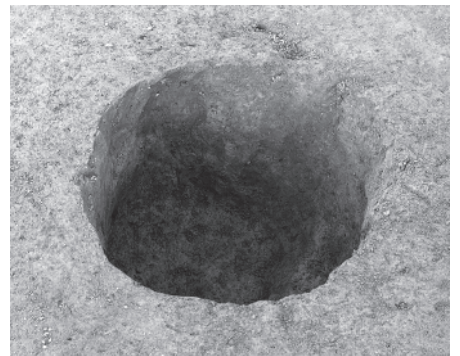
① 2・3号掘立柱建物全景(南より)



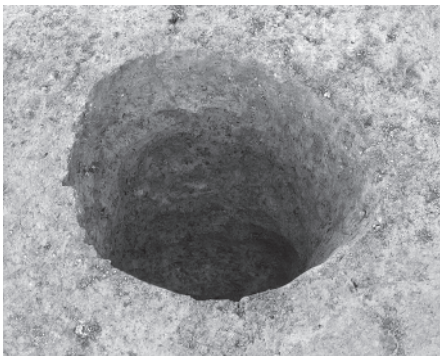
② 2号掘立柱建物P 1(南より)



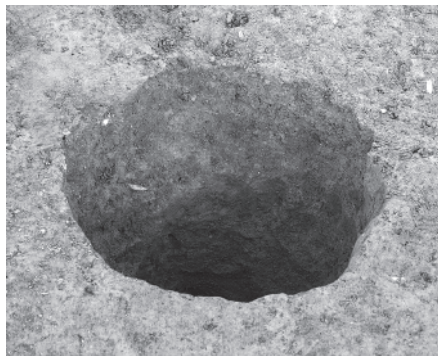
③ 2号掘立柱建物P 4(南より)



④ 2号掘立柱建物P 5(南より)



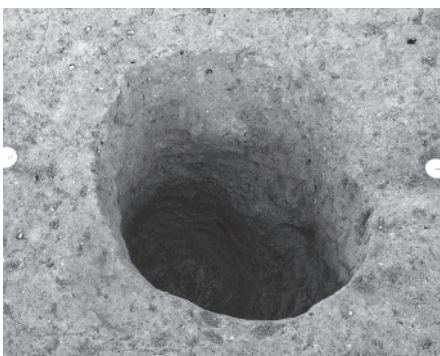
⑤ 2号掘立柱建物P 8(南より)



⑥ 3号掘立柱建物P 1(南より)



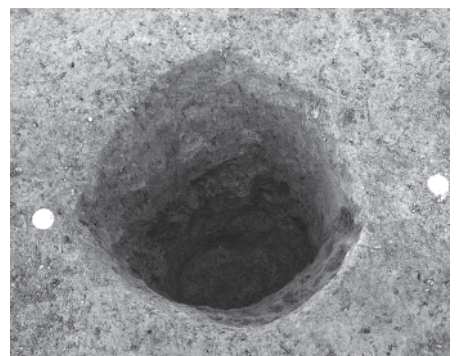
⑦ 3号掘立柱建物P 3(南より)



⑧ 3号掘立柱建物P 7(南より)



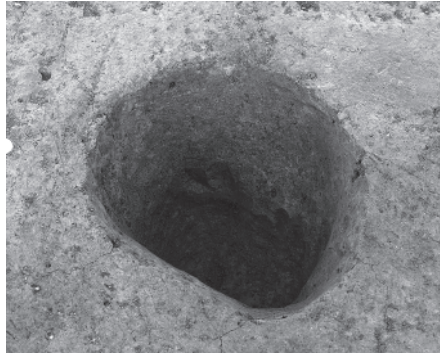
⑨ 3号掘立柱建物P 10(南より)



⑩ 3号掘立柱建物P 11(南より)



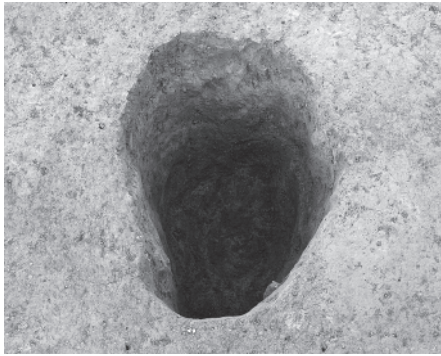
① 3号掘立柱建物P16断面(南より)



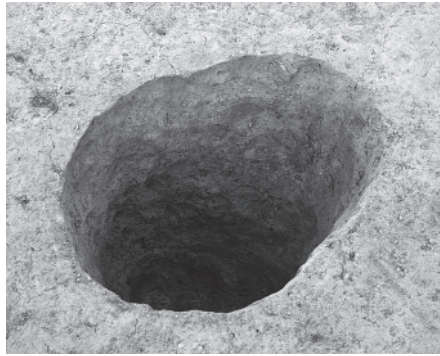
② 3号掘立柱建物P16(南より)



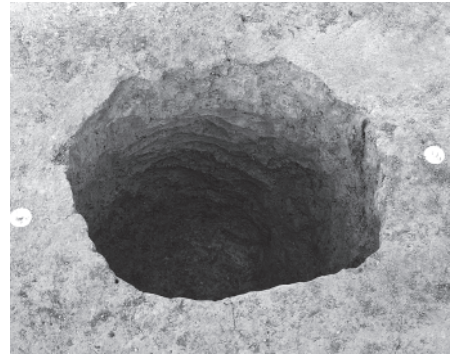
③ 3号掘立柱建物P23(南より)



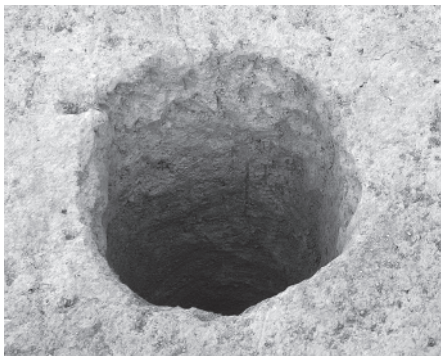
④ 3号掘立柱建物P24(南より)



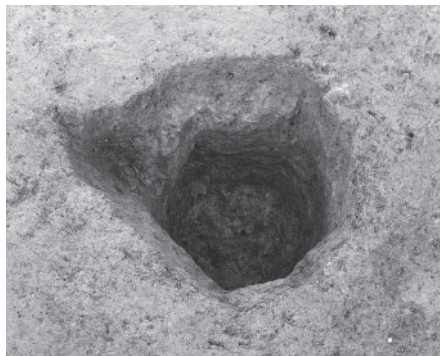
⑤ 3号掘立柱建物P25(南より)



⑥ 3号掘立柱建物P27(南より)



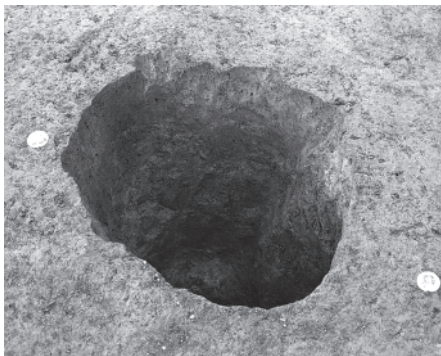
⑦ 3号掘立柱建物P29(南より)



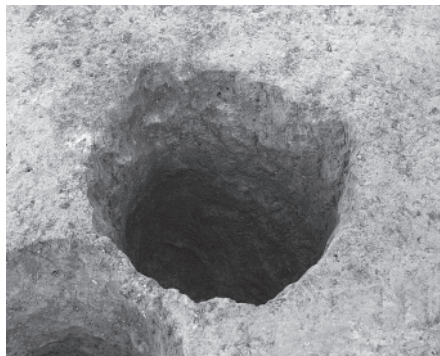
⑧ 3号掘立柱建物P32(南より)



⑨ 3号掘立柱建物P34(南より)



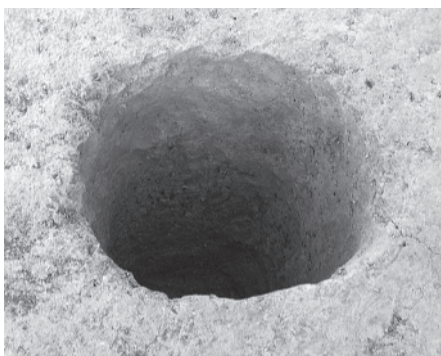
⑩ 3号掘立柱建物P35(南より)



⑪ 3号掘立柱建物P37(南より)



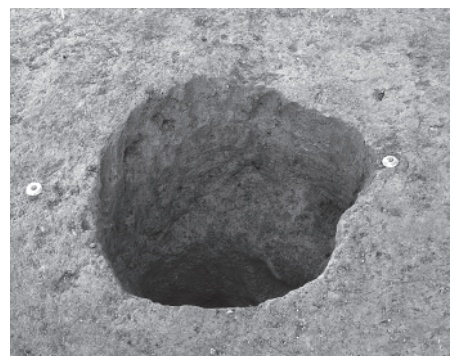
⑫ 3号掘立柱建物P46(南より)



⑬ 3号掘立柱建物P51(南より)

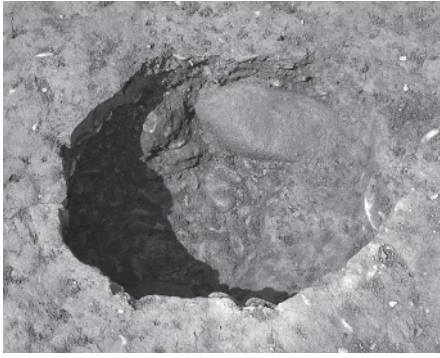


⑭ 3号掘立柱建物P54(南より)

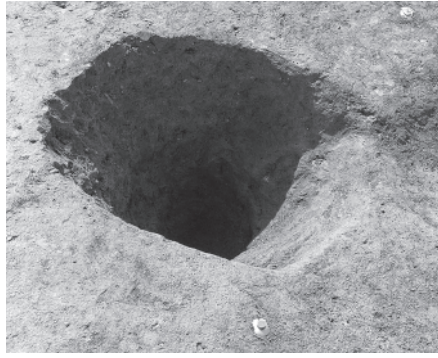


⑮ 3号掘立柱建物P55(南より)

ピット(1)



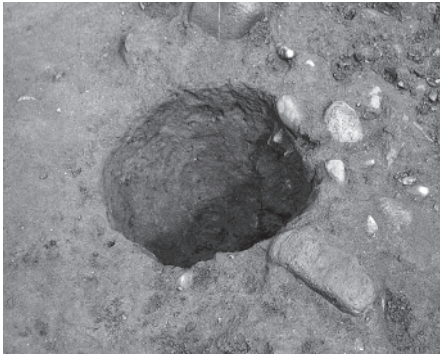
① 1号ピット(南より)



② 2号ピット(東より)



③ 13号ピット(南より)



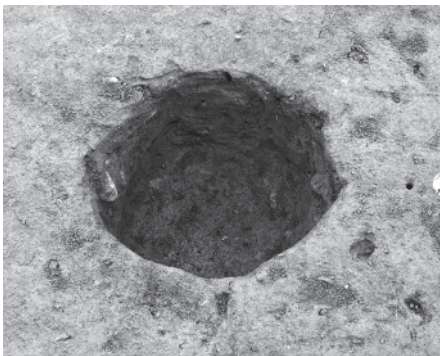
④ 17号ピット(南より)



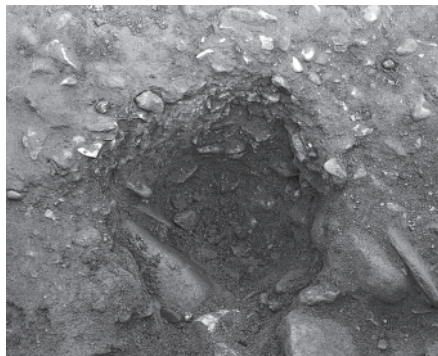
⑤ 18号ピット(南より)



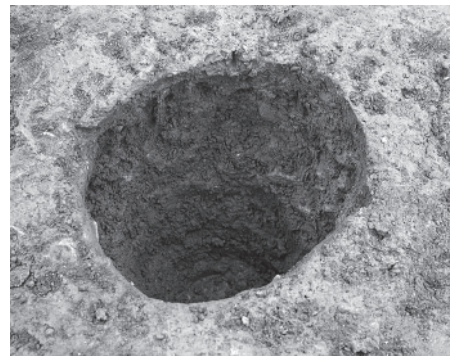
⑥ 20号ピット(南より)



⑦ 26号ピット(南より)



⑧ 28号ピット(南より)



⑨ 40号ピット(南より)



⑩ 46号ピット(南より)



⑪ 52号ピット(南より)



⑫ 66号ピット(南より)



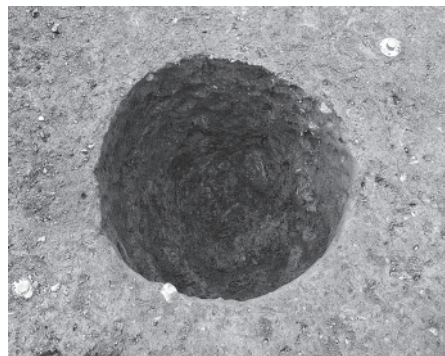
⑬ 76号ピット(南より)



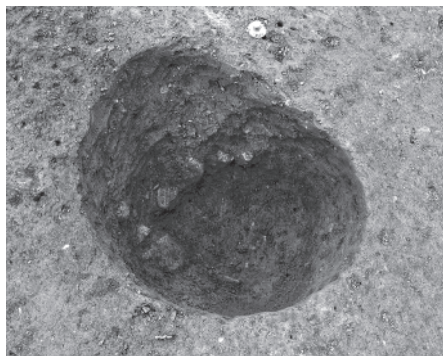
⑭ 79号ピット(南より)



⑮ 81号ピット(南より)



① 89号ピット(東より)



② 90号ピット(東より)



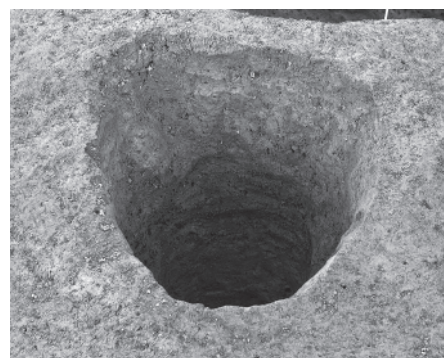
③ 93号ピット(東より)



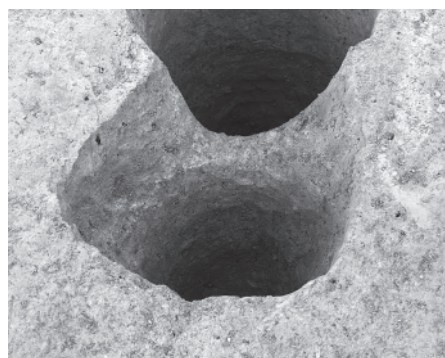
④ 94号ピット(東より)



⑤ 101号ピット断面(南より)



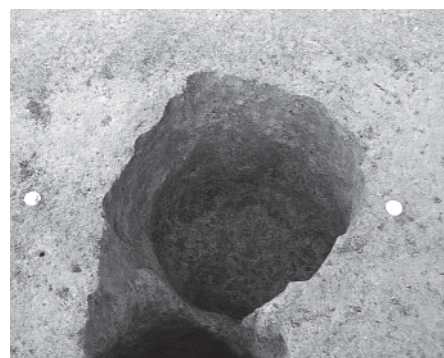
⑥ 106号ピット(南より)



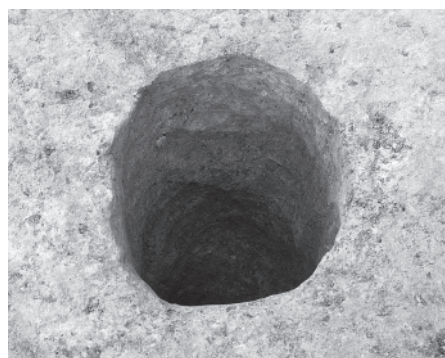
⑦ 117号ピット(南より)



⑧ 140号ピット(南より)



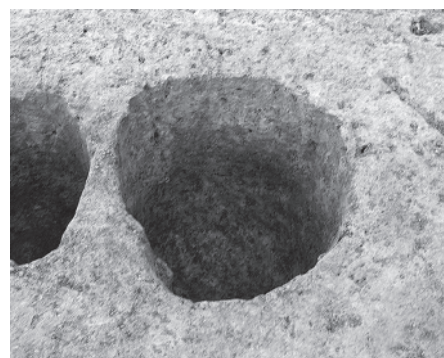
⑨ 148号ピット(南より)



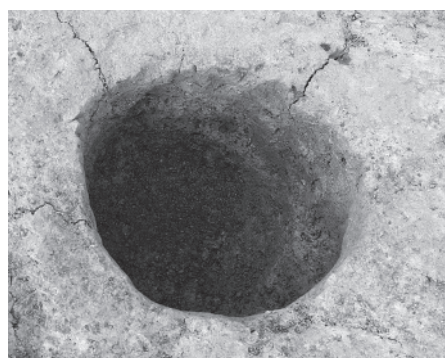
⑩ 162号ピット(南より)



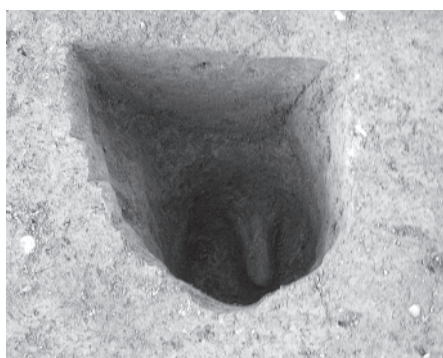
⑪ 167号ピット(南より)



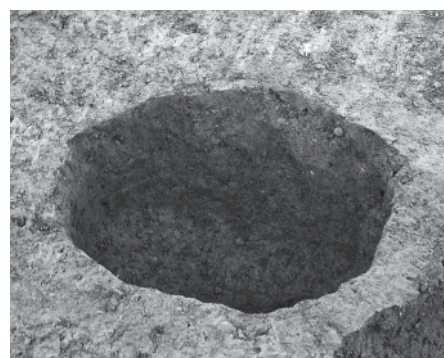
⑫ 173号ピット(南より)



⑬ 178号ピット(南より)

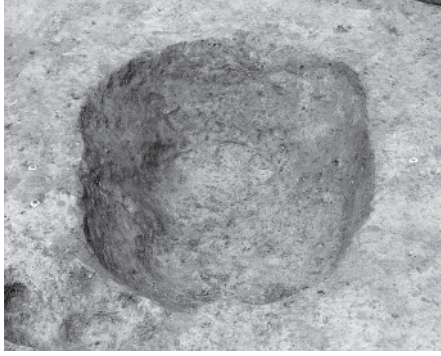


⑭ 181号ピット断面(南より)



⑮ 184号ピット(南より)

土坑(1)



① 1号土坑(南東より)



② 2号土坑(南より)



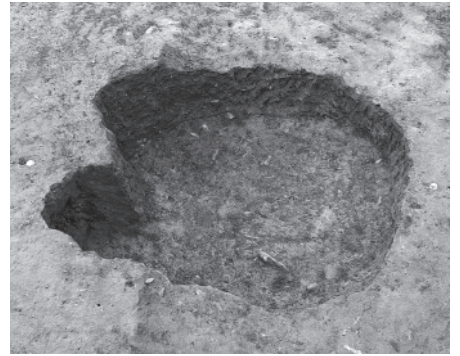
③ 3号土坑(東より)



④ 3号土坑馬歯出土状態(北より)



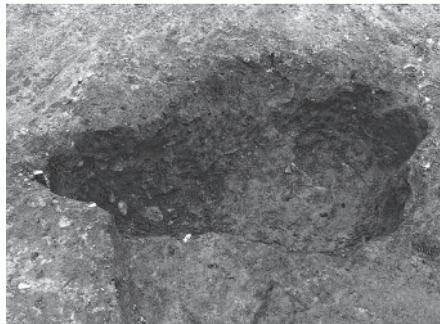
⑤ 4号土坑(南東より)



⑥ 5号土坑(南より)



⑦ 6号土坑断面(南より)



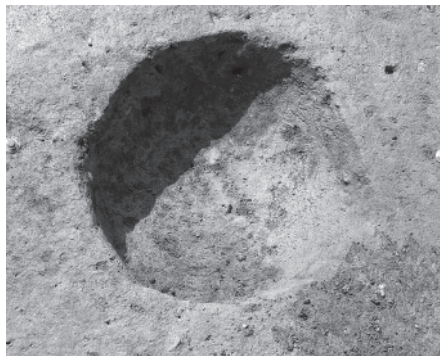
⑧ 6号土坑(南より)



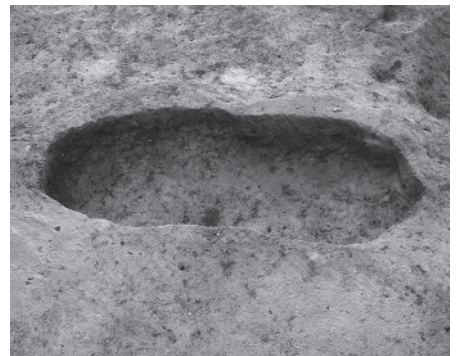
⑨ 7号土坑(南より)



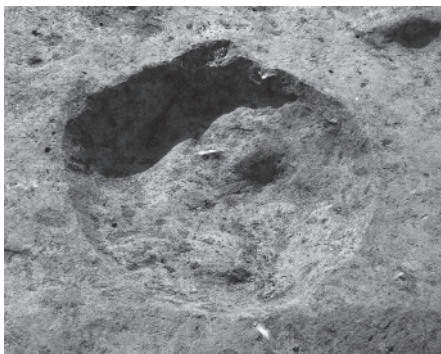
⑩ 8号土坑断面(南より)



⑪ 9号土坑(東より)



⑫ 10号土坑(東より)



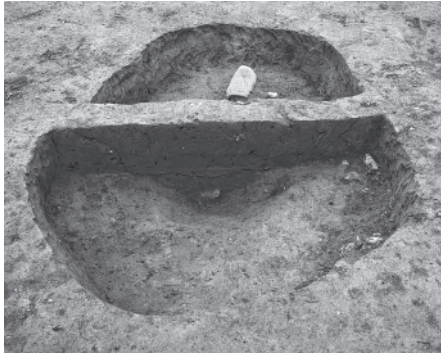
⑬ 11号土坑(東より)



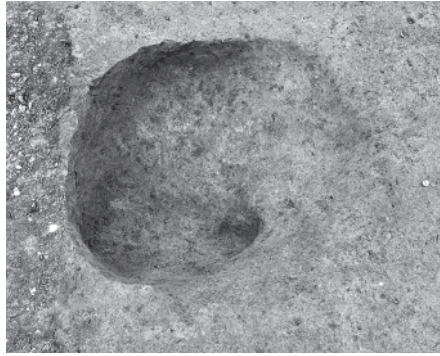
⑭ 12号土坑断面(南より)



⑮ 12号土坑(南より)



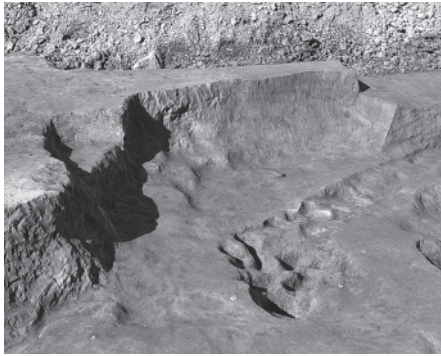
① 13号土坑断面(南西より)



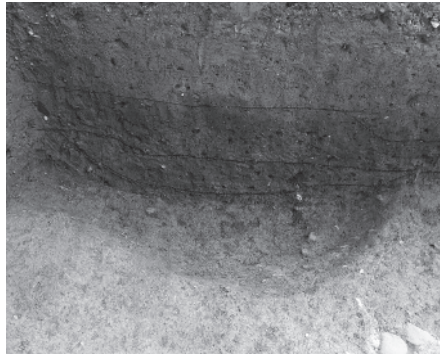
② 14号土坑(南西より)



③ 15号土坑(南西より)



④ 16号土坑(南より)



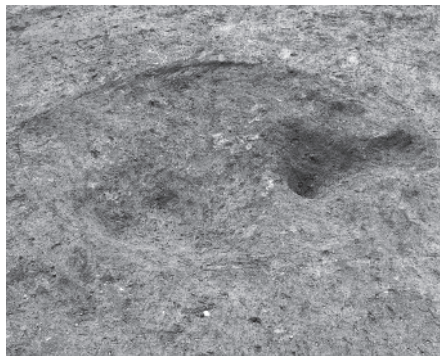
⑤ 17号土坑断面(北より)



⑥ 18号土坑(南より)



⑦ 19号土坑(西より)



⑧ 20号土坑(北より)



⑨ 21号土坑(東より)



⑩ 23号土坑(西より)



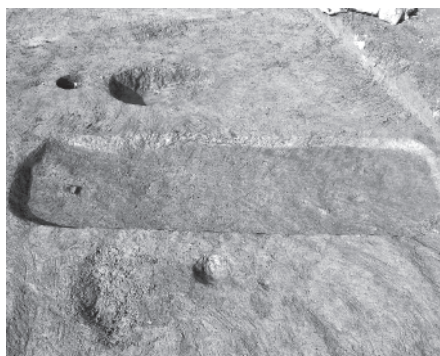
⑪ 24号土坑(北より)



⑫ 25号土坑断面(南より)



⑬ 25・26号土坑(南より)

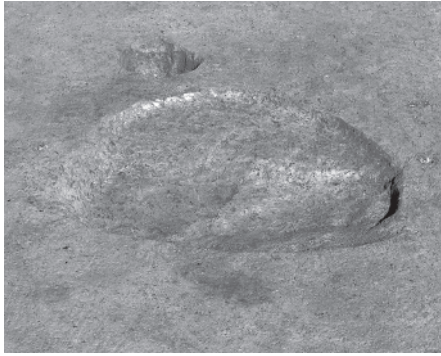


⑭ 25・26号土坑(東より)



⑮ 27号土坑断面(南より)

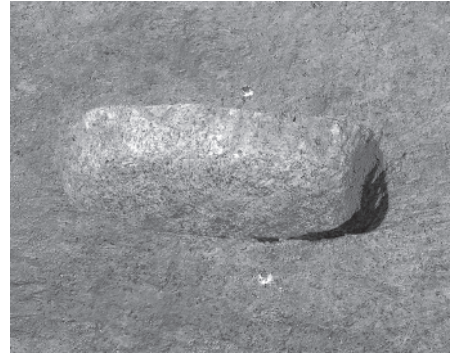
土坑(3)



① 27号土坑(南より)



② 28号土坑(東より)



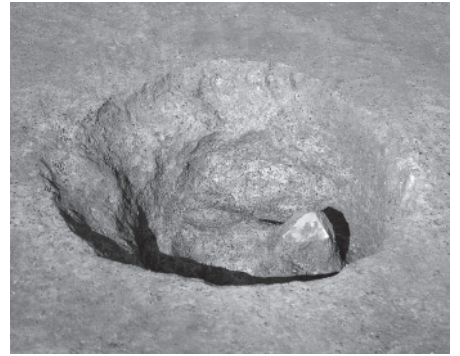
③ 29号土坑(南より)



④ 30号土坑(南より)



⑤ 31号土坑断面(南より)



⑥ 31号土坑(南より)



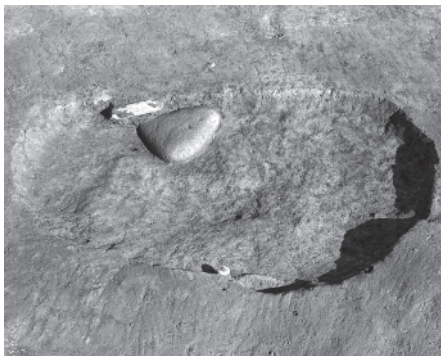
⑦ 32号土坑断面(西より)



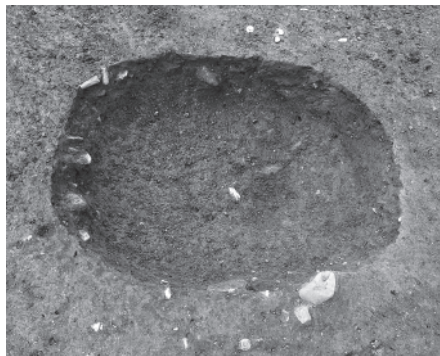
⑧ 33号土坑断面(南より)



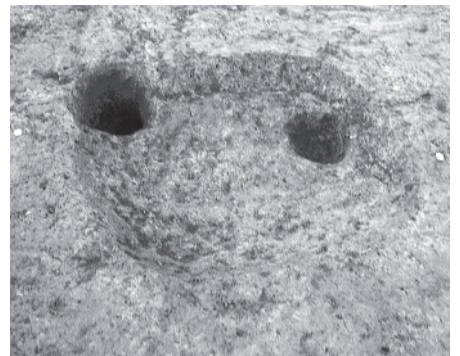
⑨ 34号土坑(南より)



⑩ 35号土坑(西より)



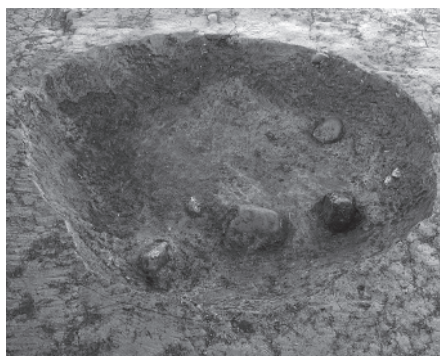
⑪ 36号土坑(東より)



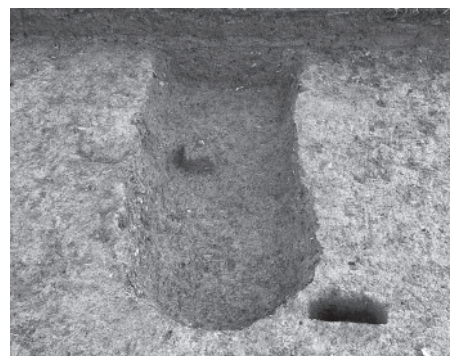
⑫ 37号土坑、185・186ピット(南より)



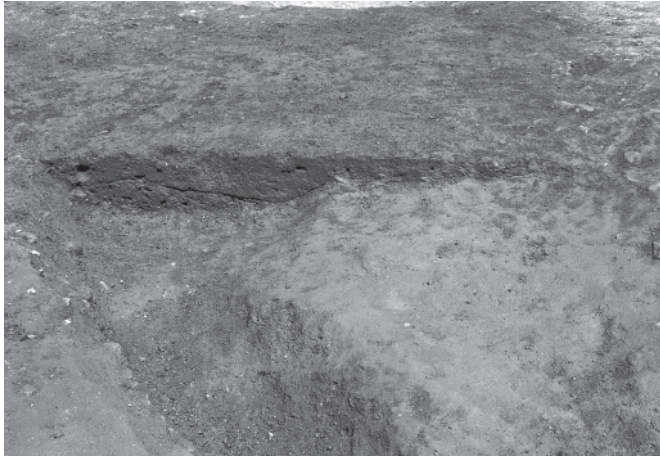
⑬ 39号土坑断面(南より)



⑭ 39号土坑(南より)



⑮ 40号土坑断面(北より)



① 1号溝断面(南より)



② 2号溝(南東より)



③ 4・4 A号溝(西より)



④ 4・4 A号溝(西より)



⑤ 4・4 A号溝(西より)



⑥ 4・4 A号溝B断面(西より)

溝(2)



① 5~7 A・B号溝(西より)



② 8号溝(北西より)



③ 9号溝(東より)



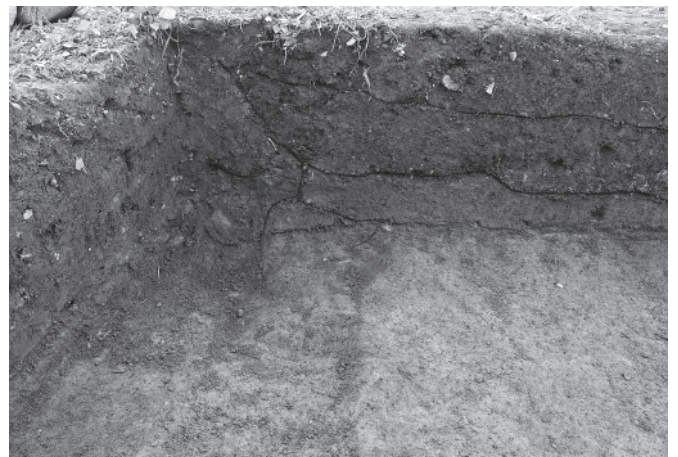
④ 9号溝(西より)



⑤ 9号溝断面(東より)



⑥ 10B号溝(北より)



⑦ 10A号溝断面(北より)



① 11号溝(北より)



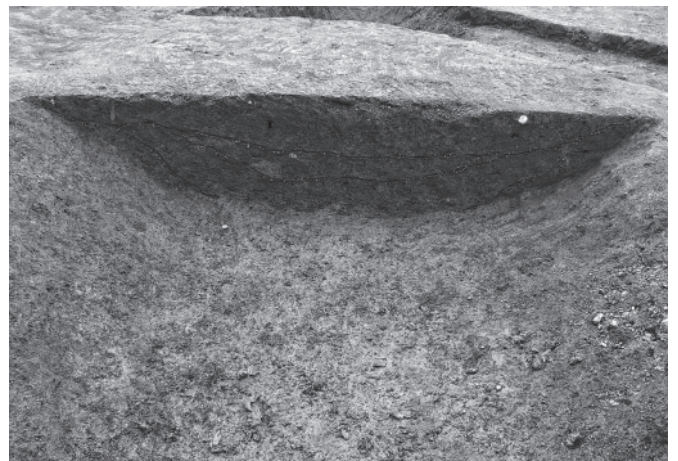
② 11号溝礫出土状態(東より)



③ 11号溝礫出土状態(東より)



④ 11号溝(南より)



⑤ 11号溝断面(北より)



⑥ 12B・13号溝(西より)



⑦ 12C号溝断面(東より)

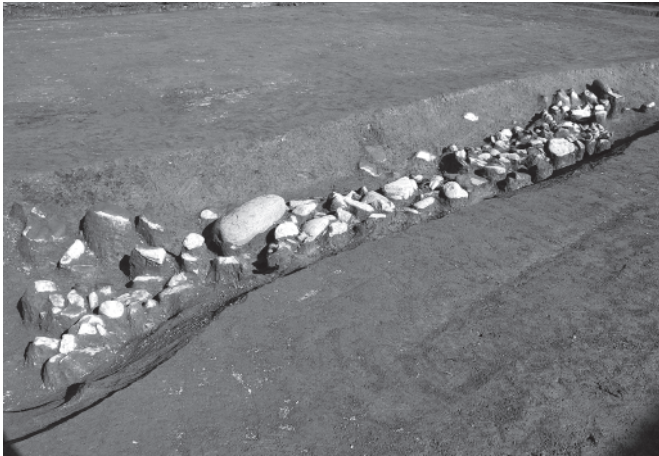
溝(4)



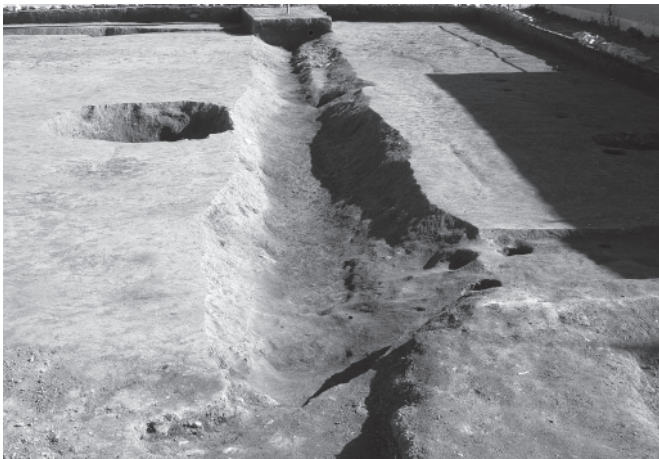
① 14A号溝(西より)



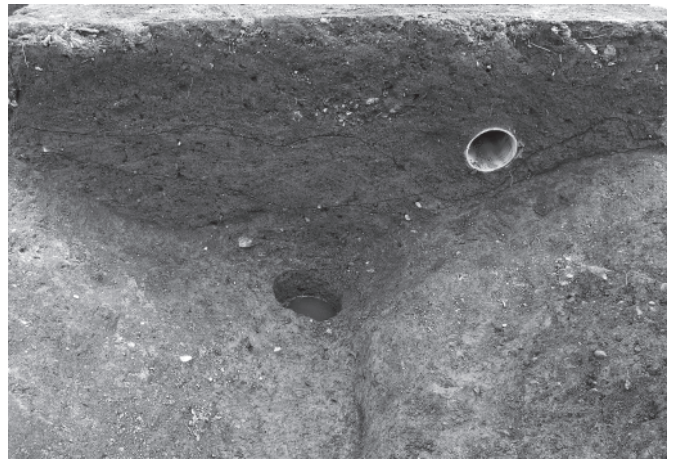
③ 14A号溝(東より)



② 14A号溝(南西より)



④ 14A号溝(西より)



⑤ 14A号溝A断面(西より)



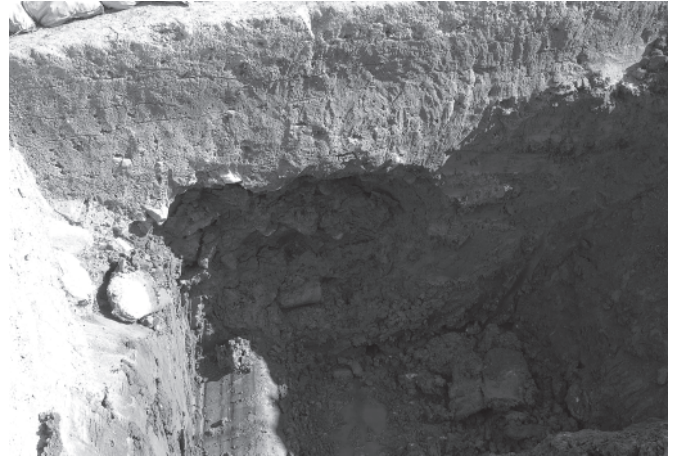
⑥ 15号溝(北より)



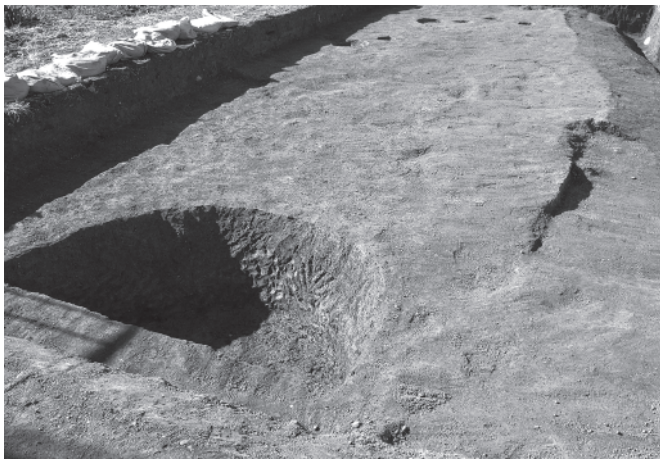
⑦ 15号溝E断面(北より)



① 1号井戸(西より)



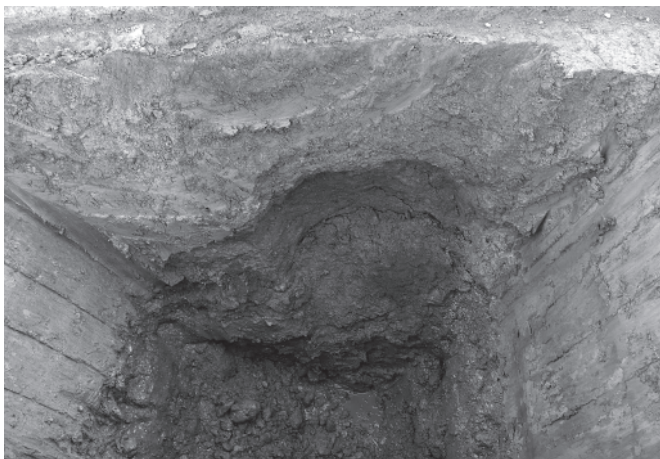
② 1号井戸断面(西より)



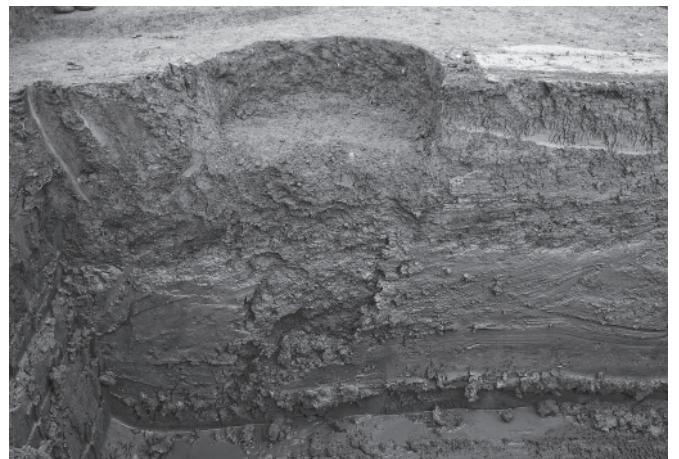
③ 2号井戸、14B号溝(北東より)



④ 3号井戸(北より)



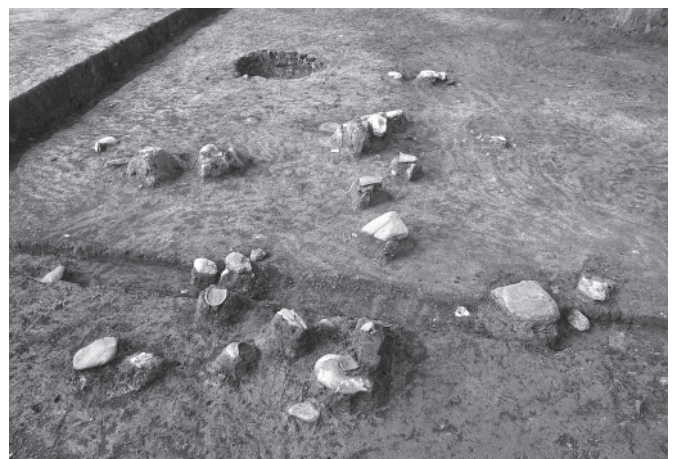
⑤ 3号井戸断面(南より)



⑥ 4号井戸断面(南より)



⑦ 遺物集中地点(南西より)



⑧ 遺物集中地点(南より)

22号住居(1)



① 22号住居(北より)



② 2区第2面と22号住居(東より)



③ 22号住居北側(北東より)



④ 22号住居南側(北西より)



⑤ 22号住居列石(東より)



⑥ 22号住居列石(南西より)



⑦ 22号住居列石(北西より)



① 22号住居中央付近(東より)



② 22号住居上面炉(北東より)



③ 22号住居下面炉と出土遺物1(上方が東)



④ 22号住居下面炉(東より)



⑤ 22号住居下面炉断面と出土遺物2(東より)



⑥ 22号住居追加調査部分(東より)



⑦ 22号住居追加調査部分(南より)

1号列石(1)



① 上空から眺めた1号列石(上方が北)



② 1号列石確認状況(西より)



③ 1号列石北側上面(東より)



④ 1号列石北側(西より)



⑤ 1号列石北側(北より)



① 1号列石北側下面(東より)



② 1号列石北西側下面(北東より)



③ 1号列石断面(西より)



④ 1号列石内側列北側(南東より)



⑤ 1号列石北東側と22号住居列石(東より)



⑥ 復元した1号列石内立石(南西より)



⑦ 1号列石内立石周辺(北より)

1号列石(3)、6号住居



① 1号列石下面(東より)



② 1号列石西側出土遺物(南東より)



③ 1号列石出土遺物56(南東より)



④ 1号列石下の基盤層(南西より)



⑤ 2区1号列石周辺(北東より)



⑥ 6号住居(東より)



⑦ 6号住居(南より)



1住-1



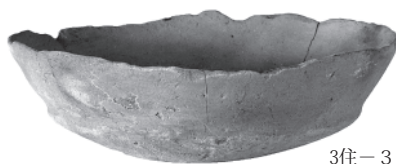
3住-1



3住-2



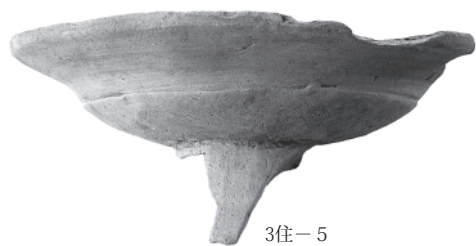
1住-2



3住-3



3住-4



3住-5



3住-6



3住-8



3住-9



3住-10



3住-11



3住-12



3住-13



3住-14



3住-15



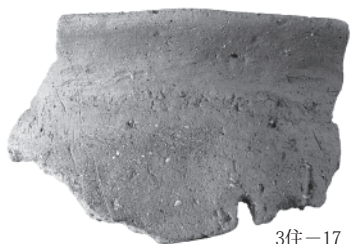
3住-16



3住-18



3住-19



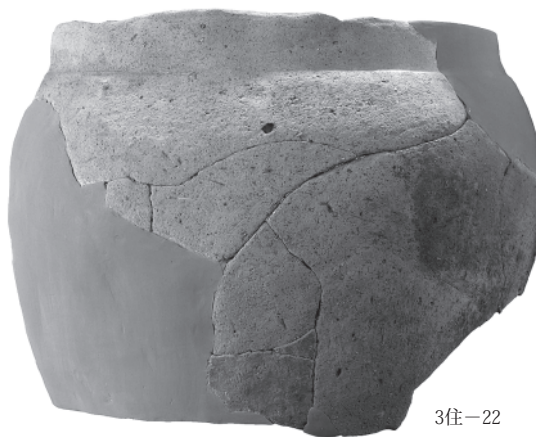
3住-17



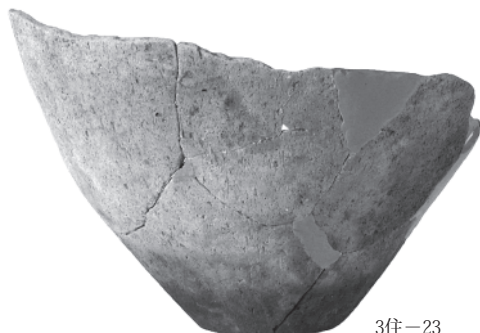
3住-20



3住-21



3住-22



3住-23



7住-1



7住-3



7住-4



7住-2



8住-2



8住-4



8住-5



8住-6



8住-7



8住-8



8住-9



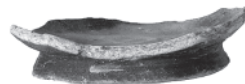
8住-10



8住-11



8住-12



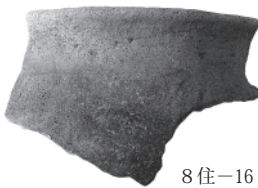
8住-13



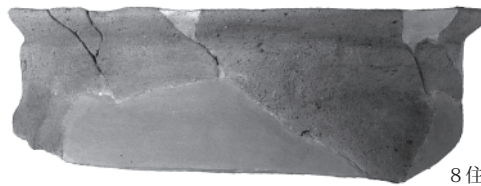
8住-14



8住-15



8住-16



8住-18



8住-20



8住-21



8住-22



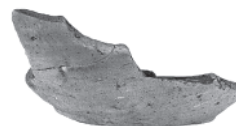
8住-19



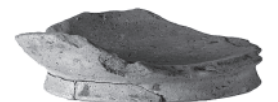
9住-2



10住-1



10住-2



10住-5



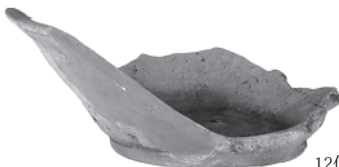
11住-2



12住-2



12住-3



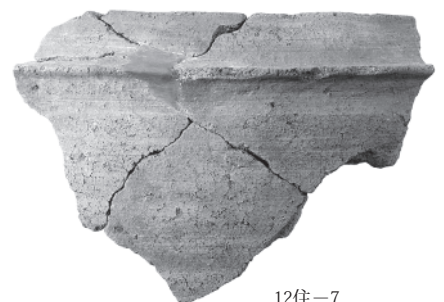
12住-1



12住-4



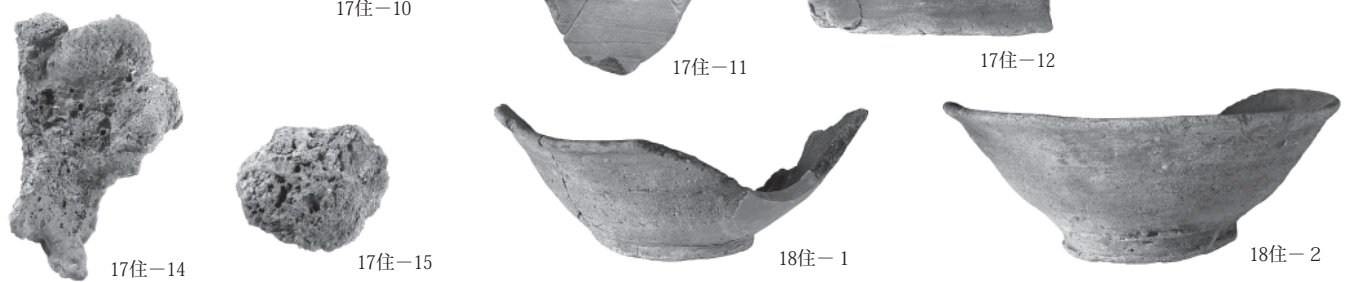
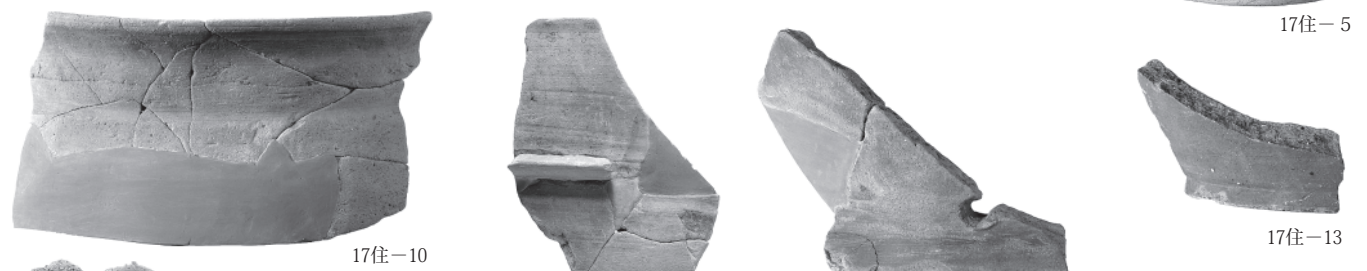
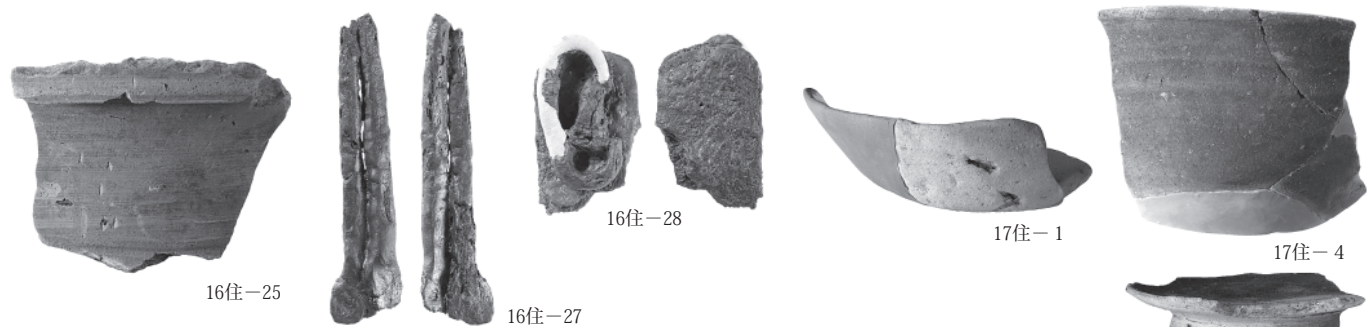
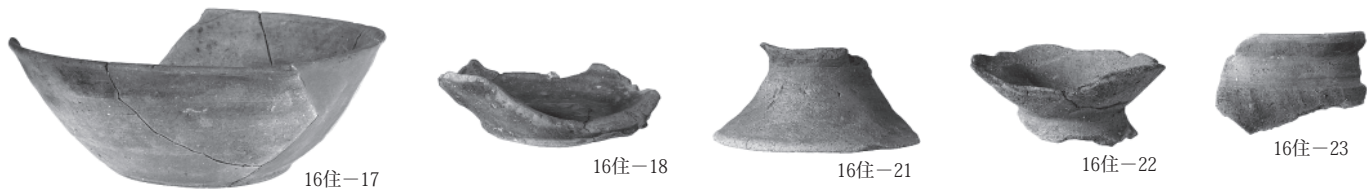
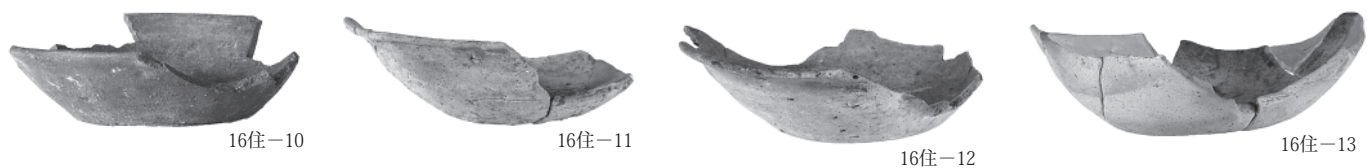
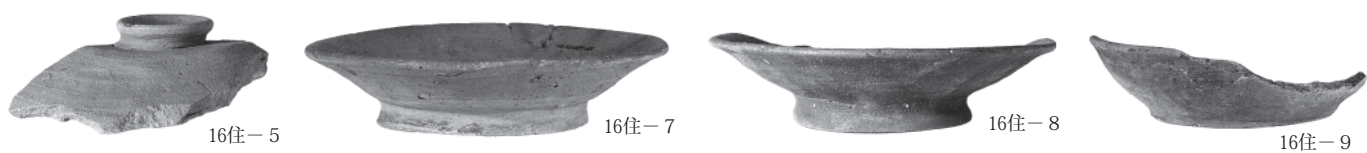
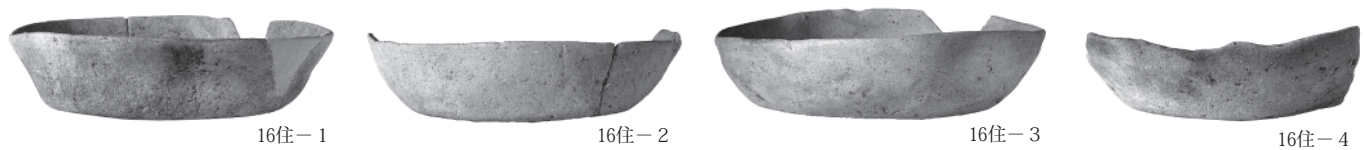
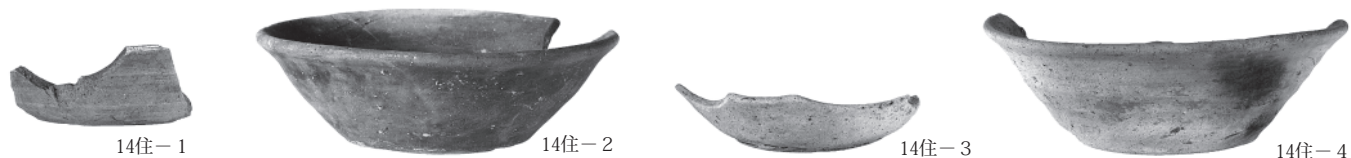
12住-6



12住-7



12住-5





18住-4



18住-5



19住-1



19住-3



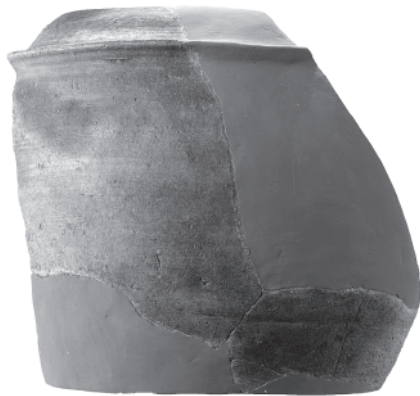
19住-4



19住-5



19住-6



19住-7



3土坑-1



4土坑-1



18土坑-1



18土坑-2



18土坑-3



39土坑-1



86ピット-1



3井戸-1



3井戸-4



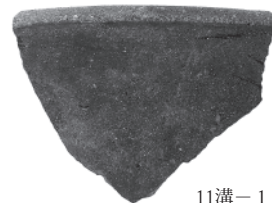
4溝-1



2溝-1



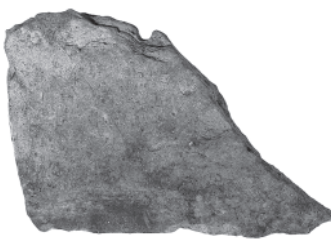
4溝-2



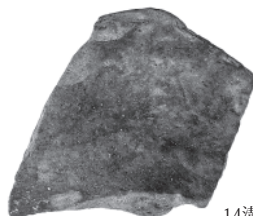
11溝-1



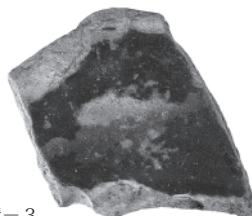
14溝-1



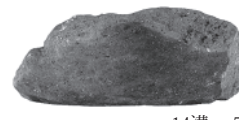
14溝-2



14溝-3



14溝-5



14溝-5



14溝-6

遺物集中地点・遺構外(古墳時代以降)、22号住居出土遺物



遺物集中-1



遺物集中-3



遺物集中-4



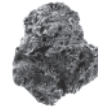
遺物集中-5



遺物集中-6



遺物集中-7



遺物集中-8



遺物集中-9



遺物集中-10



遺構外-1



遺構外-2



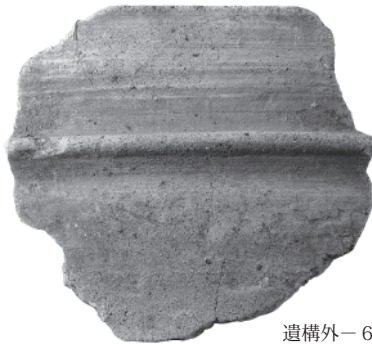
遺構外-3



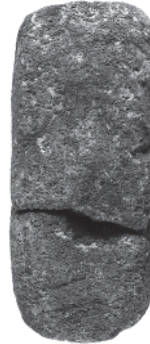
遺構外-4



遺構外-5



遺構外-6



遺構外-11



遺構外-7



22住-1



22住-3



22住-4



22住-5



22住-8



22住-6



22住-7



22住-9



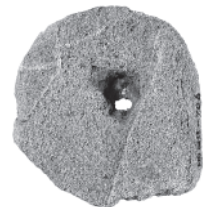
22住-11



22住-12



22住-10



22住-13



1 列-1



1 列-2



1 列-3



1 列-4



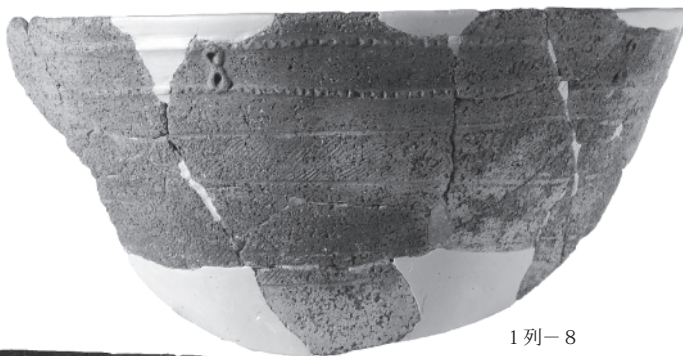
1 列-5



1 列-6



1 列-7



1 列-8



1 列-9



1 列-10



1 列-11

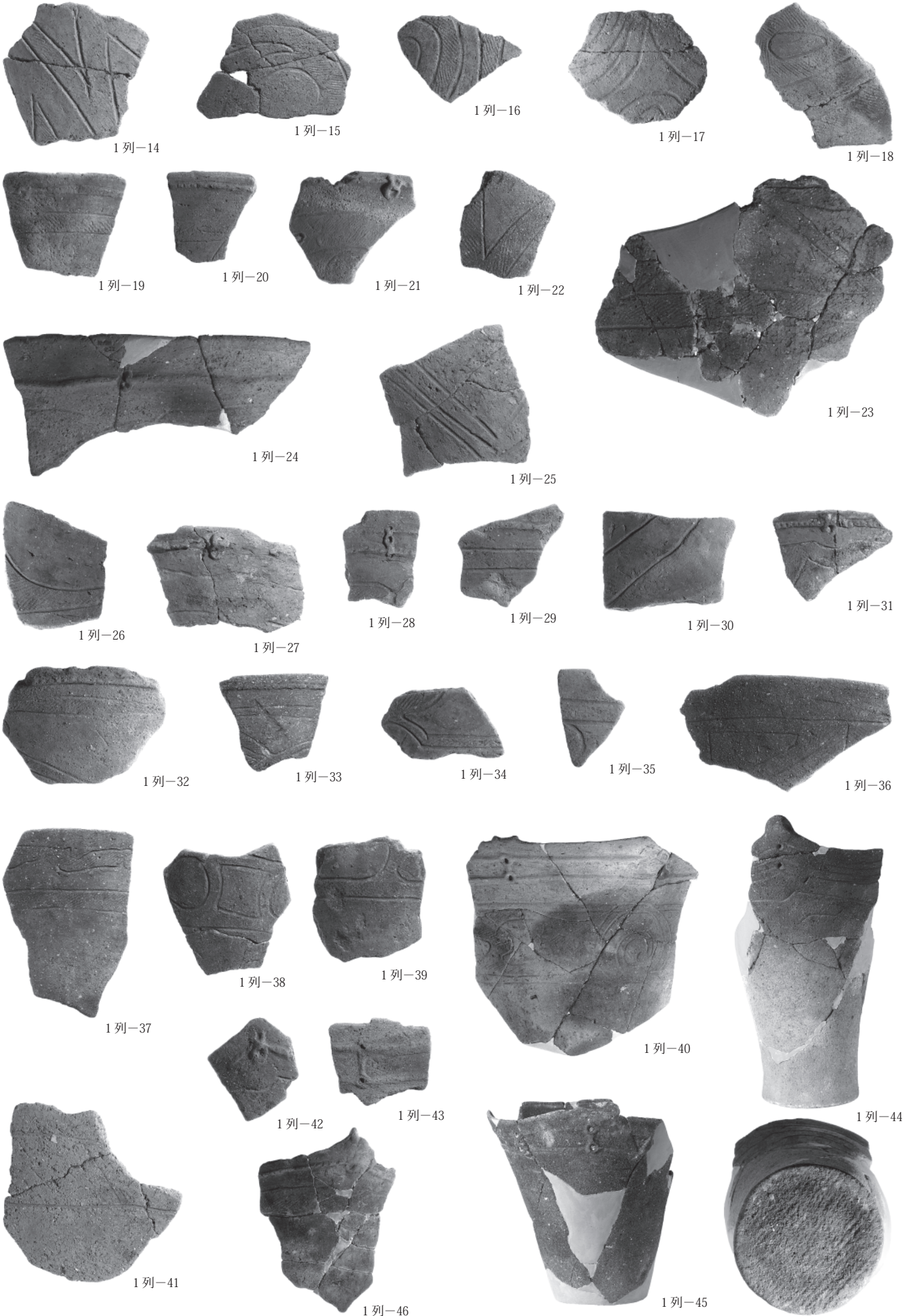


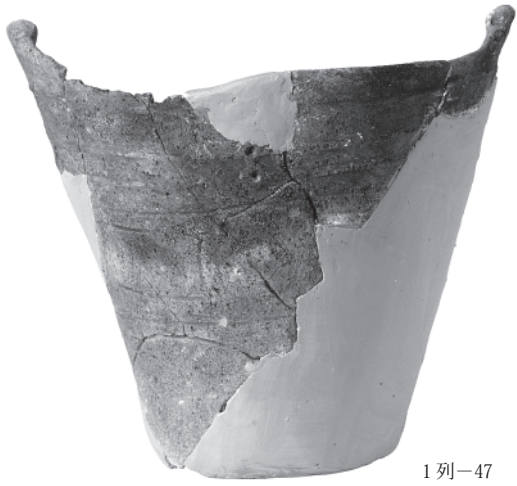
1 列-12



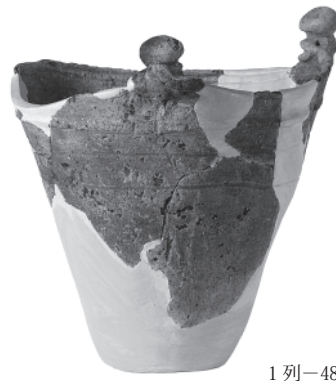
1 列-13

1 号列石出土遺物(2)





1 列-47



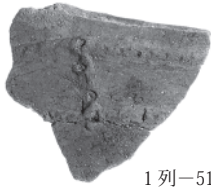
1 列-48



1 列-49



1 列-50



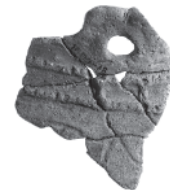
1 列-51



1 列-52



1 列-53



1 列-54



1 列-55



1 列-56



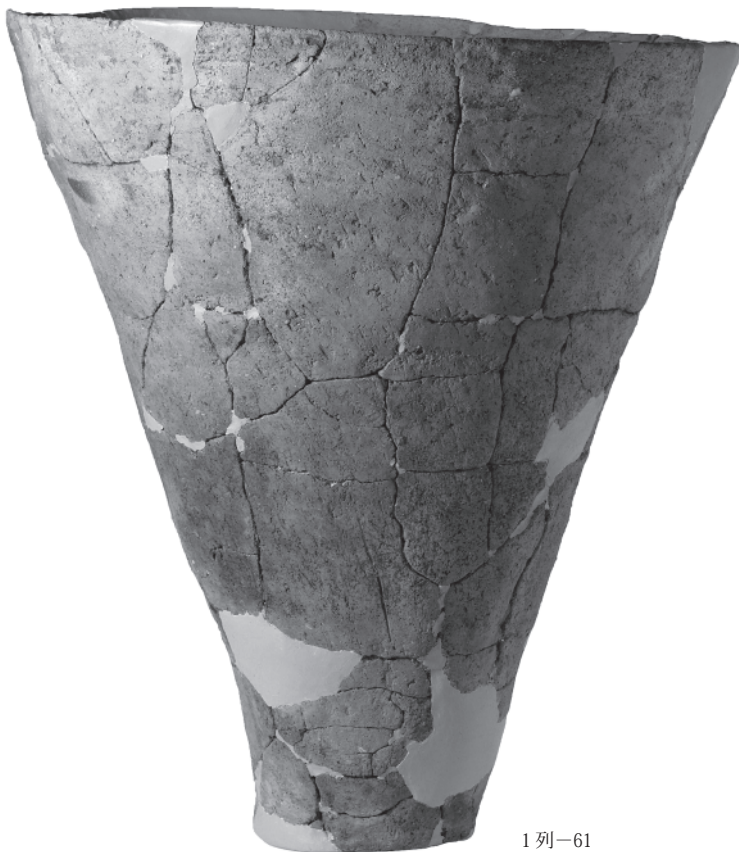
1 列-57



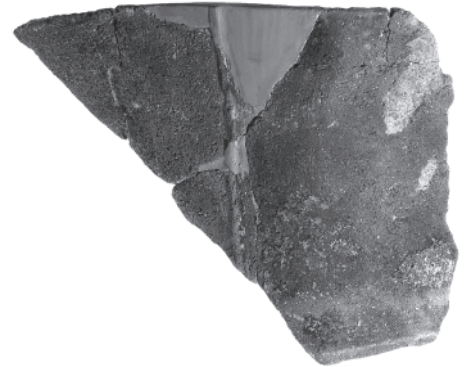
1 列-58



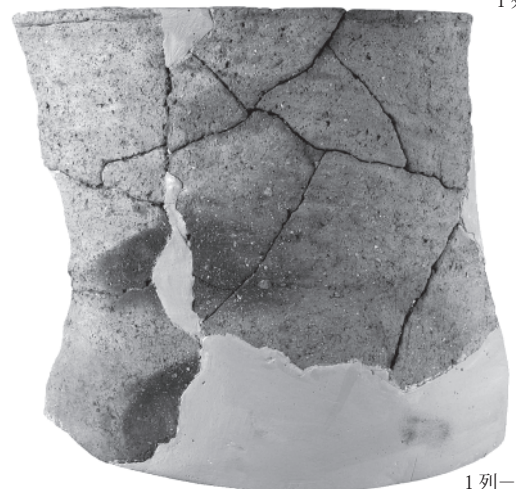
1 列-59



1 列-61



1 列-60

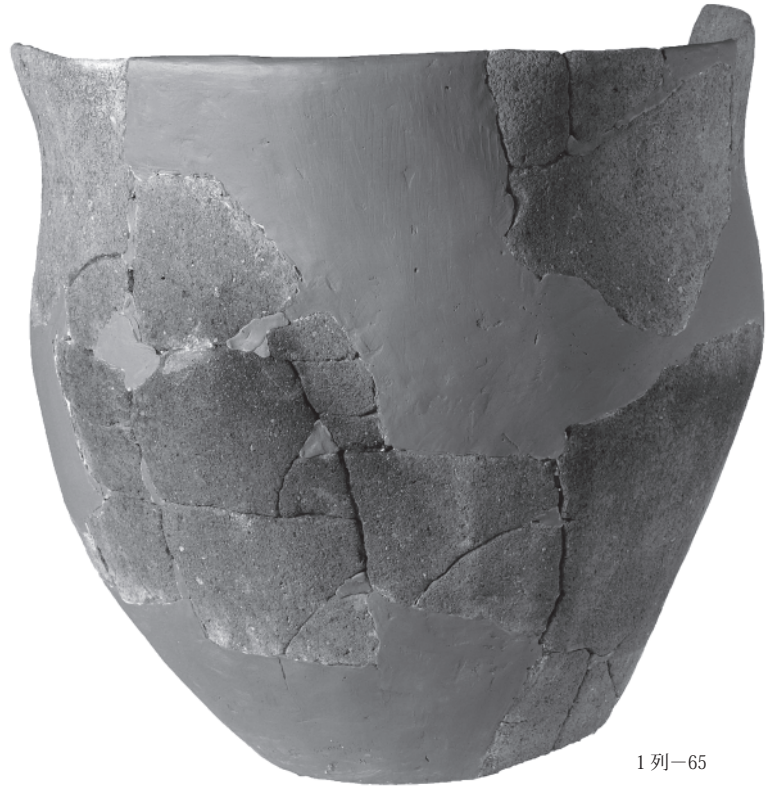


1 列-62

1 号列石出土遺物(4)



1 列-63



1 列-65



1 列-64



1 列-66



1 列-67



1 列-68



1 列-69



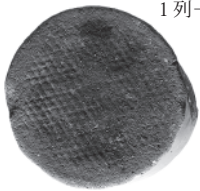
1 列-70



1 列-72



1 列-71



1 列-73



1 列-77



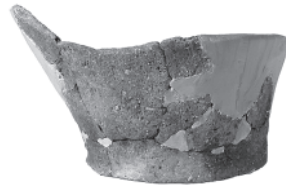
1 列-78



1 列-74



1 列-75



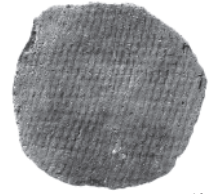
1 列-76



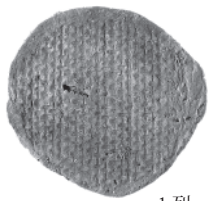
1 列-79



1 列-80



1 列-81



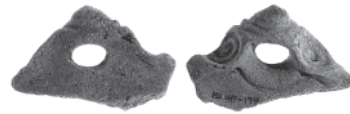
1 列-82



1 列-83



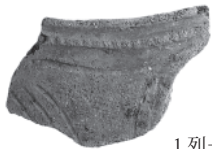
1 列-84



1 列-85



1 列-86



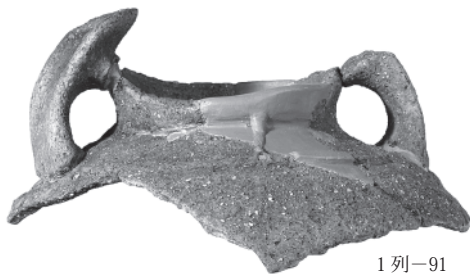
1 列-87



1 列-88



1 列-90



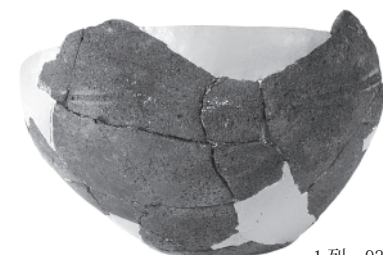
1 列-91



1 列-89



1 列-95



1 列-92



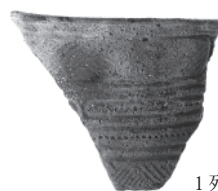
1 列-93



1 列-94



1 列-99



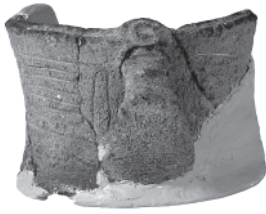
1 列-97



1 列-100

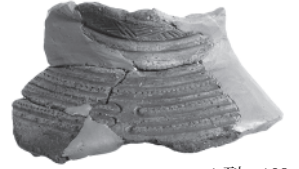
1 列-96

1 号列石出土遺物(6)

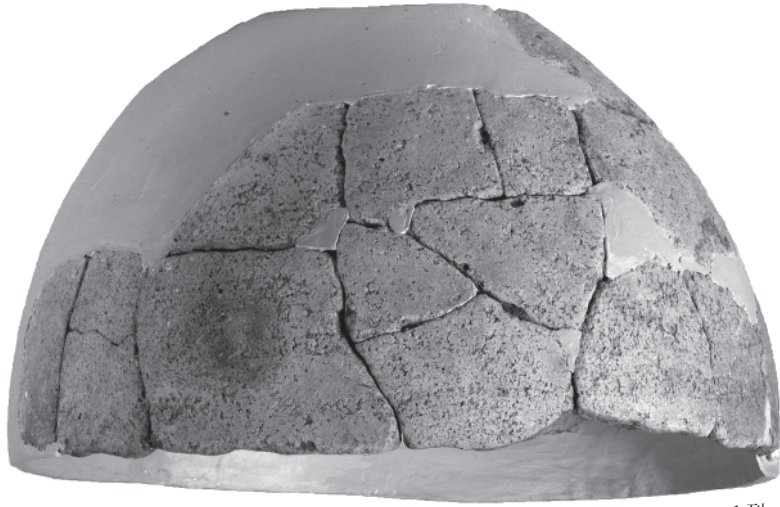


1 列-101

1 列-102



1 列-103



1 列-98



1 列-104



1 列-105



1 列-106



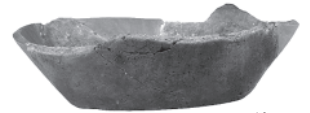
1 列-107



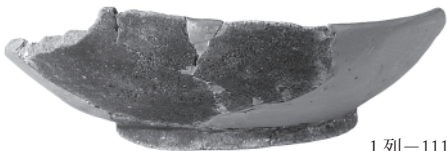
1 列-108



1 列-109



1 列-110



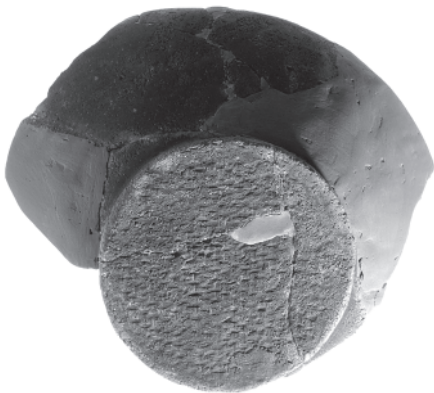
1 列-111



1 列-112



1 列-113



1 列-116



1 列-118



1 列-114



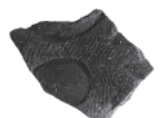
1 列-115



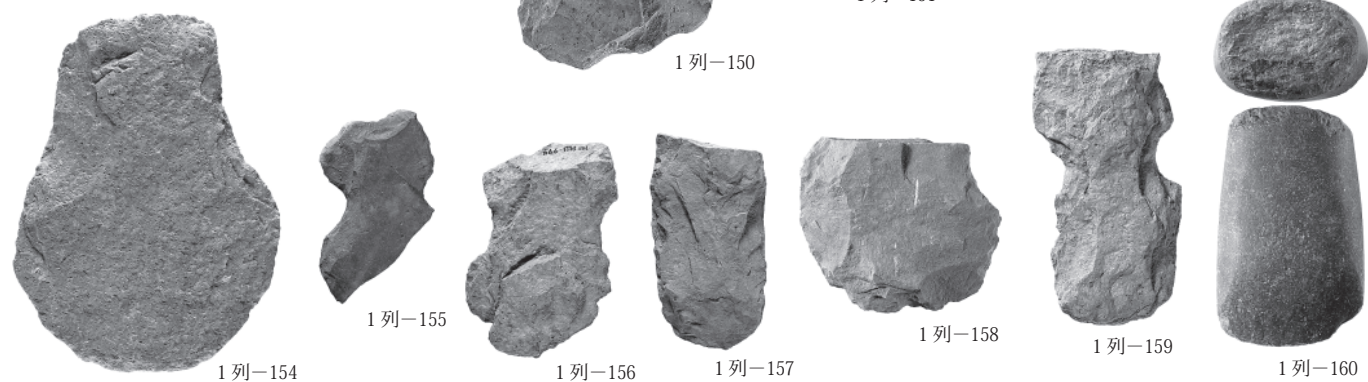
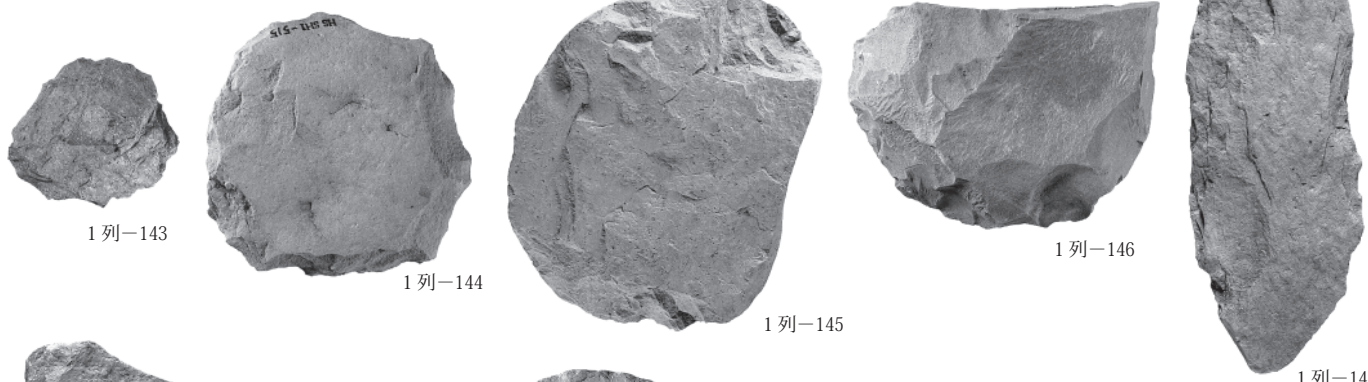
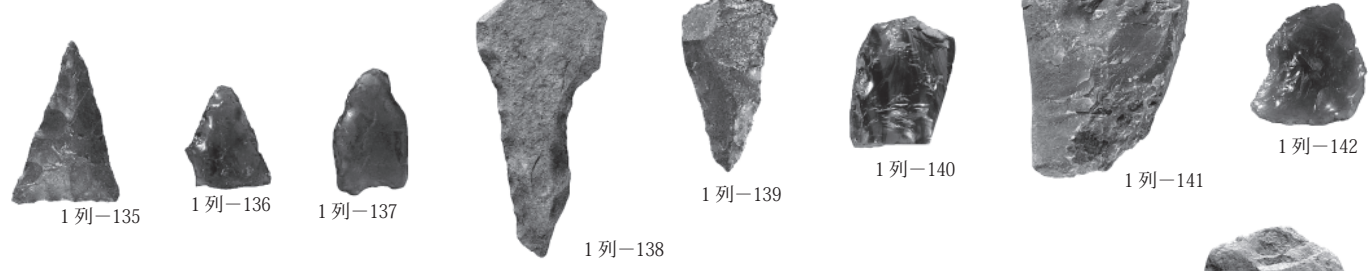
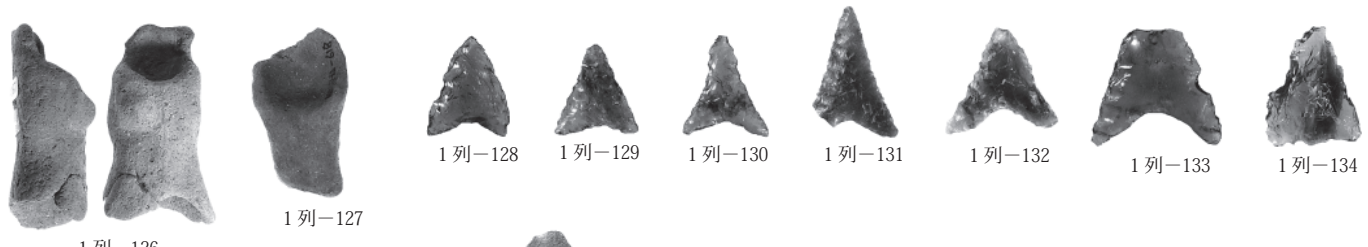
1 列-117



1 列-119



1 列-120



1 号列石出土遺物(8)



1 列-161



1 列-162



1 列-163



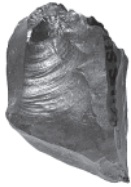
1 列-164



1 列-165



1 列-166



1 列-167



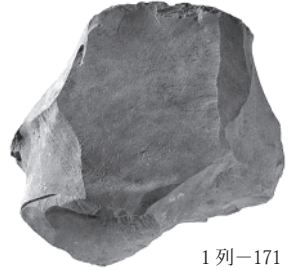
1 列-168



1 列-169



1 列-170



1 列-171



1 列-172



1 列-173



1 列-174



1 列-175



1 列-176



1 列-177



1 列-178



1 列-179



1 列-180



1 列-181



1 列-182



1 列-183



1 列-184



1 列-185



1 列-186



1 列-187



1 列-188



1 列-189



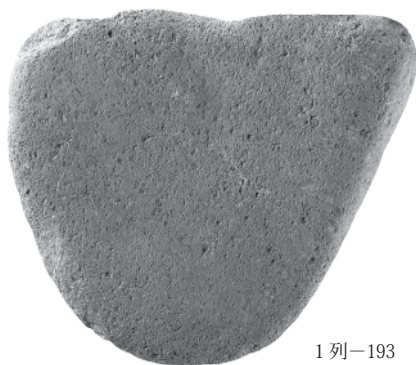
1 列-190



1 列-191



1 列-192



1 列-193



1 列-197



1 列-198



1 列-194



1 列-196



1列-195



1列-199



1列-200



1列-201



1列-202



1列-203



1列-207



1列-204



1列-205



1列-206



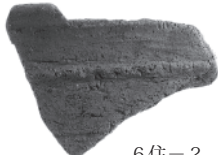
1列-209



1列-208



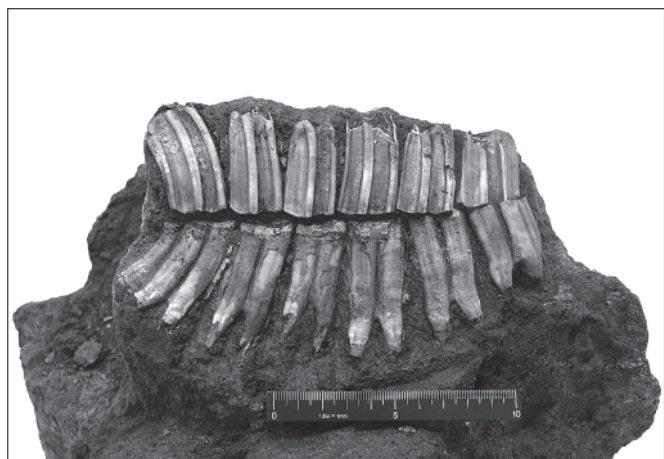
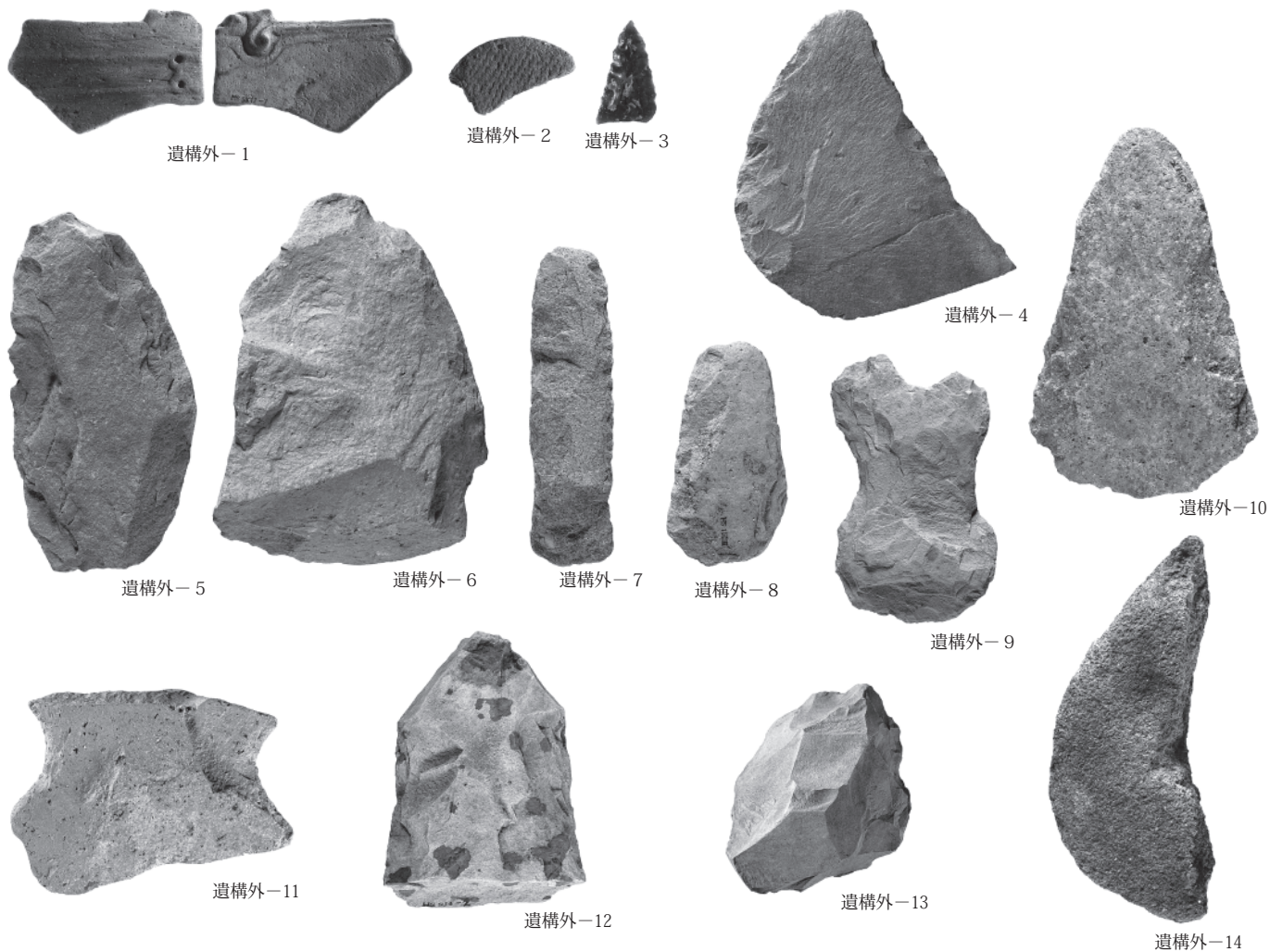
6住-1



6住-2



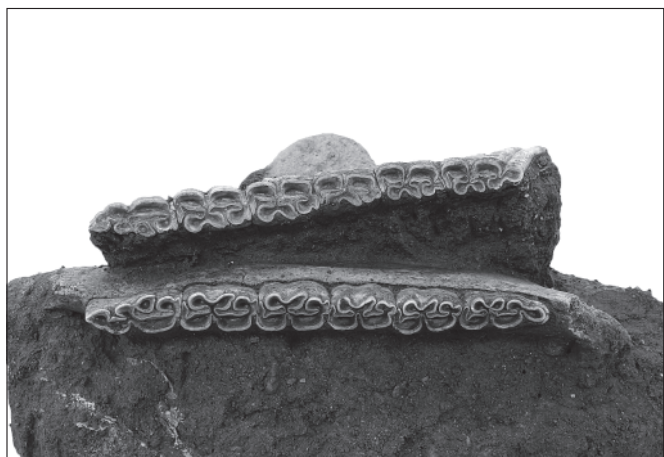
6住-3



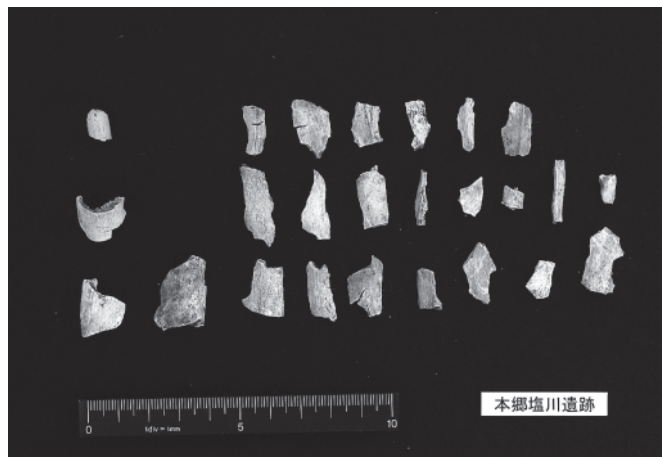
① 3号土坑出土馬歯 右咬合状態



② 3号土坑出土馬歯 下顎および左上顎



③ 3号土坑出土馬歯 下顎上面



④ 35号土坑出土 焼骨片

報告書抄録

書名ふりがな	しおがわすないど いせき
書名	塩川砂井戸遺跡
副書名	(都)3.3.2吉井北通り線社会資本整備総合交付金(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	599
編著者名	飯田陽一 関根慎二 麻生敏隆
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20150320
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	しおがわすないどいせき
遺跡名	塩川砂井戸遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしよしいまちしおがわ
遺跡所在地	群馬県高崎市吉井町塩川
市町村コード	10202
遺跡番号	02747(高崎市)
北緯(世界測地系)	361532
東経(世界測地系)	1385849
調査期間	20130801-20140131
調査面積	8368㎡
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	縄文/古墳/奈良・平安
遺跡概要	集落-縄文時代-竪穴住居2棟+列石-縄文土器+石器/古墳時代-竪穴住居2棟-土師器・須恵器+石製品/奈良平安時代-集落-竪穴住居17棟+土師器・須恵器+石製品+金属製品/中世以降-掘立柱建物3棟+溝14条+井戸4基-陶磁器+土器
特記事項	国史跡多胡碑の西方約2kmにある古代の集落遺跡。縄文時代後期堀之内2式期の柄鏡形敷石住居と弧状列石。
要約	第1面は古墳時代後期から平安時代後期までの集落と、中世と想定される方形区画を構成すると思われる溝。 第2面は縄文時代後期堀之内2式期の柄鏡形敷石住居と、弧状に掘削された溝状遺構の法面に積石が施され、弧状の列石として広がる。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第599集

塩川砂井戸遺跡

(都) 3.3.2吉井北通り線社会資本整備総合交付金

(防災・安全/活力基盤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年(2015)年3月13日 印刷

平成27年(2015)年3月20日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／川島美術印刷株式会社

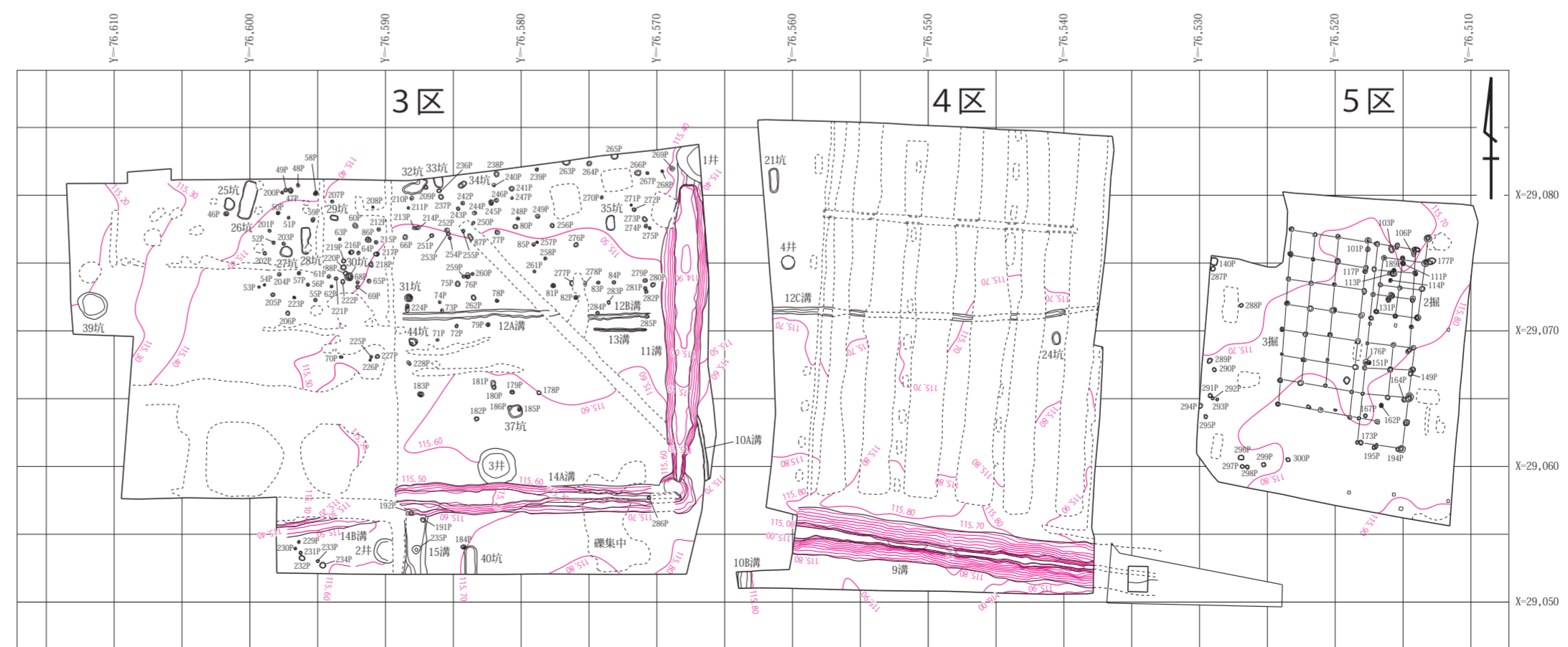
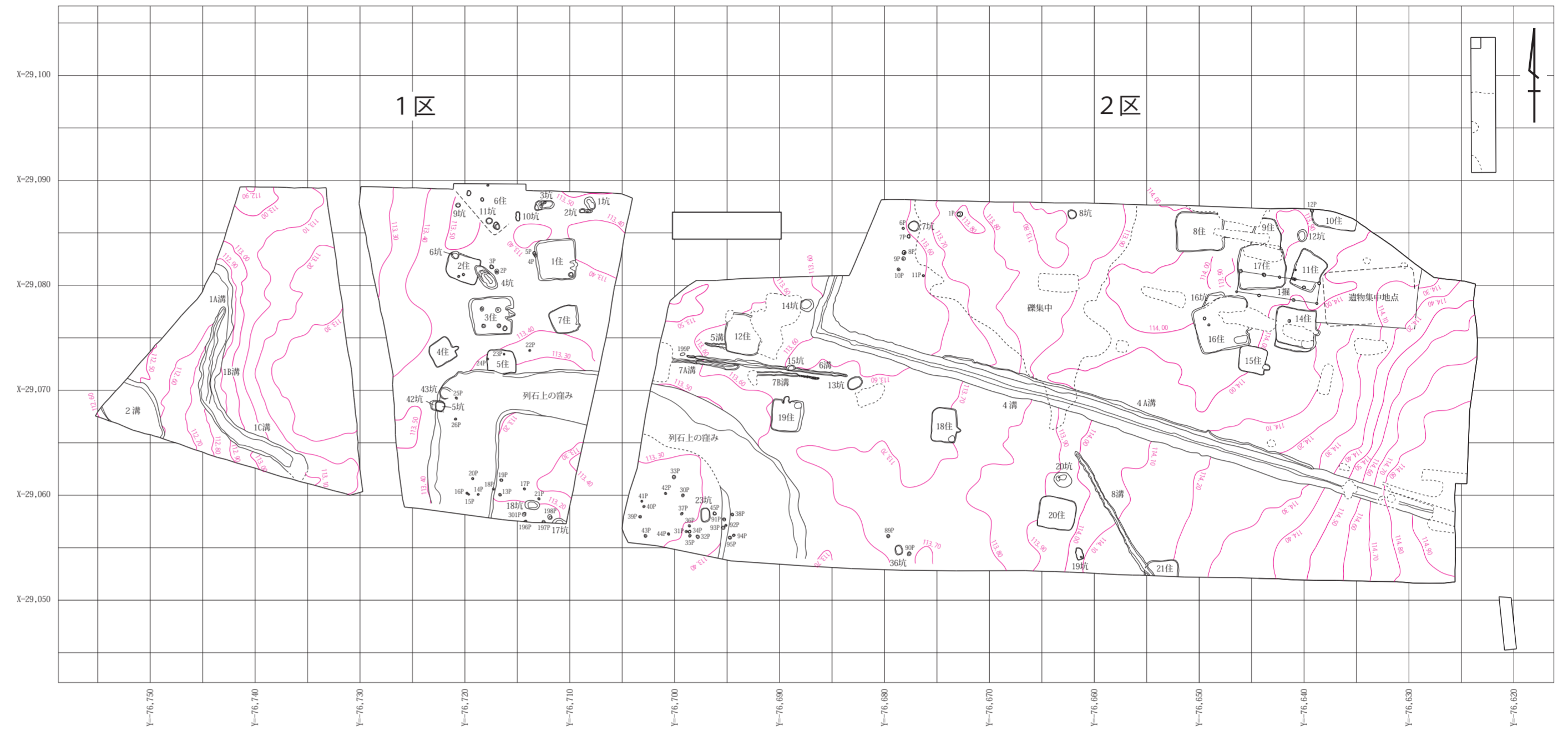
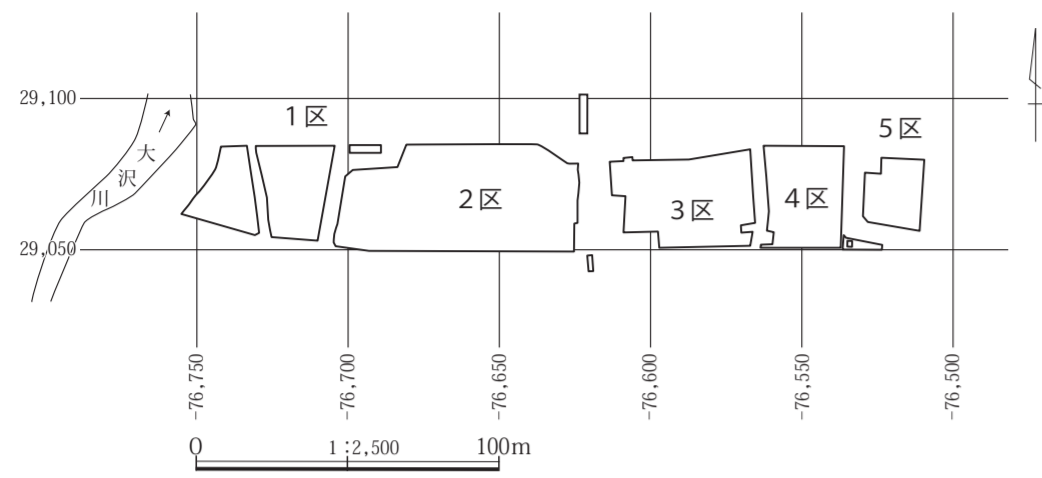
塩川砂井戸遺跡

付 図

付図 1. 塩川砂井戸遺跡 1 面全体図 (1/400)

付図 2. 塩川砂井戸遺跡 2 面詳細図 (1/80)

付図1 塩川砂井戸遺跡1面 全体図



地図中に用いた遺構名称の略語は以下の通りである。

住⇒竪穴住居

掘⇒掘立柱建物

坑⇒土坑

P⇒ピット

井⇒井戸

攪乱部分は破線（細線）で示した。

0 1:400 20m

付図2 塩川砂井戸遺跡2面 詳細図

2区

